

IBM Netcool Operations Insight

バージョン 1 リリース 4.0.2

インテグレーション・ガイド



注記

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、 323 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Netcool Operations Insight (製品番号 5725-Q09) バージョン 1、リリース 4、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

本書は下記原典を翻訳したものです。

原典： SC27-8601-02

IBM Netcool Operations Insight

Version 1 Release 4.0.2

Integration Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 2014, 2016.

目次

本書について	v
オンライン用語集へのアクセス	v
Tivoli 技術研修	v
書体の規則	v

ソリューションの概要	1
サポートされる製品とコンポーネント	4
デプロイメントに関する考慮事項	9
Netcool/OMNIBus のデプロイメントに関する考 慮事項と Operations Analytics - Log Analysis への接続	9
Networks for Operations Insight フィーチャー のデプロイメントに関する考慮事項	16
データ・フロー	16
基本 Netcool Operations Insight ソリューション のデータ・フロー	17
Networks for Operations Insight のデータ・フ ロー	19
必要な資料	24

Netcool Operations Insight のインスト ール	27
インストールのためのクイック・リファレンス	27
フレッシュ・インストールの実行	32
前提条件の確認	35
IBM Installation Manager の入手	36
Installation Manager のインストール (GUI また はコンソールの例)	38
Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact のイ ンストール	40
DB2 のインストールと REPORTER スキーマの 構成	42
IBM Operations Analytics - Log Analysis のイ ンストール	43
Gateway for JDBC および Gateway for Message Bus の構成	44
Dashboard Application Services Hub および UI コンポーネントのインストール	46
Networks for Operations Insight フィーチャー のインストール	48
Insight Pack のインストール	87
シングル・サインオンの構成	90
Netcool Operations Insight の開始	91

最新の Netcool Operations Insight へ のアップグレード	93
アップグレードのためのクイック・リファレンス	94
Netcool Operations Insight のアップグレード	95

イベント検索	99
イベント検索の構成	100
イベント検索機能のためのシングル・サインオンの 構成	104
イベント管理ツールのカスタマイズ	105
「テーブル・ビュー」 ツールバーへのカスタム・ア プリケーションの追加	108
イベントの検索	109
イベント検索ワークフロー (オペレーター向け)	113
イベント検索のトラブルシューティング	114

Event Analytics	119
Event Analytics の概要	119
Event Analytics のインストールおよびアンインス トール	120
前提条件	120
Event Analytics のインストール	121
Event Analytics のアンインストール	149
「分析の構成」ポートレット	151
Impact のデータ・プロバイダー設定およびその 他のポートレット設定	153
現在の分析構成の表示	154
新規分析構成の作成または既存の分析構成の変更	156
予定外の分析構成の手動実行	159
分析構成の停止	160
分析構成の削除	160
関連イベント・グループの有効期限の変更	161
イベント ID のフィールドの選択の変更	162
「季節性イベントの表示」ポートレット	163
季節性イベント構成およびイベントのリストの表 示	164
季節性イベントのレビュー	164
「季節性イベントの表示」ポートレットでの列の ソート	165
特定の構成についてのすべての季節性イベントの Microsoft Excel へのエクスポート	166
特定の構成についての選択した季節性イベントの Microsoft Excel へのエクスポート	167
季節性イベント・ルール	168
季節性イベント・ルールの作成	168
季節性イベント・ルールの状態	173
デフォルトの季節性イベント・ルールの有効期限 の変更	173
季節性イベント・ルールのパフォーマンス統計の 表示	175
既存の季節性イベント・ルールの変更	176
状態別にグループ化された季節性イベント・ルー ルの表示	177
季節性イベント・ルール状態の変更	177
イベントのリストへのルール・アクションの適用	178
イベントの列値の設定	179

イベントの抑止および抑止解除のための NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルの 更新	180
季節性イベント・グラフ	181
季節性イベントの季節性イベント・グラフの表示	182
季節性グラフからの履歴上のイベントの表示	183
特定の季節性イベントについての季節性イベ ント・グラフの Microsoft Excel へのエクス ポート	184
季節性イベント・グラフの信頼性しきい値の編集	185
履歴上のイベント	186
季節性イベントの履歴上のイベントの表示	187
履歴上のイベント・データのエクスポート	188
特定の季節性イベントについての履歴上のイベ ント・データの Microsoft Excel へのエクス ポート	189
関連イベント	190
関連イベントの処理	191
関連イベントに関する追加の詳細	201
相関ルールおよび関連イベント	206
パターンの作成	211
「イベント・パターン」ポートレットの開始	212
イベント・パターンの作成	213
パターン基準への正規表現の適用	216
パターン基準の正規表現の編集	217
「イベント・パターン」ポートレットでの関連イ ベントの詳細の表示	218
既存のパターンの編集	218
既存のパターンの削除	219
パターン汎用化テスト結果の Microsoft Excel へのエクスポート	219
Netcool/Impact でイベント・パターンの作成に 使用するタイプのプロパティの構成	220
リファレンス	227
Netcool/Impact のインストール・コンポーネン ト	227
Event Analytics ObjectServer の構成	228
Impact での Oracle データベース接続の構成	229
Impact 内の DB2 データベース接続の構成	231
Impact での MS SQL データベース接続の構成	233
Netcool/Impact リモート接続	235
生成されたプロパティ・ファイル	236
Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加	242
追加のフェイルオーバー機能	243
イベント・ビューアーでの履歴上のイベントの表 示	244
タイムライン・チャートについて	245
Event Analytics のトラブルシューティング	245

親イベントと子イベントがフィルターに一致する 場合にのみイベント・ビューアーにイベント関係 が表示される	255

IBM Networks for Operations Insight 259

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード の管理	259
ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード の構成	260
ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード のトラ ブルシューティング	261
カスタム・ダッシュボードの作成	267
ネットワークのイベント・ドリブン・ビューの表 示	267
ネットワーク・ビューのエンティティに関する トップ・パフォーマー・データの表示および比較	269
ゲージ・グループ内のネットワーク・ビュー・イ ベント・データの表示	272
ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード・ウィジ ュエットのイベント情報	275
ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを使用した ネットワークのモニター	276
ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのモニタ リング	277
ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード の構成	287

トポロジ検索 291

サポートされる製品とコンポーネント	292
トポロジ検索の構成	293
トポロジ検索機能のためのシングル・サインオ ンの構成	295
トポロジの検索	296

IBM Connections への統合の構成 . . . 301

IBM Connections の概要	302
IBMConnections 関数のパラメーター	302
IBMConnections プロジェクトと成果物	305
自動トピック管理	306
イベント管理ツールによる自動トピック管理	307
履歴上のイベントの有効化	307

リリース情報 309

「マイ・コレクション」を使用したトピ ックのサブセットを含む独自 PDF の作 成 321

特記事項 323

商標	324

本書について

本書には、IBM Netcool Operations Insight ソリューションのコンポーネントの統合方法が記載されています。

本書はシナリオ別に編集されており、全体を通して読まれることは想定していません。必要とするシナリオのみを参照してください。詳しくは、24 ページの『必要な資料』を参照してください。

オンライン用語集へのアクセス

IBM Terminology Web サイトには、IBM 製品ライブラリーからの用語が 1 つの便利なロケーションに統合されています。以下の Web アドレスにある用語 Web サイトにアクセスできます。

<http://www.ibm.com/software/globalization/terminology>.

Tivoli 技術研修

以下は英語のみの対応となります。Tivoli® 技術研修については、IBM® Tivoli Education Web サイト <http://www.ibm.com/software/tivoli/education> を参照してください。

書体の規則

本書では、書体について以下の規則を使用しています。

太字

- 周囲のテキストから区別しづらい小文字および大/小文字混合のコマンド
- インターフェース・コントロール (チェック・ボックス、プッシュボタン、ラジオ・ボタン、スピン・ボタン、フィールド、フォルダー、アイコン、リスト・ボックス、リスト・ボックス内の項目、マルチカラム・リスト、コンテナー、メニュー選択、メニュー名、タブ、プロパティ・シート)、ラベル (ヒントおよびオペレーティング・システムの考慮事項など)
- テキスト内のキーワードおよびパラメーター

イタリック

- 引用 (例: 資料、ディスクット、および CD のタイトル)
- 本文中で定義される語 (例: 非交換回線は *Point-to-Point* 回線 と呼ばれます)
- 単語および文字の強調 (単語自体を強調する例: 「*that* という単語は、制限節を導入します。」、文字自体を強調する例: 「LUN アドレスは *L* という文字で始まっていなければなりません。」)
- 本文中の新規用語 (定義リスト内を除く): ビュー は、データが含まれたワークスペース内のフレームです。

- 指定する必要がある変数および値 (例: ... ここで *myname* は ... を表します)

モノスペース

- 例およびコード例
- 周囲のテキストと区別しづらいファイル名、プログラミング・キーワード、およびその他のエレメント
- ユーザー宛てのメッセージ・テキストおよびプロンプト
- ユーザーが入力する必要があるテキスト
- 引数またはコマンド・オプションの値

太字モノスペース

- コマンド名、およびコマンドとして入力できるマクロおよびユーティリティの名前
- 本文中の環境変数名
- キーワード
- 本文中のパラメーター名: API 構造パラメーター、コマンドのパラメーターおよび引数、および構成パラメーター
- プロセス名
- 本文中のレジストリー変数名
- スクリプト名

ソリューションの概要

IBM Netcool Operations Insight は、アラームとアラートのリアルタイムの分析を、より広範な履歴データ分析と組み合わせて利用します。Netcool Operations Insight は、IBM Tivoli Netcool/OMNIbus の障害管理機能と、IBM Operations Analytics - Log Analysis 内の IBM の優れたビッグデータ・テクノロジーによって強化されており、強力なイベント検索および履歴分析を単一ソリューションで提供します。

Netcool Operations Insight は、アプリケーション・モニター環境の管理と分析を行う基本ソリューションと、Networks for Operations Insight というオプションの拡張機能から構成されています。この拡張機能は、その対象をネットワーク・ディスカバリー、視覚化、イベント相関、トポロジー・ベースの根本原因分析、および構成とコンプライアンスの管理まで拡大します。Networks for Operations Insight の機能は Network Manager 製品および Netcool Configuration Manager 製品によって提供されます。

さらに、Netcool Operations Insight ソリューションの一部として IBM Network Performance Insight をセットアップしてネットワーク・トラフィック・パフォーマンスをモニターできるほか、IBM Alert Notification や IBM Runbook Automation などの他のソリューションと統合することもできます。

Netcool Operations Insight は、各種ビジネス・アプリケーション、仮想化サーバー、ネットワーク・デバイスとプロトコル、インターネット・プロトコル、およびセキュリティ・デバイスとストレージ・デバイスのインフラストラクチャー管理と運用管理を、単一の一貫性のある構造に統合します。

Netcool Operations Insight には、以下の各機能があります。

イベント検索

イベント検索は、Operations Analytics - Log Analysis の検索機能と分析機能を、Tivoli Netcool/OMNIbus がモニターおよび管理するイベントに適用します。イベントは、Gateway for Message Bus 経由で Operations Analytics - Log Analysis に転送され、ここでデータ・ソースに取り込まれて、検索対象として索引付けされます。イベントに索引が付けられると、リアルタイム・イベントと履歴上のイベントのすべてのオカレンスを検索できるようになります。Tivoli Netcool/OMNIbus Insight Pack は、Operations Analytics - Log Analysis にインストールされ、さまざまな基準に基づいてイベントを検索するカスタム・アプリケーションを提供します。これらのカスタム・アプリケーションでは、イベント情報を表示し、モニタリング環境のパフォーマンスを経時的に示すダッシュボードを生成できます。キーワード検索機能と動的ドリルダウン機能を使用すると、イベント・データを掘り下げて、詳細な情報を調べることができます。これらのアプリケーションは、Operations Analytics - Log Analysis から実行できます。これらのアプリケーションを、イベント・ビューアーおよびアクティブ・イベント・リストの右クリック・メニューから起動するツールを、Web GUI にインストールできます。イベントの分析と量の削減に役立つ情報や

アプリケーションを提供する「イベント削減ウィザード」も用意されています。イベントの量を削減することにより、モニター対象環境内の「ノイズ」を最小限に減らすことができます。

詳しくは、99 ページの『イベント検索』を参照してください。

Event Analytics

Event Analytics は、Tivoli Netcool/OMNIBus の履歴上のイベント・データの統計分析を実行します。

- 分析では、季節性パターン (イベントがいつ発生するか、どのような頻度で発生するか) を判別できます。季節性パターンを見つけることができるように、季節性の分析はレポートおよびグラフに出力されます。例えば、予定外の特定の時刻に定期的に発生するイベントが強調表示されます。この季節性レポートからの情報を使用して、ネットワーク、デバイス、または抑止に関するルールを作成することで、イベント数を削減できます。
- 分析では、どのイベントが統計的に同時に発生する傾向にあるかを判別でき、この結果を定期的にイベント・グループとして出力できます。有効なイベント・グループを Netcool/Impact 相関ルールとしてデプロイできます。これらのルールはイベント・データに対して適用され、イベント・グループから単一の親イベントを表示し、グループ内のその他のすべてのイベントを子として表示します。これにより、オペレーターに表示されるイベントの数を減らすことができます。

Event Analytics は、2 つの別個のパッケージとしてインストールされます。1 つは Netcool/Impact にインストールされ、もう 1 つは Netcool/OMNIBus Web GUI にインストールされます。Event Analytics が機能するためには、両方のパッケージが必要です。

詳しくは、119 ページの『Event Analytics』を参照してください。

Networks for Operations Insight

Networks for Operations Insight は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションのデプロイメントに追加できるオプション・フィーチャーで、動的ネットワーク・インフラストラクチャーにおけるサービス保証を実現します。Networks for Operations Insight の機能には、ネットワーク・ディスカバリー、可視化、イベント相関と根本原因分析、および構成とコンプライアンスの管理があります。このフィーチャーを使用することで、アプリケーションおよびネットワークのパフォーマンス管理に対する包括的な運用上の洞察を得ることができます。Networks for Operations Insight の機能は、Network Manager 製品および Netcool Configuration Manager 製品によって提供されます。

詳しくは、259 ページの『IBM Networks for Operations Insight』を参照してください。

トポロジー検索

トポロジー検索機能は、Networks for Operations Insight フィーチャーの拡張機能です。これは、Operations Analytics - Log Analysis の検索機能と分析機能を適用して、ネットワーク・パフォーマンスに対する洞察を提供します。ネットワーク・データによってエンリッチされたイベントは、Network Manager Insight Pack によって分析され、ネットワーク・トポロ

ジー上の 2 つのエンドポイント間の経路について一定期間において最もコストが低いものを計算するために使用されます。指定された期間にそれらの経路上で発生したイベントが識別され、重大度別に表示されます。トポロジー検索を使用するには、Networks for Operations Insight のフィーチャーをインストールして構成することが必要です。

詳しくは、291 ページの『トポロジー検索』を参照してください。

IBM Connections との統合

Netcool/Impact は、主要な関係者に自動的に更新を提供することで、IBM Connections を介したソーシャル・コラボレーションを可能にします。Netcool/Impact IBMConnections アクション関数を使用することで、IBM Connections への統合を提供します。IBMConnections アクション関数を使用すると、ユーザーは、フォーラム・リストおよびトピック・リストの照会、新しいフォーラムの作成、新しいトピックの作成、既存のトピックの更新を行うことができます。IBM Connections は、組織が優秀な人材と接触し、技術革新を加速化し、成果を上げていくための先進的なソーシャル・ソフトウェア・プラットフォームです。セキュリティの高いこの統合プラットフォームを使用することにより、重要なビジネス・プロセスにおいて専門家のネットワークと連携できます。だれもが自信をもって新たなビジネス・チャンスを予測し、そのようなチャンスに的確に対応できるようになります。

詳しくは、301 ページの『IBM Connections への統合の構成』を参照してください。

ネットワーク・パフォーマンス・モニター

Network Performance Insight は、フロー・ベースのネットワーク・トラフィック・パフォーマンス・モニター・システムです。複雑で複数ベンダーかつ複数テクノロジーのネットワークのネットワーク・パフォーマンス・データを視覚化し、レポートすることにより、ネットワーク・トラフィックに関する包括的でスケーラブルな可視性を提供します。詳しくは、<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSCVHB/welcome>を参照してください。

IBM Alert Notification

IBM Alert Notification には、複数のモニター・ツールにわたって重大な IT 問題のアラートを即座に通知する機能が用意されています。IT スタッフには、IT 運用環境内の問題についてのアラートが即座に通知されます。詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSY487/com.ibm.netcool_OMNIBusaas.doc_1.2.0/landingpage/product_welcome_alertnotification.htmlを参照してください。

IBM Runbook Automation

IBM Runbook Automation は、IT 運用チームが効率よく効果的に作業するのに役立ちます。オペレーターは、本当に必要なことに集中でき、推奨されるアクションと事前設定されたコンテキストによる最適な解決策への指針を受け取ることができます。Runbook Automation を使用して実行できる内容は次のとおりです。

- 迅速かつ効率よく問題を調べて担当者を割り当てます。
- 迅速に問題を診断して修正し、運用上の知見を構築します。

- 運用手順書と自動化を簡単に作成、公開、および管理します。
- 成果を追跡し、改善の機会を見つけるために、スコアを保持します。

詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSZQDR/com.ibm.rba.doc/RBA_welcome.htmlを参照してください。

関連資料:

309 ページの『リリース情報』

サポートされる製品とコンポーネント

Netcool Operations Insight に含まれる製品およびコンポーネントについて説明します。

Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1.0.8 のコア・コンポーネント

この製品には以下のコンポーネントが含まれています。これは、Installation Manager でインストールされます。これは Netcool Operations Insight ソリューション基盤の一部であるため、インストールして構成した上で実行しておかなければ Networks for Operations Insight 機能のセットアップを開始できません。

- サーバー・コンポーネント (ObjectServer を含む)
- プローブとゲートウェイの機能
- 加速イベント通知 (AEN) クライアント

システム要件については、<https://ibm.biz/BdRNaT>を参照してください。

重要: イベント・データを管理する ObjectServer は、V8.1 でなければなりません。

DB2® V10.5 Enterprise Server Edition データベース

DB2 は、Netcool Operations Insight ソリューションに使用されるデフォルトのデータベースです。他のタイプのデータベースも使用可能です。詳しくは、<http://ibm.biz/SysReqsNOI14>を参照してください。

Gateway for JDBC

この製品は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションで必須です。これは、Installation Manager でインストールされます。システム要件は、Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1 の場合と同じです。これは、イベント・データを ObjectServer から IBM DB2 データベースに転送するために必要です。

Netcool/Impact V7.1.0.6

この製品には以下のコンポーネントが含まれています。これは、基本 Netcool Operations Insight ソリューションに含まれています。これは、Installation Manager でインストールされます。

- Impact サーバー
- GUI サーバー
- Impact サーバー 拡張機能: Event Analytics のアルゴリズムと IBM Connections への統合の作成に使用されるポリシーが含まれています。

重要: Event Analytics 機能が動作するためには、Impact サーバー拡張機能と Web GUI 拡張機能の両方がインストールされている必要があります。

システム要件については、<https://ibm.biz/BdRNLF>を参照してください。

IBM Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 および V1.3.3

Netcool Operations Insight V1.4.0.1 は IBM Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 および V1.3.3 と連動して機能します。IBM Operations Analytics - Log Analysis は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションに含まれています。これは、Installation Manager でインストールされます。システム要件については、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY_1.3.2/com.ibm.scala.doc/install/iwa_hardware_software_reqs_c.htmlを参照してください。

注: Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 Standard Edition は Netcool Operations Insight に付属しています。Operations Analytics - Log Analysis のエディションについて詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY_1.3.2/com.ibm.scala.doc/iwa_editions_oview_c.htmlを参照してください。

IBM Operations Analytics - Log Analysis 用の OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2

この製品は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションに含まれています。これは、Operations Analytics - Log Analysis でイベント検索機能を使用可能にするために必須です。この Insight Pack は Operations Analytics - Log Analysis 内にインストールされます。

Gateway for Message Bus V7.0

この製品は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションに含まれています。これは、Installation Manager でインストールされます。システム要件は、Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1 の場合と同じです。これは、イベント・データを IBM Operations Analytics - Log Analysis 製品に転送するために使用されます。

Jazz for Service Management V1.1.2.1

このコンポーネントは Netcool Operations Insight ソリューションの GUI フレームワークを提供します。Installation Manager によってインストールされ、以下のサブコンポーネントを含んでいます。

- Dashboard Application Services Hub V3.1.2.1
- Reporting Services (以前の名称は Tivoli Common Reporting V3.1)

Dashboard Application Services Hub のシステム要件については、<https://ibm.biz/BdHSYG> を参照してください。Dashboard Application Services Hub のインスタンスが、V8.1 Web GUI と季節性イベント・レポート・ポートレットをホストします。Jazz for Service Management は、Web GUI のインストール・パッケージに含まれていますが、個別のフィーチャーとしてインストールされます。

Network Manager と Netcool Configuration Manager のそれぞれのレポートを製品のインストール時にインストールすることで、それらが Reporting Services と連携して動作するようにセットアップできます。Netcool/OMNIBus V8.1 以降を Reporting Services V3.1 と統合して、イ

ベントのレポートをサポートすることができます。この統合を構成するには、Reporting Services をゲートウェイ経由でリレーショナル・データベースに接続します。次に、Netcool/OMNIBus で提供されているレポート・パッケージを Reporting Services にインポートします。イベント・レポートについて詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/omnibus/wip/install/task/omn_con_ext_deploytcrrreports.htmlを参照してください。

Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI V8.1.0.6

このコンポーネントには、以下のサブコンポーネントとアドオンが含まれています。これは、Installation Manager でインストールされます。これは、基本 Netcool Operations Insight ソリューションに含まれています。以下に示す Web GUI の拡張機能は、Netcool Operations Insight で提供されています。

- Operations Analytics - Log Analysis との統合のためのツールおよびメニュー。
- Netcool Operations Insight の拡張機能: これは Event Analytics 機能をサポートしています。

重要: Event Analytics 機能が動作するためには、Impact サーバー拡張機能と Web GUI 拡張機能の両方がインストールされている必要があります。

Web GUI は、Jazz for Service Management の一部である Dashboard Application Services Hub にインストールされます。Jazz for Service Management は、Installation Manager で個別のインストール・フィーチャーとして提供されます。システム要件については、<https://ibm.biz/BdRNaT>を参照してください。

Network Manager V4.2

この製品には、オプションの Networks for Operations Insight 機能のためのコア・コンポーネントおよび GUI コンポーネントが含まれています。

システム要件については、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itm/ip/wip/install/task/nmip_pln_planninginst.htmlを参照してください。

IBM Operations Analytics - Log Analysis 用の Network Manager Insight Pack V1.3.0.0

この製品は、Networks for Operations Insight フィーチャーに含まれています。これは、Operations Analytics - Log Analysis でトポロジー検索機能を使用可能にするために必須です。この Insight Pack は Operations Analytics - Log Analysis 内にインストールされます。これを使用するには、OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 がインストールされている必要があります。

注: Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 は、OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 とのみデータ・ソースを共有できます。以前のバージョンの Tivoli Netcool/OMNIBus Insight Pack とはデータ・ソースを共有できません。

Probe for SNMP

この製品は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションではオプションです。これは、SNMP トラップを持つ環境で使用されます。これは、Networks for Operations Insight フィーチャーで必須です。Tivoli Netcool/OMNIbus V8.1 サーバー上のプローブのインストールの場合は、IBM Installation Manager によってインストールされるプローブのインスタンスを使用してください。

Syslog プローブ

この製品は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションではオプションです。これは、Networks for Operations Insight フィーチャーで必須です。Tivoli Netcool/OMNIbus V8.1 サーバー上のプローブのインストールの場合は、IBM Installation Manager によってインストールされるプローブのインスタンスを使用してください。

Netcool Configuration Manager V6.4.2.1

この製品には以下のコンポーネントが含まれています。これは、オプションの Networks for Operations Insight フィーチャーに含まれています。

- コア・コンポーネント
- ドライバー
- ODBC コンポーネント

システム要件については、ワーカー・サーバーの場合は

<https://ibm.biz/BdRNaN>、GUI サーバーの場合は <https://ibm.biz/BdRNGF> を参照してください。

IBM Network Performance Insight V1.1.1

Network Performance Insight は、フロー・ベースのネットワーク・トラフィック・パフォーマンス・モニター・システムです。複雑で複数ベンダーかつ複数テクノロジーのネットワークのネットワーク・パフォーマンス・データを視覚化し、レポートすることにより、ネットワーク・トラフィックに関する包括的でスケーラブルな可視性を提供します。詳しくは、<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSCVHB/welcome> を参照してください。

IBM Alert Notification

IBM Alert Notification には、複数のモニター・ツールにわたって重大な IT 問題のアラートを即座に通知する機能が用意されています。IT スタッフには、IT 運用環境内の問題についてのアラートが即座に通知されます。詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSY487/com.ibm.netcool_OMNIbusaas.doc_1.2.0/landingpage/product_welcome_alertnotification.html を参照してください。

IBM Runbook Automation

IBM Runbook Automation は、IT 運用チームが効率よく効果的に作業するのに役立ちます。オペレーターは、本当に必要なことに集中でき、推奨されるアクションと事前設定されたコンテキストによる最適な解決策への指針を受け取ることができます。Runbook Automation を使用して実行できる内容は次のとおりです。

- 迅速かつ効率よく問題を調べて担当者を割り当てます。
- 迅速に問題を診断して修正し、運用上の知見を構築します。

- 運用手順書と自動化を簡単に作成、公開、および管理します。
- 成果を追跡し、改善の機会を見つけるために、スコアを保持します。

詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSZQDR/com.ibm.rba.doc/RBA_welcome.htmlを参照してください。

追加情報

Netcool Operations Insight のコンポーネント製品について詳しくは、以下の表にリストされた Web サイトを参照してください。

表 1. 製品情報

製品	Web サイト
IBM Netcool Operations Insight	http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSTPTP/welcome
IBM Tivoli Netcool/OMNIbus および Web GUI	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ/landingpage/NetcoolOMNIbus.html
IBM Tivoli Netcool/Impact	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHYH/welcome
IBM Operations Analytics - Log Analysis	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY/welcome
Netcool/OMNIbus Insight Pack	http://www.ibm.com/developerworks/servicemanagement/ia/log/downloads.html
Netcool/OMNIbus ゲートウェイ	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ/omnibus/gateways/common/Gateways.html
Jazz for Service Management	http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSEKCU/welcome
IBM Tivoli Network Manager	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK/welcome
IBM Tivoli Netcool Configuration Manager	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9/welcome
Network Performance Insight	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSCVHB/welcome
Runbook Automation	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSZQDR/com.ibm.rba.doc/RBA_welcome.html
Alert Notification	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSY487/landingpage/product_welcome_alertnotification.html

デプロイメントに関する考慮事項

Netcool/OMNIbus で想定されるイベント・ボリュームに対応し、かつ IBM Operations Analytics - Log Analysis 用に計画する容量を反映するように、デプロイメントをモデル化する方法、および Networks for Operations Insight フィーチャーのデプロイを計画する場合に考慮すべき事項。

関連タスク:

27 ページの『Netcool Operations Insight のインストール』

Netcool/OMNIbus のデプロイメントに関する考慮事項と Operations Analytics - Log Analysis への接続

デプロイメントを計画する場合は、Netcool/OMNIbus でサポートされるイベントの量と、イベントを分析するための Operations Analytics - Log Analysis の容量との関係を考慮することが重要です。イベントの量により、デプロイされるアーキテクチャーの種類 (基本アーキテクチャー、フェイルオーバー・アーキテクチャー、デスクトップ・アーキテクチャー、複数階層アーキテクチャー) が決まります。Gateway for Message Bus は、イベントの挿入だけをサポートするように構成することも、イベントの挿入と再挿入の両方をサポートするように構成することもできます。

- 『Netcool/OMNIbus と Operations Analytics - Log Analysis に関する考慮事項の説明』
- 10 ページの『デプロイメント・シナリオ』
- 12 ページの『アーキテクチャーの図』

Netcool/OMNIbus と Operations Analytics - Log Analysis に関する考慮事項の説明

ここでは、アーキテクチャー、イベント量、Operations Analytics - Log Analysis のイベント分析容量について詳しく説明します。

注: Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 Standard Edition は Netcool Operations Insight に付属しています。Operations Analytics - Log Analysis のエディションについて詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY_1.3.2/com.ibm.scala.doc/iwa_editions_oview_c.htmlを参照してください。

イベント量

イベントの挿入は各イベントの最初の発生で行われ、再挿入は各イベントのすべての発生で行われます。デフォルトでは、Gateway for Message Bus は、ObjectServer からのイベントの挿入のみを IDUC チャネルを通じて受け入れるように構成されています。イベントの挿入と再挿入をサポートするには、加速イベント通知 (AEN) クライアントによるイベント転送を構成します。詳しくは、*IBM Tivoli Netcool/OMNIbus Gateway for Message Bus* のリファレンス・ガイドで、Operations Analytics - Log Analysis との統合に関する説明を参照してください。

Netcool/OMNIbus のアーキテクチャー

基本アーキテクチャー、フェイルオーバー・アーキテクチャー、デスクトップ・アーキテクチャーは、低レベルから中レベルのイベント分析容量をサポ

ートします。複数階層アーキテクチャーは、高レベルの Operations Analytics - Log Analysis 容量をサポートします。複数階層アーキテクチャーの場合、Gateway for Message Bus に接続すると、集約層よりも収集層において、より高い容量がサポートされます。

これらのアーキテクチャーについて詳しくは、「*IBM Tivoli Netcool/OMNIBus インストールとデプロイメント・ガイド*」に加えて「*Netcool/OMNIBus Best Practices Guide*」も参照してください。

Operations Analytics - Log Analysis の容量

イベント・ボリュームを処理するための Operations Analytics - Log Analysis 製品の容量。予期されるイベント・ボリュームに対して必要なハードウェア・レベルについては、<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY/welcome> で Operations Analytics - Log Analysis の資料を参照してください。容量に制限がある場合は、削除ツールを使用して、古いデータを削除することができます。

接続層

接続層とは、Gateway for Message Busの接続先となる、複数階層アーキテクチャーの層です。Netcool/OMNIBus 製品を複数階層アーキテクチャーでデプロイしている場合にのみ、考慮事項として適用します。接続層は、Operations Analytics - Log Analysis の容量により異なります。複数階層アーキテクチャーについて詳しくは、「*IBM Tivoli Netcool/OMNIBus インストールとデプロイメント・ガイド*」に加えて「*Netcool/OMNIBus Best Practices Guide*」も参照してください。

デプロイメント・シナリオ

ここでは、9 ページの『Netcool/OMNIBus と Operations Analytics - Log Analysis に関する考慮事項の説明』に記載した相違点に関する考慮事項を組み合わせ、デプロイメント・アーキテクチャーを作成する方法について説明します。これらの要因の考えられる組み合わせ、およびそれらの組み合わせでサポートされるイベントの量と Operations Analytics - Log Analysis の容量については、これ以降の各セクションで説明します。

- 11 ページの『デプロイメント・シナリオ 1』
- 11 ページの『デプロイメント・シナリオ 2』
- 11 ページの『デプロイメント・シナリオ 3』
- 12 ページの『デプロイメント・シナリオ 4』
- 12 ページの『デプロイメント・シナリオ 5』
- 12 ページの『デプロイメント・シナリオ 6』

デプロイメント・シナリオ 1

表 2. デプロイメント・シナリオ 1: 挿入のみ、標準的なアーキテクチャー、低容量

イベント量	Netcool/ OMNIbus のアーキテ クチャー	Operations Analytics - Log Analysis の 容量	接続層	IDUC または AEN	このアーキテ クチャーの図
挿入のみ	基本、フェ イルオーバ ー、および デスクトップ ・アーキ テクチャー	低	適用されない	IDUC	13 ページの 図 1を参照し てください。 項目 1 の再 挿入に関する 記述は無視し てください。

デプロイメント・シナリオ 2

表 3. デプロイメント・シナリオ 2: 挿入と再挿入、標準的なアーキテクチャー、低容量

イベント量	Netcool/ OMNIbus のアーキテ クチャー	Operations Analytics - Log Analysis の 容量	接続層	IDUC または AEN	このアーキテ クチャーの図
挿入と再挿 入	基本、フェ イルオーバ ー、および デスクトップ ・アーキ テクチャー	中	適用されない	AEN	13 ページの 図 1を参照し てください。

デプロイメント・シナリオ 3

表 4. デプロイメント・シナリオ 3: 挿入のみ、複数階層アーキテクチャー、中程度の容量

イベント量	Netcool/ OMNIbus のアーキテ クチャー	Operations Analytics - Log Analysis の 容量	接続層	IDUC または AEN	このアーキテ クチャーの図
挿入のみ	複数階層	中	集約層	IDUC	14 ページの 図 2を参照し てください。 項目 1 の再 挿入に関する 記述は無視し てください。

デプロイメント・シナリオ 4

表 5. デプロイメント・シナリオ 4: 挿入のみ、複数階層アーキテクチャー、高容量

イベント量	Netcool/ OMNIbus のアーキテ クチャー	Operations Analytics - Log Analysis の 容量	接続層	IDUC または AEN	
挿入のみ	複数階層	高	収集層	IDUC	15 ページの 図 3を参照し てください。 項目 1 の再 挿入に関する 記述は無視し てください。

デプロイメント・シナリオ 5

表 6. デプロイメント・シナリオ 5: 挿入と再挿入、複数階層アーキテクチャー、高容量

イベント量	Netcool/ OMNIbus のアーキテ クチャー	Operations Analytics - Log Analysis の 容量	接続層	IDUC または AEN	
挿入と再挿 入	複数階層	高	集約層	AEN	14 ページの 図 2を参照し てください。

デプロイメント・シナリオ 6

表 7. デプロイメント・シナリオ 6: 挿入と再挿入、複数階層アーキテクチャー、非常に高い容量

イベント量	Netcool/ OMNIbus のアーキテ クチャー	Operations Analytics - Log Analysis の 容量	接続層	IDUC または AEN	
挿入と再挿 入	複数階層	非常に高	収集層	AEN	15 ページの 図 3を参照し てください。

アーキテクチャーの図

以下のセクションでは、Operations Analytics - Log Analysis デプロイメントのアーキテクチャーとこれらのデプロイメントが、Gateway for Message Busを含む Netcool/OMNIbus デプロイメントの各種アーキテクチャーにどのように適合するかについて説明します。

図に示すデータ・ソースは、Operations Analytics - Log Analysis 製品によって取り込まれた生データです。これは、Operations Analytics - Log Analysis 製品と Netcool/OMNIBus 製品間の統合を構成するときに定義します。

- 『基本、フェイルオーバー、およびデスクトップ・アーキテクチャー』
- 15 ページの『複数階層アーキテクチャーの場合、イベントは収集層から送信されます。』
- 14 ページの『複数階層アーキテクチャーの場合、イベントは集約層から送信されます。』

基本、フェイルオーバー、およびデスクトップ・アーキテクチャー

以下の図は、Netcool/OMNIBus の基本、フェイルオーバー、またはデスクトップ・アーキテクチャーにおける統合の仕組みを示しています。この図は、11 ページの表 2 と 11 ページの表 3 に記載したアーキテクチャーを示したものです。11 ページの表 2 に記載されているアーキテクチャーの場合、この図の項目 **1** は無視してください。

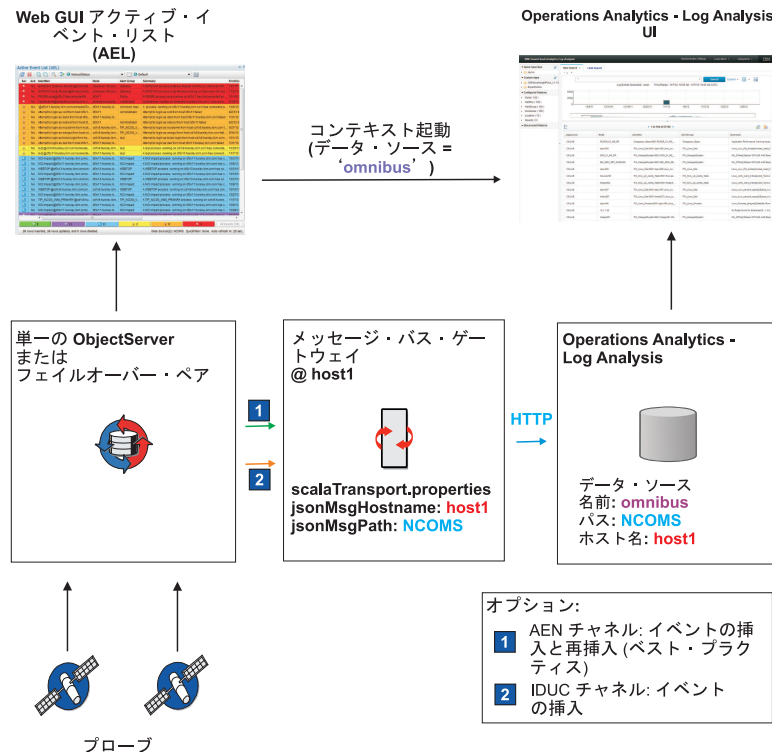


図 1. 基本、フェイルオーバー、およびデスクトップ・デプロイメント・アーキテクチャー

複数階層アーキテクチャの場合、イベントは集約層から送信されます。

以下の図は、イベントが集約層から送信される Netcool/OMNIBus 複数階層アーキテクチャにおける統合の仕組みを示しています。この図は、11 ページの表 4 と 12 ページの表 6 に記載したアーキテクチャを示したものです。11 ページの表 4 に記載されているアーキテクチャの場合、この図の項目 **1** は無視してください。

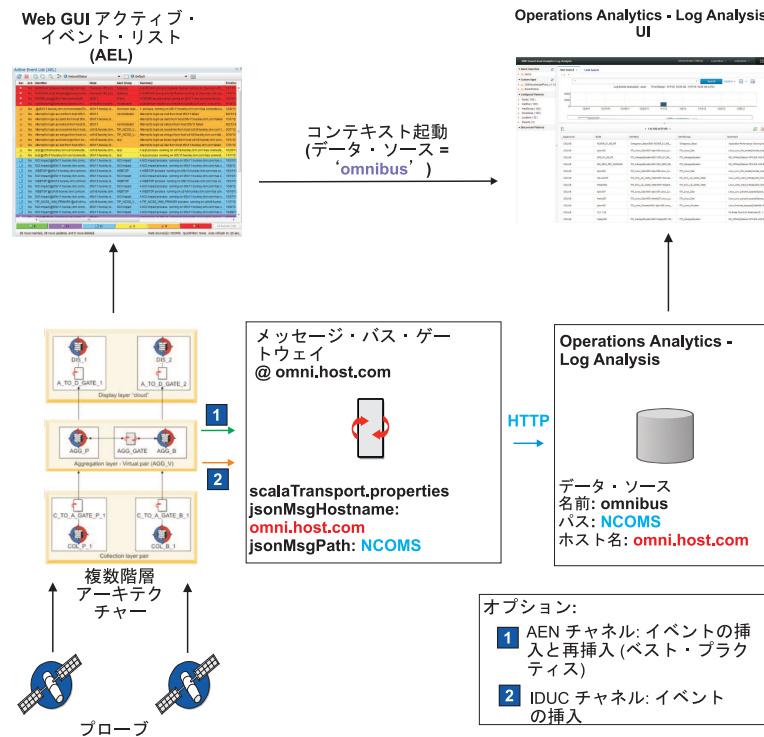


図 2. 複数階層アーキテクチャ・デプロイメント - 集約層

複数階層アーキテクチャーの場合、イベントは収集層から送信されます。

以下の図は、イベントが収集層から送信される Netcool/OMNIBus 複数階層アーキテクチャーにおける統合の仕組みを示しています。これがコンポーネント統合のベスト・プラクティスです。この図は、12 ページの表 5 と 12 ページの表 7 に記載したアーキテクチャーを示したものです。12 ページの表 5 に記載されているアーキテクチャーの場合、この図の項目 **1** は無視してください。

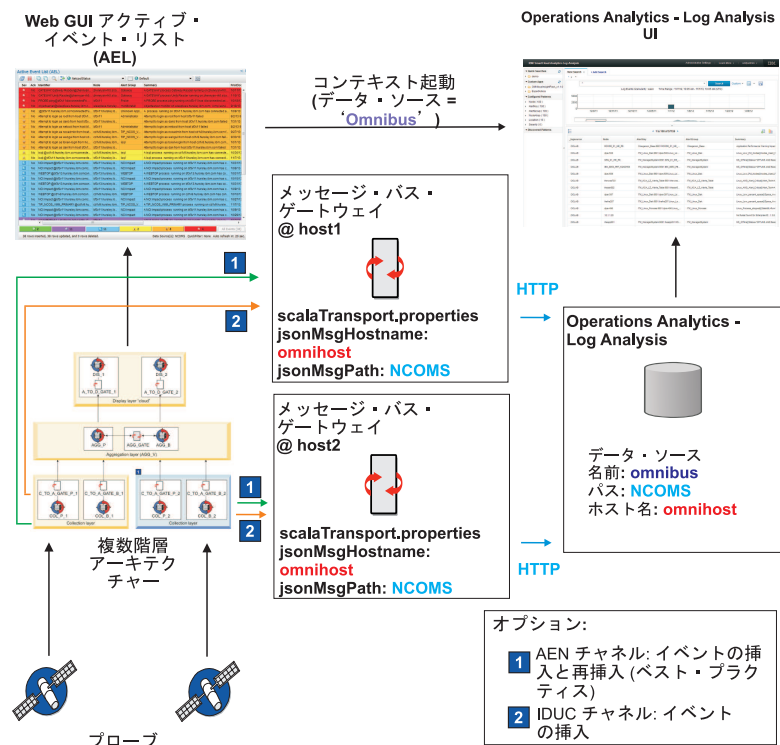


図 3. 複数階層アーキテクチャー・デプロイメント - 収集層 (ベスト・プラクティス)

関連概念:

➡ 標準的な複数階層アーキテクチャーの概要

➡ AEN クライアントの概要

関連タスク:

➡ Tivoli Netcool/OMNIBus デプロイメントのサイジング

➡ 複数階層アーキテクチャーの構成およびデプロイ

40 ページの『Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact のインストール』

関連資料:

➡ フェイルオーバー構成

➡ サンプルの Tivoli Netcool/OMNIBus インストール・シナリオ (基本、フェイルオーバー、およびデスクトップのアーキテクチャー)

関連情報:

-  [メッセージ・バス・ゲートウェイ資料](#)
-  [IBM Operations Analytics - Log Analysis 資料](#)
-  [Tivoli Netcool/OMNIBus Best Practices](#)

Networks for Operations Insight フィーチャーのデプロイメントに関する考慮事項

Networks for Operations Insight は、ネットワーク管理製品を基本 Netcool Operations Insight ソリューションの製品に統合するオプションのフィーチャーです。

Networks for Operations Insight のフィーチャーには、Network Manager と Netcool Configuration Manager が含まれます。これらの製品をデプロイするかどうかは、ご使用の環境およびネットワークの規模や複雑さによって決まります。デプロイのオプションについて詳しくは、各製品の資料に記載されているガイダンスを参照してください。

- Network Manager: http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/overview/concept/nmip_ovr_deploymentofitnm.html
- Netcool Configuration Manager: http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9_6.4.2/ncm/wip/planning/concept/ncm_plan_planninginstallation.html

データ・フロー

イベント・データがモニター対象の環境からどのように取得され、Netcool Operations Insight の製品およびコンポーネント間で分析のためにどう転送されるか。2 組のデータ・フローが用意されています。1 つは基本の Netcool Operations Insight のデータ・フローで、モニター対象のアプリケーション環境からイベント・データが取得され、製品およびコンポーネント間で転送される仕組みを示しています。もう 1 つは、オプションの Networks for Operations Insight フィーチャーとの統合を示し、ネットワーク・イベント・データがどのように取得、分析、視覚化されるかを説明しています。

関連タスク:

27 ページの『Netcool Operations Insight のインストール』

基本 Netcool Operations Insight ソリューションのデータ・フロー

イベント・データがモニター対象のアプリケーション環境からどのように取得され、基本 Netcool Operations Insight の製品およびコンポーネント間でどう転送されるか。データ・フローの説明は、理解を助けるために単純化されています。Networks for Operations Insight フィーチャーと Reporting Services は省略されています。

以下の図は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションの製品間のデータ・フローを簡略化して示しています。

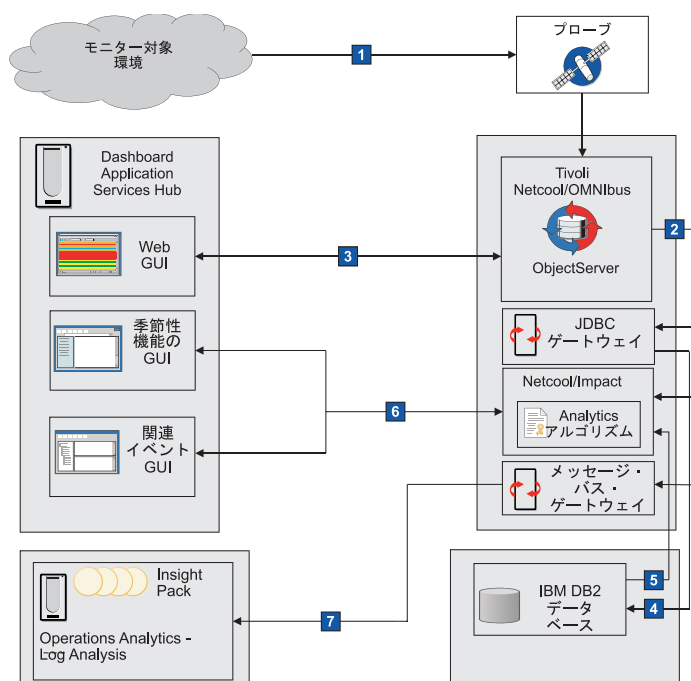


図 4. モニター対象の環境から、基本 Netcool Operations Insight ソリューションの製品およびコンポーネントへのイベント・データの転送。

このデータ・フローの各ステージを以下で説明します。各ステージは図中の番号 (例えば、**1**) によって示されています。

1：アプリケーションやデバイスからアラートが受け取られます。

プローブは、環境内のデバイスやアプリケーションをモニターします。アラート・データは、プローブによって取り込まれ、ObjectServer に転送されます。

2：イベント・データがゲートウェイおよび **Netcool/Impact** に転送されます。

イベントは、ObjectServer から Gateway for JDBC およびメッセージ・バス・ゲートウェイによって読み取られます。Netcool/Impact では、ObjectServer からイベント・データも読み取られます。Netcool/Impact では、ポリシーによって取得された情報でイベント・データがエンリッチされます。

3：イベント・データが **Web GUI** で視覚化され、管理されます。

Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI には、ObjectServer に保管されているアプリケーション・イベントが表示されます。イベント・リストから、イベント・データを変更するツールを実行できます。変更内容は、ObjectServer 内のデータと同期化されます。

4：イベント・データがアーカイブされます。

Gateway for JDBC は、イベント・データを HTTP インターフェースを介してデータベースに送信します。この図には、IBM DB2 データベースが示されていますが、サポートされる任意のデータベースを使用できます。ゲートウェイはレポート・モードで構成されている必要があります。このデータ・フローは、イベント分析機能の前提条件です。

5：アーカイブされたイベント・データに対して、**Event Analytics** アルゴリズムが実行されます。

一連の履歴上のアラートがアーカイブされると、Netcool/Impact ポリシーの季節性アルゴリズムが季節性レポートを生成できます。関連イベント機能は、Tivoli Netcool/OMNIBus の履歴上のイベント・データを分析して、統計的にどのイベントが同時に発生する傾向にあるかを判別します。

6：分析データが視覚化され、管理されます。

季節性機能は、イベントのモニターおよび管理中に、季節性トレンドを特定して調べるために役立ちます。この機能は、Dashboard Application Services Hub 内の季節性イベント・レポート・ポートレットで提供されます。このポートレットには既存の季節性レポートが含まれており、このレポートを使用して、イベント・ビューアーでイベントの季節性パターンを特定することができます。新規の季節性レポートの作成と、既存のレポートの編集が可能です。統計的に関連のあるグループを「関連イベント」GUI で分析することができます。検証されたイベント・グループは、Netcool/Impact 関連ルールとしてデプロイできます。

7：イベント・データが、索引付けのために **Operations Analytics - Log Analysis** に転送されます。

Gateway for Message Bus は、イベント・データを HTTP インターフェースを介して Operations Analytics - Log Analysis 製品に送信します。この製品で、イベント・データへの索引付けが行われます。Tivoli Netcool/OMNIBus Insight Pack V1.3.0.0 では、イベント・データが Operations Analytics - Log Analysis での使用に適したフォーマットに解

析されます。17 ページの図 4 では、イベントの挿入のみを送信するデフォルトの IDUC の接続が示されています。イベントの挿入と再挿入に対応するには、大量のイベントの処理が可能になる、加速イベント通知クライアントをデプロイできます。9 ページの『Netcool/OMNIBus のデプロイメントに関する考慮事項と Operations Analytics - Log Analysis への接続』を参照してください。

関連情報:

-  [Tivoli Netcool/OMNIBus アーキテクチャー](#)
-  [IBM Operations Analytics - Log Analysis アーキテクチャー](#)
-  [Netcool/Impact デプロイメントの概要](#)

Networks for Operations Insight のデータ・フロー

イベント・データがどのようにネットワークから取得され、Networks for Operations Insight フィーチャーの製品およびコンポーネント間で転送されるか。データ・フローの説明は、理解を助けるために単純化されています。基本 Netcool Operations Insight ソリューションのすべての製品について説明しているわけではありません。

データ・フローは、ネットワークに関する情報の取得から始まります。イベントは、プローブによって、および Network Manager 製品と Netcool Configuration Manager 製品によって検出されます。イベント・データは ObjectServer に保管され、集約されます。ネットワーク・イベントは、ネットワーク・トポロジからのデータで補強 (エンリッチ) されます。イベントはイベント・リストに表示され、ネットワーク・トポロジは Dashboard Application Services Hub を通じて Network Manager GUI に表示されます。イベント・データはデータベース内にアーカイブされます。このアーカイブは、分析に使用されるデータ・セットです。データは IBM Operations Analytics - Log Analysis 製品によって取り込まれ、イベント検索機能と季節性機能に使用されるメタデータが作成されます。イベント・リストとネットワーク GUI の間で起動することができます。コンテキスト起動ツールによって、Operations Analytics - Log Analysis 内のアプリケーションおよびネットワークのイベント・データの分析に、イベント・リストからアクセスできます。季節性機能は、トレンドを示して、定期的に発生するイベントが特定されるようにします。

製品間でどのようにデータがフローするか、およびどのように製品が統合されているかを理解するために役立つ情報を、以下のセクションで提供します。

1. 20 ページの『イベント取得のデータ・フロー』: アプリケーション・イベント、ネットワーク・イベント、および構成変更イベントとポリシー違反イベントが、どのように取得、保管、視覚化されるかについて説明しています。
2. 22 ページの『イベントのアーカイブのデータ・フロー』: イベント・データを分析のためにアーカイブして取り込む方法を説明しています。

イベント取得のデータ・フロー

以下の図に、Netcool Operations Insight ソリューションの製品によってイベントがどのように受信、エンリッチ、保管、および視覚化されるかを示します。データ・フローの順序は、番号付きのセクション (例えば **1**) によって示されます。それぞれのセクションについては、この図の後にリストで説明しています。このデータ・フローは、理解しやすいように単純化されています。一部の製品およびコンポーネントは省略されています。それらについては、『図 5 の注』のセクションで説明されています。

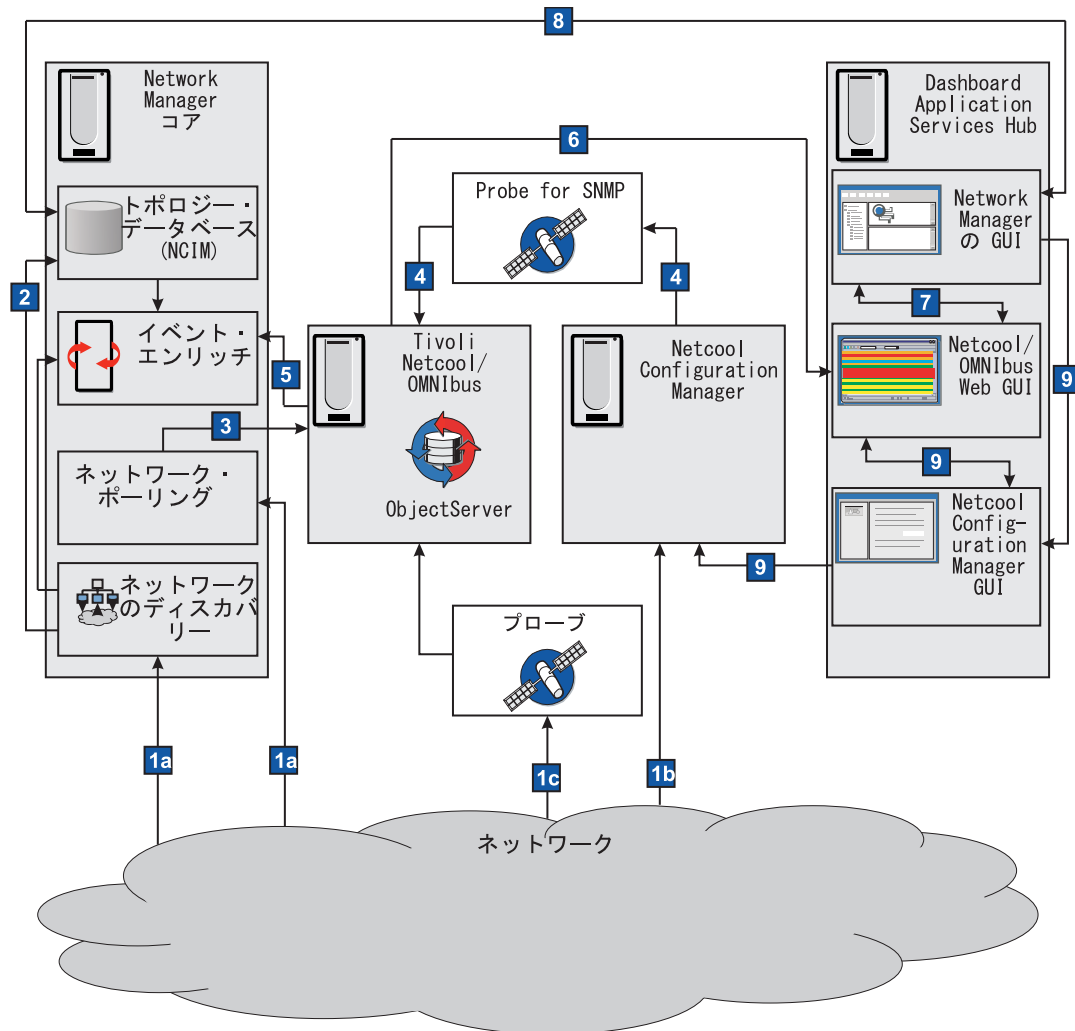


図 5. 単純化されたデータ・フロー

図 5 の最も重要な点を以下に説明します。

1a ネットワーク・ディスカバリーおよびネットワークのポーリング

Network Manager は、ネットワークに関するデータを収集します。ディスカバリー機能は、どのようなエンティティ (例えばルーターやスイッチなど) がネットワーク上にあるかを特定し、接続情報などについてそれらのエンティティに問い合わせます。ネットワークのトポロジーが生成されます。ネットワーク・ポーリングは、ネットワーク・デバイスが稼働中である

かダウンしているか、およびキー・パフォーマンス・パラメーターを超えていないかを判別し、デバイス間リンクに障害がないかを確認します。

1b デバイス構成への変更とポリシー違反の検出

Netcool Configuration Manager は、ネットワーク・エンティティーで発生した構成変更とポリシー違反に関するデータを受け取って保管します。

1c プローブによる、モニター対象のデバイスに関するアラートの送信

ネットワーク上のデバイスをモニターしている Tivoli Netcool/OMNIbus プローブは、ObjectServer にアラートを送信します。

2 ネットワーク・トポロジーの保管

Network Manager は、ステップ **1a** でディスカバーされたネットワーク・トポロジーを分類してNCIM トポロジー・データベースに保管します。

3 ネットワーク・アラートの生成

Network Manager は、ネットワークのポーリング (ステップ **1a**) が失敗した場合、障害アラートを生成します。Network Manager は、関連するポーリングの結果をイベントに変換し、それらのネットワーク・イベントを ObjectServer に送信します。

4 構成変更イベントおよびポリシー違反イベントの生成

Netcool Configuration Manager は、ステップ **1b** で検出された構成変更とポリシー違反のイベント (これ以降はネットワーク構成イベント と呼ぶ) を生成します。構成変更イベントおよびポリシー違反イベントは、Probe for SNMP を介して ObjectServer に送信されます。

5 イベント・エンリッチ

ネットワーク・イベントおよびネットワーク構成イベント (ステップ **3a** およびステップ **3b** で生成されたもの) はイベント・ゲートウェイに渡され、イベント・ゲートウェイでネットワーク・トポロジー・データによってエンリッチされます。例えば、システム・ロケーション、連絡先情報、および製品のシリアル番号をイベントに追加することができます。そのイベントが ObjectServer に返されます。

これで、ObjectServer には、プローブからのアプリケーション・イベント、Network Manager からのネットワーク・イベント、および Netcool Configuration Manager からのネットワーク構成イベントが含まれるようになります。

6 イベントの視覚化およびモニタリング

Tivoli Netcool/OMNIbus Web GUI には、ObjectServer 内にあるアプリケーション・イベント、ネットワーク・イベント、およびネットワーク構成イベントが表示されます。¹

7 さまざまなイベント・ビュー

イベント情報は、Web GUI と Network Manager GUI (例えば「ネットワーク・ビュー」と「ホップ・ビュー」など) の間で共有されます。

8 ネットワーク・トポロジーの視覚化および分析

Network Manager GUI は、NCIM データベース内に存在するネットワー

ク・トポロジー・データを表示します。このデータは、ObjectServer からの構成変更イベント情報およびポリシー・イベント情報によって拡張されます。

9 ネットワーク構成イベントの分析

構成変更およびポリシー違反が、今後の分析のために、Network ManagerGUI および Web GUI や、Netcool Configuration Manager アクティビティ・ビューアー、ウィザード、およびその他の Netcool Configuration Manager UI に表示されます²。

20 ページの図 5 の注

1. Tivoli Netcool/OMNIbus ゲートウェイは、ヘルプ・デスクまたはカスタマー・リレーションシップ・マネージメント (CRM) システム、およびリレーショナル・データベース管理システム (RDBMS) などの他のアプリケーションにアラートを転送するように構成できます。ゲートウェイは、この図に示されていません。JDBC ゲートウェイは、履歴上のイベントをデータベースにアーカイブするように構成することができます。Networks for Operations Insight フィーチャー用に、履歴上のイベントのアーカイブを構成します。詳しくは、23 ページの図 6 を参照してください。
2. オペレーターは、必要に応じて、右クリック・メニューを使用して Reporting Services のコンテキスト起動を行うことができます (この製品がインストールされている場合)。Reporting Services は、この図には示されていません。

イベントのアーカイブのデータ・フロー

以下の図は、Networks for Operations Insight フィーチャーの製品とコンポーネント間のイベント・データのフローを示しています。図を理解しやすくするため、Netcool Operations Insight ソリューションの一部の製品およびコンポーネントは省略されています。このデータ・フローが最初に完了したときに、一連のイベント (すなわちアプリケーション・イベント、ネットワーク・イベント、構成変更イベント、およびポリシー違反イベント) は、視覚化および分析できるようになっています。データ・フローの順序は、番号付きのセクション (例えば **1**) によって示されます。それぞれのセクションについては、この図の後にリストで説明しています。

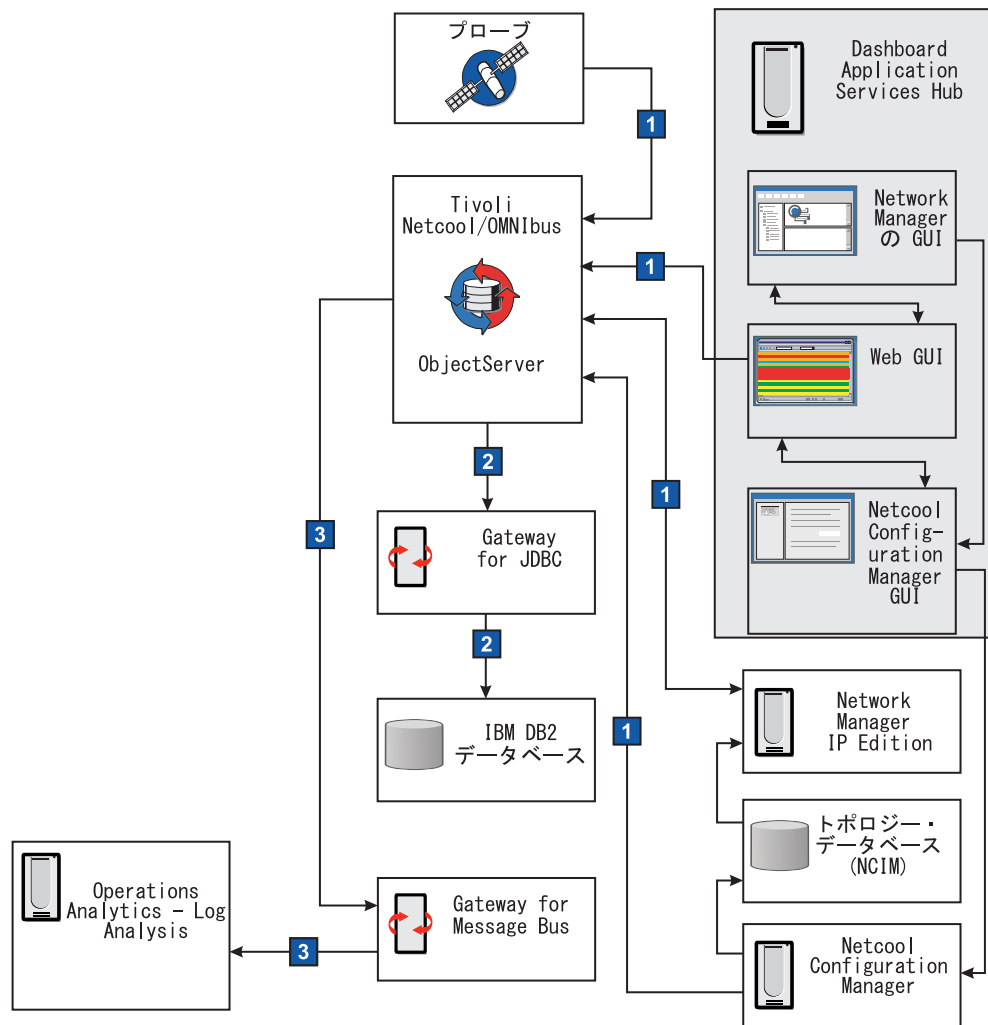


図 6. Networks for Operations Insight フィーチャーのデータ・フロー

図 6 の最も重要な点を以下に説明します。

1 イベントの取得

プローブ、Network Manager、および Web GUI から ObjectServer へのイベント・データのフローを示します。Netcool Configuration Manager イベント・リストを使用するオペレーターによってイベント・データが変更された場合、その変更内容は ObjectServer と同期化されます。このデータ・フローは、20 ページの図 5 で説明されています。

2 イベント・データのアーカイブ

Gateway for JDBC は、ObjectServer からイベントを読み取り、HTTP インターフェースを通じてそれらを ObjectServer に送信します。この図には、IBM DB2 データベースが示されていますが、サポートされる任意のデータベースを使用できます。ゲートウェイはレポート・モードで構成されている必要があります。Netcool Operations Insight ソリューションでゲートウェイおよびデータベースは必須です。それらは、Networks for Operations Insight フィーチャーに固有ではありません。このデータ・フローは、イベント分析機能の前提条件です。一連の履歴上のアラートがアーカ

イブされると、Netcool/Impact ポリシーのアルゴリズムによって、季節性レポートを生成し、統計上の同時発生の可能性に基づいて、イベントをグループ化することができます。

Gateway for JDBC がサポートするデータベース、およびゲートウェイをレポート・モード用に構成する方法について詳しくは、「*IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Gateway for JDBC* リファレンス・ガイド」を参照してください。

3 IBM Operations Analytics - Log Analysis へのイベント・データの転送

このデータ・フローは、イベント検索機能、およびオプションでトポロジ検索機能の前提条件です。Gateway for Message Bus は、ObjectServer からイベントを読み取り、それらを Operations Analytics - Log Analysis に送信します。ここでは、これらのイベントに索引が付けられます。

Dashboard Application Services Hub のイベント・リスト内の右クリック・ツールを使用すると、Operations Analytics - Log Analysis 製品を起動できます。現行のイベントおよび履歴上のイベントに対してコンテキスト検索 (イベント検索) を実行できるほか、ネットワーク・トポロジでネットワーク上の経路を検索 (トポロジ検索) することもできます。

イベント検索をサポートするには、OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 が必要です。また、トポロジ検索を実行するには、Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 が必要です。

IBM Operations Analytics - Log Analysis について詳しくは、<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY/welcome> を参照してください。Tivoli Netcool/OMNIBus Insight Pack について詳しくは、*Tivoli Netcool/OMNIBus Insight Pack* の README を参照してください。Network Manager Insight Pack について詳しくは、*Network Manager Insight Pack* の README を参照してください。Gateway for Message Bus について詳しくは、「*IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Gateway for Message Bus* リファレンス・ガイド」を参照してください。

Network Manager および Tivoli Netcool/OMNIBus のデータ・フローについて詳しくは、Network Manager 資料 (http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK/landingpage/product_welcome_itnm.html) の製品概要を参照してください。

関連概念:

 Netcool Configuration Manager のイベント

必要な資料

Netcool Operations Insight ソリューションに関する資料には、フレッシュ・インストールと各種既存環境からのアップグレードの各シナリオについて、概要から詳細情報に至るまでの説明が記載されています。資料を全部読まなくても、Netcool Operations Insight を使い始めるための方法を理解することができます。ご使用の環境に最も適した資料をこのセクションで確認して、有用な資料だけを参照してください。

本資料で示されているインストールおよびアップグレードのシナリオと、各セクションへのリンクを、以下の表に示します。

表 8. インストール・シナリオとアップグレード・シナリオの資料のセクション

インストールまたはアップグレード	シナリオ	説明箇所
フレッシュ・インストール。 環境内に既存の製品がない状態。	PoC (概念検証) の概要	クイック・スタート・ガイド
	Netcool Operations Insight のインストールに必要なタスクをより詳しく理解するためのクイック・リファレンス	27 ページの『インストールのためのクイック・リファレンス』
	Netcool Operations Insight に含まれるすべての製品およびコンポーネントをインストールする手順のエンドツーエンドの概要 (推奨順)	32 ページの『フレッシュ・インストールの実行』
以前のバージョンからのアップグレード	Netcool Operations Insight のアップグレードのためのクイック・リファレンス	94 ページの『アップグレードのためのクイック・リファレンス』
	Netcool Operations Insight に含まれるすべての製品およびコンポーネントを V1.2 からアップグレードする手順のエンドツーエンドの概要 (推奨順)	95 ページの『Netcool Operations Insight のアップグレード』

Netcool Operations Insight に含まれるいずれかの機能を個別にセットアップする方法を知りたい場合の参照資料を、以下の表に示します。

表 9. Netcool Operations Insight の機能をセットアップするためのシナリオ

機能	シナリオ	リンク
イベント検索	Insight Pack のインストールまたはアップグレード	Insight Pack のインストール
	機能の構成	100 ページの『イベント検索の構成』
Event Analytics	既存の環境への新しい Event Analytics の追加	121 ページの『Event Analytics のインストール』
	既存の Event Analytics のアップグレード	127 ページの『Event Analytics 用の Netcool Operations Insight への更新』
Networks for Operations Insight	既存の環境への Networks for Operations Insight の追加	48 ページの『Networks for Operations Insight フィーチャーのインストール』
トポロジー検索	Insight Pack のインストール	Insight Pack のインストール
	機能の構成	293 ページの『トポロジー検索の構成』

表 9. Netcool Operations Insight の機能をセットアップするためのシナリオ (続き)

機能	シナリオ	リンク
IBM Connections との統合	機能の構成	301 ページの『IBM Connections への統合の構成』
Network Performance Insight	Network Performance Insight は、フロー・ベースのネットワーク・トラフィック・パフォーマンス・モニター・システムです。複雑で複数ベンダーかつ複数テクノロジーのネットワークのネットワーク・パフォーマンス・データを視覚化し、レポートすることにより、ネットワーク・トラフィックに関する包括的でスケーラブルな可視性を提供します。詳しくは、 http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSCVHB/welcome を参照してください。	
IBM Alert Notification	IBM Alert Notification には、複数のモニター・ツールにわたって重大な IT 問題のアラートを即座に通知する機能が用意されています。IT スタッフには、IT 運用環境内の問題についてのアラートが即座に通知されます。詳しくは、 http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSY487/com.ibm.netcool_OMNIBusaas.doc_1.2.0/landingpage/product_welcome_alertnotification.html を参照してください。	
IBM Runbook Automation	IBM Runbook Automation は、IT 運用チームが効率よく効果的に作業するのに役立ちます。オペレーターは、本当に必要なことに集中でき、推奨されるアクションと事前設定されたコンテキストによる最適な解決策への指針を受け取ることができます。Runbook Automation を使用して実行できる内容は次のとおりです。 • 迅速かつ効率よく問題を調べて担当者を割り当てます。 • 迅速に問題を診断して修正し、運用上の知見を構築します。 • 運用手順書と自動化を簡単に作成、公開、および管理します。 • 成果を追跡し、改善の機会を見つけるために、スコアを保持します。 詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSZQDR/com.ibm.rba.doc/RBA_welcome.htmlを参照してください。	

関連概念:

4 ページの『サポートされる製品とコンポーネント』

Netcool Operations Insight のインストール

Netcool Operations Insight の製品およびコンポーネントを、既存のソフトウェアを持たない新しい環境にインストールする方法を示します。ここにはインストールのためのクイック・リファレンスを提供するシナリオのほか、単純なシステム体系におけるエンドツーエンドのシナリオが提供されています。

このタスクについて

注: 使用されているシナリオおよび例は、UNIX システムでのデプロイメントを前提としています。

関連概念:

9 ページの『デプロイメントに関する考慮事項』

16 ページの『データ・フロー』

インストールのためのクイック・リファレンス

Netcool Operations Insight を初めて使用の方が、インストールを初めから実行する場合に、ここに示す情報をクイック・リファレンスとして使用できます。この概要では、Netcool Operations Insight に含まれている各製品についての詳細な知識が前提となっています。ここでは詳細な情報がすべて提供されるわけではありません。Netcool Operations Insight の資料内、または Netcool Operations Insight を構成する製品の製品資料内には、詳細情報へのリンクが提供されています。

以下の表に、Netcool Operations Insight をインストールするための手順の概要をリストします。手順 1 から 12 は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションでは必須です。手順 13 から 17 は、Networks for Operations Insight 機能には必須です。ステップ 18 と 20 は、Networks for Operations Insight を使用し、トポロジー検索機能をデプロイする場合に必要です。ステップ 21 から 23 は、Netcool Operations Insight 環境でセットアップできる追加機能を対象としています。PDF ファイルの形での資料をダウンロードできる場所について詳しくは、32 ページの『PDF 資料の入手先』を参照してください。

ヒント: インストール済みパッケージのバージョンを確認するには、IBM Installation Manager のメイン画面で「ファイル」メニューから「インストール済みパッケージの表示 (View Installed Packages)」を選択します。

表 10. Netcool Operations Insight のインストールのためのクイック・リファレンス

項目	アクション	追加情報
1	前提条件を確認してインストールの準備をします。	各コンポーネントのハードウェアおよびソフトウェアの互換性と詳細なシステム要件については、「IBM Software Product Compatibility Reports」Web サイト (http://www-969.ibm.com/software/reports/compatibility/clarity/index.html) を参照してください。 35 ページの『前提条件の確認』

表 10. Netcool Operations Insight のインストールのためのクイック・リファレンス (続き)

項目	アクション	追加情報
2	Netcool Operations Insight のコンポーネントがインストールされている各ホストに IBM Installation Manager をインストールします。 Installation Manager は、IBM Tivoli Netcool/OMNIBus および Operations Analytics - Log Analysis の圧縮ファイル配布に含まれています。IBM リポジトリまたはローカル・リポジトリから直接インストールする場合は、Installation Manager を別途ダウンロードしてください。Installation Manager を別個にインストールする必要がある場合は、IBM Fix Central からダウンロードすることができます。	http://www.ibm.com/support/fixcentral/ 36 ページの『IBM Installation Manager の入手』 38 ページの『Installation Manager のインストール (GUI またはコンソールの例)』
3	Netcool/OMNIBus コア・コンポーネントをインストールし、V8.1.0.8 (フィックスパック 8) を適用します。関連タスクとして、ObjectServer の作成と始動、およびフェイルオーバーまたは複数階層アーキテクチャーのセットアップなどがあります。	40 ページの『Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact のインストール』 「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus インストールとデプロイメント・ガイド」を参照してください。
4	DB2 データベースをインストールします。REPORTER スキーマを適用します。	42 ページの『DB2 のインストールと REPORTER スキーマの構成』
5	Gateway for JDBC と Gateway for Message Bus をインストールします。	「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Gateway for JDBC リファレンス・ガイド」および「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Gateway for Message Bus Reference Guide」を参照してください。
6	Netcool/Impact および V7.1.0.6 (フィックスパック 6) をインストールします。	40 ページの『Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact のインストール』 「IBM Tivoli Netcool/Impact Netcool/Impact Installation Guide」を参照してください。
7	ObjectServer が Event Analytics 機能の関連イベント機能をサポートするように構成します。nco_sq1 ユーティリティを relatedevents_objectserver.sql ファイル (Netcool/Impact で提供される) に対して実行します。	228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』
8	IBM Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 をインストールします。「omnibus」という名前のデータ・ソースを作成します。	http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY/welcome 100 ページの『イベント検索の構成』のステップ 3 (101 ページ) を参照してください。

表 10. *Netcool Operations Insight* のインストールのためのクイック・リファレンス (続き)

項目	アクション	追加情報
9	Gateway for Message Bus を、ObjectServer と Operations Analytics - Log Analysis 間のインターフェースとして構成します。デフォルトの IDUC チャネルを使用しない場合は、オプションで加速イベント通知クライアントを構成します。	44 ページの『Gateway for JDBC および Gateway for Message Bus の構成』 「 <i>IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Gateway for Message Bus Reference Guide</i> 」を参照してください。
10	OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 をインストールします。	<i>OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 README</i> を参照してください。 注: いずれの Insight Pack も後からインストールできます。ステップ 18 を参照してください。
11	Netcool/OMNIBus Web GUI をインストールします。 注: Web GUI V8.1.0.6 (フィックスパック 6) のインストールの前に、Installation Manager V1.8.2.1 以降が必要です。 インストール時には、以下のコンポーネントも一緒に選択されていることを確認します。 • IBM WebSphere® Application Server V8.5.0.1 (またはそれ以降) for Jazz for Service Management. • IBM WebSphere SDK Java Technology Edition V7.0.x。 • Jazz for Service Management V1.1.2.1。Installation Manager は、Jazz™ リポジトリ内の 2 つの必要なパッケージをディスカバーします。 IBM WebSphere V8.5 用の Jazz for Service Management 拡張機能のパッケージと、Dashboard Application Services Hub V3.1.2.1 のパッケージをインストール対象として選択します。 • Web GUI V8.1.0.6 (フィックスパック 6) を適用します。 • Netcool Operations Insight Extensions for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI フィーチャーをインストールします。Event Analytics を季節性レポートとともにインストールするには、「Event Analytics のインストール」が選択されていることを確認します。	46 ページの『Dashboard Application Services Hub および UI コンポーネントのインストール』 46 ページの『Dashboard Application Services Hub および UI コンポーネントのインストール』および「 <i>IBM Tivoli Netcool/OMNIBus インストールとデプロイメント・ガイド</i> 」を参照してください。

表 10. Netcool Operations Insight のインストールのためのクイック・リファレンス (続き)

項目	アクション	追加情報
12	Web GUI を Operations Analytics - Log Analysis との統合用に構成します。 server.init ファイルで、 scala.* プロパティを適切に設定します。	46 ページの『Dashboard Application Services Hub および UI コンポーネントのインストール』および「IBM Tivoli Netcool/OMNIbus インストールとデプロイメント・ガイド」を参照してください。
13	Network Manager 用の Probe for SNMP および Syslog プローブをインストールします。	50 ページの『Probe for SNMP および Syslog プローブのインストール』
14	オプション: ObjectServer を Network Manager との統合用に構成するために、Network Manager インストール・パッケージから ConfigOMNI スクリプトを取得して、このスクリプトを ObjectServer に対して実行します。	51 ページの『オプション: Network Manager と統合するための ObjectServer の準備』および「IBM Tivoli Network Manager IP Edition Installation and Configuration Guide」を参照してください。 重要: 既に Tivoli Netcool/OMNIbus、Netcool/OMNIbus Knowledge Library、および Probe for SNMP を正常にインストールしてある場合は、この時点で Network Manager をインストールできます。このタスクの手順に従う必要はありません。 Network Manager インストーラーにより、インストール・プロセス中に Tivoli Netcool/OMNIbus が自動的に構成されます。 Network Manager および Tivoli Netcool/OMNIbus をインストールして構成した後に ObjectServer のセットアップが変更された場合は、このトピックでの説明に従って ObjectServer を Network Manager と統合する必要があります。
15	Network Manager で使用するトポロジー・データベースを準備します。	52 ページの『Network Manager 用データベースの準備』
16	Network Manager V4.2 のコア・コンポーネントと GUI コンポーネントをインストールします。	53 ページの『Network Manager および Netcool Configuration Manager のインストール』 詳細情報: 『 「IBM Tivoli Network Manager IP Edition Installation and Configuration Guide」を参照してください。』
17	Netcool Configuration Manager V6.4.2 をインストールし構成します。このタスクには、Network Manager との統合の構成が含まれます。 6.4.2.1 (フィックスパック 1) をインストールします。http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9_6.4.2/ncm/wip/relnotes/ncm_rn_6421.html を参照してください。	53 ページの『Network Manager および Netcool Configuration Manager のインストール』 59 ページの『Netcool Configuration Manager との統合の構成』 詳細情報: 『 「IBM Tivoli Netcool Configuration Manager Installation and Configuration Guide」および「IBM Tivoli Netcool Configuration Manager Integration Guide」を参照してください。』
18	Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 をインストールし、NCIM トポロジー・データベースへの接続を構成します。	Network Manager Insight Pack Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 README を参照してください。 注: この段階で両方の Insight Pack をインストールするには、サマリー・タスク 87 ページの『Insight Pack のインストール』を参照してください。

表 10. Netcool Operations Insight のインストールのためのクイック・リファレンス (続き)

項目	アクション	追加情報
19	トポロジー検索機能を構成します。 nco_sql を scala_itnm_configuration.sql ファイル (Netcool/OMNIBus フィックスパックで提供される) に対して実行します。 Web GUI から Operations Analytics - Log Analysis UI 内の Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションを起動するツールおよびメニューをインストールします。	293 ページの『トポロジー検索の構成』
20	イベント・リストから Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションを起動するように、Web GUI を構成します。	293 ページの『トポロジー検索の構成』のステップ 3 (294 ページ) を参照してください。
21	ネットワーク・パフォーマンス・モニター機能を追加するには、Network Performance Insight をセットアップした後、Netcool/OMNIBus と統合するための手順に従ってください。	Network Performance Insight は、フロー・ベースのネットワーク・トラフィック・パフォーマンス・モニター・システムです。複雑で複数ベンダーかつ複数テクノロジーのネットワークのネットワーク・パフォーマンス・データを視覚化し、レポートすることにより、ネットワーク・トラフィックに関する包括的でスケーラブルな可視性を提供します。詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSCVHB/welcomeを参照してください。
22	Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact から Alert Notification サービスを通じて転送されるイベント・データをセットアップできます。	IBM Alert Notification には、複数のモニター・ツールにわたって重大な IT 問題のアラートを即座に通知する機能が用意されています。IT スタッフには、IT 運用環境内の問題についてのアラートが即座に通知されます。詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSY487/com.ibm.netcool_OMNIBusaas.doc_1.2.0/landingpage/product_welcome_alertnotification.htmlを参照してください。
23	Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact をセットアップして IBM Runbook Automation と統合できます。	IBM Runbook Automation は、IT 運用チームが効率よく効果的に作業するのに役立ちます。オペレーターは、本当に必要なことに集中でき、推奨されるアクションと事前設定されたコンテキストによる最適な解決策への指針を受け取ることができます。Runbook Automation を使用して実行できる内容は次のとおりです。 • 迅速かつ効率よく問題を調べて担当者を割り当てます。 • 迅速に問題を診断して修正し、運用上の知見を構築します。 • 運用手順書と自動化を簡単に作成、公開、および管理します。 • 成果を追跡し、改善の機会を見つけるために、スコアを保持します。 詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSZQDR/com.ibm.rba.doc/RBA_welcome.htmlを参照してください。

PDF 資料の入手先

Netcool Operations Insight の PDF 形式の資料 (Insight Pack README を含む) は、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSTPTP_1.4.0.1/soc/integration/reference/soc_ref_PDFbooks.html から入手できます。

IBM Tivoli Netcool/OMNIbus および Web GUI の資料は、FTP ダウンロード・サイト (<ftp://public.dhe.ibm.com/software/tivoli/Netcool/NetcoolOmnibus/>) から入手できます。

IBM Tivoli Netcool/OMNIbus のゲートウェイの資料は、IBM Knowledge Center (<https://ibm.biz/BdE7Lv>) から入手できます。目次で、必要とするゲートウェイの項目 (例えば、「**Gateway for JDBC**」) をクリックし、次に「**PDF バージョン**」をクリックします。

Netcool/Impact の資料は、Netcool/Impact の Wiki (<https://ibm.biz/BdE79r>) から入手できます。

Operations Analytics - Log Analysis の資料は、IBM Knowledge Center のみから入手できます。ただし、「マイ・コレクション」機能を使用すると、資料を保存して、PDF としてダウンロードすることができます。これを行う方法の例については、321 ページの『「マイ・コレクション」を使用したトピックのサブセットを含む独自 PDF の作成』を参照してください。

Network Manager の資料は、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/common/reference/nmip_ref_pdfbookset.html から入手できます。

Netcool Configuration Manager の資料は、IBM Knowledge Center (http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9_6.4.2/ncm/wip/common/reference/ncm_ref_PDFdocset.dita) から入手できます。

フレッシュ・インストールの実行

このインストールのシナリオでは、Netcool Operations Insight のフレッシュ・インストールについて説明します。4 台のサーバーからなるシステム体系の例が示されています。これは分かりやすくするための簡素化された例です。フェイルオーバー、複数階層アーキテクチャー、ロード・バランシング、およびクラスタリングのために拡大および拡張することができます。

このシナリオでは、Netcool Operations Insight 製品が環境内に存在しないものと仮定しています。したがって、バックアップ、リストア、アップグレードについての情報は示されていません。このシナリオでは、概要的な情報を示し、Netcool Operations Insight に固有の最も注意を要する事項、および発生する可能性の高い問題について説明しています。Networks for Operations Insight フィーチャーをインストールするステップが含まれていますが、基本ソリューションのみインストールする場合はこれらのステップをスキップしてください。このシナリオは順を追って示されているため、記載されたタスクは指定された順序どおりに実行する必要があります。

このシナリオの各タスクについて詳しくは、このページの末尾にある関連概念、関連タスク、および関連情報のリンクを参照してください。

以下の図は、このシナリオの基になるインストール・アーキテクチャーを簡略化したものです。

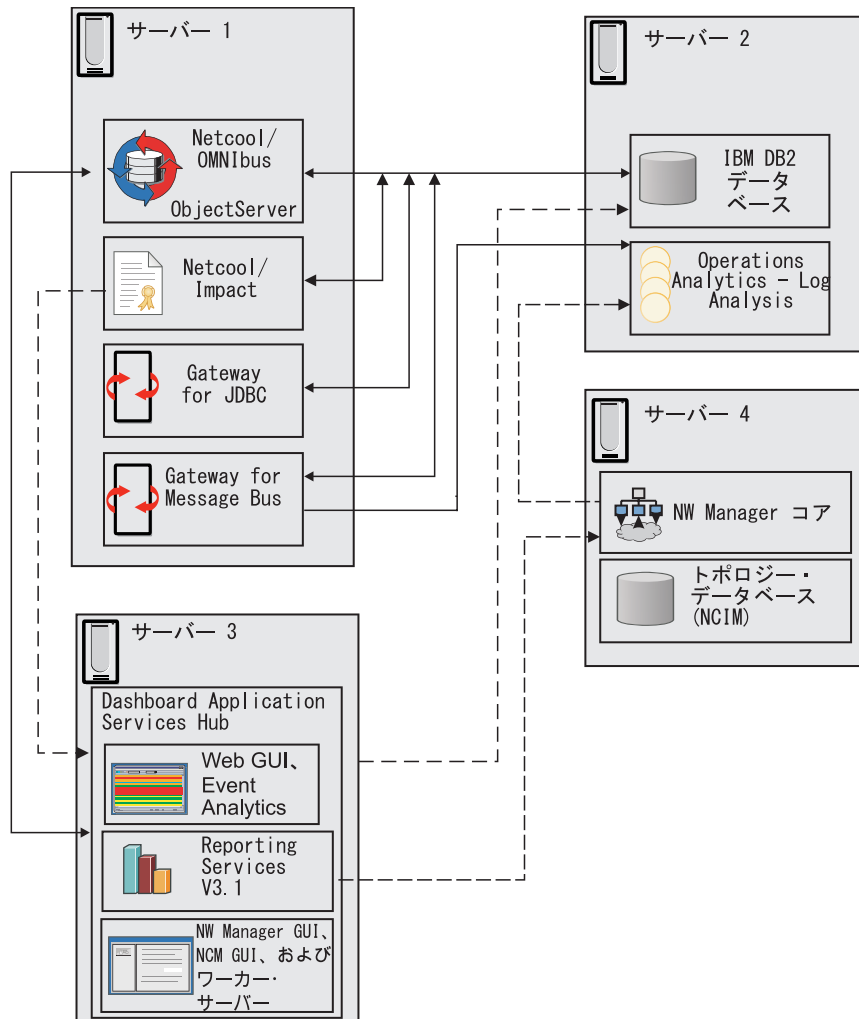


図 7. インストール・シナリオのための簡素化されたインストール・アーキテクチャー

サーバー 1

Netcool/OMNIBus V8.1.0.8 コア・コンポーネント、Gateway for JDBC、Gateway for Message Bus V7.0、および Netcool/Impact V7.1.0.6 をホストします。イベント分析機能およびトポロジー検索機能をサポートするための構成が ObjectServer に適用されます。イベント分析は、基本の Netcool Operations Insight ソリューションの一部です。トポロジー検索は、Networks for Operations Insight フィーチャーの一部です。Gateway for Message Bus のデフォルト構成は、イベントの挿入を IDUC チャネル経由で Operations Analytics - Log Analysis に転送することです。この接続は、加速イベント通知クライアントを介してイベントの再挿入または挿入を転送するように変更できます。

サーバー 2

IBM DB2 データベースおよび Operations Analytics - Log Analysis

V1.3.2 または V1.3.3 をホストします。OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 および Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 が Operations Analytics - Log Analysis にインストールされます。 OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 は、基本の Netcool Operations Insight ソリューションの一部です。 Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 は、Networks for Operations Insight フィーチャーの一部です。 イベントを Gateway for JDBC から転送できるようにするために、REPORTER スキーマが DB2 データベースに適用されます。 DB2 についてはさまざまなインストール方式が可能です。 詳しくは、<https://ibm.biz/BdEWtm>を参照してください。

サーバー 3

Dashboard Application Services Hub (Jazz for Service Management のコンポーネント) をホストします。 Jazz for Service Management は、GUI フレームワークおよび Reporting Services コンポーネントを提供します。 Netcool/OMNIBus V8.1.0.6 Web GUI および Event Analytics コンポーネントが Dashboard Application Services Hub にインストールされます。 このセットアップでは、そのほかに Networks for Operations Insight のフィーチャーの一部である Network Manager GUI コンポーネントおよび Netcool Configuration Manager とともに Reporting Services がこのサーバーにインストールされます。 この場合は GUI サーバーの構成が単純になり、製品によって提供されるレポート・エンジンおよびレポート・テンプレートが 1 つのホストで提供されます。

注: Network Manager と Netcool Configuration Manager のそれぞれのレポートを製品のインストール時にインストールすることで、それらが Reporting Services と連携して動作するようにセットアップできます。 Netcool/OMNIBus V8.1 以降を Reporting Services V3.1 と統合して、イベントのレポートをサポートすることができます。 この統合を構成するには、Reporting Services をゲートウェイ経由でリレーショナル・データベースに接続します。 次に、Netcool/OMNIBus で提供されているレポート・パッケージを Reporting Services にインポートします。 イベント・レポートについて詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/omnibus/wip/install/task/omn_con_ext_deploytcrrreports.htmlを参照してください。

サーバー 4

Networks for Operations Insight フィーチャーの最終的なコンポーネントである Network Manager コア・コンポーネントと NCIM トポロジー・データベースをホストします。 このセットアップでは大規模ネットワークを想定しており、ネットワークのディスカバーおよびネットワーク・トポロジーの作成と維持に多くのシステム・リソースが必要になる場合があります。

関連情報:

 Tivoli Common Reporting へのイベント要約レポートのインポート

前提条件の確認

各製品をインストールする前に、IBM Prerequisite Scanner (PRS) を実行して、ターゲット・ホストが最適であること、およびインストール上の予測可能な問題がないことを確認してください。また、構成するサーバーの `maxproc` と `ulimit` の設定を調べて、適切な最小値に設定されていることを確認してください。

始める前に

- 各コンポーネントのハードウェアおよびソフトウェアの互換性と詳細なシステム要件については、「IBM Software Product Compatibility Reports」Web サイト (<http://www-969.ibm.com/software/reports/compatibility/clarity/index.html>) を参照してください。

ヒント: レポートを作成するときは、Netcool Operations Insight を探して、ご使用のバージョン (例えば、V1.4) を選択してください。レポートでは、吹き出しヘルプおよび追加のリンクによって役立つ追加情報が使用可能です。

例えば、各コンポーネントのオペレーション・システムとの互換性を確認するには、「オペレーティング・システム」タブに移動してご使用のオペレーション・システムの行を探し、「コンポーネント」列内のアイコンにカーソルを移動します。制限事項について詳しくは、「詳細」列の「表示」リンクをクリックしてください。

- IBM Prerequisite Scanner を IBM Fix Central (<http://www.ibm.com/support/fixcentral/>) からダウンロードします。「IBM Prerequisite Scanner」を検索してください。
- 使用可能な最新バージョンをダウンロードした後、`.tar` アーカイブをすべてのホスト上のターゲット・ディレクトリーに解凍します。
- IBM Tivoli Netcool/Impact ホスト上で、Impact サーバーおよび GUI サーバーの両方についてホストがスキャンされるように環境変数 `IMPACT_PREREQ_BOTH=True` を設定します。

すべての製品コードのリストについては、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27041454>を参照してください

このタスクについて

Operations Analytics - Log Analysis および IBM DB2 は、IBM Prerequisite Scanner でサポートされていません。これらの製品のインストールおよびシステム要件については、資料を参照してください。

手順

IBM Prerequisite Scanner の使用

- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus および IBM Tivoli Netcool/Impact ホスト上で、IBM Prerequisite Scanner を次のように実行します。

製品	コマンド
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus	<code>prereq_checker.sh NOC detail</code>
IBM Tivoli Netcool/Impact	<code>prereq_checker.sh NCI detail</code>

- GUI コンポーネントのホストの場合、次のようにします

製品	コマンド
Jazz for Service Management	prereq_checker.sh ODP detail
Dashboard Application Services Hub	prereq_checker.sh DSH detail
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI	prereq_checker.sh NOW detail

- Networks for Operations Insight ホスト上で、以下のようになります。

製品	コマンド
IBM Tivoli Network Manager	prereq_checker.sh TNM detail
IBM Tivoli Netcool Configuration Manager	prereq_checker.sh NCM detail
Tivoli Common Reporting	prereq_checker.sh TCR detail

maxproc の設定を確認します。

- 次のファイルを開きます。/etc/security/limits.d/90-nproc.conf

- nproc を 131073 の値に設定します。

ulimit の設定を確認します。

- 次のファイルを開きます。/etc/security/limits.conf

- nofile を 131073 の値に設定します。

関連タスク:

 Operations Analytics - Log Analysis のインストール前提条件

 DB2 製品のシステム要件

 DB2 製品のインストール要件

IBM Installation Manager の入手

IBM リポジトリまたはローカル・リポジトリから直接インストールを行う場合にのみ、このタスクを実行します。Netcool/OMNIBus、Netcool/

Impact、Operations Analytics - Log Analysis、および Dashboard Application Services Hub をベースとする製品とコンポーネントをホストする各コンピューター上に、IBM Installation Manager をインストールする必要があります。このシナリオでは、これはサーバー 1、サーバー 2、およびサーバー 3 を意味します。これらの製品のインストール・パッケージには、Installation Manager が含まれています。

始める前に

<http://www.ibm.com> で、IBM ID を作成します。IBM Fix Central からソフトウェアをダウンロードするには、IBM ID が必要です。

注:

Red Hat Enterprise Linux では、Installation Manager の GUI モードで libcairo UI ライブラリーを使用します。RHEL 6 の最新の更新には既知の問題があり、そのために Installation Manager が異常終了してしまいます。Red Hat Enterprise Linux 6 に Installation Manager をインストールする前に、技術情報

<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21690056> の説明に従って、libcairo UI ライブラリーをサポート対象バージョンに構成してください。

更新できない場合の、この問題の回避策は、技術情報 <http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21688528> に記載されています。

要確認: IBM パスポート・アドバンテージおよび DVD から入手できる Netcool/OMNIbus 8.1 のインストール・イメージには、Installation Manager が含まれています。Netcool/OMNIbus を IBM リポジトリまたはローカル・リポジトリから直接インストールしている場合は、Installation Manager を別途ダウンロードするだけで済みます。

Installation Manager は、管理者モード、非管理者モード、グループ・モードの 3 つのユーザー・モードのうちのいずれかでインストールすることができます。ユーザー・モードによって、Installation Manager を実行できるユーザーと、製品データを保管する場所が決まります。以下の表に、IBM Netcool Operations Insight に含まれる各製品でサポートされる、Installation Manager のユーザー・モードを示します。

表 11. Installation Manager のサポートされるユーザー・モード

製品	管理者モード	非管理者モード	グループ・モード
IBM Tivoli Netcool/OMNIbus (OMNIbus コア、Web GUI、ゲートウェイを含みます。)	X	X	X
IBM Tivoli Netcool/Impact	X	X	X
IBM Operations Analytics - Log Analysis (Insight Pack は、Operations Analytics - Log Analysis の pkg_mgmt コマンドによってインストールされます。)		X	

手順

IBM Fix Central Web サイトでは、製品ファイルを見つけるための方法として、「製品の選択」と「製品の検索」の 2 とおりの方法があります。以下に、「製品の検索」オプションを使用した場合の手順を説明します。

1. IBM Fix Central (<http://www.ibm.com/support/fixcentral/>) にアクセスして、**IBM Installation Manager** を検索します。

- a. 「製品の検索」タブで、「製品セクター」フィールドに IBM Installation Manager と入力します。
 - b. 「インストール済みバージョン」のリストから、V1.8.2.1 以降を選択します。
 - c. 「プラットフォーム」のリストから、目的のホスト・オペレーティング・システムを選択して、「次へ進む」をクリックします。
2. 「フィックスの特定」ページで、「フィックスの参照」と「このバージョンに適用するフィックスの表示 (1.7.2.0)」を選択します。「続行」をクリックします。
 3. 「フィックスの選択」ページで、目的のホスト・オペレーティング・システムに適合するインストール・ファイルを選択して、「次へ進む」をクリックします。
 4. プロンプトが出されたら、IBM ID とパスワードを入力します。
 5. ブラウザーが Java™ 対応である場合は、「Download Director」オプションを選択します。そうでない場合は、「HTTP」ダウンロード・オプションを選択します。
 6. インストール・ファイルのダウンロードを開始します。ダウンロードの場所を書き留めておきます。

次のタスク

Installation Manager をインストールします。<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24034941>を参照してください。

関連情報:

 IBM Installation Manager の概要

Installation Manager のインストール (GUI またはコンソールの例)

この例に示すように、ウィザード・スタイルの GUI または対話式のコンソールで Installation Manager をインストールすることができます。

始める前に

以下のアクションを実行します。

- Installation Manager インストール・ファイルの内容を適切な一時ディレクトリに解凍します。
- 対象のインストール済み環境、データ、および共有ディレクトリに対して、必要なユーザー権限があることを確認します。
- コンソール・インストーラーは必要なディスク・スペースを報告しません。コンソール・インストールを開始する前に、十分な空き領域があることを確認してください。

Installation Manager インストーラーを実行する前に、以下のターゲット・ディレクトリを作成して、Installation Manager の実行時および以降の製品インストール時に指定するユーザーおよびグループのファイル権限を設定します。

メイン・インストール・ディレクトリ
製品バイナリーのインストール先。

データ・ディレクトリー

Installation Manager がインストール済み製品に関する情報を格納する場所。

共有ディレクトリー

Installation Manager がロールバックに使用するダウンロード済みパッケージを格納する場所。

これらのディレクトリーが同じであってはなりません。例えば、次のようにします。

```
mkdir /opt/IBM/NetcoolIM
mkdir /opt/IBM/NetcoolIM/IBMIM
mkdir /opt/IBM/NetcoolIM/IBMIMData
mkdir /opt/IBM/NetcoolIM/IBMIMShared
chown -R netcool:ncoadmin /opt/IBM/NetcoolIM
```

このタスクについて

使用するユーザー・モードに応じて、最初のインストール・ステップが異なります。インストールを完了するためのステップは、すべてのユーザー・モードとオペレーティング・システムに共通です。

Installation Manager は、インストールしたファイルおよびディレクトリーの許可モードを設定するときに、現在の `umask` 設定を考慮に入れます。グループ・モードを使用すると、Installation Manager は、設定されているすべてのグループ・ビットを無視し、結果として値が 0 の場合は `umask` として 2 を使用します。

手順

1. グループ・モードでインストールするには、以下のようになります。
 - a. `id` ユーティリティーを使用して、現在有効なユーザー・グループがインストールに適しているかどうかを検証します。必要に応じて、以下のコマンドを使用して、適切かつ有効なグループで新しいシェルを開始します。
`newgrp group_name`
 - b. `umask` ユーティリティーを使用して `umask` 値を確認します。必要な場合は、`umask` 値を変更します。
 - c. Installation Manager のインストール・ファイルがある一時ディレクトリーに移動します。
 - d. 以下のコマンドを使用して、インストールを開始します。

GUI インストール

```
./groupinst -dL data_location
```

コンソール・インストール

```
./groupinstc -c -dL data_location
```

ここで、`data_location` では、データ・ディレクトリーを指定します。グループのすべてのメンバーがアクセスできるデータ・ディレクトリーを指定する必要があります。

要確認: Installation Manager の各インスタンスのデータ・ディレクトリーは異なっている必要があります。

2. インストーラーの指示に従って、インストールを完了します。インストールのさまざまな段階で、インストーラーに以下の項目を入力する必要があります。

GUI インストール

- 最初のパネルで、Installation Manager パッケージを選択します。
- ご使用条件を読み、同意します。
- プロンプトが出されたら、インストール・ディレクトリーを入力するか、デフォルト・ディレクトリーを受け入れます。
- インストール・サイズの合計が、使用可能なディスク・スペースを超えないことを確認します。
- プロンプトが表示されたら、Installation Manager を再始動します。

コンソール・インストール

- ご使用条件を読み、同意します。
- プロンプトが出されたら、インストール・ディレクトリーを入力するか、デフォルト・ディレクトリーを受け入れます。
- 必要に応じて、応答ファイルを生成します。ディレクトリー・パスおよび .xml の拡張子を持つファイル名を入力します。応答ファイルは、インストールが完了する前に生成されます。
- プロンプトが表示されたら、Installation Manager を再始動します。

タスクの結果

Installation Manager がインストールされ、IBM Netcool Operations Insight をインストールするために使用できるようになりました。

次のタスク

必要に応じて、Installation Manager のインストール・ディレクトリー・パスを PATH 環境変数に追加します。

Netcool/OMNIbus および Netcool/Impact のインストール

Netcool/OMNIbus のコア・コンポーネント、Netcool/Impact、および Gateway for JDBC と Gateway for Message Bus を入手して、インストールします。これらの製品はすべて、IBM Installation Manager によってインストールされます。IBM Installation Manager を使用して、これらの製品のインストール・パッケージをダウンロードし、1 つのフローでインストールすることができます。インストール後に、製品ごとの追加構成を行う必要があります。

手順

- Netcool/OMNIbus V8.1 のコア・コンポーネントをインストールします。インストール後に、初期構成ウィザード (**nco_icw**) を使用して、製品を構成したり (例えば、ObjectServer の作成と始動など)、自動フェイルオーバーや複数階層アーキテクチャーを構成できます。Netcool/OMNIbus のインストールに関する説明は、後述の関連リンクを参照してください。
- Netcool/Impact GUI サーバーおよび Impact サーバーをインストールします。Netcool/Impact のインストールに関する説明は、後述の関連リンクを参照してください。

- Netcool/OMNIBus コア 8.1.0.8 (フィックスパック 8) と Netcool/Impact 7.1.0.6 (フィックスパック 6)、および IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for Netcool Operations Insight_7.1.0.6 フィーチャー (Netcool/Impact フィックスパックで提供) を適用します。IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for Netcool Operations Insight_7.1.0.6 フィーチャーは、イベント分析機能に必要です。フィックスパックは IBM Fix Central から入手できます。<http://www.ibm.com/support/fixcentral/> を参照してください。
- Netcool/Impact から DB2 データベースへの接続を作成します。231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』を参照してください。
- ObjectServer が Event Analytics 機能の関連イベント機能をサポートするように構成します。この構成では、alerts.status テーブルに ParentIdentifier 列が必要です。228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』で説明されているように、SQL ユーティリティを使用して列を追加します。
- ObjectServer が トポロジー検索機能をサポートするように構成します。
\$NCHOME/omnibus/extensions で、**nco_sql** ユーティリティを
scala_itnm_configuration.sql ファイルに対して実行します。

./nco_sql -user root -password myp4ss -server NCOMS
< /opt/IBM/tivoli/netcool/omnibus/extensions/scala/scala_itnm_configuration.sql

NCIM データベースからの Network Manager データによってイベントが拡張されるまでイベントの保管を遅延するトリガーが ObjectServer に適用されます。
- Gateway for JDBC と Gateway for Message Bus をインストールします。インストール後に、サーバー・エディター (**nco_xigen**) で ObjectServer とゲートウェイ間の接続を作成します。サーバー・エディターでの接続の作成に関する説明は、後述の関連リンクを参照してください。
- Netcool/Impact と IBM Connections 間の統合を構成します。この構成では、**\$IMPACT_HOME/add-ons/IBMConnections/importData** プロジェクトを Netcool/Impact にインポートします。また、IBM Connections のプロパティを **\$IMPACT_HOME/etc/NCI_server.props** ファイルに追加する必要があります。このファイルを編集した後、Netcool/Impact サーバーを再始動します。IBM Connections への統合の構成と、Impact サーバーの再始動に関する説明は、後述の関連リンクを参照してください。

次のタスク

IBM Fix Central で、使用可能な暫定修正を探して適用します。
<http://www.ibm.com/support/fixcentral/> を参照してください。

関連概念:

 サーバー・エディターでの接続

関連タスク:

 Tivoli Netcool/OMNIBus の インストール

 ObjectServer の作成および実行

231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』

228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』

301 ページの『IBM Connections への統合の構成』

 Impact サーバーの再始動

関連資料:

9 ページの『Netcool/OMNIbus のデプロイメントに関する考慮事項と Operations Analytics - Log Analysis への接続』

 初期構成ウィザード

関連情報:

 Netcool/Impact のインストール

DB2 のインストールと REPORTER スキーマの構成

Netcool Operations Insight には、履歴上のイベントのアーカイブのために、REPORTER スキーマを適用した DB2 データベースが必要です。

ヒント: DB2 の履歴イベント・データのハウスキーピングやサンプル SQL スクリプトについては、Netcool/OMNIbus ベスト・プラクティス Wiki (http://ibm.biz/nco_bps) の「Netcool/OMNIbus Best Practices Guide」に記載されているセクション『Historical event archive sizing guidance』を参照してください。

手順

- DB2 データベースとゲートウェイ構成スクリプトのパッケージを入手して、ダウンロードします。
- パッケージを解凍します。次に、root システム・ユーザーとして **db2setup** コマンドを実行し、ホストに DB2 データベースをインストールします。**db2setup** コマンドを実行すると、DB2 セットアップ・ウィザードが開始します。このセットアップ・ウィザードでは、進行中にいくつかのユーザーを作成する必要があるため、root システム・ユーザーとしてインストールしてください。
- Netcool/OMNIbus ホスト上で IBM Installation Manager を実行し、ゲートウェイ構成スクリプトをインストールします。REPORTER スキーマの作成に必要な SQL ファイルが、`$OMNIHOME/gates/reporting/db2/db2.reporting.sql` にインストールされます。
- `db2.reporting.sql` ファイルで、以下の変更を行います。
 - CREATE DATABASE 行のコメントを外します。
 - デフォルトのユーザー名とパスワードを、DB2 のインストールと一致するように設定します。次のように入力します。

```
CREATE DATABASE reporter @  
CONNECT TO reporter USER db2inst1 USING db2inst1 @
```

- 以下の行のコメントを外して、対応するアラートが削除されたときに、関連付けられているジャーナル行と詳細行がデータベースから削除されるようにします。


```
-- Uncomment the line below to enable foreign keys
-- This helps pruning by only requiring the alert to be
-- deleted from the status table
, CONSTRAINT eventref FOREIGN KEY (SERVERNAME, SERVERSERIAL) REFERENCES
REPORTER_STATUS(SERVERNAME, SERVERSERIAL) ON DELETE CASCADE)
```

この SQL は、SQL ファイル内に 2 回出現します。1 つは詳細テーブル定義内で、もう 1 つはジャーナル・テーブル定義内です。両方のインスタンスのコメントを外してください。

- DB2 データベースに対してこの SQL ファイルを実行するために、次のコマンドを db2inst1 システム・ユーザーとして実行します。

```
$ db2 -td@ -vf db2.reporting.sql
```

結果

DB2 インストーラーにより、db2inst1 を含むいくつかのユーザーが作成されます。

関連情報:

 DB2 セットアップ・ウィザードによる DB2 サーバーのインストール (Linux および UNIX)

 Gateway for JDBC のレポート・モード用の構成スクリプト

IBM Operations Analytics - Log Analysis のインストール

Operations Analytics - Log Analysis では、GUI およびコンソールによるインストールと、サイレント・インストールがサポートされます。64 ビット・オペレーティング・システムと z/OS オペレーティング・システムでは、インストール・プロセスが異なります。

手順

Operations Analytics - Log Analysis は、IBM Installation Manager を使用してインストールできます。あるいは、install.sh ラッパー・スクリプトを実行することもできます。

ヒント: ベスト・プラクティスでは、Web GUI および Operations Analytics - Log Analysis を別々のホストにインストールします。

制約事項: Operations Analytics - Log Analysis は、IBM Installation Manager のグループ・モードでのインストールをサポートしません。

次のタスク

- ホストのロケールが英語 (米国) に設定されていない場合は、Operations Analytics - Log Analysis のスクリプトを実行する前に、コマンド・シェルのロケールを `export LANG=en_US.UTF-8` に設定します。
- 基本 Netcool Operations Insight ソリューションのみをデプロイする予定の場合は、Tivoli Netcool/OMNIbus Insight Pack をインストールします。 87 ページの『Insight Pack のインストール』を参照してください。Tivoli Netcool/OMNIbus Insight Pack について記述したステップのみを実行します。
- IBM Fix Central で、使用可能な暫定修正を探して適用します。
<http://www.ibm.com/support/fixcentral/>を参照してください。

関連タスク:

 Operations Analytics - Log Analysis のインストール

関連資料:

 インストールの計画

Gateway for JDBC および Gateway for Message Bus の構成

Gateway for JDBC をレポート・モードで実行するように構成して、Gateway for JDBC がイベント・データを DB2 データベースに転送してアーカイブできるようにします。Gateway for Message Bus ゲートウェイがイベント・データを Operations Analytics - Log Analysis に転送するように構成し、Gateway for Message Bus ゲートウェイを Operations Analytics - Log Analysis モードで実行します。

始める前に

- DB2 データベースをインストールし、REPORTER スキーマを構成して、Gateway for JDBC が接続できるようにします。
- Tivoli Netcool/OMNIbus のコア・コンポーネントと同じホスト (つまり、サーバー 1) にゲートウェイをインストールします。
- Operations Analytics - Log Analysis をインストールし、Gateway for Message Bus との接続のための URL を取得します。

手順

- Gateway for JDBCを構成します。 このタスクには、次の手順が含まれます。
 - ターゲット・データベース用の JDBC ドライバーをデータベース・ベンダーから入手し、ベンダーの指示に従ってインストールします。ドライバーは通常、.jar ファイルの形で提供されます。
 - ゲートウェイがターゲット・データベースと通信できるようにするために、\$OMNIHOME/etc/G_JDBC.props ファイルの **Gate.Jdbc.*** プロパティにそれぞれの値を指定する必要があります。これは、ゲートウェイに付属しているデフォルトのプロパティ・ファイルです。このファイルがレポート・モード用に構成されます。

Gateway for JDBC のプロパティ・ファイルのサンプルを以下に示します。

```
# Reporting mode properties
Gate.Jdbc.Mode: 'REPORTING'
# Table properties
Gate.Jdbc.StatusTableName: 'REPORTER_STATUS'
Gate.Jdbc.JournalTableName: 'REPORTER_JOURNAL'
Gate.Jdbc.DetailsTableName: 'REPORTER_DETAILS'
# JDBC Connection properties
Gate.Jdbc.Driver: 'com.ibm.db2.jcc.DB2Driver'
Gate.Jdbc.Url: 'jdbc:db2://server3:50000/REPORTER'
Gate.Jdbc.Username: 'db2inst1'
Gate.Jdbc.Password: 'db2inst1'
Gate.Jdbc.ReconnectTimeout: 30
Gate.Jdbc.InitializationString: ''
# ObjectServer Connection properties
Gate.RdrWtr.Username: 'root'
Gate.RdrWtr.Password: 'netcool'
Gate.RdrWtr.Server: 'AGG_V'
```

- Gateway for Message Bus がイベント・データを Operations Analytics - Log Analysis に転送するように構成します。このタスクには、次の手順が含まれます。
 - Netcool/OMNIBus インターフェース・ファイル内でのゲートウェイ・サーバーの作成
 - G_SCALA.props プロパティ・ファイルの構成 (.map マッピング・ファイルの指定を含む)
 - scalaTransformers.xml ファイル内でのエンドポイントの構成
 - SSL 接続の構成 (必要な場合)
 - scalaTransport.properties ファイル内でのトランスポート・プロパティの構成
- Gateway for Message Bus のデフォルトの構成 (ObjectServer と Operations Analytics - Log Analysis 間の IDUC チャネル、およびイベントの挿入のみをサポート) を使用しない場合は、AEN クライアントを介したイベント転送を構成します。この構成では、イベントの挿入と再挿入がサポートされます。このタスクには次の手順が含まれます。
 - Gateway for Message Bus で AEN イベント転送を構成する。
 - 挿入後トリガーおよびトリガー・グループを有効にして、各 ObjectServer の AEN チャネルとトリガーを構成する。
- Gateway for Message Bus を Operations Analytics - Log Analysis モードで始動します。例えば、次のようにします。


```
$OMNIHOME/bin/nco_g_xml -propsfile $OMNIHOME/etc/G_SCALA.props
```

ゲートウェイにより、Tivoli Netcool/OMNIBus から Operations Analytics - Log Analysis へのイベントの送信が開始されます。
- Gateway for JDBC を reporter モードで始動します。例えば、次のようにします。


```
$OMNIHOME/bin/nco_g_jdbc -jdbcreporter
```
- コマンド行インターフェースからゲートウェイを始動する代わりに、ゲートウェイをプロセス制御下に置きます。プロセス制御について詳しくは、「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus 管理ガイド」を参照してください。

関連概念:

Tivoli Netcool/OMNIBus プロセス・コントロール

関連情報:

Gateway for JDBC 資料

Gateway for Message Bus 資料

Dashboard Application Services Hub および UI コンポーネントのインストール

Dashboard Application Services Hub とすべての UI コンポーネントをインストールします。これは、Netcool/OMNIbus Web GUI、Event Analytics コンポーネント、フィックスパック、およびオプションで Reporting Services に当てはまります。

UI コンポーネントは 2 段階でインストールされます。最初に、IBM WebSphere Application Server および Jazz for Service Management がインストールされ、これらは基礎となる UI テクノロジーを提供します。次に、Event Analytics コンポーネントおよびイベント検索機能をサポートする Web GUI および拡張パッケージがインストールされます。インストール後に、Operations Analytics - Log Analysis と統合してトポロジー検索機能をサポートするように Web GUI を構成します。

オプションで、Reporting Services V3.1 を Dashboard Application Services Hub にインストールすることができます。Network Manager と Netcool Configuration Manager のそれぞれのレポートを製品のインストール時にインストールすることで、それらが Reporting Services と連携して動作するようにセットアップできます。Netcool/OMNIbus V8.1 以降を Reporting Services V3.1 と統合して、イベントのレポートをサポートすることができます。この統合を構成するには、Reporting Services をゲートウェイ経由でリレーショナル・データベースに接続します。次に、Netcool/OMNIbus で提供されているレポート・パッケージを Reporting Services にインポートします。イベント・レポートについて詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIbus.doc_8.1.0/omnibus/wip/install/task/omn_con_ext_deploytcrrreports.htmlを参照してください。

始める前に

- IBM パスポート・アドバンテージからパッケージを取得します。パッケージに必要な eAssembly 番号については、<http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24041694>を参照してください。
- Reporting Services V3.1 をインストールする場合は、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSEKCU_1.1.2.1/com.ibm.psc.doc/install/tcr_c_install_prereqs.html に示されている追加要件をホストが満たしていることを確認してください。
- Web GUI V8.1 フィックスパック 4 のインストールの前に、IBM Installation Manager V1.8.2.1 以降が必要です。
- Dashboard Application Services Hub V3.1.2.1 Cumulative Patch 3 を https://www.ibm.com/developerworks/community/wikis/home?lang=en#!/wiki/W8b1151be2b42_4819_998e_f7de7db7bfa2/page/Download%20Cumulative%20Patches%20-%20UI%20Services%20%28DASH%29 からダウンロードします。

手順

1. Installation Manager を開始して Jazz for Service Management をインストールします。インストールする必要があるパッケージを以下に示します。

パッケージ	説明
IBM WebSphere Application Server V8.5.0.1 (またはそれ以降) for Jazz for Service Management	V8.5.0.1 以降を選択します。V8.0.5 も見つかった場合、これをクリアします。
IBM WebSphere SDK Java Technology Edition V7.0.x。	
Jazz for Service Management V1.1.2.1	インストール用に以下の項目を選択します。 • IBM WebSphere V8.5 用の Jazz for Service Management 拡張機能。 • Dashboard Application Services Hub V3.1.2.1。
Reporting Services V3.1	このパッケージはオプションです。イベントおよびネットワーク管理のレポートを実行する場合に選択します。

2. Web GUI および拡張機能を構成するパッケージをインストールします。

パッケージ	説明
Netcool/OMNIbus Web GUI	これは Web GUI をインストールする基本コンポーネントです。
IBM SmartCloud Analytics - Log Analysis を使用したイベント検索用のツールおよびメニューのインストール	このパッケージは、Tivoli Netcool/OMNIbus Insight Pack のカスタム・アプリケーションをイベント・リストから起動するツールをインストールします。
Netcool Operations Insight Extensions for IBM Tivoli Netcool/OMNIbus Web GUI	このパッケージは、Event Analytics GUI をインストールします。
Netcool/OMNIbus Web GUI V8.1 フィックスパック 6	これは、トポロジー検索機能のための拡張機能を含むフィックスパックです。

3. Web GUIを構成します。例えば、データ・ソース (ObjectServer)、ユーザー、グループなどへの接続です。Web GUI 構成ツールを使用してこれを行うことができます。詳しくは、<https://ibm.biz/BdXqcP>を参照してください。
4. Operations Analytics - Log Analysis との統合を構成します。server.init ファイルに以下のプロパティが設定されていることを確認します。

```
scala.app.keyword=OMNIbus_Keyword_Search
scala.app.static.dashboard=OMNIbus_Static_Dashboard
scala.datasource=omnibus
scala.url=protocol://host:port
scala.version=1.2.0.3
```

これらのいずれかの値を変更する必要がある場合は、Web GUI サーバーを再始動します。

5. Web GUI Administration API クライアントをセットアップします。
6. Web GUI から Operations Analytics - Log Analysis UI 内の Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションを起動するツールおよびメニューをインストールします。\$WEBGUI_HOME/extensions/LogAnalytics で、runwaapi コマンドを scalaEventTopology.xml ファイルに対して実行します。

```
$WEBGUI_HOME/waapi/bin/runwaapi -user username -password password -file  
scalaEventTopology.xml
```

ここで、*username* および *password* は、WAAPI クライアントを制御する
\$WEBGUI_HOME/waapi/etc/waapi.init プロパティ・ファイル内で定義された管
理者ユーザーの資格情報です。

次のタスク

- IBM Fix Central で、使用可能な暫定修正を探して適用します。
<http://www.ibm.com/support/fixcentral/>を参照してください。
- Web GUI イベント・リストのビューを再構成して「**NmosObjInst**」列が表示
されるようにします。Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケー
ションを起動するツールは、この列に値を持つイベントに対してのみ機能しま
す。詳しくは、IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 管理およびユーザズ・
ガイドを参照してください。

関連概念:

120 ページの『Event Analytics のインストールおよびアンインストール』

関連タスク:

Web GUI のインストール

サーバーの再始動

関連資料:

server.init プロパティ

Networks for Operations Insight フィーチャーのインストール

このインストール・シナリオでは、Netcool Operations Insight ソリューション内
で Networks for Operations Insight フィーチャーをセットアップする方法につい
て説明します。インストール・タスクの基盤となるサンプルのシステム・トポロジ
ーが提供されています。ここでは、Netcool Operations Insight ソリューションの
コア製品が既にインストールされ、稼働中であるものと想定して説明を進めます。

このシナリオで提供されている情報は全体像であり、Netcool Operations Insight
ソリューションにおける Networks for Operations Insight フィーチャーに固有の
最も注意を要する事項、および発生する可能性の高い問題について説明していま
す。このシナリオは順を追って示されているため、記載されたタスクは指定された
順序どおりに実行する必要があります。

詳しくは、このトピックの末尾にある関連概念、関連タスク、および関連情報のリ
ンクを参照してください。

始める前に

- 4 ページの『サポートされる製品とコンポーネント』の説明に従って、Netcool
Operations Insight のコンポーネントをインストールします。Networks for
Operations Insight ソリューションを使用するには、以下の製品がインストール
されており、以下のように構成および実行されている必要があります。
 - Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1 サーバーのコンポーネントがインストールさ
れており、ObjectServer が作成および実行されている。ObjectServer の管理
者ユーザーがデフォルトから変更されていることを確認してください。

- Tivoli Netcool/OMNIbus V8.1 Web GUI が、Dashboard Application Services Hub のインスタンスにインストールされ、実行されている。ObjectServer が Web GUI のデータ・ソースとして定義されている。
- IBM DB2 データベースがインストールされ、イベント・アーカイブに対応するように構成されている。Gateway for JDBC がインストールされ、ObjectServer からのイベントを転送および同期化するように構成されている。
- IBM Operations Analytics - Log Analysis がインストールおよび実行されており、イベントが Tivoli Netcool/OMNIbus から Operations Analytics - Log Analysis に Gateway for Message Bus 経由で転送されるように構成されている。100 ページの『イベント検索の構成』を参照してください。
- ObjectServer に関する以下の情報を入手します。
 - ホスト名とポート番号
 - インストール・ディレクトリー (\$OMNIHOME 環境変数の値)
 - 名前 (NCOMS など)
 - 管理者パスワード
- イベント検索およびイベント季節性の各フィーチャーをインストールおよび構成します。

上記のいずれかの製品がインストールされていないか、いずれかのフィーチャーが構成されていない場合は、これらの構成を行わなければ、Networks for Operations Insight フィーチャーをセットアップできません。

このタスクについて

このタスクおよびサブタスクは、Networks for Operations Insight フィーチャー内の製品の新規デプロイメントを行うシナリオについて説明したものです。システム・トポロジは論理サンプルです。これが使用可能な唯一のシステム・トポロジではありません。これは参照用に提供されており、デプロイメントの計画を支援することを目的としています。システム・トポロジは以下のとおりです。

- Tivoli Netcool/OMNIbus と Network Manager が別々のホストにインストールされています (分散インストール)。Tivoli Netcool/OMNIbus のバージョンは 8.1 です。
- ObjectServer が製品のユーザー・リポジトリとして構成されています。

注: Netcool Operations Insight ソリューションのすべての製品で、ユーザー・リポジトリとして LDAP ディレクトリーの使用もサポートされています。

- Network Manager と Netcool Configuration Manager が、どちらもイベントの保管と管理に V8.1 の ObjectServer を使用しています。
- このトポロジでは、デフォルトの DB2 v10.5 Enterprise Server Edition データベースを使用します。

関連概念:

19 ページの『Networks for Operations Insight のデータ・フロー』

関連資料:

309 ページの『リリース情報』

Probe for SNMP および Syslog プロープのインストール

Networks for Operations Insight フィーチャーには、Probe for SNMP と Syslog プロープが必要です。ただし、Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1 製品のライセンスに含まれるプロープをインストールすることが重要です。Network Manager のライセンスにもこれらのプロープが含まれていますが、Network Manager からこれらのプロープをインストールしないでください。Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1 に用意されているプロープのインスタンスが、IBM Installation Manager によってインストールされます。

手順

1. Installation Manager のインストール・ディレクトリーの /eclipse/tools サブディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行して Installation Manager を開始します。

```
./IBMIM
```

他のコンピューターでサイレント・インストールを行うときに使用するためにインストール手順を応答ファイルに記録するには、`-record` オプションを使用します。例えば、`/tmp/install_1.xml` ファイルに記録するには、以下のように指定します。

```
./IBMIM -record /tmp/install_1.xml
```

2. IBM パスポート・アドバンテージからパッケージ・リポジトリをダウンロードするように Installation Manager を構成します。
3. メインの「Installation Manager」ペインで、「インストール」をクリックし、インストール・ウィザードの指示に従ってインストールを完了します。インストールのさまざまな段階で、インストーラーに以下の項目を入力する必要があります。

- ご使用の IBM ID のユーザー名とパスワードを入力します (プロンプトが出された場合)。
- ご使用条件を読み、同意します。
- Installation Manager の共有ディレクトリーを指定するか、デフォルトのディレクトリーをそのまま使用します。

`nco-p-syslog` フィーチャー (Syslog プロープ) を選択し、`nco-p-mttrapd` フィーチャー (Probe for SNMP) を選択します。インストールが完了したら、「完了」をクリックします。

タスクの結果

インストールが正常に実行されると、Installation Manager に成功メッセージが表示され、インストール履歴が更新されて、インストールの成功が記録されます。インストールが正常に実行されなかった場合は、Installation Manager を使用してアンインストールを実行するか、インストール済み環境を変更できます。

次のタスク

両方のプロープが構成されていることを確認します。

- Probe for SNMP の構成について詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSHTQ/omnibus/probes/snmp/wip/reference/snmp_config.html を参照してください。
- Syslog プローブの構成について詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSHTQ/omnibus/probes/syslog/wip/concept/syslog_intro.html を参照してください。

関連タスク:

 IBM Installation Manager のインストールと構成

 Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1 のインストール

関連資料:

 Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1 のインストール可能フィーチャー

オプション: Network Manager と統合するための ObjectServer の準備

既に Tivoli Netcool/OMNIBus、Netcool/OMNIBus Knowledge Library、および Probe for SNMP を正常にインストールしてある場合は、この時点で Network Manager をインストールできます。このタスクの手順に従う必要はありません。Network Manager インストーラーにより、インストール・プロセス中に Tivoli Netcool/OMNIBus が自動的に構成されます。Network Manager および Tivoli Netcool/OMNIBus をインストールして構成した後に ObjectServer のセットアップが変更された場合は、このトピックでの説明に従って ObjectServer を Network Manager と統合する必要があります。

Network Manager 製品を既存の Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1 ObjectServer と再統合するには、ObjectServer に対して **ConfigOMNI** スクリプトを実行します。

手順

1. **ConfigOMNI** スクリプトを使用して、Network Manager と共に ObjectServer が実行されるように構成します。

このスクリプトにより、Network Manager トリガーおよび GUI アカウント情報が作成されます。ObjectServer がリモート・サーバーにある場合、`$NCHOME/precision/install/scripts/ConfigOMNI` スクリプトおよびサポート・スクリプトの `$NCHOME/precision/scripts/create_itnm_triggers.sql` をコピーし、それらをリモート ObjectServer の同じディレクトリーに配置します。ObjectServer が Network Manager に対してローカルの場合、両方のスクリプトをそのまま使用できます。

2. ObjectServer ホストで、scripts ディレクトリーに移動し、**ConfigOMNI** スクリプトを実行します。

以下の例では、管理パスワード `NCOM5password` を使用して `NCOMS2` という ObjectServer を構成します。ただし、`NCOMS2` という ObjectServer が存在しない場合は、指定のディレクトリー (`OMNIHOME`) にそれを作成し、ObjectServer で `itnadmin` および `itnmuser` というユーザーを作成または変更します。

```
./ConfigOMNI -o NCOMS2 -p NC0M5password -h /opt/ibm/tivoli/netcool
-u ITNMpassword
```

3. Network Manager のコア設定および Web GUI データ・ソース設定の更新が必要になることもあります。詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/install/task/nmip_ins_installingandconfiguringomnibus.htmlを参照してください。

関連タスク:

 Tivoli Netcool/OMNIBus のインストールおよび構成

Network Manager 用データベースの準備

サポートされているデータベースをインストールした後、Network Manager で使用されるトポロジー・データベースを構成するためのデータベース・スクリプトをインストールし、実行する必要があります。Network Manager をインストールする前に、このスクリプトを実行する必要があります。

このタスクについて

パスポート・アドバンテージから圧縮ソフトウェア・パッケージをダウンロードした場合、解凍したソフトウェア・ファイルの最上位にデータベース作成スクリプトが含まれています。そのスクリプトをデータベース・サーバーにコピーし、使用します。

「Network Manager トポロジー・データベース作成スクリプト」パッケージを選択することによって、Installation Manager を使用して Network Manager トポロジー・データベース作成スクリプトをインストールすることもできます。データベース・スクリプトがインストールされるデフォルトのディレクトリーは、インストール・ディレクトリーの `precision/scripts/` (デフォルトでは `/opt/IBM/netcool/core/precision/scripts/`) です。

手順

1. DB2 をインストールしたサーバーにログインします。
2. DB2 インスタンスがインストールされたディレクトリーに移動して、`sqllib` サブディレクトリーに移動します。
3. 以下のコマンドを入力して、環境をセットアップします。

シェル	コマンド
Bourne	<code>./db2profile</code>
C	<code>source db2cshrc</code>

Network Manager アプリケーションのラッパー・スクリプトが、DB2 環境を自動的にセットアップします。

4. 圧縮されたデータベース作成ファイル `db2_creation_scripts.tar.gz` を見つけ、DB2 のインストール先サーバーにコピーします。このファイルを解凍します。
5. `precision/scripts/` ディレクトリーに移動し、インスタンスの DB2 管理ユーザー (`db2inst1`) として、以下の方法で `create_db2_database.sh` スクリプトを実行します。

```
./create_db2_database.sh database_name user_name -force
```

ここで、*database_name* はデータベースの名前であり、*user_name* はデータベースへの接続に使用する DB2 ユーザーであり、*-force* は、データベース作成前にすべての DB2 ユーザーをそのインスタンスから強制的にログオフさせる引数です。

重要: *user_name* は、管理ユーザーにしないでください。このユーザーは、既存のオペレーティング・システムおよび DB2 のユーザーである必要があります。

例えば、ITNM という名前の DB2 データベースを DB2 ユーザー *ncim* で作成する場合は、以下を入力します。

```
./create_db2_database.sh ITNM ncim
```

6. `create_db2_database.sh` を実行した後、DB2 管理ユーザーとして **run db2stop** を実行してから **run db2start** を実行し、データベースを再始動します。
7. 後で Network Manager インストーラーを実行するときに、既存の DB2 データベースを構成するオプションを必ず選択するようにします。これにより、Network Manager インストーラーは、データベースがどこにインストールされているかに応じて、ローカル・ホストまたはリモート・ホストのいずれかのデータベース内に表を作成することができます。

インストーラーは、以下のファイル内に接続プロパティを取り込みます。これらのファイルで、データベースへの接続に関する問題があるかどうかを調べることができます。

- `/etc/precision` 内の `DbLogins.DOMAIN.cfg` ファイルおよび `$NCHOME/etc/precision` ファイル。これらのファイルは、Network Manager コア・プロセスによって使用されます。
- `$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm` 内の `tnm.properties` ファイル。これらのファイルは、Network Manager GUI によって使用されます。

Network Manager および Netcool Configuration Manager のインストール

Networks for Operations Insight フィーチャーの基盤を構築するには、Network Manager および Netcool Configuration Manager をインストールします。

始める前に

- Netcool Operations Insight、Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1、Netcool/Impact V7.1、および Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 または V1.3.3 の基本製品およびコンポーネントと関連コンポーネントおよび構成をインストールし、構成しておく必要があります。Networks for Operations Insight でサポートされる製品を参照してください。
- ObjectServer に関する以下の情報を入手します。
 - ObjectServer 名 (NCOMS など)
 - ホスト名とポート番号
 - 管理者ユーザー ID
 - 管理者パスワード
- ご使用の DB2 データベースに関する以下の情報を入手します。
 - データベース名

- ホスト名とポート番号
- 表を作成する権限を持つ管理者ユーザー ID
- 管理者ユーザー・パスワード
- IBM パスポート・アドバンテージからパッケージを取得します。パッケージに必要な eAssembly 番号については、<http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24041694> を参照してください。
- 開始前に、Python の互換バージョンがこのサーバーにインストールされていることを確認してください。Linux では、Network Manager コア・コンポーネントのインストール先サーバーにバージョン 2.6 または 2.7 の Python をインストールする必要があります。AIX では、Network Manager にバージョン 2.7.5 の Python が必要です。

このタスクについて

以下の手順では、ウィザード・モードの Installation Manager に表示されるオプションについて説明します。他のモードでも同等のオプションを使用できます。

手順

1. Installation Manager を開始して以下のパッケージをインストールします。

パッケージ	説明
Network Manager コア・コンポーネント バージョン 4.2	Network Manager コア・コンポーネントをインストールし、指定された ObjectServer への接続をセットアップし、NCIM トポロジーに使用するデータベースへの接続をセットアップし、表を作成し (選択する必要があります)、Network Manager のデフォルト・ユーザーを作成し、ネットワーク・ドメインをセットアップし、ポーリング・プログラム集約の詳細を構成します。 詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/install/task/nmip_ins_installingcorecomponents.htmlを参照してください。 注: Network Manager コア・コンポーネントは、32 ページの『フレッシュ・インストールの実行』で説明されているシナリオのサーバー 4 にインストールできます。

パッケージ	説明
Network Manager GUI コンポーネント バージョン 4.2	Network Manager GUI コンポーネントをインストールし、指定された ObjectServer への接続をセットアップし、NCIM トポロジー・データベースへの接続をセットアップし、デフォルト・ユーザーをセットアップします。 詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/install/task/nmip_ins_installingguicomponents.htmlを参照してください。 注: Network Manager GUI コンポーネントは、32 ページの『フレッシュ・インストールの実行』で説明されているシナリオのサーバー 3 にインストールできます。ソリューションに含まれる他の製品の GUI コンポーネント (Netcool Configuration Manager および Reporting Services) もこのホストに配置されます。

パッケージ	説明
ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード 4.2	ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードをインストールします。 ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードをインストールすると、以下の役割がインストールされます。これらの役割により、ユーザーはネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを操作できます。 • ncp_networkhealth_dashboard • ncp_networkhealth_dashboard_admin • ncp_event_analytics 新しいネットワーク・ヘルス・ダッシュボードは、Netcool Operations Insight の一部として Network Manager を使用している場合にのみ利用できます。ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードは、選択されたネットワーク・ビューをモニターし、そのネットワーク・ビュー内のデバイスおよびインターフェースの可用性を表示します。また、モニター対象のデバイスおよびインターフェースの KPI データのグラフ、テーブル、およびトレースを表示することにより、パフォーマンスについても報告します。ダッシュボード・タイムラインは、デバイスの構成変更およびイベント・カウントについて報告します。これにより、構成変更とイベントの相関付けが可能になります。ダッシュボードには、より詳細なイベント情報を提供するイベント・ビューアーが組み込まれています。 注: ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードは、Network Manager GUI コンポーネントと同じホストにインストールする必要があります。

パッケージ	説明
Network Manager レポート 4.2	Reporting Services フィーチャーの一部として使用できる、Network Manager によって提供されるレポートをインストールします。 注: Reporting Services には、データを保管するための DB2 データベースが必要です。インストール時にこのデータベースが実行されている必要があります。データベースが Reporting Services と同じサーバーにインストールされている場合、インストーラーによりインストール時にデータベースが構成されます。データベースが異なるサーバーにある場合、Reporting Services をインストールする前にデータベースを構成する必要があります。 32 ページの『フレッシュ・インストールの実行』で説明されているシナリオでは、DB2 データベースを別のサーバーに配置するため、以下のように Reporting Services 用のリモート DB2 データベースをセットアップする必要があります。 1. Jazz for Service Management パッケージから、DB2 のインストール先のサーバーに <code>TCR_generate_content_store_db2_definition.sh</code> スクリプトをコピーします。 2. 以下のコマンドを実行します。 <pre>./TCR_generate_content_store_db2_definition.sh database_name db2_username</pre> ここで、<i>database_name</i> は、Reporting Services データベースに対して指定する名前であり、<i>db2_username</i> は、コンテンツ・ストアに接続するためのユーザー名 (つまり、データベースの所有者 <code>db2inst1</code>) です。 3. 生成された SQL スクリプトを一時ディレクトリーにコピーして、DB2 ユーザー (<code>db2inst1</code>) として DB2 インスタンスに対して実行します。例を示します。 <pre>\$ cp tcr_create_db2_cs.sql /tmp/tcr_create_db2_cs.sql \$ su - db2inst1 -c "db2 -vtf /tmp/tcr_create_db2_cs.sql"</pre>

パッケージ	説明
Netcool Configuration Manager 6.4.2.0	Netcool Configuration Manager コンポーネントをインストールし、必要なデータベース・スキーマをロードします。「サーバー・インストール・タイプ (Server Installation Type)」の場合は、「プレゼンテーション・サーバーとワーカー・サーバー (Presentation Server and Worker Server)」を選択し、GUI サーバーとワーカー・サーバーの両方をインストールします。 詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9_6.4.2/ncm/wip/install/task/ncm_ins_installingncm.htmlを参照してください。 注: Netcool Configuration Manager コンポーネントは、32 ページの『フレッシュ・インストールの実行』で説明されているシナリオのサーバー 3 にインストールできます。 IBM Fix Central (http://www.ibm.com/support/fixcentral/) からフィックスパック 1 をダウンロードした場合は、Netcool Configuration Manager バージョン 6.4.2.1 をインストールすることを選択できます。フィックスパック 1 について詳しくは、http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9_6.4.2/ncm/wip/relnotes/ncm_rn_6421.html を参照してください。
Reporting Services 環境	Reporting Services フィーチャーの一部として使用できる、Netcool Configuration Manager によって提供されるレポート (ITNCM レポート) をインストールします。

2. Network Manager の GUI コンポーネントがインストールされているホストで、ネットワーク・ビューから Operations Analytics - Log Analysis の GUI にある Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションを起動するツールおよびメニューをインストールします。
 - a. \$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm/topoviz.properties で、**topoviz.unity.customappsui** プロパティを設定します。これは Operations Analytics - Log Analysis への接続を定義します。例えば、次のようにします。

```
# Defines the LogAnalytics custom App launcher URL
topoviz.unity.customappsui=https://server3:9987/Unity/CustomAppsUI
```
 - b. \$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm/menus/ncp_topoviz_device_menu.xml ファイルで、「イベント検索」メニュー項目を定義します。以下のように、「<menu id="Event Search"/>」項目をファイルに追加してください。


```
<tool id="showConnectivityInformation"/>
    <separator/>
    <menu id="Event Search"/>
```

3. オプション: 『Netcool Configuration Manager との統合の構成』で説明されているとおりの手順に従って、Network Manager と Netcool Configuration Manager の間の統合を構成します。

タスクの結果

インストールされた各製品またはコンポーネントが使用するポートが表示されます。これらのポートは、\$NCHOME/log/install/Configuration.log ファイルにも書き込まれます。

次のタスク

- IBM Fix Central で、使用可能な暫定修正を探して適用します。
<http://www.ibm.com/support/fixcentral/>を参照してください。

関連資料:

 Network Manager のインストール

関連情報:

 Netcool Configuration Manager のインストール

 V4.2 ダウンロード資料

Netcool Configuration Manager との統合の構成

製品をインストールした後、Network Manager と Netcool Configuration Manager の間の統合を構成できます。

関連タスク:

 Netcool Configuration Manager のインストール

関連資料:

 Netcool Configuration Manager リリース・ノート

 インストール情報のチェックリスト

関連情報:

 Netcool Configuration Manager を使用するための DB2 データベースの準備

ユーザー役割の要件:

統合には、特定の管理ユーザー役割が必要です。

注: シングル・サインオンについては、関連トピックのリンクを参照してください。

Dashboard Application Services Hub のユーザー役割

Dashboard Application Services Hub 内から開始される Netcool Configuration Manager コンポーネント (Netcool Configuration Manager のウィザード、Netcool Configuration Manager - Base クライアントおよび Netcool

Configuration Manager - Compliance クライアント) にアクセスするには、以下の Dashboard Application Services Hub 役割が必要です。

既に「IntellidenUser」役割を持っている既存の Netcool Configuration Manager ユーザーと同じ名前で Dashboard Application Services Hub ユーザーを作成するか、既に Dashboard Application Services Hub ユーザーとしてセットアップされている適切な Network Manager ユーザー (itnmadmin など) を使用します。

Network Manager ユーザーを使用する場合は、対応する新規 Netcool Configuration Manager ユーザーを同じ名前 (パスワードは違っていても構いません) で作成し、この新規ユーザーに「IntellidenUser」役割を割り当てます。

重要: Network Manager で既存の Netcool Configuration Manager ユーザーと同じ名前の Dashboard Application Services Hub ユーザーを作成する場合は、そのユーザーを適切な Network Manager ユーザー・グループに追加するか、必要な Network Manager 役割を手動で付与するかのいずれかを行う必要もあります。

さらに、Dashboard Application Services Hub ユーザーに以下の役割を割り当てます。

- ncp_rest_api
- ncmConfigChange
- ncmConfigSynch
- ncmIDTUser
- ncmPolicyCheck
- ncmActivityViewing
- ncmConfigViewing
- ncmConfigEdit
- ncmDashService

以下の相互参照表に、ユーザー・インターフェース間のセキュリティー要件、Dashboard Application Services Hub の役割、Netcool Configuration Manager の機能、および Netcool Configuration Manager のレلم・コンテンツの権限を示します。この情報を使用して、Dashboard Application Services Hub の役割を割り当てたり、レلم・コンテンツの権限を定義したりします。

表 12. Dashboard Application Services Hub の役割、Netcool Configuration Manager の機能、およびレلم・コンテンツの権限による UI セキュリティー

アクセス権限	Dashboard Application Services Hubrole	機能	レلم・コンテンツの権限
モデル化されたコマンド・セットの適用	ncmConfigChange	構成変更の実行	表示、実行
ネイティブ・コマンド・セットの適用	ncmConfigChange	構成変更の実行、ネイティブ・コマンド・セットの適用	表示、実行
同期 (ITNCM からデバイスへ)	ncmConfigSynch	構成同期の実行	表示、実行
構成の送信	ncmConfigChange	構成変更の実行	表示、実行

表 12. Dashboard Application Services Hub の役割、Netcool Configuration Manager の機能、およびレルム・コンテンツの権限による UI セキュリティー (続き)

アクセス権限	Dashboard Application Services Hubrole	機能	レルム・コンテンツの権限
ポリシーの適用	ncmPolicyCheck	コンプライアンス・ポリシーの実行	表示
構成の表示	ncmConfigViewing	適用外	表示
構成の編集	ncmConfigEdit	適用外	表示、変更
構成の比較	ncmConfigViewing	適用外	表示
IDT 自動	ncmIDTUser	IDT アクセス、IDT 自動ログインの許可	表示
IDT 手動	ncmIDTUser	IDT アクセス、IDT 手動ログインの許可	表示
デバイスの検索	適用外	適用外	表示
UOW ログの表示	適用外	適用外	適用外
IDT ログの表示	適用外	適用外	表示
アクティビティー・ビューアー	ncmActivityViewing	適用外	適用外
デバイス同期	ncp_rest_api	適用外	適用外
Dashboard Application Services Hub サービスへのアクセス (右クリック・メニューを使用)	ncmDashServices	適用外	適用外

Reporting Services のユーザー役割

Dashboard Application Services Hub のコンポーネントと一緒に、Reporting Services および Netcool Configuration Manager のデフォルト・レポートがインストールされます。

レポートにアクセスする必要があるユーザーには、次の権限が必要です。

- Dashboard Application Services Hub コンソールで「レポート」ノードにアクセスするための関連する Reporting Services の役割。Reporting Services の GUI から、ユーザーが自分に許可されているレポートを実行できるように、これらの役割を割り当てます。
- レポート・セットへのアクセス権限、およびレポートを使用するための関連する Reporting Services の役割。Network Manager のトポロジー表示、アクティブ・イベント・リスト、および Reporting Services の GUI からユーザーが Netcool Configuration Manager レポートを実行できるように、これらの役割を割り当てます。

レポート・セットへのアクセスを許可する方法、およびユーザーまたはグループごとに役割を割り当てる方法については、IBMTivoli Systems Management インフォメーション・センター (<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SS3HLM/welcome>) にアクセスし、Reporting Services の資料のノードを探し、

「許可」および「ユーザー役割」を検索してください。

他のユーザー役割

Web GUI の「アラート」メニューを構成するには、ncw_admin 役割が必要です。

Dashboard Application Services Hub のコンポーネントのインストール:

統合シナリオのために、Netcool Configuration Manager には、Dashboard Application Services Hub のコンポーネントとして、アクティビティ・ビューアー、Dashboard Application Services Hub のウィザード、および Netcool Configuration Manager のシック・クライアント起動ポータルが用意されています。

始める前に

バージョン 6.4.2 以降では、Dashboard Application Services Hub コンポーネントのインストール中に Netcool Configuration Manager レポートがインストールされるのではなく、Netcool Configuration Manager のメイン・インストール中にインストールされるようになっています。

重要: Dashboard Application Services Hub コンポーネントをインストールする前に、「統合 (Integrated)」オプションを使用して Netcool Configuration Manager をインストールしてください。

このタスクについて

制約事項: Netcool Configuration Manager Dashboard Application Services Hub のコンポーネントは、Network Manager をインストールしたユーザーと同じユーザーとしてインストールする必要があります。

手順

1. Dashboard Application Services Hub サーバーにログオンします。
2. Installation Manager グループのインストール・ディレクトリーの /eclipse サブディレクトリーに移動し、以下のコマンドを使用して Installation Manager を開始します。

`./IBMIM`

他のコンピューターでサイレント・インストールを行うときに使用するためにインストール手順を応答ファイルに記録するには、「-record response_file」オプションを使用します。例えば、以下のようになります。

`IBMIM -record C:\response_files\install_1.xml`

3. IBM パスポート・アドバンテージからパッケージ・リポジトリをダウンロードするように Installation Manager を構成します。
 - a. メインメニューから、「ファイル」 > 「設定」を選択します。
IBM Installation Manager でプロキシ・サーバーの設定を行えます。プロキシ・サーバーを使用すると、ファイアウォールの内側からリモート・サーバーに接続できます。
 - b. 「設定」ウィンドウで、インターネット・ノードを展開して以下のいずれかのオプションを選択します。

FTP プロキシ (FTP Proxy)

SOCKS プロキシのホスト・アドレスおよび SOCKS プロキシのポート番号を指定する場合、このオプションを選択します。

HTTP プロキシ (HTTP Proxy)

HTTP プロキシまたは SOCKS プロキシを使用可能にする場合、このオプションを選択します。

- c. 「プロキシ・サーバーを使用可能にする」を選択します。
 - d. 「設定」ウィンドウで、「**Passport Advantage**」パネルを選択します。
 - e. 「**Passport Advantage** へ接続」を選択します。
 - f. 「適用」をクリックし、次に、「**OK**」をクリックします。
4. Installation Manager のメイン・ウィンドウで「インストール」をクリックし、「**IBM Dashboard Applications for ITNCM**」を選択し、インストール・ウィザードの指示に従ってインストールを完了します。
5. ご使用条件に同意し、インストール・ディレクトリーを選択して、以下の詳細情報を指定します。

Netcool Configuration Manager データベースの詳細

SID/サービス名/データベース名 (db2)

データベース・ホスト名

ポート

ユーザー名

パスワード

Dashboard Application Services Hub 管理用資格情報

Dashboard Application Services Hub 管理者ユーザー名 (デフォルトは smadmin)

Dashboard Application Services Hub 管理者パスワード

Network Manager 管理用資格情報

デフォルトは itnadmin (または Dashboard Application Services Hub スーパーユーザー)。Dashboard Application Services Hub の ncw_admin 役割を持っている必要があります。

パスワード

Netcool Configuration Manager プレゼンテーション・サーバー

Netcool Configuration Manager プレゼンテーション・サーバーへの接続の詳細

検証スキップ用オプション (プレゼンテーション・サーバーが使用不可の場合)

Reporting Services サーバー

Reporting Services サーバーへの接続の詳細

検証スキップ用オプション (Reporting Services サーバーが使用不可の場合)

6. インストールを完了します。

次のタスク

Netcool Configuration Manager Dashboard Application Services Hub のコンポーネントにアクセスできるようにするために、Netcool Configuration Manager Dashboard Application Services Hub ユーザーをセットアップし、このユーザーに適切なアクセス権限を付与する必要があります。

ユーザーをセットアップしたら、Netcool Configuration Manager Dashboard Application Services Hub のコンポーネント (アクティビティー・ビューアー、Dashboard Application Services Hub のウィザード、およびシック・クライアント起動ポータル) に以下の方法でアクセスします。

- スタンドアロンの Netcool Configuration Manager UI (シック・クライアント UI と呼ばれることがあります) は、Dashboard Application Services Hub シック・クライアント起動ポータルから起動します。
- アクティビティー・ビューアー、Dashboard Application Services Hub のウィザード、および状況に応じたレポートのサブセットには、Network Manager および Tivoli Netcool/OMNIBus からアクセスします。
- 各種のレポートには、Dashboard Application Services Hub の Reporting Services GUI を使用してアクセスします。

個別のデータベース・タイプの構成:

統合環境内で異なるデータベースまたはリモート・データベースを使用する場合など、状況によっては、追加のデータベース構成手順を実行する必要があります。

このタスクについて

Network Manager と ITNCM レポートを一括してインストールする場合、および Network Manager データベースが DB2 でありかつ別のサーバーに存在する場合は、そのコンポーネント・データベースをカタログする必要があります。

Network Manager が分散環境で Informix データベースを使用していて、Dashboard Application Services Hub が Network Manager と同じサーバーにインストールされていない場合は、必ず正しいライブラリーの jar を使用してください。

手順

1. 必須: **Network Manager** と **ITNCM** レポートを一括してインストールする場合、および **Network Manager** データベースが **DB2** でありかつ別のサーバーに存在する場合:
 - a. TCR のインストール済み環境からリモート・サーバー上の DB2 データベースに接続するには、必ず、DB2 クライアントをインストールしてリモート・データベースをカタログしてください。構成中の WebSphere Application Server ノードに対してデータベース・サーバーがリモートである場合は、ノードで以下のコマンドを入力して TCP/IP ノード・エントリをノード・ディレクトリーに追加します。

```
db2 catalog tcpip node <NODENAME> remote <REMOTE> server <PORT>
```

ここで、

NODENAME

カタログするノードのローカル別名を指定します。

REMOTE

リモート DB サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。

PORT

データベースがアクセス可能なポートです (通常はポート 50000)。

```
db2 catalog database <database_name> at node <NODENAME>
```

where

database_name

DB2 データベース名を指定します。

NODENAME

前のステップで指定したローカル別名です。

- b. 「source \$HOME/sqllib/db2profile」を <install_user>/.bash_profile に追加します。ここで、\$HOME は DB2 クライアントのインストール中にクライアントの管理用に構成したユーザー (通常は db2inst1) のホーム・ディレクトリーを指し、<install_user> は Netcool Configuration Manager をインストールしたユーザー (通常は icosuser) です。

注: .bash_profile は bash シェルの場合にのみ使用します。sh、csh、ksh の場合は異なります。

- c. この更新後にレポート・サーバーを再始動します。ただし、レポート・サーバーを再始動する前に、変更後のログイン・プロファイルを格納したことを確認してください。

ヒント: DB2 データベースを使用するインストール済み環境の場合は、Cognos に 32 ビット DB2 クライアント・ライブラリーが必要です。このライブラリーは、64 ビット DB2 クライアントによってインストールされます。しかし、おそらくこれ以外にも、システムに存在する他の 32 ビット・パッケージに対する依存関係があります。このようなエラーが報告された場合は、ldd \$library_name で確認できます。

2. 必須: **Network Manager** と **ITNCM** レポートを一括してインストールする場合、および **Network Manager** データベースが **Oracle** である場合:

- a. TCR のインストール済み環境から Oracle データベースに接続するには、ITNCM レポートがインストールされていることを確認して、以下の itncmEnv.sh ファイルのデフォルトの場所を更新してください。

```
/opt/IBM/tivoli/netcool/ncm/reports/itncmEnv.sh
```

以下の変数をエクスポートします。

ORACLE_HOME

```
ORACLE_HOME=<install directory>/reports/oracle export  
ORACLE_HOME
```

TNS_ADMIN

```
TNS_ADMIN=<install directory>/reports/oracle/network/admin  
export TNS_ADMIN
```

LD_LIBRARY_PATH

```
LD_LIBRARY_PATH=<install directory>/reports/  
oracle:$LD_LIBRARY_PATH export LD_LIBRARY_PATH
```

- b. <install directory>/reports/oracle/network/admin/ に tnsnames.ora ファイルを作成します。
- c. NCIM データベースを tnsnames.ora ファイルに追加します。 例: NCIM = (DESCRIPTION = (ADDRESS_LIST = (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(Host = <Database Server>)(Port = 1521))) (CONNECT_DATA = (SERVICE_NAME = NCIM)))
- d. 「source <install directory>/reports/itncmEnv.sh」を <install_user>/.bash_profile に追加します。

注: .bash_profile は bash シェルの場合にのみ使用します。sh、csh、ksh の場合は異なります。

- e. この更新後にレポート・サーバーを再始動します。ただし、レポート・サーバーを再始動する前に、変更後のログイン・プロファイルを格納したことを確認してください。

Tivoli Netcool/OMNIBus との統合の構成:

Netcool Configuration Manager 用の Netcool/OMNIBus Knowledge Library (NcKL) Enhanced Probe Rules を Tivoli Netcool/OMNIBus サーバーにインストールしておく必要があります。

始める前に

Netcool Configuration Manager に固有のルールをデプロイします。これらのルールは Netcool Configuration Manager にバンドルされており、インストール中に Netcool Configuration Manager プレゼンテーション・サーバーにデプロイされて <NCM-INSTALL-DIR>/nckl-rules ディレクトリーに格納されています。

注: この手順では、Network Manager とのデバイス同期および Netcool Configuration Manager と Network Manager の間のデバイスのマッピングが不要になっています。

統合のための前提条件タスクの一部として、ObjectServer と Probe for SNMP に対して、標準の Netcool/OMNIBus Knowledge Library 構成を適用しておく必要があります。また、Probe がインストールされているコンピューターに \$NC_RULES_HOME 環境変数を設定しておく必要もあります。UNIX、または Linux 上では、この環境変数を \$NCHOME/etc/rules に設定します。

ヒント: Network Manager 環境スクリプトを読み込むには、以下のスクリプトを実行します。

```
./opt/IBM/tivoli/netcool/env.sh
```

ここで、opt/IBM/tivoli/netcool は、デフォルトの Network Manager ディレクトリーです。

注: 保存する必要がある既存の Probe for SNMP カスタム・ルールがある場合、ステップ 2 で Netcool/OMNIBus Knowledge Library ルールをデプロイする前に、必要に応じてバックアップを作成してください。

このタスクについて

`$NC_RULES_HOME` で指定された場所の複数のサブディレクトリー内に Netcool/OMNIbus Knowledge Library のルックアップ・ファイルとルール・ファイルが格納されます。特に、`$NC_RULES_HOME/include-snmptrap/ibm` サブディレクトリーには、Probe for SNMP に対して適用可能なファイルが格納されています。統合をサポートするには、このサブディレクトリーに Netcool Configuration Manager 用のカスタマイズされたルールを追加する必要があります。

要確認: Netcool/OMNIbus Knowledge Library (NcKL) Enhanced Probe Rules バージョン 4.4 Multiplatform English (NcKL4.4) を Tivoli Netcool/OMNIbus サーバーにインストールした場合は (このオプションを推奨します)、ここでの説明に従って、ITNCM 固有のルール・ファイルをインストールする必要はありません。

手順

Netcool Configuration Manager に固有のルール・ファイルのインストール (非推奨オプション)

1. Netcool Configuration Manager をインストールしたサーバーから、以下のファイルをコピーします。

- `ncm_install_dir/nckl_rules/nckl_rules.zip`

ここで、`ncm_install_dir` は、Netcool Configuration Manager のインストール場所を示しています。例: `/opt/IBM/tivoli/netcool/ncm`

Probe for SNMP がインストールされているコンピューター上の一時的な場所に、これらのファイルをコピーします。

2. `nckl_rules.zip` ファイルの内容を解凍した後、解凍したファイルを `$NC_RULES_HOME/include-snmptrap/ibm` サブディレクトリーにコピーします。
3. オブジェクト・サーバーのフェイルオーバーが既に構成されている場合は、ステップ 4 に進みます。それ以外の場合は、以下のステップを実行します。
 - a. `mttrapd.props` が格納されているフォルダーに移動します。例: `$NCHOME/omnibus/probes/AIX5`。ここで、`AIX5` は、ご使用のオペレーティング・システムに固有です。
 - b. 以下のように、バックアップ・オブジェクト・サーバー参照のコメント化することにより、`mttrapd.props` ファイルを編集します。
4. 拡張されたルックアップ・ファイルとルール・ファイルを Probe から参照できるようにするために、以下に示すように、`include` ステートメントのコメントを外すことにより、`$NC_RULES_HOME/snmptrap.rules` ファイルを編集します。

```
include "$NC_RULES_HOME/include-snmptrap/ibm/ibm.master.include.lookup"
include "$NC_RULES_HOME/include-snmptrap/ibm/ibm.master.include.rules"
include "$NC_RULES_HOME/include-snmptrap/ibm/ibm-preclass.include.snmptrap.rules"
```

5. Probe を実行します。Probe がすでに稼働している場合、変更内容を有効にするために、Probe に対してルール・ファイルの強制的な再読み込みを行います。

Probe が稼働しているサーバーで以下のコマンドを実行して、Probe の PID を特定します。- `nco_p_mttrapd` という名前のプロセスを見つけます。

```
ps -eaf | grep mttrapd  
kill -9 PID
```

注: Network Manager または Dashboard Application Services Hub ポータルとは別のコンピューター上に Probe がインストールされている場合、手動で Probe を再始動する必要があります。

Network Manager との統合の構成:

いくつかの jar ファイルを Network Manager GUI サーバーから WebSphere の Netcool Configuration Manager インスタンスにコピーします。

このタスクについて

注: 以下のデフォルトの場所は、Network Manager サーバーおよび Netcool Configuration Manager サーバーでの WebSphere のインストール先に応じて異なります。

手順

以下の jar を Network Manager GUI サーバーから Netcool Configuration Manager WebSphere インスタンスの対応するフォルダーにコピーします。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/etc/vmm4ncos.jks
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/lib/ext/com.ibm.tivoli.ncw.ncosvmm.jar
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/lib/ext/jconn3.jar

デバイス同期の構成:

Netcool Configuration Manager がネットワーク・デバイス・ディスカバリーに Network Manager を使用できるように、デバイス同期を構成します。

始める前に

Netcool Configuration Manager 6.4.2 のインストール中に、製品を統合するかどうかの確認メッセージが出ます。「はい」を選択すると、インストーラーによって、Netcool Configuration Manager と Network Manager の間のデバイス同期構成をセットアップするために必要な質問が表示されます。

Network Manager との定期的な同期のために Netcool Configuration Manager の rseries.properties ファイルで定義されているデフォルト値は 24 時間 (1440 分) です。初めて同期するときには、多くのデバイスが Network Manager によって既にディスカバリーされている可能性があるため、Netcool Configuration Manager にインポートされるまでに長時間かかる場合があります。(ディスカバリーの範囲を拡大したために多数の新規デバイスが Network Manager に追加される場合も同様です。) そのため、デバイスがすぐに Netcool Configuration Manager データベースの NMENTITYMAPPING 表に登録されるとは限りません。その場合、未登録のデバイスに Network Manager のコンテキスト・ツール (右クリック・ツール) を使用することはできません。

ヒント: この時間を短縮するには、rseries.properties ファイルを編集してマッピング周期を (例えば) 60 に変更します。これにより、Netcool Configuration

Manager のオートディスカバリー・キューにデバイスを追加する処理の速度が上がりますが、各デバイスの構成がインポートされるまでの実際の時間は変化しません。

ヒント:

Network Manager で **itnadmin** ユーザーのパスワードが変更された場合は、以下のようにして **Netcool Configuration Manager** に格納されたローカル・コピーを更新してください。

`/opt/IBM/tivoli/netcool/ncm/bin` にある `icosadmin` スクリプトを使用します。

例えば、次のようにします。

```
icosadmin ChangeNmPassword -u itnadmin -p <new_password>
```

このタスクについて

構成は、ディレクトリー `<ncm-install-dir>/config/properties/` の `rseries.properties` ファイルに格納されます。

Network Manager:

```
NMEntityMappingComponent/baseUrl=https://nmguiservername:16311
NMEntityMappingComponent/uri=/ibm/console/nm_rest/topology/devices/domain/NCOMS
NMEntityMappingComponent/uriParam=
NMEntityMappingComponent/uriProps=
#####Note: Complete URL = baseUrl+uri+uriProps&uriParam
```

```
NMEntityMappingComponent/delay=10 ## delay on startup before first run
NMEntityMappingComponent/importRealm=ITNCM/@DOMAINNAME
NMEntityMappingComponent/maxDevicesPerRealm=50
NMEntityMappingComponent/ncmUser=administrator
NMEntityMappingComponent/period=1440 ## Daily (in minutes)
NMEntityMappingComponent/user=itnadmin
NMEntityMappingComponent/passwd=netcool ## Optional: Install stores securely
```

注: 要件が変化した場合は、インストール後に、このファイルおよびコンポーネント構成プロパティを編集できます。

初回のデバイス同期を実行する前に、Network Manager Rest API ユーザー (この例では `itnadmin`) が DASH の `ncp_rest_api` 役割を持っている必要があります。

デバイス同期は、Netcool Configuration Manager の新しいコア・コンポーネントによって実行されるようになったため、Netcool Configuration Manager コンポーネント構成の一部になっており、Netcool Configuration Manager の始動時に自動的に開始されます。コンポーネントの始動は `<ncm-install-dir>/config/server/config.xml` で構成します。

```
<component>
<name>NMEntityMappingComponent</name>
<class>com.intelliden.nmentitemapping.NMEntityMappingComponent</class>
</component>
```

注: `NMEntityMappingComponent` はデフォルトで構成されるため、Netcool Configuration Manager の始動時にそれが開始されないようにするには、`config.xml` ファイルでその部分をコメント化してください。

注: インポートされるデバイスは、Netcool Configuration Manager のレルムごとに 50 個に制限されています。Network Manager ドメインにこれより多くのデバイスがある場合は、Netcool Configuration Manager のサブレルムに追加されます (001、002、などのラベルが付きます)。

例

NM コンポーネントのトラブルシューティング

ファイルでコンポーネントが始動したことを確認します。

```
<NCM_INSTALL_DIR>/logs/Server.out  
Fri Jul 31 13:30:06 GMT+00:00 2015 - Starting component : NMEntityMappingComponent  
Fri Jul 31 13:30:06 GMT+00:00 2015 - All components started
```

config.xml ファイルで、このコンポーネントが始動対象として指定されていることを確認します。

NMEntityMapping 表に、新規コンポーネント実装に必要な新しい列があることを確認します。

```
"NMENTITYMAPPING" (  
  "UNIQUEKEY" BIGINT NOT NULL,  
  "ENTITYID" BIGINT NOT NULL DEFAULT 0,  
  "RESOURCEBROWSERID" BIGINT NOT NULL DEFAULT 0,  
  "DOMAINNAME" VARCHAR(64),  
  "JPAVERSION" BIGINT NOT NULL DEFAULT 1,  
  "ENTITYNAME" VARCHAR(255),  
  "ACCESSIPADDRESS" VARCHAR(64),  
  "SERIALNUMBER" VARCHAR(64),  
  "VENDORTYPE" VARCHAR(64),  
  "MODELNAME" VARCHAR(64),  
  "OSVERSION" VARCHAR(64),  
  "OSIMAGE" VARCHAR(255),  
  "OSTYPE" VARCHAR(64),  
  "HARDWAREVERSION" VARCHAR(64)  
)
```

Network Manager Rest API ユーザーが DASH の ncp_rest_api 役割を持っていることを確認します。

アクティブ・イベント・リストの「アラート」メニューの構成:

「アラート」メニューを構成して、アクティブ・イベント・リストからアクティビティ・ビューアーにアクセスするための項目を追加する必要があります。

手順

1. ナビゲーション・ペインで、「管理」 > 「イベント管理ツール」 > 「メニュー構成」をクリックします。
2. 右側の「使用可能なメニュー」リストから、「アラート」を選択し、「変更」をクリックします。
3. 「メニュー・エディター」ウィンドウで、「使用可能な項目」の下のドロップダウン・リストから「<分離文字>」を選択し、次に「選択されている項目を追加」をクリックして、「現在の項目」リストに項目を追加します。「<分離文字>」項目が最後の項目として追加されます。
4. 「使用可能な項目」の下のドロップダウン・リストから「メニュー」を選択します。「アラート」メニューに追加できるすべてのメニュー項目のリストが表示されます。

5. 「構成管理」項目を選択し、「選択されている項目を追加」をクリックします。
この項目が「現在の項目」リストの「<分離文字>」項目の下に追加されます。
6. 「保存」をクリックし、次に、「OK」をクリックします。

タスクの結果

「構成管理」サブメニューおよびツールが、アクティブ・イベント・リストの「アラート」メニューで選択可能になり、Netcool Configuration Manager イベントで使えるようになりました。

注: 「レポート」メニューのオプションは、選択したイベントがエンリッチされていない場合は表示されません。

次のタスク

必要に応じて、アクティブ・イベント・リストに表示するイベントを Netcool Configuration Manager イベントのみに制限するためのグローバル・フィルターを作成できます。WAAPI クライアントまたはフィルター・ビルダーを使用して、このフィルターを Web GUI に追加することができます。フィルターを作成するときは、意味のある名前 (ITNCMEvents など) を指定し、次の SQL WHERE 節を指定することにより、フィルター条件を定義します。

```
where Class = 87724
```

フィルターの作成方法について詳しくは、Tivoli Netcool/OMNIBus インフォメーション・センター (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/tivihelp/v8r1/topic/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_7.3.1/omnibus/wip/welcome.htm) の「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 管理およびユーザーズ・ガイド」を参照してください。

レポートのマイグレーション:

既存の Netcool Configuration Manager インストール済み環境内にカスタムの Reporting Services レポートがある場合、独自の Reporting Services ソリューションのある Network Manager と統合するには、スタンドアロン版から統合版の Reporting Services へと、カスタム・レポートをマイグレーションします。

始める前に

既存の Netcool Configuration Manager インストール済み環境と同じサーバーに Network Manager をインストールする場合、Network Manager のインストール前に、カスタム・レポートをエクスポートする必要があります。

このタスクについて

レポートのマイグレーション手順は、単一サーバーの統合の場合と複数サーバーの統合の場合では異なります。

Netcool Configuration Manager と Network Manager を同じサーバーにインストールする場合

1. 既存の Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services からカスタム・レポートをエクスポートして、安全な場所にコピーします。

注: 既存のレポートが上書きされないように、Network Manager をインストールする前にカスタム・レポートをエクスポートします。

2. 既存の Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services を使用不可にして、アンインストールします。
3. 説明に従って、Network Manager をインストールし、既存のバージョンの Netcool Configuration Manager と統合します。
4. Network Manager 版の Reporting Services にカスタム・レポートをインポートします。

Netcool Configuration Manager と Network Manager を別々のサーバーにインストールする場合

1. 説明に従って、Network Manager をインストールし、既存のバージョンの Netcool Configuration Manager と統合します。
2. 既存の Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services からカスタム・レポートをエクスポートして、Network Manager サーバーにコピーします。
3. Network Manager 版の Reporting Services にカスタム・レポートをインポートします。
4. 既存の Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services を使用不可にします。

カスタム・レポートのエクスポート (分散統合アーキテクチャー):

既存の Netcool Configuration Manager インストール済み環境以外のサーバーに Network Manager をインストールしてすべての統合タスクを実行したら、カスタム Reporting Services レポートをエクスポートします。さらに、既存の Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services を使用不可にしてアンインストールします。

始める前に

ユーザー・シナリオに対して以下のすべての条件があてはまる場合は、Network Manager をインストールした後に、レポートをエクスポートします。

- 既存の Netcool Configuration Manager インストール済み環境 (未統合) の一部として、Reporting Services が既に稼働している。
- 分散統合アーキテクチャーをデプロイしており、かつ、既存バージョンの Netcool Configuration Manager とは別のサーバーに Network Manager を既にインストールしてある。
- カスタマイズした Netcool Configuration Manager レポートがあり、これらのレポートを、計画した統合ソリューションにマイグレーションする必要がある。

このタスクについて

既存バージョンの Netcool Configuration Manager とは別のサーバーに Network Manager 版の Reporting Services をインストールすると、Reporting Services の以前のレポートと以前のバージョンは Netcool Configuration Manager サーバー内に残ります。これらのレポートを統合ソリューションにマイグレーションするには、以下のタスクを実行します。

Netcool Configuration Manager と **Network Manager** を別々のサーバーにインストールする場合

1. 説明に従って、**Network Manager** をインストールし、既存のバージョンの **Netcool Configuration Manager** と統合します。
2. 既存の **Netcool Configuration Manager** 版の **Reporting Services** からカスタム・レポートをエクスポートして、**Network Manager** サーバーにコピーします。
3. **Network Manager** 版の **Reporting Services** にカスタム・レポートをインポートします。
4. 既存の **Netcool Configuration Manager** 版の **Reporting Services** を使用不可にします。

要確認: 標準の **Netcool Configuration Manager** レポートをマイグレーションする必要はありません。標準レポート (および多数のネットワーク・ビュー・レポート) は、**Network Manager** 版の **Reporting Services** とともにインストールされるためです。標準レポートのインストール後にカスタマイズしたレポート、および新規作成したレポートのみをマイグレーションします。

手順

1. 以下の URL を使用して、**Netcool Configuration Manager** 版の **Reporting Services** にログインします。
`http://hostname:16310/ibm/console`
ここで、*hostname* は、ご使用の **Netcool Configuration Manager** サーバーの名前です。*16310* は、**Reporting Services** のデフォルト・ポート番号です。
2. 「レポート作成 (**Reporting**)」 > 「共通レポート作成 (**Common Reporting**)」をクリックします。
3. ツールバーで「起動」をクリックしてから、ドロップダウン・メニューで「管理」を選択します。
4. 「構成」タブを選択してから、「コンテンツ管理」をクリックします。
5. 「新規エクスポート」をクリックして、「新規エクスポート」ウィザードを起動します。
6. エクスポートするレポートの名前と説明を入力してから、「次へ」をクリックします。
7. デフォルトのデプロイメント方式を受け入れ、「次へ」をクリックします。
8. 「追加」リンクをクリックし、「**ITNCM** レポート」チェック・ボックスを選択してから、「選択されたエントリー」リストに **ITNCM** レポートを移動します。
9. 「**OK**」をクリックしてから、「次へ」 > 「次へ」 > 「次へ」の順にクリックして、デフォルト値を受け入れます。
10. 「新しいアーカイブ」を選択してから、「次へ」 > 「次へ」を選択して、デフォルト値を受け入れます。
11. 「完了」 > 「実行」 > 「**OK**」をクリックします。レポートがエクスポートされ、新規エクスポート・アーカイブが表示されます。
12. 以下のディレクトリーにナビゲートします。
`/opt/IBM/tivoli/netcool/ncm/tipv2Components/TCRComponent/cognos/`

deployment:

ここで、レポート・アーカイブを表示することができます。例:

```
-rw-r--r--    1 icosuser staff      262637 23 Feb 10:27  
ncm_export.zip
```

ここで、ncm_export.zip は、レポート・アーカイブです。

13. このファイルを Network Manager サーバー上の次のディレクトリーにコピーします。

```
$TIP_HOME/../../TCRComponent/cognos/deployment
```

タスクの結果

カスタム・レポートをエクスポートして Network Manager サーバーにコピーしました。

次のタスク

次に、Network Manager 版の Reporting Services にアーカイブ済みレポートをインポートしてから、Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services を使用不可にします。

レポートのインポート (分散統合アーキテクチャー):

カスタム・レポートをエクスポートして、Network Manager サーバーにコピーした後に、Network Manager 版の Reporting Services にアーカイブ済みレポートをインポートしてから、Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services を使用不可にします。

始める前に

カスタム・レポートをエクスポートして、Network Manager サーバーにコピーしておく必要があります。

このタスクについて

手順

1. Network Manager Dashboard Application Services Hub にログインします。
2. 「レポート作成 (**Reporting**)」 > 「共通レポート作成 (**Common Reporting**)」をクリックします。
3. ツールバーで「起動」をクリックしてから、ドロップダウン・メニューで「管理」を選択します。
4. 「構成」タブを選択してから、「コンテンツ管理」をクリックします。
5. 「新規インポート」をクリックして、「新規インポート」ウィザードを起動します。 使用可能なレポート・アーカイブのリストが表示されます。
6. 前にエクスポートしたアーカイブを選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「ITNCM レポート」を選択してから、「次へ」、「次へ」の順に選択して、デフォルト値を受け入れます。
8. 「完了」 > 「実行」 > 「OK」をクリックします。 レポートがインポートされ、アーカイブのリストに新規アーカイブが表示されます。

9. 「Common Reporting」タブを閉じて、ナビゲーション・ペイン内の「Common Reporting」リンクをクリックします。これで、Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services で、カスタム・レポートが使用できるようになります。
10. 以下のディレクトリーにナビゲートします。
`/opt/IBM/tivoli/netcool/ncm/bin/utils/support`
11. `setPlatform.sh` スクリプト (`bash-3.2$ ./setPlatform.sh`) を実行して Reporting を使用不可にしてから、終了します。Netcool Configuration Manager サーバーが再始動したときに、Reporting Services は稼働していません。

タスクの結果

これで、分散統合環境でのカスタム・レポートのマイグレーションが完了しました。

レポートのインポート (単一サーバー統合アーキテクチャー):

カスタム・レポートのエクスポート、Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services の使用不可化とアンインストール、およびその他のすべての統合ステップを完了したら、Network Manager 版の Reporting Services にレポート・アーカイブをインポートします。

始める前に

既存の Netcool Configuration Manager インストール済み環境と同じサーバーに Network Manager をインストールする前に、カスタム・レポートをエクスポートしておく必要があります。

このタスクについて

手順

1. Network Manager Dashboard Application Services Hub にログインします。
2. 「レポート作成 (Reporting)」 > 「共通レポート作成 (Common Reporting)」をクリックします。
3. ツールバーで「起動」をクリックしてから、ドロップダウン・メニューで「管理」を選択します。
4. 「構成」タブを選択してから、「コンテンツ管理」をクリックします。
5. 「新規インポート」をクリックして、「新規インポート」ウィザードを起動します。使用可能なレポート・アーカイブのリストが表示されます。
6. 前にエクスポートしたアーカイブを選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「ITNCM レポート」を選択してから、「次へ」、「次へ」の順に選択して、デフォルト値を受け入れます。
8. 「完了」 > 「実行」 > 「OK」をクリックします。レポートがインポートされ、アーカイブのリストに新規アーカイブが表示されます。
9. 「Common Reporting」タブを閉じて、ナビゲーション・ペインの「Common Reporting」リンクをクリックします。

タスクの結果

これで、Netcool Configuration Manager 版の Reporting Services で、カスタム・レポートが使用できるようになります。

Netcool Configuration Manager のシングル・サインオンの構成:

Tivoli® 製品のシングル・サインオン (SSO) 機能を使用すれば、ある Tivoli アプリケーションにログオンした後に、ユーザーの資格情報を再入力せずに他の Web ペースまたは Web 対応の Tivoli アプリケーションを起動することができます。

そのユーザー ID 用のリポジトリは、Tivoli Netcool/OMNIbus ObjectServer です。関係するアプリケーションの 1 つにユーザーがログオンし、その時点でその資格情報が中央リポジトリで認証されます。中央の場所に対して認証された資格情報を使用すると、そのユーザーはあるアプリケーションから別アプリケーションへと起動して、関連データの表示またはアクションの実施が可能となります。シングル・サインオン (SSO) は、複数のマシン上の Dashboard Application Services Hub サーバーにデプロイされたアプリケーション間で、行うことができます。

シングル・サインオン機能では、SSO に参加する製品が認証メカニズムとして Lightweight Third Party Authentication (LTPA) を使用していることが求められます。SSO が使用可能になると、LTPA トークンを含む Cookie が作成され、HTTP 応答に挿入されます。同一のドメイン・ネーム・サービス (DNS) ドメイン内の他の任意のアプリケーション・サーバー・プロセスで、ユーザーが他の Web リソースにアクセスすると、その Cookie が要求の中で送信されます。次に、LTPA トークンが Cookie から抽出されて、妥当性検査が行われます。その要求がアプリケーション・サーバーの異なるセル間のものである場合、SSO が機能するためには、そのセル間で LTPA 鍵とユーザー・レジストリーが共用されていなければなりません。SSO ドメイン内の各システム上のレルム名は大/小文字の区別が必要であり、完全に一致する必要があります。WebSphere Application Server インフォメーション・センターで『複数の WebSphere® Application Server セルからの LTPA 鍵の管理』を参照してください。

統合インストールで ITNCM レポートを構成する場合は、必ず Reporting Services サーバーでシングル・サインオン (SSO) を構成してください。特に、Network Manager GUI をホストする WebSphere のインスタンスと、ITNCM レポートをホストする WebSphere のインスタンスとの間で SSO を構成する必要があります。これにより、Network Manager 内からレポートを起動するときに不要なログイン・プロンプトが表示されなくなります。詳しくは、「IBM Tivoli Netcool Configuration Manager Installation and Configuration Guide」の『Configuring WebSphere user registry』を参照してください。

Dashboard Application Services Hub 用のユーザー・グループの作成:

Dashboard Application Services Hub および Netcool Configuration Manager との間のシングル・サインオン (SSO) を構成するには、Dashboard Application Services Hub 用の Netcool Configuration Manager グループおよび役割を作成する必要があります。

始める前に

注: Dashboard Application Services Hub および Netcool Configuration Manager との間の SSO が機能するためには、この手順で定義するユーザー・グループが Dashboard Application Services Hub と Netcool Configuration Manager の両方に存在している必要があります。

Network Manager ユーザーと Netcool Configuration Manager ユーザーは、Dashboard Application Services Hub で同じ認証タイプ (例えば、ObjectServer) を使用する必要があります。

注: **IntellidenUser** 役割を **IntellidenUser** グループに割り当てる必要があります。同様に、**IntellidenAdminUser** 役割を **IntellidenAdminUser** グループに付与する必要があります。

このタスクについて

手順

1. プロファイルの所有者 (smadmin など) として Network Manager GUI サーバーの WebSphere 管理コンソールにログオンします。
2. 「ユーザーおよびグループ」 > 「グループの管理」 > 「作成」をクリックして、グループを作成します。
3. 「グループ名」フィールドに「IntellidenUser」と入力します。
4. 「作成」をクリックし、次に、「類似の作成」をクリックします。
5. 「グループ名」フィールドに「IntellidenAdminUser」と入力します。
IntellidenAdminUser 役割は、Netcool Configuration Manager のアカウント管理にアクセスする場合に必要です。
6. 「作成」をクリックし、次に、「閉じる」をクリックします。
7. WebSphere 管理コンソールからログオフした後、Dashboard Application Services Hub GUI にログオンします。
8. 「コンソール設定」 > 「役割」 > 「IntellidenUser」を選択します。
9. 「ユーザーおよびグループ」 > 「グループの追加」 > 「検索」をクリックし、「IntellidenUser」グループを選択して「追加」をクリックします。
10. 「コンソール設定」 > 「役割」 > 「IntellidenAdminUser」を選択します。
11. 「ユーザーおよびグループ」 > 「グループの追加」 > 「検索」をクリックし、「IntellidenAdminUser」グループを選択して「追加」をクリックします。

次のタスク

Dashboard Application Services Hub 用の Netcool Configuration Manager グループおよび役割を作成した後で、Dashboard Application Services Hub 用の Netcool Configuration Manager ユーザーを作成します。

Dashboard Application Services Hub 用のユーザーの作成:

このセクションでは、Netcool Configuration Manager の **Intelliden** スーパーユーザーおよびデフォルト・ユーザー (**administrator**、**operator**、**observer**) を Dashboard Application Services Hub 用に作成する方法を説明します。

始める前に

Dashboard Application Services Hub と Netcool Configuration Manager との間でシングル・サインオン (SSO) が機能するためには、Dashboard Application Services Hub と Netcool Configuration Manager の両方にユーザーが存在している (つまり、アカウントを持っている) 必要があります。

インストール時に、Netcool Configuration Manager によって 4 人のユーザー (**Intelliden**、**administrator**、**operator**、および **observer**) が自動的に作成されます。これらのユーザーのうち、Dashboard Application Services Hub で作成するのは **Intelliden** ユーザーのみです。しかし、他のユーザーも作成することをお勧めします。

注: 一致している必要があるのはユーザー名だけです。パスワードは一致していなくても構いません。シングル・サインオン構成が完了したら、Dashboard Application Services Hub に入力したユーザー・パスワードを使用して、Netcool Configuration Manager ログインが認証されます。

このタスクについて

このタスクでは、前にリストした Netcool Configuration Manager ユーザーを Dashboard Application Services Hub 用に作成する方法について説明します。

手順

1. プロファイルの所有者 (smadmin など) として Network Manager GUI サーバーの WebSphere コンソールにログオンします。
2. 「ユーザーおよびグループ」 > 「ユーザーの管理」をクリックし、次に「作成」をクリックします。
3. 「ユーザー ID」、「名」、「姓」の各フィールドに「Intelliden」と入力します。
4. 「パスワード」フィールドと「パスワードの確認」フィールドに、Intelliden ユーザーのパスワードを入力します。
5. 「グループ・メンバーシップ」をクリックし、「検索」を選択します。
6. 一致するグループのリストで **IntellidenAdminUser** グループと **IntellidenUser** グループを強調表示し、「追加」をクリックし、次に「閉じる」をクリックします。
7. 「作成」をクリックし、次に、「類似の作成」をクリックします。

8. 以下のフィールドに、「administrator」と入力します。
 - ユーザー ID
 - 名
 - 姓
 - パスワード
 - パスワードの確認
9. 「グループ・メンバーシップ」をクリックし、「検索」を選択します。
10. 一致するグループのリストで **IntellidenAdminUser** グループと **IntellidenUser** グループを強調表示し、「追加」をクリックし、次に「閉じる」をクリックします。
11. 「作成」をクリックし、次に、「閉じる」をクリックします。
12. 「作成」をクリックします。
13. 以下のフィールドに、「operator」と入力します。
 - ユーザー ID
 - 名
 - 姓
 - パスワード
 - パスワードの確認
14. 「グループ・メンバーシップ」をクリックし、「検索」を選択します。
15. 一致するグループのリストで **IntellidenUser** グループを強調表示し、「追加」、「閉じる」の順にクリックします。
16. 「作成」をクリックし、次に、「類似の作成」をクリックします。
17. 以下のフィールドに、「observer」と入力します。
 - ユーザー ID
 - 名
 - 姓
 - パスワード
 - パスワードの確認
18. 「グループ・メンバーシップ」をクリックし、「検索」を選択します。
19. 一致するグループのリストで **IntellidenUser** グループを強調表示し、「追加」をクリックし、次に「閉じる」をクリックします。
20. 「作成」をクリックし、次に、「閉じる」をクリックします。

次のタスク

Dashboard Application Services Hub 用の Netcool Configuration Manager ユーザーを作成した後で、LTPA鍵ストアを Netcool Configuration Manager サーバーにエクスポートします。

Dashboard Application Services Hub の LTPA 鍵ストアのエクスポート:

セキュリティーを強化するために、WebSphere によって管理される鍵ストア (後続の手順では「LTPA 鍵ストア」として記載) を使用して、LTPA トークンの内容の暗号化および復号が行われます。WebSphere の 2 つのインスタンスで LTPA トークンによる認証情報を共有するには、両方のインスタンスで同じ LTPA 鍵ストアを使用する必要があります。これは、IBM 管理コンソールで WebSphere の一方のインスタンスの LTPA 鍵ストアをエクスポートして、もう一方のインスタンスにインポートするという簡単なプロセスで実現します。

このタスクについて

このタスクでは、鍵ストア同期のために、Network Manager Dashboard Application Services Hub サーバーで稼働する WebSphere のインスタンスから Netcool Configuration Manager サーバーで稼働する WebSphere のインスタンスに LTPA 鍵ストアをエクスポートする方法を説明します。

手順

1. Dashboard Application Services Hub 管理コンソールを起動します。例:
http://www.nm_gui_server_ip.com:16310/ibm/console
2. 「設定」 > 「**WebSphere** 管理コンソール」に移動します。
3. 「セキュリティー」 > 「グローバル・セキュリティー」をクリックします。
4. 「認証メカニズムおよび有効期限」タブで、「**LTPA**」をクリックします。
5. 「クロスセル・シングル・サインオン (**Cross-cell single sign-on**)」タブで、「パスワード」フィールドおよび「確認パスワード」フィールドにパスワードを入力します。このパスワードは、後で Netcool Configuration Manager サーバーへの LTPA 鍵ストアのインポートに使用します。
6. 「完全修飾鍵ファイル名 (**Fully qualified key file name**)」フィールドに、LTPA 鍵ストアのエクスポート先ディレクトリーとファイル名を入力します。
7. 「鍵のエクスポート」をクリックして実行します。
8. Netcool Configuration Manager サーバーに LTPA 鍵ストアを転送します。

タスクの結果

LTPA 鍵ストアが正常にエクスポートされたことを示すメッセージを受け取ります。

次のタスク

次は、Dashboard Application Services Hub の SSO 属性を構成します。

関連タスク:

82 ページの『Netcool Configuration Manager サーバーへの Dashboard Application Services Hub の LTPA 鍵ストアのインポート』

Netcool Configuration Manager のシングル・サインオンの構成:

SSO の構成は、複数サーバー上でデプロイされる製品を統合化するための前提条件です。すべての Dashboard Application Services Hub サーバー・インスタンスは中央ユーザー・レジストリーを指していなければなりません。

このタスクについて

以下の手順を使用して、Dashboard Application Services Hub のシングル・サインオン属性を構成します。

手順

1. Dashboard Application Services Hub 管理コンソールを起動します。例:
http://www.nm_gui_server_ip.com:16310/ibm/console.
2. 「設定」 > 「WebSphere 管理コンソール」に移動します。
3. 「セキュリティ」を選択し、「グローバル・セキュリティ」 > 「Web および SIP セキュリティ」 > 「シングル・サインオン (SSO)」をクリックします。
4. 「認証」領域で Web セキュリティを展開し、「グローバル・セキュリティ」 > 「Web および SIP セキュリティ」(「認証」領域のもの) > 「シングル・サインオン (SSO)」をクリックします。
5. SSO が使用不可の場合は、「使用可能」オプションを選択します。
6. 「SSL を必要とする」を選択解除します。
7. SSO が有効となる「ドメイン名 (Domain name)」フィールドに完全修飾のドメイン名を入力します。このドメイン名が完全修飾でないと、Dashboard Application Services Hub サーバーは LTPAToken Cookie に対してドメイン名の値を設定せず、SSO が有効となるのは、その Cookie を作成したサーバーに対してだけになります。Tivoli® アプリケーション全体にわたって SSO が機能するためには、それらのアプリケーション・サーバーが同一ドメイン内にインストールされている (同一ドメイン名を使用している) 必要があります。例については以下を参照してください。
8. オプション: 「インターオペラビリティ・モード」オプションを選択解除します。
9. オプション: 「Web インバウンド・セキュリティ属性の伝搬」オプションを選択解除します。
10. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。
11. すべての Dashboard Application Services Hub サーバー・インスタンスを停止して、再始動します。WebSphere 管理コンソールからログアウトします。

例

Dashboard Application Services Hub が **server1.ibm.com** にインストールされ、Netcool Configuration Manager が **server2.ibm.com** にインストールされている場合は、値 **.ibm.com** を入力します。

次のタスク

次に、Netcool Configuration Manager で SSO を使用可能にします。

関連タスク:

『Netcool Configuration Manager サーバーへの Dashboard Application Services Hub の LTPA 鍵ストアのインポート』

Netcool Configuration Manager の SSO の有効化:

SSO を有効にするには、Netcool Configuration Manager と Netcool Configuration Manager WebSphere の両方を構成する必要があります。

このタスクについて

このタスクでは、Netcool Configuration Manager のインストール時に SSO を有効にしなかった場合に、SSO を有効にする方法について説明します。

手順

1. `$NCM_installation_dir/Utils` に移動します。
2. `configSSO.sh` スクリプトを実行します。例えば、以下のようにします。

```
cd /opt/IBM/tivoli/netcool/ncm/bin/Utils ./configSSO.sh enable
```

次のタスク

SSO が有効な場合、Netcool Configuration Manager のインターフェースでは、認証方法として LTPA トークンを受け入れる必要があります。Netcool Configuration Manager サーバーに LTPA 鍵ストアをインポートすることによって、これが行われます。

Netcool Configuration Manager サーバーへの Dashboard Application Services Hub の LTPA 鍵ストアのインポート:

セキュリティを強化するために、WebSphere によって管理される鍵ストアを使用して、LTPA トークンの内容の暗号化および復号が行われます。WebSphere の 2 つのインスタンスで LTPA トークンによる認証情報を共有するには、両方のインスタンスで同じ鍵ストアを使用する必要があります。これは、IBM 管理コンソールで WebSphere の一方のインスタンスの鍵ストアをエクスポートして、もう一方のインスタンスにインポートするという簡単なプロセスで実現します。

始める前に

前のタスクで、Network Manager Dashboard Application Services Hub サーバーで稼働する WebSphere のインスタンスから LTPA 鍵ストアエクスポートして、Netcool Configuration Manager サーバーにコピーしておく必要があります。

このタスクについて

以下の手順では、Netcool Configuration Manager サーバーで稼働する WebSphere のインスタンスに LTPA 鍵ストアをインポートします。

手順

1. インストール時に指定したスーパーユーザー名とパスワード (通常は Intelliden) を使用して Netcool Configuration Manager Presentation Server の WebSphere 管理コンソールにログオンします。

例: `http://NCM_presentation_server:16316/ibm/console`

2. 「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」をクリックします。
3. 「認証メカニズムおよび有効期限」で、「**LTPA**」をクリックします。
4. 「クロスセル・シングル・サインオン (**Cross-cell single sign-on**)」で、「パスワード」フィールドおよび「確認パスワード」フィールドにパスワードを入力します。このパスワードは、Dashboard Application Services Hub から LTPA 鍵ストアをエクスポートしたときに使用したパスワードです。
5. 「完全修飾鍵ファイル名 (Fully qualified key file name)」フィールドに、LTPA 鍵ストア・ファイル名を入力します。これは、Dashboard Application Services Hub からエクスポートした LTPA 鍵ストアです。
6. 「キーのインポート」をクリックします。
7. 「直接マスター構成に保存 (**Save directly to the master configuration**)」をクリックします。

次のタスク

次は、Netcool Configuration Manager サーバーで稼働する WebSphere のインスタンス用のシングル・サインオン属性を構成します。

関連タスク:

80 ページの『Dashboard Application Services Hub の LTPA 鍵ストアのエクスポート』

81 ページの『Netcool Configuration Manager のシングル・サインオンの構成』

Netcool Configuration Manager WebSphere のシングル・サインオン属性の構成:

SSO の構成は、複数サーバー上でデプロイされる製品を統合化するための前提条件です。すべての eWAS サーバー・インストールは中央ユーザー・レジストリーを指していなければなりません。

このタスクについて

この手順は、Netcool Configuration Manager サーバー上で稼働している Netcool Configuration Manager eWAS インスタンスに対して実行します。

手順

1. インストール時に指定したスーパーユーザー名とパスワード (通常は Intelliden) を使用して Netcool Configuration Manager Presentation Server の WebSphere 管理コンソールにログオンします。

例: `http://NCM_presentation_server:16316/ibm/console`

2. 「認証」領域で「Web セキュリティ」を展開し、次に、「シングル・サインオン」をクリックします。
3. SSO が使用不可の場合は、「使用可能」オプションを選択します。

4. 「**SSL** を必要とする」を選択解除します。
5. 「ドメイン名」フィールドでドメイン名をブランクのままにします。
6. オプション: 「インターオペラビリティ・モード」オプションを選択解除します。
7. オプション: 「**Web** インバウンド・セキュリティ属性の伝搬」オプションを選択解除します。
8. 「適用」をクリックして、変更内容を保存します。
9. 「直接マスター構成に保存 (**Save Directly to the Master Configuration**)」をクリックします。

次のタスク

次に、Netcool Configuration Manager のフェデレーテッド・ユーザー・リポジトリを作成します。

Netcool Configuration Manager のフェデレーテッド・ユーザー・リポジトリの作成および構成:

Tivoli Netcool/OMNIbus ObjectServer を使用して認証するための最初のステップとして、Netcool Configuration Manager のフェデレーテッド・ユーザー・リポジトリを作成します。

始める前に

重要: この手順を実行する前に、68 ページの『Network Manager との統合の構成』のタスクを実行してください。

このタスクについて

複数の個別のユーザー・リポジトリからの項目を単一の仮想リポジトリにマップする機能を備えている Virtual Member Manager (VMM) 上でフェデレーテッド・ユーザー・リポジトリを構築します。フェデレーテッド・ユーザー・リポジトリは、単一の名前付きレルムで構成されています。レルムとは、複数の独立したユーザー・リポジトリからなるセットのことです。各ユーザー・リポジトリは、全体が外部ユーザー・リポジトリである場合があります。

このタスクでは、Netcool Configuration Manager のフェデレーテッド・ユーザー・リポジトリを作成して構成する方法について説明します。

手順

1. <http://<ncmserver-hostname-ip>:<16316>/ibm/console> から WebSphere 管理コンソールを起動し、インストール中に指定した Netcool Configuration Manager スーパーユーザー名およびパスワードを使用してログインします。

注: 標準インストール以外の場合は、ポート番号が異なる場合があります。
2. 「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」を選択します。
3. ユーザー・アカウント・リポジトリの使用可能なレルム定義フィールドから「統合リポジトリ」を選択し、「構成」をクリックします。

4. レルムのリポジトリで「リポジトリの追加 (LDAP、カスタムなど)」を選択します。
5. 「一般プロパティ」で「新規リポジトリ」 > 「カスタム・リポジトリ (Custom Repository)」を選択します。
6. ここに記載するとおり (またはカスタム・リポジトリのとおり) ObjectServer の VMM プロパティを更新します。

リポジトリ ID

NetcoolObjectServer

リポジトリ・アダプターのクラス名

com.ibm.tivoli.tip.vmm4ncos.ObjectServerAdapter

カスタム・プロパティ

以下の 4 つのプロパティを追加します。

注: リポジトリに格納されている正確な詳細情報を確認してください。それは、Network Manager GUI 管理コンソールで表示できます。

表 13. カスタム・プロパティ

名前 (大/小文字を区別)	値
username	ObjectServer 管理者ユーザー名
password	ObjectServer で暗号化される管理者ユーザーのパスワード
port1	Object Server のポート番号
host1	Object Server のホスト名または IP アドレス

7. 「適用」をクリックして、変更内容をマスター構成に直接保存します。
8. リポジトリ参照の一般プロパティで、固有の識別名を o=netcoolObjectServerRepository に更新します。
9. 「OK」をクリックして変更内容をマスター構成に直接保存し、再度「OK」をクリックします。
10. Netcool Configuration Manager にも存在する ID がローカル・リポジトリに存在しない場合があります。対処するには、以下のいずれかの手順を実行します。
 - リポジトリのフェデレーションからローカル・ファイル・リポジトリを削除する。
 - 競合するすべてのユーザーをローカル・ファイル・リポジトリから削除する。
11. プロンプトが出された場合は、WebSphere 管理者ユーザーのパスワードを「パスワード」フィールドおよび「パスワードの確認」フィールドに入力し、「OK」をクリックします。
12. ユーザー・アカウント・リポジトリの「グローバル・セキュリティ」で、使用可能なレルム定義フィールドから「統合リポジトリ」を選択し、「現在として設定 (Set as current)」をクリックします。
13. 「適用」をクリックして、変更内容をマスター構成に直接保存します。

14. 管理コンソールからログアウトします。
15. `./itncm.sh stop` コマンドを使用して、Netcool Configuration Manager サーバーを停止します。次に、`./itncm.sh start` コマンドを使用して、Netcool Configuration Manager サーバーを始動します。

次のタスク

Netcool Configuration Manager が ObjectServer の VMM で認証されるようになります。

Netcool Configuration Manager スーパーユーザーは、Dash プロファイルのインストール中に作成されたユーザー (デフォルトでは `smadmin`) に戻されています。

Networks for Operations Insight の使用開始

インストールおよび構成の手順が完了したら、Networks for Operations Insight フィーチャーのコンポーネントを開始し、Web ブラウザーを使用してホストにログインすることができます。

手順

1. Tivoli Netcool/OMNIBus ObjectServer が実行されていることを確認します。
`http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/omnibus/wip/admin/task/omn_con_startingobjserv.html?lang=en` を参照してください。
2. `/opt/IMB/JazzSM/profiles/bin/startServer.sh server name` コマンドを使用して、Dashboard Application Services Hub サーバーを始動します。
3. 環境変数を入手します。Network Manager コア・コンポーネントがインストールされているサーバーでは、スクリプトは `installation_directory/netcool/core/env.sh` です。Network Manager GUI コンポーネントがインストールされているサーバーでは、スクリプトは `installation_directory/nmgui_profile.sh` (`/opt/IBM/netcool/nmgui_profile.sh` など) です。
4. 製品のバックエンド・プロセスを開始します。**itnm_start** コマンドを使用して、Network Manager を開始します。このコマンドは、ObjectServer を始動するのには使用しないでください。ObjectServer の始動と停止には、Tivoli Netcool/OMNIBus のコマンドを使用します。Netcool Configuration Manager は、別途 `itncm.sh start` スクリプトを使用して開始します。
5. `http://host.domain:16310/ibm/console` でログインし、セキュア環境の場合は、`https://host.domain:16311/ibm/console` でログインします。ここで、*host.domain* は、Jazz for Service Management アプリケーション・サーバーの完全修飾ホスト名または IP アドレスです。16310 と 16311 は、HTTP と HTTPS のそれぞれのデフォルト・ポートです。提供されている `itnmadmin` ユーザーは、インストール時に指定したパスワードで使します。
6. Netcool Configuration Manager - ベース GUI へは、`http://ncmserver-hostname:port-number` 経由でログインできます。ここで、*ncmserver-hostname* は、Netcool Configuration Manager のインストール先のコンピューターのホスト名です。*port-number* は、インストール時に指定したポートです。インストール時に指定したデフォルトのユーザー名とパスワードを使用します。

関連タスク:

- ➡ 環境変数の読み込み
- ➡ Network Manager の開始
- ➡ ログイン
- ➡ Netcool Configuration Manager の起動 (基本)

関連資料:

- ➡ itncm.sh スクリプト

関連情報:

- ➡ Network Manager の開始
- ➡ Netcool Configuration Manager の概要

Insight Pack のインストール

Insight Pack は、Operations Analytics - Log Analysis 内にイベント・データを取り込み、カスタム・アプリケーションをインストールします。2 つの Insight Pack が提供されています。Tivoli Netcool/OMNIbus Insight Pack は、常に必須です。Network Manager Insight Pack は、Networks for Operations Insight フィーチャーをデプロイし、トポロジー検索機能を使用する場合にのみ必要になります。

Insight Pack のインストール中に、Operations Analytics - Log Analysis は稼働中のままでかまいません。

始める前に

トポロジー検索機能をデプロイする場合は、53 ページの『Network Manager および Netcool Configuration Manager のインストール』の手順でインストールした NCIM データベースについての情報を取得します。

ヒント: 必要な情報のほとんどは、\$NCHOME/etc/precision/DbLogins.cfg ファイルまたは DbLogins.DOMAIN.cfg ファイルから取得することができます (DOMAIN は、ドメインの名前)。

この情報は、この手順のステップ 6 (88 ページ) で必要です。

手順

1. Python 2.6 以降を simplejson ライブラリーとともにインストールします。これは Insight Pack に含まれているカスタム・アプリケーションに必要です。
2. 必要な Insight Pack を取得します。Insight Pack のイメージは、Operations Analytics - Log Analysis ダウンロードに含まれています。
<http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24041694> の『Event Search integration』および『Topology Search integration』についての情報を参照してください。Insight Pack のファイル名は次のとおりです。
 - OMNIbusInsightPack_v1.3.0.2.zip
 - NetworkManagerInsightPack_V1.3.0.0.zip
3. Tivoli Netcool/OMNIbus Insight Pack を Operations Analytics - Log Analysis のホストにインストールします。例えば、次のようにします。

```
$UNITY_HOME/utilities/pkg_mgmt.sh -install $UNITY_HOME/unity_content/OMNibus/OMNibusInsightPack_v1.3.0.2.zip
```

4. Operations Analytics - Log Analysis UI で、データ・ソース・ウィザードを使用して、イベント・データを取り込むデータ・ソースを作成します。

「omnibus1100」データ・ソースは、Tivoli Netcool/OMNibus Insight Pack と Network Manager Insight Pack の両方のデータを取り込むことができます。

- a. 「ロケーションの選択 (Select Location)」パネルで「カスタム」を選択し、Netcool/OMNibus サーバーのホスト名を入力します。Gateway for Message Busの **JsonMsgHostname** トランスポート・プロパティに指定したのと同じホスト名を入力してください。
- b. 「データの選択 (Select Data)」パネルで、以下のフィールド値を入力します。

フィールド	値
ファイル・パス	NCOMS。これは、Gateway for Message Busの jsonMsgPath トランスポート・プロパティのデフォルト値です。この値をデフォルト値から変更した場合は、それに応じて「ファイル・パス」フィールドの値を変更します。
タイプ	OMNibus1100
コレクション	OMNibus1100-Collection

- c. 「属性の設定 (Set Attributes)」パネルで、以下のフィールド値を入力します。

フィールド	値
名前	omnibus。入力する値は、Web GUI server.init ファイルの scala.datasource プロパティの値と同じにしてください。「名前」フィールドの値が omnibus でない場合は、 scala.datasource プロパティにもその同じ値を使用します。
グループ	このフィールドは、ブランクのままにします。
説明	選択項目の説明を入力します。

5. オプション: Network Manager Insight Pack をインストールします。例えば、次のようにします。

```
$UNITY_HOME/utilities/pkg_mgmt.sh -install $UNITY_HOME/unity_content/NetworkManagerNetworkManagerInsightPack_v1.3.0.0.zip
```

6. オプション: \$UNITY_HOME/AppFramework/Apps/NetworkManagerInsightPack_V1.3.0.0/Network_Topology_Search/NM_EndToEndSearch.properties で、NCIM データベースの詳細を指定します。

ncp.dla.ncim.domain

トポロジー検索機能の有効範囲をトポロジー内の単一ドメインに制限します。複数のドメインの場合、Network Manager のクロスドメイン・ディス

カバリ機能を実装して、集約ドメインの名前を指定します。トポロジー内のすべてのドメインについて、このプロパティをコメント化します。リンクのままにしないでください。

ncp.spf.multipath.maxLinks

2 つのエンドポイント間の経路が取得されたときに処理されるリンク数に制限を設定します。リンク数が制限を超えた場合、最初に識別された経路のみが返されます。例えば、`ncp.spf.multipath.maxLinks = 1000` と指定したとします。999 個のリンクが処理される場合、2 つのエンドポイント間のすべての経路が取得されます。1001 個のリンクが処理される場合、1 つの経路が計算されてから処理が停止します。

ncp.dla.datasource.type

Network Manager トポロジーを保管するために使用されるデータベースのタイプ。指定可能な値は `db2` または `oracle` です。

ncp.dla.datasource.driver

データベース・ドライバー。DB2 の場合は `com.ibm.db2.jcc.DB2Driver` と入力します。Oracle の場合は `oracle.jdbc.driver.OracleDriver` と入力します。

ncp.dla.datasource.url

データベース URL。DB2 の場合、URL は次のようになります。

`jdbc:db2://host:port/name`

Oracle の場合、URL は次のようになります。

`jdbc:oracle:thin:@host:port:name`

どちらの場合も、*host* はデータベース・ホスト名、*port* はポート番号、*name* は NCIM などのデータベース名です。

ncp.dla.datasource.schema

NCIM データベース・スキーマ名を入力します。デフォルトは `ncim` です。

ncp.dla.datasource.ncpgui.schema

NCPGUI データベース・スキーマ名を入力します。デフォルトは `ncpgui` です。

ncp.dla.datasource.username

データベース・ユーザー名を入力します。

ncp.dla.datasource.password.

データベース・パスワードを入力します。

ncp.dla.datasource.encrypted

パスワードが暗号化されている場合は、`true` と入力します。暗号化されていない場合は、`false` と入力します。

ncp.dla.datasource.keyfile

暗号鍵ファイルの名前とパスを入力します。例えば、`$UNITY_HOME/wlp/usr/servers/Unity/keystore/unity.ks` と入力します。

ncp.dla.datasource.loginTimeout

必要な場合は、ログインがタイムアウトになるまでの秒数を変更します。

次のタスク

- **pkg_mgmt** コマンドを使用して、Insight Pack のインストールを検証します。Insight Pack のバージョンの検査およびInsight Pack がインストールされたことを確認するを参照してください。
- ネットワーク・トポロジーに Oracle データベースを使用する場合 (NCIM データベース) は、Oracle 用の追加構成を実行します。 *Network Manager Insight Pack README* を参照してください。
- Operations Analytics - Log Analysis と Dashboard Application Services Hub の間でシングル・サインオン (SSO) を構成して、イベント・ビューアーから右クリック・ツールを起動できるようにします。Network Manager Insight Pack をインストールした場合は、ネットワーク・ビューから右クリック・ツールを起動できるようにします。『シングル・サインオンの構成』を参照してください。

関連概念:

 データ・ソースの作成

関連情報:

 Gateway for Message Bus 資料

シングル・サインオンの構成

シングル・サインオン (SSO) を構成することで、Netcool Operations Insight の製品およびコンポーネントの間でのツールの起動をサポートすることができます。さまざまな SSO ハンドシェークがサポートされています。ここでは、どの機能の場合にどのハンドシェークを構成すべきかを説明します。各ハンドシェークは別々に構成する必要があります。

手順

以下の表で説明されているように SSO ハンドシェークをセットアップします。この表には、SSO によって接続される製品およびコンポーネント、SSO ハンドシェークを必要とする機能、および役立つ追加情報がリストされています。

表 14. Netcool Operations Insight のための SSO ハンドシェーク

SSO ハンドシェークを間に構成できる製品またはコンポーネント		ハンドシェークを構成してサポートされる機能	追加の注意事項
Operations Analytics - Log Analysis	Dashboard Application Services Hub	イベント検索	Netcool/OMNIbus Web GUI のイベント・リスト (すなわちイベント・ビューアーおよびアクティブ・イベント・リスト。) から Tivoli Netcool/OMNIbus Insight Pack のカスタム・アプリケーションへの右クリック・ツールの起動をサポートします。

表 14. Netcool Operations Insight のための SSO ハンドシェーク (続き)

SSO ハンドシェークを間に構成できる製品 またはコンポーネント		ハンドシェーク を構成してサポ ートされる機能	追加の注意事項
Operations Analytics - Log Analysis	Dashboard Application Services Hub	トポロジー検索	Web GUI イベント・リス トから Network Manager Insight Pack のカスタム・ アプリケーションへの右ク リック・ツールの起動をサ ポートします。 Network Manager 製品の ネットワーク・ビューから Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケ ーションへの右クリック・ ツールの起動をサポートし ます。
Netcool Configuration Manager	Dashboard Application Services Hub	Networks for Operations Insight	ネットワーク・ビューから Netcool Configuration Manager GUI への右ク リック・ツールの起動をサポ ートします。

関連タスク:

104 ページの『イベント検索機能のためのシングル・サインオンの構成』

295 ページの『トポロジー検索機能のためのシングル・サインオンの構成』

➡ Operations Analytics - Log Analysis と Dashboard Application Services
Hub の間の SSO の構成

81 ページの『Netcool Configuration Manager のシングル・サインオンの構成』

関連情報:

➡ SSO に対応するための Jazz for Service Management の構成

Netcool Operations Insight の開始

ここに示す情報は、基本 Netcool Operations Insight ソリューションのみに適用されます。Networks for Operations Insight も併せてインストールした場合は、86 ページの『Networks for Operations Insight の使用開始』に記載されている手順を実行してください。

このタスクについて

ヒント:

始動スクリプトを作成して、各種の Netcool Operations Insight 製品を自動的に開始することができます。始動スクリプトの構成方法とその例については、Netcool/OMNIbus ベスト・プラクティス Wiki (http://ibm.biz/nco_bps) の

「Netcool/OMNIBus *Best Practices Guide*」に記載されているセクション『The Netcool Process Agent and machine start-up』を参照してください。

停止コマンドを実行したときにユーザーの資格情報を要求しないように Jazz を構成することができます。バックアップを作成した後、`/opt/IBM/JazzSM/profile/properties/soap.client.props` ファイルの以下の行を編集します。

```
com.ibm.SOAP.securityEnabled=true
com.ibm.SOAP.loginUserId=smadmin
com.ibm.SOAP.loginPassword=netcool
```

以下のコマンドを実行して、ファイルに埋め込んだパスワードを暗号化します。

```
/opt/IBM/JazzSM/profile/bin/PropFilePasswordEncoder.sh ¥
/opt/IBM/JazzSM/profile/properties/soap.client.props ¥
com.ibm.SOAP.loginPassword
```

詳しくは、次の技術情報を参照してください。 <http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21584635>

手順

- `/opt/IBM/JazzSM/profiles/bin/startServer.sh server name` コマンドを使用して、Dashboard Application Services Hub サーバーを始動します。
- `http://host.domain:16310/ibm/console` でログインし、セキュア環境の場合は、`https://host.domain:16311/ibm/console` でログインします。ここで、*host.domain* は、Jazz for Service Management アプリケーション・サーバーの完全修飾ホスト名または IP アドレスです。16310 と 16311 は、HTTP と HTTPS のそれぞれのデフォルト・ポートです。
- ユーザーに役割を割り当てます。ユーザーに Event Analytics 機能へのアクセス権限を付与する場合は、`ncw_analytics_admin` ユーザーを割り当てます。

次のタスク

「Netcool Operations Insight Example Guide」に、使用する環境を構成する方法についての有益な情報があります。このガイドは、<https://www.ibm.com/developerworks/community/wikis/home?lang=en#/wiki/Tivoli%20Netcool%20OMNIBus/page/Best%20Practices>でダウンロードできます。

関連タスク:

86 ページの『Networks for Operations Insight の使用開始』

最新の Netcool Operations Insight へのアップグレード

以前のバージョンの Netcool Operations Insight の製品およびコンポーネントを最新のバージョンにアップグレードする方法を示します。ここにはアップグレードのためのクイック・リファレンスを提供するシナリオのほか、最新のバージョンへのアップグレードを説明するエンドツーエンドのシナリオが提示されています。

ヒント: 実動システムへの悪影響を最小限に抑えるためのアドバイスとして、Tivoli Netcool/OMNIbus ベスト・プラクティス Wiki (http://ibm.biz/nco_bps) を参照してください。

以下の表では、V1.4.0.1 から V1.4.0.2 にアップグレードするために Netcool Operations Insight の製品の各インスタンスに対して行う必要がある操作を示しています。

表 15. Netcool Operations Insight の最新バージョンへのアップグレードに必要な構成要素の製品およびコンポーネントへの変更

製品またはコンポーネント	アクション
Tivoli Netcool/OMNIbus	フィックスパックを適用し、構成を適用する
Tivoli Netcool/OMNIbus Web GUI	フィックスパックを適用し、構成を適用する
Gateway for JDBC	アップグレードは不要
Gateway for Message Bus	アップグレードは不要
Netcool/Impact	フィックスパックを適用し、構成を適用する
Operations Analytics - Log Analysis	アップグレードは不要 注: バージョン V1.3.2 および V1.3.3 はサポートされています。V1.3.2 Standard Edition は Netcool Operations Insight に含まれています。
Event Analytics	Tivoli Netcool/OMNIbus Web GUI 拡張および Netcool/Impact 拡張で提供される最新バージョンにアップグレード
Tivoli Netcool/OMNIbus Insight Pack	アップグレードは不要
Network Manager Insight Pack	アップグレードは不要
Network Manager	アップグレードは不要
Netcool Configuration Manager	フィックスパックを適用し、構成を適用する

アップグレードのためのクイック・リファレンス

以下の表に、Netcool Operations Insight V1.4.0.1 から V1.4.0.2 へのアップグレード方法を要約して示します。

この概要では、Netcool Operations Insight に含まれている各製品についての詳細な知識が前提となっています。ここでは詳細な情報がすべて提供されるわけではありません。Netcool Operations Insight の資料内、または Netcool Operations Insight を構成する製品の製品資料内には、詳細情報へのリンクが提供されています。

ヒント: インストール済みパッケージのバージョンを確認するには、IBM Installation Manager のメイン画面で「ファイル」メニューから「インストール済みパッケージの表示 (View Installed Packages)」を選択します。

要確認: いずれの Netcool Operations Insight 製品の場合も、製品のインストール先の各サーバーに IBM Installation Manager をデプロイする必要があります。

表 16. Netcool Operations Insight のアップグレードのためのクイック・リファレンス

項目	アクション	追加情報
1	Netcool/OMNIBus コア V8.1.0.8 (フィックスパック 8) を適用します。このフィックスパックは IBM Fix Central のみから入手できます。	http://www.ibm.com/support/fixcentral/
2	IBM Fix Central から入手した Netcool/Impact 7.1.0.6 (フィックスパック 6) を適用します。 Event Analytics のアップグレードの一環として、Netcool/Impact 7.1.0.6 のインストール時に「 IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight 7.1.0.6 」パッケージを選択します。	http://www.ibm.com/support/fixcentral/ Event Analytics のアップグレード
3	IBM Fix Central から入手した Netcool/OMNIBus Web GUI V8.1.0.6 (フィックスパック 6) を適用します。 Event Analytics のアップグレードの一環として、Web GUI V8.1.0.6 のインストール時に「 IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 1.4.0.2 」パッケージを選択します。	http://www.ibm.com/support/fixcentral/ Event Analytics のアップグレード
4	Web GUI を Operations Analytics - Log Analysis との統合用に構成します。server.init ファイルで、 scala.* プロパティを適切に設定します。この設定がご使用の Operations Analytics - Log Analysis インスタンスを指すようにしてください。	「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 管理およびユーザーズ・ガイド」を参照してください。
5	Netcool Configuration Manager 6.4.2.1 (フィックスパック 1) をインストールします。	http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9_6.4.2/ncm/wip/relnotes/ncm_rn_6421.html を参照してください。 http://www.ibm.com/support/fixcentral/

Netcool Operations Insight のアップグレード

このシナリオでは、Netcool Operations Insight の最新バージョンへのアップグレード方法を説明します。

始める前に

- 環境内のすべての製品およびコンポーネントをバックアップします。
- IBM Fix Central にアクセスして、Tivoli Netcool/OMNIbus コア 8.1.0.8、Web GUI 8.1.0.6、および Netcool/Impact 7.1.0.6 をダウンロードします:
<http://www-933.ibm.com/support/fixcentral/>。

他の製品およびコンポーネントは同じ VRM 番号のままであることから、ホストはインストール前提条件を引き続き満たすことが想定されます。IBM Installation Manager、製品フィックスパック、および暫定修正は、IBM Fix Central (<http://www-933.ibm.com/support/fixcentral/>) から入手できます。

手順

1. Netcool/OMNIbus ホストで、Netcool/OMNIbus コア V8.1.0.8 (フィックスパック 8) を適用します。Installation Manager を開始します。Installation Manager のインストール・ディレクトリーの /eclipse サブディレクトリーに移動し、次のコマンドを入力して Installation Manager を開始します。

```
./IBMIM
```

2. ダウンロード・パッケージが存在するローカル・リポジトリまたは IBM パスポート・アドバンテージ・リポジトリのいずれかを指すように Installation Manager を構成します。詳しくは、Installation Manager に関する IBM Knowledge Center のコンテンツで、トピック『ウィザード・モードの使用によるパッケージのインストール』を参照してください。以下の URL で Installation Manager に関する IBM Knowledge Center コンテンツを参照してください。

```
http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSDV2W/im\_family\_welcome.html
```

3. Installation Manager のメイン・ウィンドウで、「更新」をクリックし、次のタイプのインストール・ウィザードの手順に従って、更新パッケージのインストールを実行します。
 - a. 「更新パッケージ」タブで、関連する更新パッケージを検索するための製品グループを選択し、「次へ」をクリックします。使用可能な更新パッケージのリストが表示されます。
 - b. 使用可能な更新パッケージのリストで V8.1.0.8 (フィックスパック 8) を選択して、「次へ」をクリックします。
 - c. 「ライセンス」タブで、ライセンスの内容を確認します。「使用条件の条項に同意します。」を選択し、「次へ」をクリックします。
 - d. 「機能」タブで、更新パッケージの機能を選択して「次へ」をクリックします。
 - e. 構成の詳細を指定して「次へ」をクリックします。

- f. 「要約」タブで、要約の詳細を確認します。詳細を変更する必要がある場合は、「戻る」をクリックします。要約の詳細に問題がなければ「更新」をクリックし、更新パッケージのインストールが完了するまで待ちます。
 - g. 更新パッケージのインストールが完了するとウィンドウが更新され、インストールの詳細が表示されます。「完了」をクリックします。
4. ObjectServer が トポロジー検索機能をサポートするように構成します。

\$NCHOME/omnibus/extensions で、**nco_sql** ユーティリティを
scala_itnm_configuration.sql ファイルに対して実行します。

```
./nco_sql -user root -password myp4ss -server NCOMS  
< /opt/IBM/tivoli/netcool/omnibus/extensions/scala/scala_itnm_configuration.sql
```

NCIM データベースからの Network Manager データによってイベントが拡張されるまでイベントの保管を遅延するトリガーが ObjectServer に適用されます。

重要: Netcool/OMNIBus コア V8.1.0.5 (フィックスパック 5) の適用前に作成した ObjectServer インスタンスに接続していて、ObjectServer に付属の Operations Analytics - Log Analysis トリガーを使用している場合は、以下の SQL ファイルを実行して、Operations Analytics - Log Analysis AEN トリガーをアップグレードする必要があります。

\$OMNIHOME/etc/update81to81fp5.sql

\$NCHOME/omnibus/extensions/scala ディレクトリー内にある Operations Analytics - Log Analysis Network Manager トリガーを使用している場合は、
\$NCHOME/omnibus/extensions/scala ディレクトリー内の update81to81fp5.sql ファイルを適用する必要があります。

5. Netcool/Impact ホストで V7.1.0.6 (フィックスパック 6) を適用し、
Netcool/OMNIBus Web GUI ホストで V8.1.0.6 (フィックスパック 6) を適用してから、Event Analytics を構成します。詳しくは、134 ページの『IBM Netcool Operations Insight 1.3.1 および 1.4 から IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 への Event Analytics のアップグレード』を参照してください。
6. Netcool Configuration Manager ホストで、6.4.2.1 (フィックスパック 1) を適用します。このフィックスパックは IBM Fix Central (<http://www.ibm.com/support/fixcentral/>) から入手できます。フィックスパック 1 について詳しくは、http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9_6.4.2/ncm/wip/relnotes/ncm_rn_6421.html を参照してください。

関連概念:

127 ページの『Event Analytics 用の Netcool Operations Insight への更新』

➡ サーバー・エディターでの接続

関連タスク:

➡ Web GUI サーバーの再始動

➡ Backing up and restoring Operations Analytics - Log Analysis data

➡ IBM Operations Analytics - Log Analysis のインストール

 [Configuring Reporting Services for Network Manager](#)

関連資料:

 [Web GUI server.init ファイル](#)

関連情報:

 [Gateway for Message Bus 資料](#)

イベント検索

イベント検索は、Operations Analytics - Log Analysis の検索機能と分析機能を、Tivoli Netcool/OMNIBus がモニターおよび管理するイベントに適用します。イベントは、Gateway for Message Bus 経由で Operations Analytics - Log Analysis に転送され、ここでデータ・ソースに取り込まれて、検索対象として索引付けされます。イベントに索引が付けられると、リアルタイム・イベントと履歴上のイベントのすべてのオカレンスを検索できるようになります。Tivoli Netcool/OMNIBus Insight Pack は、Operations Analytics - Log Analysis にインストールされ、さまざまな基準に基づいてイベントを検索するカスタム・アプリケーションを提供します。これらのカスタム・アプリケーションでは、イベント情報を表示し、モニタリング環境のパフォーマンスを経時的に示すダッシュボードを生成できます。キーワード検索機能と動的ドリルダウン機能を使用すると、イベント・データを掘り下げて、詳細な情報を調べることができます。これらのアプリケーションは、Operations Analytics - Log Analysis から実行できます。これらのアプリケーションを、イベント・ビューアーおよびアクティブ・イベント・リストの右クリック・メニューから起動するツールを、Web GUI にインストールできます。イベントの分析と量の削減に役立つ情報やアプリケーションを提供する「イベント削減ウィザード」も用意されています。イベントの量を削減することにより、モニター対象環境内の「ノイズ」を最小限に減らすことができます。

必要な製品およびコンポーネント

イベント検索に必要な製品およびコンポーネントは以下のとおりです。

- Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 または V1.3.3。この製品のシステム要件 (サポートされるオペレーティング・システムなど) については、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY_1.3.2/com.ibm.scala.doc/install/iwa_hardware_software_reqs_c.htmlを参照してください。

注: Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 Standard Edition は Netcool Operations Insight に付属しています。Operations Analytics - Log Analysis のエディションについて詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY_1.3.2/com.ibm.scala.doc/iwa_editions_oview_c.htmlを参照してください。

- OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2
- Gateway for Message Bus V7.0
- Netcool/OMNIBus V8.1.0.7 (フィックスパック 7) 以降のコア・コンポーネント
- Netcool/OMNIBus Web GUI V8.1.0.5 (フィックスパック 5) 以降

Netcool/OMNIBus V8.1 のコア・コンポーネントおよび Web GUI のシステム要件については、<https://ibm.biz/BdRNAaT> を参照してください。

関連タスク:

100 ページの『イベント検索の構成』

関連資料:

イベント検索の構成

このセクションでは、Netcool/OMNIBus 製品と Operations Analytics - Log Analysis 製品の統合を構成する方法を説明します。イベントは、Gateway for Message Busを介して、Netcool/OMNIBus から Operations Analytics - Log Analysis に転送されます。

始める前に

- 製品バージョンに関して、サポートされる組み合わせを使用します。詳しくは、99 ページの『必要な製品およびコンポーネント』を参照してください。ベスト・プラクティスでは、製品を以下の順序でインストールします。
 1. Netcool/OMNIBus V8.1 および Web GUI
 2. Gateway for Message Bus. Netcool/OMNIBus 製品と同じホストにゲートウェイをインストールします。
 3. Operations Analytics - Log Analysis。 <https://ibm.biz/BdXeZk>を参照してください。
 4. Netcool/OMNIBus Insight Pack。 「Netcool/OMNIBus Insight Pack README」を参照してください。

ヒント: ベスト・プラクティスでは、Web GUI および Operations Analytics - Log Analysis を別々のホストにインストールします。

制約事項: Operations Analytics - Log Analysis は、IBM Installation Manager のグループ・モードでのインストールをサポートしません。

- イベント・データを Operations Analytics - Log Analysis に転送する ObjectServer が、alerts.status テーブル内に **NmosObjInst** 列を持つようにしてください。**NmosObjInst** はデフォルトで提供されており、この構成に必須です。ObjectServer SQL コマンドを使用して列の有無を調べ、列がない場合に追加することができます。その方法は以下のとおりです。
 - alerts.status テーブルの列を読み取るには、DESCRIBE コマンドを使用します。
 - alerts.status テーブルに **NmosObjInst** を追加するには、ALTER TABLE コマンドに ALTER COLUMN 設定を指定して使用します。

alerts.status テーブルおよび ObjectServer SQL コマンドについて詳しくは、「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus 管理ガイド」を参照してください。

- 以下のようにして Web GUI server.init ファイルを構成します。

注: Web GUI V8.1 フィックスパック 5 以降では、デフォルト値を変更する必要はありません。

```
scala.app.keyword=OMNIBus_Keyword_Search
scala.app.static.dashboard=OMNIBus_Static_Dashboard
scala.datasource=omnibus
scala.url=protocol://host:port
scala.version=1.2.0.3
```

これらのいずれかの値を変更した場合、サーバーを再始動します。「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 管理およびユーザーズ・ガイド」を参照してください。

- デプロイメントのシナリオを選択して計画します。 9 ページの『Netcool/OMNIBus のデプロイメントに関する考慮事項と Operations Analytics - Log Analysis への接続』を参照してください。デプロイメントで IDUC チャネル経由でイベントを転送するために Gateway for Message Bus を使用する場合、ステップ 5 (102 ページ) をスキップできます。イベントを転送するために AEN クライアントを使用する場合、すべてのステップを実行します。
- Operations Analytics - Log Analysis 製品を始動します。
- Gateway for Message Bus の構成について十分に理解します。「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Reference Guide」を参照してください。このタスクのステップ 1、5 (102 ページ)、および 6 (103 ページ) では、ゲートウェイの知識が必要です。

手順

データ・ソース という用語は、構成する製品により意味が異なります。Web GUI の場合、データ・ソースは、常に ObjectServer です。Operations Analytics - Log Analysis 製品の場合、データ・ソースは、生データのソースであり、通常はログ・ファイルです。イベント検索機能のコンテキストの場合、Operations Analytics - Log Analysis のデータ・ソースは、Netcool/OMNIBus のイベントです。

1. Gateway for Message Bus を構成します。上位レベルでは、これには以下が含まれます。
 - Netcool/OMNIBus インターフェース・ファイル内でのゲートウェイ・サーバーの作成
 - G_SCALA.props プロパティ・ファイルの構成 (.map マッピング・ファイルの指定を含む)
 - scalaTransformers.xml ファイル内でのエンドポイントの構成
 - SSL 接続の構成 (必要な場合)
 - scalaTransport.properties ファイル内でのトランスポート・プロパティの構成

ゲートウェイの構成について詳しくは、「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Gateway for Message Bus リファレンス・ガイド」を参照してください。

2. 支払請求可能なデータを取り込んでおり、Netcool Operations Insight データ・ソースに取り込まれたデータを使用統計に含めることが不要である場合、Netcool Operations Insight データ・ソースを支払請求対象外として設定する必要があります。<https://ibm.biz/BdXAbC> で説明されているように、シード・ファイルにデータ・ソースへのパス (デフォルトは NCOMS。以下の手順を参照) を追加して、Operations Analytics - Log Analysis を再始動します。

注: Netcool/OMNIBus イベント用に「omnibus」データ・ソースを構成する前に、この手順を確実に実行してください。

3. Operations Analytics - Log Analysis で、「データ・ソースの追加 (Add Data Source)」ウィザードを開始し、Netcool/OMNIBus イベントの「omnibus」デ

ータ・ソースを構成します。単一のデータ・ソースのみが必要です。Web GUI のイベント管理ツールは、単一のデータ・ソースのみをサポートします。

- a. 「ロケーションの選択 (Select Location)」パネルで「カスタム」を選択し、Netcool/OMNIBus サーバーのホスト名を入力します。Gateway for Message Busの **JsonMsgHostname** トランスポート・プロパティに指定したのと同じホスト名を入力してください。
- b. 「データの選択 (Select Data)」パネルで、以下のフィールド値を入力します。

フィールド	値
ファイル・パス	NCOMS。これは、Gateway for Message Busの jsonMsgPath トランスポート・プロパティのデフォルト値です。この値をデフォルト値から変更した場合は、それに応じて「ファイル・パス」フィールドの値を変更します。
タイプ	OMNIBus1100
コレクション	OMNIBus1100-Collection

- c. 「属性の設定 (Set Attributes)」パネルで、以下のフィールド値を入力します。

フィールド	値
名前	omnibus。入力する値は、Web GUI server.init ファイルの scala.datasource プロパティの値と同じにしてください。「名前」フィールドの値が omnibus でない場合は、 scala.datasource プロパティにもその同じ値を使用します。
グループ	このフィールドは、ブランクのままにします。
説明	選択項目の説明を入力します。

4. 前のステップでセットアップしたデータ・ソースへのアクセスを構成します。これには、以下の Operations Analytics - Log Analysis に対する管理設定の手順が含まれます。
 - a. 「役割」タブを使用して役割を作成し (例えば **noirrole**)、データ・ソースにアクセスするための役割権限を必ず割り当てるようにします。
 - b. ユーザーを追加し (例えば **noiuser**)、データ・ソースにアクセスする権限がある、作成した役割 (この例では、**noirrole**) を割り当てます。

Operations Analytics - Log Analysis でのユーザーおよび役割の作成および変更については、<https://ibm.biz/BdXeYj>を参照してください。

注: Netcool/OMNIBus Insight Pack ダッシュボードの内容は、データ・ソースにアクセスする権限を割り当てられた役割を持つユーザーでログインしていない場合は、空です。

5. 加速イベント通知 (AEN) クライアントを構成します。

- a. Gateway for Message Busで、AEN イベント転送を構成します。
- b. 以下の挿入後トリガーおよびトリガー・グループを有効にして、各 ObjectServer の AEN チャンネルおよびトリガーを構成します。

- scala_triggers
- scala_insert
- scala_reinsert

これらの項目は、ObjectServer のデフォルト構成と、AEN チャンネルを構成する SQL コマンドに組み込まれます。ただし、デフォルトでは無効になります。Operations Analytics - Log Analysis 製品との統合における AEN クライアントの構成について詳しくは、「*IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Gateway for Message Bus Reference Guide*」の『AEN を使用したイベント転送の構成』を検索してください。

6. Gateway for Message Busを SCA-LA モードで始動します。ゲートウェイによる Netcool/OMNIBus イベントの Operations Analytics - Log Analysis への送信が開始されます。
7. Web GUI をイベント検索機能と共にインストールします。詳しくは、「*IBM Tivoli Netcool/OMNIBus インストールとデプロイメント・ガイド*」を参照してください。

タスクの結果

構成が完了したら、Operations Analytics - Log Analysis で Netcool/OMNIBus のイベントを検索できます。Web GUI イベント管理ツールを使用して Operations Analytics - Log Analysis を起動し、イベント・データを表示することもできます。

次のタスク

- Operations Analytics - Log Analysis 製品の暫定修正およびフィックスパックが提供されていれば、それをインストールします。IBM Fix Central (<http://www.ibm.com/support/fixcentral/>) から入手できます。
- 以下の方法でイベント検索をカスタマイズできます。
 - Operations Analytics - Log Analysis の索引の構成を変更する。詳しくは、Netcool/OMNIBus Insight Pack の README ファイルを参照してください。索引の構成を変更した場合は、Gateway for Message Busのマップ・ファイルも変更します。マップ・ファイルを変更したら、ゲートウェイを再始動します。詳しくは、Gateway for Message Busの資料で『マップ定義ファイル』を検索してください。
 - Insight Pack に組み込まれた Operations Analytics - Log Analysis カスタム・アプリケーションをカスタマイズするか、新規アプリケーションを作成する。詳しくは、Netcool/OMNIBus Insight Pack の README ファイルを参照してください。
 - Web GUI イベント・リスト・ツールをカスタマイズする。詳しくは、105 ページの『イベント管理ツールのカスタマイズ』を参照してください。

- Web GUI と Operations Analytics - Log Analysis が同じホスト上にある場合、ブラウザー・セッションの期限切れを防ぐために、シングル・サインオンを構成します。『イベント検索機能のためのシングル・サインオンの構成』を参照してください。

関連タスク:

105 ページの『イベント管理ツールのカスタマイズ』

 トリガーの構成

109 ページの『イベントの検索』

関連資料:

 `unity.sh` コマンド (IBM SmartCloud Analytics - Log Analysis の起動)

関連情報:

 Gateway for Message Bus 資料

イベント検索機能のためのシングル・サインオンの構成

Web GUI と Operations Analytics - Log Analysis の間にシングル・サインオン (SSO) を構成し、毎回ログインせずに、ユーザーが 2 つの製品間を切り替えられるようにします。最初に、専用のユーザーを LDAP ディレクトリーに作成します。このディレクトリーは、ユーザー認証の際に両方の製品で使用する必要があります。次に、SSO 接続を構成します。

手順

1. 専用のユーザーとグループを LDAP ディレクトリーに作成します。例えば、次のようにします。
 - a. NetworkManagement という名前の新規組織単位 (OU) を作成します。
 - b. NetworkManagement OU の下に、webguildap という名前の新規グループを作成します。
 - c. NetworkManagement OU の下に、新規ユーザー `webgui1`、`webgui2`、`webgui3`、および `webgui4` を作成します。
 - d. これらの新規ユーザーを `webguildap` グループに追加します。
2. Web GUI で、ステップ 1 で作成した `webguildap` グループに `ncw_admin` 役割と `ncw_user` 役割を割り当てます。
3. Operations Analytics - Log Analysis 製品から Web GUI をホストしている Dashboard Application Services Hub インスタンスへの SSO 接続を構成します。以下は、Operations Analytics - Log Analysis SSO 構成の重要なステップです。
 - Operations Analytics - Log Analysis の役割をステップ 1 で作成したユーザーとグループに割り当てます。
 - `$SCALAHOME/wlp/usr/servers/Unity/server.xml/server.xml` ファイルで、`<webAppSecurity>` エレメントに `httpOnlyCookies="false"` 属性が設定されていることを確認します。終了エレメント `</server>` の前に、以下の行を追加します。例:


```
<webAppSecurity ssoDomainNames="hostname" httpOnlyCookies="false"/>
</server>
```

ここで `httpOnlyCookies="false"` 属性は、Operations Analytics - Log Analysis によって生成された Cookie の `httponly` フラグを無効にします。これは、Web GUI で SSO を有効にするために必須です。

関連タスク:

-  LDAP ディレクトリに対する Web GUI のユーザー認証の構成
-  Web GUI ユーザーおよびグループへの役割の割り当て
-  Configuring SSO with Operations Analytics - Log Analysis

関連資料:

-  Web GUI の役割

114 ページの『イベント検索のトラブルシューティング』

イベント管理ツールのカスタマイズ

イベント・ビューアーおよび AEL 内のツールは、Netcool/OMNIbus ObjectServer からのフィールドに基づいてイベント・データを検索します。これらのフィールドは、Operations Analytics - Log Analysis 製品をツールから始動するときに呼び出される URL によって指定されています。選択したフィールドを検索するように、ツールに設定された URL をデフォルトのイベント・フィールドから変更することができます。

例えば、「類似イベントの検索」 > 「イベントの 15 分前」ツールでは、AlertGroup、Type、および Severity の各フィールドに基づいてイベントがフィルタリングされます。デフォルトの URL は次のとおりです。

```
$(SERVER)/integrations/scala/Search?queryFields=AlertGroup,Type,Severity
&queryValuesAlertGroup={$selected_rows.AlertGroup}
&queryValuesType={CONVERSION($selected_rows.Type)}
&queryValuesSeverity={CONVERSION($selected_rows.Severity)}
&firstOccurrences={$selected_rows.FirstOccurrence}
&timePeriod=15
&timePeriodUnits=minutes
```

このタスクについて

URL は、以下の方法で変更できます。

- `scalaIntegration.xml` 構成ファイルを変更し、Web GUI 管理 API (WAAP) クライアントに組み込まれている Web GUI `runwaapi` コマンドでこの変更を適用します。
- Web GUI の「管理」コンソール・ページでツール構成を変更します。

手順

例として、「類似イベントの検索」 > 「イベントの 15 分前」ツールの URL を変更して、AlertKey イベント・フィールドおよび Location イベント・フィールドで検索するように設定する方法を、それぞれの方式ごとに以下の手順で示します。

- `scalaIntegration.xml` 構成ファイル内の URL を変更するには、以下のステップを実行します。

1. `WEBGUI_HOME/extensions/LogAnalytics/scalaIntegration.xml` ファイル (別のファイルを使用している場合は対応する XML ファイル) で、以下の `<tool>` エLEMENT を見つけます。

```
<tool:tool name="scalaSearchByEvent15Minutes">
```
 2. このELEMENTの URL を以下のように変更します。変更点は、太字テキストで示しています。

```
<tool:cgiurl foreach="true" windowforeach="false" target="_blank" method="GET"
  url="$(SERVER)/integrations/scala/Search?queryFields=AlertKey,Location
  &queryValuesAlertKey={$selected_rows.AlertKey}
  &queryValuesLocation={$selected_rows.Location}
  &firstOccurrences={$selected_rows.FirstOccurrence}
  &timePeriod=15
  &timePeriodUnits=minutes">
```
 3. **runwaapi** コマンドを使用して、ツールを再インストールします。

```
runwaapi -file scalaIntegration.xml
```
 4. 以下のツール・メニューをイベント・ビューアーまたは AEL の「アラート」メニュー項目に再インストールします。
 - `scalaStaticDashboard`
 - `scalaSimilarEvents`
 - `scalaEventByNode`
 - `scalaKeywordSearch`
- 「管理」ページで URL を変更するには、以下のステップを実行します。
 1. Web GUI で、「管理」 > 「イベント管理ツール」 > 「ツール作成」をクリックします。次に、「ツール作成」ページで、`scalaSearchByEvent15Minutes` ツールを探します。
 2. URL を以下のように変更します。変更点は、太字テキストで示しています。

```
$(SERVER)/integrations/scala/Search?queryFields=AlertKey,Location
&queryValuesAlertKey={$selected_rows.AlertKey}
&queryValuesLocation={$selected_rows.Location}
&firstOccurrences={$selected_rows.FirstOccurrence}
&timePeriod=15
&timePeriodUnits=minutes
```
 3. ツールの URL に対する変更がロードされるように、イベント・ビューアーまたは AEL を最新表示します。

次のタスク

- Gateway for Message Busは、ルックアップ・テーブルを使用して、Severity、Type、および Class の各イベント・フィールドの整数値をストリングに変換します。ツールの変更または作成を行ったら、CONVERSION 関数を使用して、これらのフィールド値を Operations Analytics - Log Analysis で要求されるストリングに変更します。
- メニュー内の他のツールを変更し、これらのツールが同じフィールドを検索するようにします。各ツールを UI で変更するよりも、構成ファイルを変更してから **runwaapi** コマンドを使用した方が効率的です。以下の表は、「ツール作成」ページと「メニュー構成」ページに表示されるイベント管理のメニュー項目とツールの名前をリストしています。

表 17. Web GUI のメニューとツールの名前

メニュー項目	メニュー項目名	ツール	ツール名
ノードごとのイベントの検索	scalaEventByNode	イベントの 15 分前	scalaSearchByNode15Minutes
		イベントの 1 時間前	scalaSearchByNode1Hour
		イベントの 1 日前	scalaSearchByNode1Day
		イベントの 1 週間前	scalaSearchByNode1Week
		イベントの 1 カ月前	scalaSearchByNode1Month
		イベントの 1 年前	scalaSearchByNode1Year
		カスタム ...	scalaSearchByNodeCustom
類似イベントの検索	scalaSimilarEvents	イベントの 15 分前	scalaSearchByEvent15Minutes
		イベントの 1 時間前	scalaSearchByEvent1Hour
		イベントの 1 日前	scalaSearchByEvent1Day
		イベントの 1 週間前	scalaSearchByEvent1Week
		イベントの 1 カ月前	scalaSearchByEvent1Month
		イベントの 1 年前	scalaSearchByEvent1Year
		カスタム ...	scalaSearchByEventCustom
ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示	scalaStaticDashboard	イベントの 15 分前	scalaEventDistributionByNode15Minutes
		イベントの 1 時間前	scalaEventDistributionByNode1Hour
		イベントの 1 日前	scalaEventDistributionByNode1Day
		イベントの 1 週間前	scalaEventDistributionByNode1Week
		イベントの 1 カ月前	scalaEventDistributionByNode1Month
		イベントの 1 年前	scalaEventDistributionByNode1Year
		カスタム ...	scalaEventDistributionByNodeCustom
キーワードおよびイベント・カウントの表示	scalaKeywordSearch	イベントの 15 分前	scalaSetSearchFilter15Minutes
		イベントの 1 時間前	scalaSetSearchFilter1Hour
		イベントの 1 日前	scalaSetSearchFilter1Day
		イベントの 1 週間前	scalaSetSearchFilter1Week
		イベントの 1 カ月前	scalaSetSearchFilter1Month
		イベントの 1 年前	scalaSetSearchFilter1Year
		カスタム ...	scalaSetSearchFilterCustom

- 「ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示」ツールと「キーワードおよびイベント・カウントの表示」ツールは、Operations Analytics - Log Analysis で、OMNIBus Static Dashboard および OMNIBus Keyword Search カスタム・アプリケーションを始動します。アプリケーションのカスタマイズについて詳しくは、<ftp://public.dhe.ibm.com/software/tivoli/Netcool/NetcoolOperationsInsight/library/opsinsight130/> にある Insight Pack の資料を参照してください

関連タスク:

109 ページの『イベントの検索』

「テーブル・ビュー」ツールバーへのカスタム・アプリケーションの追加

カスタム・アプリケーションを迅速に起動するには、Operations Analytics - Log Analysis UI の「テーブル・ビュー」ツールバーにカスタム・アプリケーションを追加します。このツールバーには、OMNIBus_Keyword_Search.app アプリケーションと OMNIBus_Static_Dashboard.app アプリケーションを追加することをお勧めします。

手順

- OMNIBus_Keyword_Search.app アプリケーションを追加するには、以下の例のような構成を使用します。

```
{
  "url": "https://hostname:9987/Unity/CustomAppsUI?
name=OMNIBus_Keyword_Search&appParameters=[]",
  "icon": "https://hostname:9987/Unity/images/keyword-search.png",
  "tooltip": "OMNIBus Keyword Search"
}
```

ここで *hostname* は、Operations Analytics - Log Analysis ホストの完全修飾ドメイン名です。*keyword-search* は、ツールバー上でアプリケーションを表す .png ファイルのファイル名です。 .png ファイルは、独自に作成してください。

- OMNIBus_Static_Dashboard.app アプリケーションを追加するには、以下の例のような構成を使用します。

```
{
  "url": "https://hostname:9987/Unity/CustomAppsUI?
name=OMNIBus_Static_Dashboard&appParameters=[]",
  "icon": "https://hostname:9987/Unity/images/dashboard.png",
  "tooltip": "OMNIBus Static Dashboard"
}
```

ここで *hostname* は、Operations Analytics - Log Analysis ホストの完全修飾ドメイン名です。*dashboard* は、ツールバー上でアプリケーションを表す .png ファイルのファイル名です。 .png ファイルは、独自に作成してください。

関連情報:

 「テーブル・ビュー」ツールバーへのカスタム・アプリケーションのショートカットの追加

イベントの検索

イベント検索ツールでは、環境で大量のイベントを生成している問題の根本原因を見つけることができます。このツールでは、例えばイベント・ストームを引き起こしている根本原因イベントを特定できるパターンをイベント・データ内で検出できます。これにより、問題の原因となっているイベントを手動で探す手間を省くことができます。最も重要なイベントと問題を、迅速かつ正確に特定できます。

このツールは Web GUI イベント・リスト (AEL およびイベント・ビューアー) に組み込まれています。デフォルトの基準に基づき、特定の時間枠でフィルター処理されたイベント・データに対して検索が実行されます。大量のイベントを検索することができます。検索基準の変更や別の時間フィルターの指定も可能です。ツールを実行すると Operations Analytics - Log Analysis 製品が開始され、そこで検索結果が表示されます。

始める前に

- イベント検索用に環境をセットアップします。 100 ページの『イベント検索の構成』を参照してください。
- Operations Analytics - Log Analysis の検索ワークスペースについて理解しておきます。http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY_1.3.2/com.ibm.scala.doc/use/iwa_using_ovw.htmlを参照してください。
- イベント検索用に索引が付けられるイベント・フィールドを把握するために、ObjectServer の alerts.status テーブルについて理解しておきます。http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/omnibus/wip/common/reference/omn_ref_tab_alertsstatus.htmlを参照してください。

手順

- イベント検索ツールの使用を開始するために、イベント・リストで 1 つ以上のイベントを選択して右クリックします。右クリック・メニューで「イベント検索」をクリックし、ツールをクリックし、時間フィルターをクリックします。使用するツールは以下のとおりです。

ツール	説明
ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示	同じホスト名、サービス名、または IP アドレス (ObjectServer alerts.status テーブルの Node フィールドと同等です) から発生する、すべてのイベントを検索します。
類似イベントの検索	選択したイベントと同じ障害タイプ、タイプ、および重大度のすべてのイベントを検索します。障害タイプは、alerts.status テーブルの AlertGroup フィールドと同等です。タイプは Type フィールドと等価です。重大度は Severity フィールドと等価です。

ツール	説明
ノードごとのイベントの検索	同じソース、つまり同じホスト名、サービス名、または IP アドレスから発生する、すべてのイベントを検索します。このホスト名、サービス名、または IP アドレスは、alerts.status テーブルの Node フィールドと同等です。結果は Operations Analytics - Log Analysis GUI のリストに表示されます。
キーワードおよびイベント・カウントの表示	イベント要約のテキスト、イベント・ソース、および障害タイプからキーワードのリストを抽出します。イベント要約のテキストは、alerts.status テーブルの Summary フィールドと等価です。イベント・ソースは Node フィールドと等価です。障害タイプは AlertGroup フィールドと等価です。

時間フィルターは、選択した 1 つ以上のイベントのタイム・スタンプから計算されます。Operations Analytics - Log Analysis のタイム・スタンプは、ObjectServer alerts.status テーブルの FirstOccurrence フィールドと等価です。デフォルトの時間フィルターは以下のとおりです。「カスタム」をクリックした場合は、整数と時間の単位 (15 週間など) を指定してください。

- イベントの **15** 分前
- イベントの **1** 時間前
- イベントの **1** 日前
- イベントの **1** 週間前
- イベントの **1** カ月前
- イベントの **1** 年前
- カスタム ...

タイム・スタンプが 8 January 2014 08:15:26 AM である単一のイベントが選択された場合に、「ノードごとのイベントの検索」 > 「イベントの 1 時間前」をクリックすると、結果が「8 January 2014 07:15:26 AM」から「8 January 2014 08:15:26 AM」の時間範囲でフィルター処理されます。

複数のイベントが選択された場合は、最も早いタイム・スタンプから最新のタイム・スタンプの間で時間フィルターが適用されます。タイム・スタンプがそれぞれ 1 January 2014 8:28:46 AM、7 January 2014 8:23:20 AM、8 January 2014 8:15:26 AM である 3 つのイベントに対して、「ノードごとのイベントの検索」 > 「イベントの 1 週間前」をクリックすると、「25 December 2013 08:28:46 AM」から「08 January 2014 08:15:26 AM」の時間範囲内の一致するイベントが返されます。

制約事項: Web GUI と Operations Analytics - Log Analysis では、タイム・スタンプの処理が異なります。Web GUI は、時間、分、秒を認識しますが、Operations Analytics - Log Analysis は秒を無視します。この問題は、「ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示」と「ノードごとのイベントの検索」に影響します。タイム・スタンプ 8 January 2014 07:15:26 AM が渡されると、Operations Analytics - Log Analysis はこのタイム・スタンプを 8 January

2014 07:15 AM と解釈します。このため、後続の検索の結果が最初に実行された検索と異なることがあります。

結果の表示方法はツールによって異なります。時間フィルターが結果の表示方法に影響することはありません。

ツール	検索結果の表示方法
ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示	OMNibus Static Dashboard カスタム・アプリケーション用にダッシュボードが開き、一致するイベントの分布に関する以下の情報が表示されます。 • 重大度別イベント・トレンド • アラート・グループ別イベント・ストーム • ノード別イベント・ストーム • ノードおよびアラート・グループ別ホット・スポット • 重大度の分布 • 上位 5 個のアラート・グループの分布 • 上位 5 個のノードの分布 • アラート・グループおよび重大度別ホット・スポット OMNibus Static Dashboard カスタム・アプリケーションについて詳しくは、Tivoli Netcool/OMNibus Insight Pack の README ファイルを参照してください。
類似イベントの検索 および ノードごとのイベントの検索	結果は検索タイムラインに表示され、指定した時間枠での一致するイベントの分布が示されます。タイムラインの下には、結果のリストが表示されます。「テーブル・ビュー」または「リスト・ビュー」をクリックすると、結果の表示形式が変更されます。結果のページを前後に移動するには、「>」または「<」をクリックします。検索結果に複数回出現するキーワードは、括弧 () で囲まれた出現回数とともに、ナビゲーション・ペインの「共通パターン (Common Patterns)」領域に表示されます。
キーワードおよびイベント・カウントの表示	キーワードは、Operations Analytics - Log Analysis GUI の「構成されたパターン (Configured Patterns)」領域に表示されます。時間枠での各キーワードの出現回数がカウントされ、キーワードの横に括弧 () 付きで表示されます。

- 結果が表示された後に、検索ワークスペース内の結果に対してさらに検索を実行して結果を絞り込むことができます。例えば、「構成されたパターン (Configured Patterns)」リストからキーワードをクリックして「検索」フィールドに追加することができます。

重要: 2 つの製品で秒の処理が異なるため、「キーワードおよびイベント・カウントの表示」ツールで得られたキーワード・カウントに対してさらに検索を実行すると、「構成されたパターン (Configured Patterns)」でキーワードに対して返されたカウントと、検索ワークスペースで実行した検索でのカウントが異なる場合があります。

「検索」フィールドの上には、検索の進行状況を示す一連のパンくずリストが表示されます。パンくずリスト項目のいずれかをクリックすると、その検索の結果が返されます。

例

「キーワードおよびイベント・カウントの表示」ツールでは、ご使用の環境で問題のあるイベントが発生する前に何が起きたのかを調べることができます。イベント・ストームで大量の重大イベントが生成されているとします。想定されるワークフローは以下のとおりです。

- いくつかの重大イベントを選択し、「イベント検索」 > 「キーワードおよびイベント・カウントの表示」 > 「イベントの 1 時間前」をクリックすると、過去 1 時間に発生した重大イベント間の類似性を特定できます。
- イベントの最新のタイム・スタンプ (FirstOccurrence) は、1 January 2014 8:28:00 AM です。Operations Analytics - Log Analysis GUI には、検索結果として Summary、Node、AlertGroup の各フィールドから得たすべてのキーワードとその出現回数が表示されます。
- スtring「swt0001」(環境内のスイッチのホスト名) の出現回数が多いことがわかりました。「swt0001」をクリックし、さらに検索を実行して、結果の数を「swt0001」を含むイベントのみに絞り込みます。
- 数を絞り込んだこの結果リストから、スイッチの構成が誤っていることを示す 1 つのイベントがすぐに見つかり、この問題が環境の下流で問題を引き起こしていることがわかりました。そこで、Web GUI のイベント・リストに戻り、この単一のイベントに対してアクションを実行します。

次のタスク

検索で特定されたイベントに対し、ご使用の環境に適したアクションを実行します。イベント・ビューアーの場合は http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/webtop/wip/task/web_use_jsel_manageevents.html? を、AEL の場合は http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/webtop/wip/task/web_use_ael_managingevents.html? を参照してください。

関連タスク:

100 ページの『イベント検索の構成』

105 ページの『イベント管理ツールのカスタマイズ』

関連資料:

114 ページの『イベント検索のトラブルシューティング』

関連情報:



Using Operations Analytics - Log Analysis to search data

イベント検索ワークフロー (オペレーター向け)

イベント検索ツールがイベント・リストからの選別と診断にどのように役立つかをオペレーターに示す一般的なワークフロー。

イベント・ストームが発生したが、その原因がわからないという状況を考えてみましょう。過去 1 時間の間に、重大イベントが大量に生成されました。これらの重大イベントに対してイベント検索ツールを実行します。

1. イベント・ストームが始まってから起こったことを大まかに把握するために、重大イベントを選択します。次に、選択した重大イベントを右クリックして、「イベント検索」 > 「ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示」 > 「イベントの 1 時間前」を選択します。表示されるグラフには、重大イベントの内訳が、ノード、アラート・グループ、重大度などごとに示されます。
2. グラフ内で特に目立っているノードがあるかどうかを確認します。ある場合は、Operations Analytics - Log Analysis GUI を閉じて、イベント・リストに戻り、そのノードから発生しているイベントを探します。例えば、イベント・ビューアーのツールバーにあるテキスト・ボックスに、以下の例のようなフィルターを入力します。このフィルターは、*mynode* ノードからの重大イベントをフィルタリングします。

```
SELECT * from alerts.status where Node = mynode; and Severity = 5;
```

イベント・リストが最新表示され、一致するイベントだけが表示されたら、イベントを選択して右クリックし、「イベント検索」 > 「ノードごとのイベントの検索」 > 「イベントの 1 時間前」をクリックします。

3. 検索結果で、そのノードからのイベントで特に目立ったものがあるかどうかを確認します。ある場合は、Operations Analytics - Log Analysis GUI を閉じて、イベント・リストに戻り、要約やシリアル番号でフィルタリングするなどして、そのイベントを特定します。

```
SELECT * from alerts.status where Node = mynode; and Summary like "Link Down ( FastEthernet0/13 )";
```

```
SELECT * from alerts.status where Node = mynode; and Serial = 4586967;
```

そのイベントに対処します。

4. イベント・ストームの原因を特定する特徴が何もない場合は、Operations Analytics - Log Analysis GUI を閉じてイベント・リストに戻ります。すべての重大イベントを再度選択して、「イベント検索」「キーワードおよびイベント・カウントの表示」「イベントの 1 時間前」をクリックします。
5. 結果で、ナビゲーション・ペインの「共通パターン (Common Patterns)」領域を調べます。汎用的ではないがよく出現するキーワード (ホスト名、IP アドレスなど) を探します。
6. 関連キーワードをクリックして、「検索」フィールドにそのキーワードをコピーし、検索を実行します。これで、検索結果が絞り込まれます。そのキーワードが出現するすべてのイベントが表示され、「共通パターン (Common Patterns)」領域が更新されます。

7. イベント・ストームの原因として目立っているイベントがある場合は、Operations Analytics - Log Analysis GUI を閉じてイベント・リストに戻り、そのイベントに対処します。そのようなイベントがない場合は、根本原因である可能性のあるイベントが明確になるまで、キーワードの検索による検索結果の絞り込みを続けます。

イベント・ビューアーから実行可能なアクションについては、
http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/webtop/wip/task/web_use_jsel_manageevents.htmlを参照してください。アクティブ・イベント・リストから実行可能なアクションについては、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/webtop/wip/task/web_use_ael_managingevents.htmlを参照してください。ご使用の環境に実装されているツールによっては、上記以外のアクションも実行可能です。

関連情報:

 イベント検索の例 (IBM DeveloperWorks)

 Using Operations Analytics - Log Analysis to search data

イベント検索のトラブルシューティング

イベント検索の構成に関する問題の解決方法。

- 『インターフェースを切り替えるたびにログインが必要になる』
- 115 ページの『Operations Analytics - Log Analysis セッションが 2 時間後にタイムアウトになる』
- 116 ページの『 英語以外のロケールが設定された Firefox で、Operations Analytics - Log Analysis を起動できない』
- 116 ページの『イベント・リストでのツールの右クリックで Operations Analytics - Log Analysis を始動できない』
- 117 ページの『動的ダッシュボードを実行すると、エラー・メッセージが表示される』
- 117 ページの『イベント・リストの「ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示」ツールを使用すると、エラー・メッセージが表示される』
- 117 ページの『「類似イベントの検索」ツールを実行しても検索結果が見つからない』
- 118 ページの『Operations Analytics - Log Analysis のグラフ表示が警告なしで変化する』 118 ページの『キーワード検索で返される結果が 0 件である』

インターフェースを切り替えるたびにログインが必要になる

この問題は、シングル・サインオン (SSO) が構成されていない場合に発生します。Web GUI と Operations Analytics - Log Analysis が同じホスト・コンピュータ上にある場合は、ブラウザでインターフェースを切り替えるたびに、ログインする必要があります。

この問題は、WebSphere Application Server の各インスタンスで使用される LTPA トークン Cookie のデフォルト名 (LtpaToken2) が同じであることが原因で発生しま

す。インターフェースを切り替えると、ある WebSphere Application Server インスタンスが別の WebSphere Application Server インスタンスの Cookie を上書きし、最初のセッションが終了します。

この問題を解決する方法を以下に示します。

- Web GUI SSO 構成内のドメイン名をカスタマイズします。
 1. Web GUI をホストしている WebSphere Application Server の管理コンソールで、「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」をクリックします。次に、「認証」 > 「Web セキュリティ」をクリックしてから、「シングル・サインオン (SSO)」をクリックします。
 2. 組織の該当するドメイン・ネームを入力します (例: ibm.com)。デフォルトでは、ドメイン・ネーム・フィールドは空で、Cookie のドメインはホスト名です。また、Operations Analytics - Log Analysis の WebSphere Application Server でドメイン名をカスタマイズする場合も、競合を回避するために、必ず 2 つのドメイン・ネームを別のものにしてください。
 3. Dashboard Application Services Hub サーバーを再始動します。
- WebSphere Application Server のあるインスタンスへのアクセスには完全修飾ドメイン名を使用し、別のインスタンスへのアクセスには IP アドレスを使用します。例えば、Web GUI へのアクセスには常に完全修飾ドメイン・ネームを使用し、Operations Analytics - Log Analysis へのアクセスには常に IP アドレスを使用します。Operations Analytics - Log Analysis に IP アドレスでアクセスするように Web GUI を構成するには、以下のステップを実行します。
 1. `$WEBGUI_HOME/etc/server.init` ファイルで `scala.url` プロパティの値をホストの IP アドレスに変更します。例:
`https://3.127.46.125:9987/Unity`
 2. Dashboard Application Services Hub サーバーを再始動します。
`http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/webtop/wip/task/web_adm_server_restart.html`を参照してください。

Operations Analytics - Log Analysis セッションが 2 時間後にタイムアウトになる

この問題は、SSO が構成されていない場合に発生します。Web GUI のイベント・リストから Operations Analytics - Log Analysis 製品を最初に始動するときには、Operations Analytics - Log Analysis にログインするようプロンプトが出されます。2 時間が経過すると自動的にログアウトするため、2 時間ごとにログイン資格情報を再入力する必要があります。この問題は、LTPA トークンのデフォルトの有効期限が 2 時間であることが原因で発生します。

この問題を解決するには、Operations Analytics - Log Analysis 製品でのセッション・タイムアウトを以下のように変更します。

1. `$SCALA_HOME/wlp/usr/servers/Unity/server.xml` ファイルで `<ltpa expiration="120m"/>` 属性の値 (分) を必要な値まで大きくします。例えば、セッション・タイムアウトを 540 分に変更するには、次のように指定します。

```

</oauthProvider>
  <ltpa expiration="540"/>
  <webAppSecurity ssoDomainNames="hostname" httpOnlyCookies="false"/>
</server>

```

2. Operations Analytics - Log Analysis WebSphere Liberty Profile を再始動します。

英語以外のロケールが設定された **Firefox** で、**Operations Analytics - Log Analysis** を起動できない

この問題は既知の問題であり、アクティブ・イベント・リスト (AEL) から Firefox ブラウザー内で起動するときに発生します。

ブラウザーが米国英語 (en_us) または英語 (en) 以外の言語に設定されている場合は、Web GUI AEL から Operations Analytics - Log Analysis を起動できない場合があります。

この問題は、Firefox がサポートしている言語の一部を、Operations Analytics - Log Analysis がサポートしていないことが原因で発生します。

この問題を回避するには、ご使用のブラウザーの言語を代替の言語バージョンに設定してみてください。例えば、ブラウザーの言語がフランス語 [fr] であるときに問題が発生する場合は、言語をフランス語 [fr-fr] に設定します。ブラウザーの言語がドイツ語 [de-de] であるときに問題が発生する場合は、言語をドイツ語 [de] に設定します。

イベント・リストでのツールの右クリックで **Operations Analytics - Log Analysis** を始動できない

イベント・リストの右クリック・メニューからツールを始動すると、以下のエラーが表示されます。

CTGA0026E: 照会内の APP 名に誤りがあるか、またはこの APP がありません
(CTGA0026E: The APP name in the query is invalid or it does not exist)

このエラーは、\$WEBGUI_HOME/etc/server.init ファイルに定義されたカスタム・アプリケーションが Tivoli Netcool/OMNIBus Insight Pack 内のファイル名に一致していないために発生します。

この問題を解決するには、server.init ファイルで、**scala.app.keyword** プロパティーと **scala.app.static.dashboard** プロパティーを適宜設定します。

- これらのプロパティーが以下のように設定されている場合、Insight Pack のバージョンは V1.1.0.2 でなければなりません。

```

scala.app.keyword=OMNIBus_Keyword_Search
scala.app.static.dashboard=OMNIBus_Static_Dashboard

```

- これらのプロパティーが以下のように設定されている場合、Insight Pack のバージョンは V1.1.0.1 または V1.1.0.0 でなければなりません。

```

scala.app.keyword= OMNIBus_SetSearchFilter
scala.app.static.dashbaord=OMNIBus_Event_Distribution

```

これらのプロパティーの値を変更する必要がある場合は、その後で Dashboard Application Services Hub サーバーを再始動します。http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/

webtop/wip/task/web_adm_server_restart.htmlを参照してください。

動的ダッシュボードを実行すると、エラー・メッセージが表示される

Operations Analytics - Log Analysis 製品から動的ダッシュボードを実行すると、以下のエラーが表示されます。

未定義 - 結果データ内に見つかりません (undefined not found in results data)

このエラーは、Operations Analytics - Log Analysis 製品の既知の問題です。解決するには、動的ダッシュボードをいったん閉じてから再び開いてください。

イベント・リストの「ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示」ツールを使用すると、エラー・メッセージが表示される

イベント・リストから「ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示」ツールを始動すると、エラー・メッセージが表示されます。

このエラーは、Insight Pack のバージョンと Operations Analytics - Log Analysis 製品のバージョンとの間に互換性がないことが原因で発生します。例えば、Operations Analytics - Log Analysis が V1.2.0.3 で、Insight Pack が V1.1.0.1 の場合は、エラーが表示されます。

必ず、バージョン間の互換性を保つようにしてください。99 ページの『必要な製品およびコンポーネント』を参照してください。インストール済みの Insight Pack のバージョンの確認について詳しくは、Insight Pack のバージョンの検査を参照してください。

「類似イベントの検索」ツールを実行しても検索結果が見つからない

「類似イベントの検索」ツールを実行しても結果が返されません。「検索に一致する結果が見つかりません (No results found matching the search)」というメッセージが表示されます。

このエラーは、Operations Analytics - Log Analysis 製品の V1.2.0.3 と統合するように Web GUI が構成されていないことが原因で発生します。このツールで生成される検索照会、Operations Analytics - Log Analysis の V1.2.0.3 との互換性がありません。

この問題を解決するには、以下のステップを実行します。

1. Operations Analytics - Log Analysis のバージョンが V1.2.0.3 であることを確認します。
2. ファイル内の **scala.version** プロパティを以下のように設定します。
`scala.version = 1.2.0.3`
3. Dashboard Application Services Hub サーバーを再始動します。
http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/webtop/wip/task/web_adm_server_restart.htmlを参照してください。

Operations Analytics - Log Analysis のグラフ表示が警告なしで変化する

Operations Analytics - Log Analysis GUI でのグラフ表示のシーケンスが偶発的に変化することがあります。この問題は、Operations Analytics - Log Analysis 製品の既知の問題であり、回避策や解決策はありません。

キーワード検索で返される結果が 0 件である

この問題は、Operations Analytics - Log Analysis V1.2.0.3 でのみ発生します。キーワード検索で返される結果が 0 件です。Operations Analytics - Log Analysis 製品の V1.2.0.3 では、非同期検索が使用されます。そのため、データの取り出しが行われている間は、検索結果が 0 件として表示されます。データがロードされるのを数秒待ってから、再び結果を確認してください。

関連タスク:

104 ページの『イベント検索機能のためのシングル・サインオンの構成』

109 ページの『イベントの検索』

 Dashboard Application Services サーバーの再始動

 WebSphere Application Server Liberty: コマンド・プロンプトからのサーバーの始動と停止

Event Analytics

Event Analytics を使用すると、イベントのモニターおよび管理を行いながら季節トレンドや関連イベントを分析することができます。

Event Analytics の概要

Event Analytics を使用すると、モニター対象環境におけるイベントの季節性パターンと関連イベントを特定できます。

季節性イベント

Event Analytics は、IBM Tivoli Netcool/OMNIbus の履歴上のイベント・データの統計分析を使用して、イベントの季節性 (イベントがいつ発生するか、どのような頻度で発生するか) を判別します。この分析結果は、レポートとグラフの両方に出力されます。

イベントの季節性レポートに提示されるデータは、インフラストラクチャー内のイベントの季節性パターンを特定するのに役立ちます。例えば、予定外の特定の時刻に定期的に発生するイベントが強調表示されます。季節性イベント・ルールは、「季節性イベント・ルール」ポートレットで、状態別にグループ化されます。以下を行うことができます。

- 季節性イベントの表示 UI を使用して、季節性イベントおよび関連付けられている関連イベントを分析する。
- 検証された季節性イベント・ルールを、新規コードの書き込みなしでデプロイする。このようにして生成されたルールには、さまざまなアクションが適用されています。

関連イベント

Event Analytics では、Tivoli Netcool/OMNIbus の履歴上のイベント・データの統計分析を使用して、どのイベントが統計的に同時に発生する傾向にあるかを判別します。Event Analytics は、スケジュールに基づいて、この統計分析の結果をイベント・グループとして出力します。以下を行うことができます。

- 関連イベント UI を使用して、これらのイベント・グループを分析する。
- 検証されたイベント・グループを、シングルクリックで Netcool/Impact 相関ルールとしてデプロイする。コードを記述する必要はありません。このようにして生成された相関ルールは、リアルタイム・イベント・データに対して適用され、イベント・グループ内のイベントの単一の合成イベントを表示します。
- グループ内のすべてのイベントをこの合成イベントの子として表示する。このビューにより、イベント・ビューアーで運用担当者に表示されるイベントの数が削減されます。
- 「関連イベント」ポートレットを使用して、グループ内のパターンを分析し、グループ間の共通イベント・タイプに基づいて相関ルールをデプロイする。

グループ内で最も対応可能なイベントが、相関ルールにより設定される親イベントとして使用されます。デフォルトでは、グループ内で最もチケット発行回数が多い、または確認回数が多いイベントが、最も対応可能なイベントになります。相関ルールをデプロイする前に、この親イベントの設定を変更できます。合成イベントは、親イベントの一部のプロパティを使用して作成され、すべての関連イベントが、この合成グループの下にグループ化されます。

イベント・グループは、関連イベント構成のスケジュールされた実行により生成されます。デフォルトの関連イベント構成が提供されています。独自の構成を作成して、分析対象の履歴データを指定できます。例えば、カスタムの時刻範囲、イベント・フィルター、スケジュールを指定できます。関連イベントについて詳しくは、190 ページの『関連イベント』を参照してください。

関連イベント分析によってディスカバーされた関連イベント・グループに基づいて、パターンを作成できます。パターンは関連イベント・グループと似ていますが、関連イベント・グループと異なり、リソースに固有ではありません。グループ内のイベントを相関ルールで設定される親イベントとして使用したり、合成イベントを親として作成したりすることができます。作成前にパターンのパフォーマンスのテストを行って、パターンについて、返される関連イベント・グループやイベントの数を確認することもできます。

Event Analytics のインストールおよびアンインストール

Event Analytics をインストールまたはアンインストールする前に、以下のトピックを参照してください。

前提条件

Event Analytics をインストールする前に、以下に示すインストール前のタスクを実行する必要があります。

イベントのアーカイブ

アーカイブ済みイベントが格納されたデータベースが実行されている必要があります。Event Analytics では DB2 と Oracle データベースがサポートされています。Event Analytics で MS SQL をサポートするには、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.1 以上が必要です。

イベントをデータベースにアーカイブするには、ゲートウェイを使用します。レポート・モードでは、ゲートウェイはイベントをターゲット・データベースにアーカイブします。詳しくは、http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSHTQ/omnibus/gateways/jdbcgw/wip/concept/jdbcgw_intro.htmlを参照してください。

注: ゲートウェイは、監査モードおよびレポート・モードの 2 つのモードで動作可能です。Event Analytics でサポートされているのはレポート・モードのみです。

ブラウザー要件

季節性イベント・グラフを Microsoft Internet Explorer で表示するには、Microsoft Silverlight プラグインをインストールする必要があります。

メモリーの削減

Event Analytics を Solaris で実行しているのではない場合は、`jvm.options` ファイルからコメントを削除するか、そのファイルに以下のエントリーを追加します。

```
#-Xgc:classUnloadingKickoffThreshold=100
```

コメントを削除するか、そのエントリーを追加することにより、メモリー所要量が動的に削減されます。

Event Analytics のインストール

Event Analytics をインストールするには、IBM Installation Manager の GUI またはコンソールを使用するか、サイレント・インストールを実行します。Event Analytics は IBM Installation Manager 1.7.2 から 1.8.4 までをサポートします。

IBM Installation Manager のインストールおよび使用について詳しくは、以下の IBM Knowledge Center を参照してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSDV2W/im_family_welcome.html

Event Analytics のインストール (GUI)

IBM Installation Manager GUI を使用して Event Analytics をインストールすることができます。

始める前に

- 必要な Installation Manager ユーザー・モードはどれかを決定します。
- 予定のインストール先ディレクトリーに必要なユーザー許可が設定されていることを確認します。
- Event Analytics パッケージのインストール先となるコンピューターで `localhost` を構成します。

このタスクについて

Event Analytics をインストールするには、以下の製品グループの製品パッケージをインストールする必要があります。

- IBM Tivoli Netcool/Impact
- IBM Tivoli Netcool/OMNIbus
- IBM Netcool.

Installation Manager を開始するためのステップは、どのユーザー・モードでそれをインストールしたかによって異なります。Installation Manager ウィザードを使用して Event Analytics のインストールを完了するためのステップは、すべてのユーザー・モードおよびオペレーティング・システムに共通です。

Installation Manager は、インストールしたファイルおよびディレクトリーの許可モードを設定するときに、現在の `umask` 設定を考慮に入れます。管理者モードまたは非管理者モードを使用する際に、`umask` が 0 である場合、Installation Manager は `umask` として 22 を使用します。グループ・モードを使用する場合、

Installation Manager は設定されているすべてのグループ・ビットを無視し、結果として値が 0 の場合は `umask` として 2 を使用します。

このパッケージと機能をインストールするには、以下の手順を実行します。

手順

1. Installation Manager を開始します。Installation Manager のインストール・ディレクトリーの `/eclipse` サブディレクトリーに移動し、以下のコマンドを使用して Installation Manager を開始します。

```
./IBMIM
```

他のコンピューターでのサイレント・インストールで使用するために、インストール・ステップを応答ファイルに記録するには、`-record response_file` オプションを使用します。例:

```
./IBMIM -record /tmp/install_1.xml
```

2. ダウンロード・パッケージが存在するローカル・リポジトリまたは IBM Passport Advantage リポジトリのいずれかを指すように Installation Manager を構成します。詳しくは、Installation Manager に関する IBM Knowledge Center のコンテンツで、トピック『*Installing packages by using wizard mode*』を参照してください。
3. Installation Manager のメインウィンドウで「インストール」をクリックし、インストール・ウィザードの指示に従ってインストールを実行します。
4. 「インストール」タブで以下のインストール・パッケージを選択し、「次へ」をクリックします。
 - IBM Tivoli Netcool/Impact のパッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.5
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.5
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for Netcool Operations Insight_7.1.0.5
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for Netcool Operations Insight_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus のパッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
 - IBM Netcool のパッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.5
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6
 - Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.1.
 - Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2.

5. 「ライセンス」タブで、ライセンスの内容を確認します。ライセンスの内容に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 「ロケーション」タブで、「インストール・ディレクトリー」と「アーキテクチャー」の情報を入力するか、デフォルト値のままにし、「次へ」をクリックします。
 - IBM Netcool の場合、デフォルト値は /opt/IBM/netcool と 64-bit です。
 - IBM Netcool Impact の場合、デフォルト値は /opt/IBM/tivoli/impact と 64-bit です。
7. 「機能」タブで以下の機能を選択して「次へ」をクリックします。他の機能は自動的に選択されます。

表 18. 使用可能な機能

機能	説明
「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.5」 > 「基本フィーチャーのインストール」	Event Analytics をインストールして実行します。
「Netcool Operations Insight Extensions Web GUI 1.4.0.1」 > 「Event Analytics のインストール」	Event Analytics コンポーネントが含まれています。

表 19. 使用可能な機能

機能	説明
「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.6」 > 「基本フィーチャーのインストール」	Event Analytics をインストールして実行します。
「Netcool Operations Insight Extensions Web GUI 1.4.0.2」 > 「Event Analytics のインストール」	Event Analytics コンポーネントが含まれています。

8. 「要約」タブで、要約の詳細を確認します。要約の詳細に問題がなければ「次へ」をクリックし、詳細を変更する必要がある場合は「戻る」をクリックします。
9. 「完了」をクリックしてインストールを完了します。

タスクの結果

Installation Manager によって Event Analytics がインストールされます。

次のタスク

1. Event Analytics の ObjectServer を構成します。228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』を参照してください。
2. IBM Tivoli Netcool/Impact 内から、有効なデータベースに接続します。Event Analytics がサポートするいずれかのデータベースへの接続を構成するには、以下のトピックを参照してください。
 - DB2: 231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』
 - Oracle: 229 ページの『Impact での Oracle データベース接続の構成』

- MS SQL: 233 ページの『Impact での MS SQL データベース接続の構成』
- 3. Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.4 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。
- 4. Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.5 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。
- 5. Dashboard Application Services Hub から Netcool/Impact へのリモート接続をセットアップする必要があります。詳しくは、235 ページの『Netcool/Impact リモート接続』を参照してください。

Event Analytics のインストール (コンソール)

IBM Installation Manager コンソールを使用して Event Analytics をインストールすることができます。

始める前に

IBM パスポート・アドバンテージから Event Analytics をダウンロードするための IBM ID および資格を取得します。インストールする資格のあるパッケージは、Installation Manager にリストされています。

以下のアクションを実行します。

- 必要な Installation Manager ユーザー・モードはどれかを決定します。
- 使用するインストール・ディレクトリーに対して、必要なユーザー権限があることを確認します。
- インストール・パッケージからインストールする機能を決定し、それらの機能に関して必要な情報を収集します。
- Event Analytics をインストールするコンピューターで localhost を構成します。

このタスクについて

Installation Manager を開始するためのステップは、どのユーザー・モードでそれをインストールしたかによって異なります。Installation Manager コンソールを使用して Event Analytics のインストールを完了するためのステップは、すべてのユーザー・モードとオペレーティング・システムに共通です。

Installation Manager は、インストールしたファイルおよびディレクトリーの許可モードを設定するときに、現在の umask 設定を考慮に入れます。管理者モードまたは非管理者モードを使用する際に、umask が 0 である場合、Installation Manager は umask として 22 を使用します。グループ・モードを使用する場合、Installation Manager は設定されているすべてのグループ・ビットを無視し、結果として値が 0 の場合は umask として 2 を使用します。

手順

1. Installation Manager インストール・ディレクトリーの /eclipse/tools サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを使用して Installation Manager を開始します。

- ./imcl -c OR ./imcl -consoleMode
3. Installation Manager を、IBM Passport Advantage からパッケージ・リポジトリをダウンロードするよう構成します。
 - a. メインメニューから、「設定」を選択します。
 - b. 「設定」メニューで、「Passport Advantage」を選択します。
 - c. 「Passport Advantage」メニューで、「Passport Advantage へ接続」を選択します。
 - d. プロンプトが出されたら、IBM ID のユーザー名とパスワードを入力します。
 - e. メインメニューに戻ります。
 4. インストーラーで提供されるオプションで、インストールするリポジトリを追加します。
 5. メインメニューから、「インストール」を選択します。

インストーラーの指示に従って、インストールを完了します。インストールのさまざまな段階で、インストーラーに以下の項目を入力する必要があります。

- Event Analytics を選択します。
 - プロンプトが出されたら、Installation Manager 共有ディレクトリーを指定するか、デフォルト・ディレクトリーを受け入れます。
 - プロンプトが出されたら、インストール・ディレクトリーを入力するか、デフォルト・ディレクトリーを受け入れます。
 - 必要でない機能はクリアします。
 - 必要に応じて、他のコンピューターでのサイレント・インストールに使用する応答ファイルを生成します。ディレクトリー・パスおよび .xml の拡張子を持つファイル名を入力します。応答ファイルは、インストールが完了する前に生成されます。
6. インストールが完了したら、「完了」をクリックします。

タスクの結果

Installation Manager によって Event Analytics がインストールされます。

次のタスク

Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。

Event Analytics のサイレント・インストール

IBM Installation Manager を使用して Event Analytics のサイレント・インストールを行えます。このインストール方法は、複数のワークステーションに同じインストール構成を適用する場合に役立ちます。サイレント・インストールには、インストール構成を定義する応答ファイルが必要です。

始める前に

以下のアクションを実行します。

- Installation Manager 応答ファイルを作成するか記録します。

応答ファイルにリポジトリを持つ、ローカルまたはリモートの IBM Tivoli Netcool/OMNIbus パッケージおよび Netcool Operations Insight Extensions Web GUI パッケージを指定できます。Installation Manager が IBM Passport Advantageからパッケージをダウンロードするように指定することもできます。応答ファイル内の認証済みリポジトリの指定について詳しくは、Installation Manager インフォメーション・センターで『資格情報の保管』のトピックを検索してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSDV2W/im_family_welcome.html

デフォルトの応答ファイルは、Event Analytics インストール・パッケージの `responsefiles/platform` に含まれています。ここで、*platform* は `unix` または `windows` です。

応答ファイルを記録する際に、`-skipInstall` 引数を使用することで、インストールを実行することなく、インストール・プロセス用の応答ファイルを作成することができます。例えば、以下ようになります。

- `skipInstall` を次のようにして作成または記録します。

```
IBMIM.exe -record C:%response_files%install_1.xml -skipInstall  
C:%Temp%skipInstall
```

- 必要な Installation Manager ユーザー・モードはどれかを決定します。
- ご使用条件を読みます。ご使用条件ファイル `license.txt` は、`/native/license_version.zip` アーカイブに保管されています。このアーカイブは、インストール・パッケージに含まれています。
- 予定のインストール先ディレクトリに必要なユーザー許可が設定されていることを確認します。
- Event Analytics をインストールするコンピューターで `localhost` を構成します。

手順

1. Installation Manager インストール・ディレクトリーの `/eclipse/tools` サブディレクトリーに移動します。

2. Dashboard Application Services Hub への初期ログインのために管理ユーザーが使用するパスワードを暗号化するには、以下のコマンドを実行します。

- `./imutilsc encryptString password`

ここで、*password* は暗号化するパスワードです。

3. Event Analytics をインストールするには、以下のコマンドを実行します。

- `./imcl -input response_file -silent -log /tmp/install_log.xml -acceptLicense`

ここで、*response_file* は、応答ファイルのディレクトリー・パスです。

タスクの結果

Installation Manager によって Event Analytics がインストールされます。

次のタスク

Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。

Event Analytics 用の Netcool Operations Insight への更新

適切なフィックスパックを適用することによって、Event Analytics IBM Netcool Operations Insight パッケージに更新できます。

以下のようにして、フィックスパックを適用します。

- IBM Netcool Operations Insight 1.2 を使用している場合、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.1 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.1 を適用します。その後、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.6 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.6 を適用します。
- IBM Netcool Operations Insight 1.3 (2015 年 3 月 GA リリース) を使用している場合、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.2 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.2 が適用されています。アップグレードするには、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.6 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.6 を適用します。
- IBM Netcool Operations Insight 1.3 (2015 年 9 月 更新) を使用している場合、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.3 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.3 が適用されています。アップグレードするには、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.6 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.6 を適用します。
- IBM Netcool Operations Insight 1.3.1 または IBM Netcool Operations Insight 1.4 を使用している場合、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.4 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.4 が適用されています。アップグレードするには、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.6 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.6 を適用します。
- IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.1 を使用している場合、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.5 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.5 が適用されています。アップグレードするには、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.6 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.6 を適用します。

上記のシナリオで説明したようにフィックスパックを適用した後、季節性プロファイルと関連イベント構成が移行されます。

IBM Netcool Operations Insight 1.2 から IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 への Event Analytics のアップグレード:

IBM Netcool Operations Insight 1.2 プラットフォームの Event Analytics を使用している場合は、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 プラットフォームの Event Analytics にアップグレードできます。

始める前に

アップグレードを開始する前に、以下の製品パッケージがインストールされていることを確認してください。前提条件パッケージのインストールについて詳しくは、Event Analytics のインストールを参照してください。

- IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.1
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.1
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.1
- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.2
- IBM Netcool パッケージ。
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.1
 - IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.2.0.0

このタスクについて

IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 プラットフォームの Event Analytics にアップグレードするには、IBM Installation Manager の「更新」機能を使用して更新パッケージを探し、以下の製品更新パッケージで現在の環境を更新してください。

IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6
IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2

複数の製品更新パッケージの同時更新はできないため、製品更新パッケージごとに以下の手順を実行してください。

手順

1. Installation Manager を開始します。Installation Manager のインストール・ディレクトリーの /eclipse サブディレクトリーに移動し、次のコマンドを入力して Installation Manager を開始します。

`./IBMIM`

2. ダウンロード・パッケージが存在するローカル・リポジトリまたは IBM パスポート・アドバンテージ・リポジトリのいずれかを指すように Installation Manager を構成します。詳しくは、Installation Manager に関する IBM Knowledge Center のコンテンツで、トピック『ウィザード・モードの使用によるパッケージのインストール』を参照してください。以下の URL で Installation Manager に関する IBM Knowledge Center コンテンツを参照してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSDV2W/im_family_welcome.html

3. Installation Manager のメイン・ウィンドウで、「更新」をクリックし、次のタイプのインストール・ウィザードの手順に従って、更新パッケージのインストールを実行します。
 - a. 「更新パッケージ」タブで、関連する更新パッケージを検索するための製品グループを選択し、「次へ」をクリックします。使用可能な更新パッケージのリストが表示されます。
 - b. 使用可能な更新パッケージのリストで、インストールする更新パッケージを 1 つ選択して「次へ」をクリックします。一度にインストールできる更新パッケージは 1 つだけであることに注意してください。
 - c. 「ライセンス」タブで、ライセンスの内容を確認します。「使用条件の条項に同意します。」を選択し、「次へ」をクリックします。
 - d. 「機能」タブで、更新パッケージの機能を選択して「次へ」をクリックします。
 - e. 構成の詳細を指定して「次へ」をクリックします。
 - f. 「要約」タブで、要約の詳細を確認します。詳細を変更する必要がある場合は、「戻る」をクリックします。要約の詳細に問題がなければ「更新」をクリックし、更新パッケージのインストールが完了するまで待ちます。
 - g. 更新パッケージのインストールが完了するとウィンドウが更新され、インストールの詳細が表示されます。「完了」をクリックします。
4. 「季節性イベントの表示」ポートレットにイベント構成を表示するには、その構成を再実行してください。イベント構成の実行について詳しくは、151 ページの『「分析の構成」ポートレット』トピックを参照してください。

次のタスク

1. 正しいパッケージがインストールされていることを確認します。各パッケージの更新後に、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 の Event Analytics 用の正しい環境が存在することを確認するために、以下のパッケージがインストールされていることを確認してください。

- IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:

IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6

IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6

IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool
Operations Insight_7.1.0.6

- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8

- IBM Netcool パッケージ。

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6

IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli
Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2

2. Event Analytics 用の ObjectServer を構成します。Event Analytics 用の ObjectServer の構成について詳しくは、 228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』を参照してください。
3. IBM Tivoli Netcool/Impact 内から、有効なデータベースに接続します。Event Analytics がサポートするいずれかのデータベースへの接続を構成するには、以下のトピックを参照してください。
 - DB2: 231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』
 - Oracle: 229 ページの『Impact での Oracle データベース接続の構成』
 - MS SQL: 233 ページの『Impact での MS SQL データベース接続の構成』
4. Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、 242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。
5. Event Analytics のパターン汎用化機能を使用したい場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact でイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティを構成する必要があります。IBM Tivoli Netcool/Impact でのイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティの構成について詳しくは、 220 ページの『Netcool/Impact でイベント・パターンの作成に使用するタイプのプロパティの構成』を参照してください。

IBM Netcool Operations Insight 1.3 から IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 への Event Analytics のアップグレード:

IBM Netcool Operations Insight 1.3 プラットフォームの Event Analytics を使用している場合は、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 プラットフォームの Event Analytics にアップグレードできます。

始める前に

アップグレードを開始する前に、以下の製品パッケージがインストールされていることを確認してください。前提条件パッケージのインストールについて詳しくは、Event Analytics のインストールを参照してください。

IBM Netcool Operations Insight 1.3 (2015 年 3 月 GA リリース) を使用している場合は、以下の製品パッケージが既にインストールされていることを確認してください。

- IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:

IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.2

IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.2

IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations
Insight_7.1.0.2

- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.3

- IBM Netcool パッケージ。

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.2

IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli
Netcool/OMNIBus Web GUI_1.3

IBM Netcool Operations Insight 1.3 (2015 年 9 月 更新) を使用している場合は、
以下の製品パッケージが既にインストールされていることを確認してください。

- IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:

IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.3

IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.3

IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations
Insight_7.1.0.3

- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.4

- IBM Netcool パッケージ。

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.3

IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli
Netcool/OMNIBus Web GUI_1.3.0.1

このタスクについて

IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 プラットフォームの Event Analytics に
アップグレードするには、IBM Installation Manager の「更新」機能を使用して更
新パッケージを探し、以下の製品更新パッケージで現在の環境を更新してくださ
い。

IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6

IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6

IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations
Insight_7.1.0.6

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6

IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus
Web GUI_1.4.0.2

手順

製品更新パッケージは個々に更新しなければなりません。製品更新パッケージごと
にステップ 1 から 3 を実行してください。

1. Installation Manager を開始します。Installation Manager のインストール・ディレクトリーの /eclipse サブディレクトリーに移動し、次のコマンドを入力して Installation Manager を開始します。

./IBMIM

2. ダウンロード・パッケージが存在するローカル・リポジトリまたは IBM パスポート・アドバンテージ・リポジトリのいずれかを指すように Installation Manager を構成します。詳しくは、Installation Manager に関する IBM Knowledge Center のコンテンツで、トピック『ウィザード・モードの使用によるパッケージのインストール』を参照してください。以下の URL で Installation Manager に関する IBM Knowledge Center コンテンツを参照してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSDV2W/im_family_welcome.html

3. Installation Manager のメイン・ウィンドウで、「更新」をクリックし、次のタイプのインストール・ウィザードの手順に従って、更新パッケージのインストールを実行します。
 - a. 「更新パッケージ」タブで、関連する更新パッケージを検索するための製品グループを選択し、「次へ」をクリックします。使用可能な更新パッケージのリストが表示されます。
 - b. 使用可能な更新パッケージのリストで、インストールする更新パッケージを 1 つ選択して「次へ」をクリックします。一度にインストールできる更新パッケージは 1 つだけであることに注意してください。
 - c. 「ライセンス」タブで、ライセンスの内容を確認します。「使用条件の条項に同意します。」を選択し、「次へ」をクリックします。
 - d. 「機能」タブで、更新パッケージの機能を選択して「次へ」をクリックします。
 - e. 構成の詳細を指定して「次へ」をクリックします。
 - f. 「要約」タブで、要約の詳細を確認します。詳細を変更する必要がある場合は、「戻る」をクリックします。要約の詳細に問題がなければ「更新」をクリックし、更新パッケージのインストールが完了するまで待ちます。
 - g. 更新パッケージのインストールが完了するとウィンドウが更新され、インストールの詳細が表示されます。「完了」をクリックします。
4. IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 にアップグレードする前に作成された季節性イベント レポートが表示されることを確認するために、以下のように SE_CLEANUPDATA ポリシーを実行してください。
 - a. IBM Tivoli Netcool/Impact が保管され実行されているサーバーに管理者としてログインします。
 - b. 「ポリシー」タブにナビゲートし、SE_CLEANUPDATA ポリシーを検索します。
 - c. ポリシーを開くために、そのポリシーをダブルクリックします。
 - d. ポリシーを実行するには、「ポリシー」画面のツールバーの「実行」ボタンを使用します。

5. 「季節性イベントの表示」ポートレットにイベント構成を表示するには、その構成を再実行してください。イベント構成の実行について詳しくは、151 ページの『「分析の構成」ポートレット』トピックを参照してください。

次のタスク

1. 正しいパッケージがインストールされていることを確認します。各パッケージの更新後に、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 の Event Analytics 用の正しい環境が存在することを確認するために、以下のパッケージがインストールされていることを確認してください。
 - IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
 - IBM Netcool パッケージ。
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6
 - IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2
2. Event Analytics 用の ObjectServer を構成します。Event Analytics 用の ObjectServer の構成について詳しくは、228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』を参照してください。
3. IBM Tivoli Netcool/Impact 内から、有効なデータベースに接続します。Event Analytics がサポートするいずれかのデータベースへの接続を構成するには、以下のトピックを参照してください。
 - DB2: 231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』
 - Oracle: 229 ページの『Impact での Oracle データベース接続の構成』
 - MS SQL: 233 ページの『Impact での MS SQL データベース接続の構成』
4. Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。
5. Event Analytics のパターン汎用化機能を使用したい場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact でイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティを構成する必要があります。IBM Tivoli Netcool/Impact でのイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティの構成について詳しくは、220 ページの『Netcool/Impact でイベント・パターンの作成に使用するタイプのプロパティの構成』を参照してください。

IBM Netcool Operations Insight 1.3.1 および 1.4 から IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 への Event Analytics のアップグレード:

IBM Netcool Operations Insight 1.3.1 または 1.4 プラットフォームの Event Analytics を使用している場合は、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 プラットフォームの Event Analytics にアップグレードできます。

始める前に

アップグレードを開始する前に、以下の製品パッケージがインストールされていることを確認してください。前提条件パッケージのインストールについて詳しくは、Event Analytics のインストールを参照してください。

IBM Netcool Operations Insight 1.3.1 または IBM Netcool Operations Insight 1.4 を使用している場合は、以下の製品パッケージが既にインストールされていることを確認してください。

- IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.4
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.4
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.4
- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.4
- IBM Netcool パッケージ。
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.4
 - IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.3.1

このタスクについて

IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 プラットフォームの Event Analytics にアップグレードするには、IBM Installation Manager の「更新」機能を使用して更新パッケージを探し、以下の製品更新パッケージで現在の環境を更新してください。

IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6
IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2

手順

製品更新パッケージは個々に更新しなければなりません。製品更新パッケージごとにステップ 1 から 3 を実行してください。

1. Installation Manager を開始します。Installation Manager のインストール・ディレクトリーの /eclipse サブディレクトリーに移動し、次のコマンドを入力して Installation Manager を開始します。

```
./IBMIM
```

2. ダウンロード・パッケージが存在するローカル・リポジトリまたは IBM パスポート・アドバンテージ・リポジトリのいずれかを指すように Installation Manager を構成します。詳しくは、Installation Manager に関する IBM Knowledge Center のコンテンツで、トピック『ウィザード・モードの使用によるパッケージのインストール』を参照してください。以下の URL で Installation Manager に関する IBM Knowledge Center コンテンツを参照してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSDV2W/im_family_welcome.html

3. Installation Manager のメイン・ウィンドウで、「更新」をクリックし、次のタイプのインストール・ウィザードの手順に従って、更新パッケージのインストールを実行します。
 - a. 「更新パッケージ」タブで、関連する更新パッケージを検索するための製品グループを選択し、「次へ」をクリックします。使用可能な更新パッケージのリストが表示されます。
 - b. 使用可能な更新パッケージのリストで、インストールする更新パッケージを 1 つ選択して「次へ」をクリックします。一度にインストールできる更新パッケージは 1 つだけであることに注意してください。
 - c. 「ライセンス」タブで、ライセンスの内容を確認します。「使用条件の条項に同意します。」を選択し、「次へ」をクリックします。
 - d. 「機能」タブで、更新パッケージの機能を選択して「次へ」をクリックします。
 - e. 構成の詳細を指定して「次へ」をクリックします。
 - f. 「要約」タブで、要約の詳細を確認します。詳細を変更する必要がある場合は、「戻る」をクリックします。要約の詳細に問題がなければ「更新」をクリックし、更新パッケージのインストールが完了するまで待ちます。
 - g. 更新パッケージのインストールが完了するとウィンドウが更新され、インストールの詳細が表示されます。「完了」をクリックします。
4. IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 にアップグレードする前に作成された季節性イベント レポートが表示されることを確認するために、以下のように SE_CLEANUPDATA ポリシーを実行してください。
 - a. IBM Tivoli Netcool/Impact が保管され実行されているサーバーに管理者としてログインします。
 - b. 「ポリシー」タブにナビゲートし、SE_CLEANUPDATA ポリシーを検索します。
 - c. ポリシーを開くために、そのポリシーをダブルクリックします。

- d. ポリシーを実行するには、「ポリシー」画面のツールバーの「実行」ボタンを使用します。
5. 「季節性イベントの表示」ポートレットにイベント構成を表示するには、その構成を再実行してください。イベント構成の実行について詳しくは、151 ページの『「分析の構成」ポートレット』トピックを参照してください。

次のタスク

1. 正しいパッケージがインストールされていることを確認します。各パッケージの更新後に、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 の Event Analytics 用の正しい環境が存在することを確認するために、以下のパッケージがインストールされていることを確認してください。
 - IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
 - IBM Netcool パッケージ。
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6
 - IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2
2. Event Analytics 用の ObjectServer を構成します。Event Analytics 用の ObjectServer の構成について詳しくは、228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』を参照してください。
3. IBM Tivoli Netcool/Impact 内から、有効なデータベースに接続します。Event Analytics がサポートするいずれかのデータベースへの接続を構成するには、以下のトピックを参照してください。
 - DB2: 231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』
 - Oracle: 229 ページの『Impact での Oracle データベース接続の構成』
 - MS SQL: 233 ページの『Impact での MS SQL データベース接続の構成』
4. Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。
5. Event Analytics のパターン汎用化機能を使用したい場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact でイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティを構成する必要があります。IBM Tivoli Netcool/Impact でのイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティの構成について詳しくは、220 ページの『Netcool/Impact でイベント・パターンの作成に使用するタイプのプロパティの構成』を参照してください。

IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.1 から IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 への Event Analytics のアップグレード:

IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.1 の Event Analytics を使用している場合は、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 の Event Analytics にアップグレードできます。

始める前に

アップグレードを開始する前に、以下の製品パッケージがインストールされていることを確認してください。前提条件パッケージのインストールについて詳しくは、Event Analytics のインストールを参照してください。

IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.1 を使用している場合は、以下の製品パッケージが既にインストールされていることを確認してください。

- IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.5
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.5
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.5
- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.7
- IBM Netcool パッケージ。
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.5
 - IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.1

このタスクについて

IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 プラットフォームの Event Analytics にアップグレードするには、IBM Installation Manager の「更新」機能を使用して更新パッケージを探し、以下の製品更新パッケージで現在の環境を更新してください。

IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6
IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2

手順

製品更新パッケージは個々に更新しなければなりません。製品更新パッケージごとにステップ 1 から 3 を実行してください。

1. Installation Manager を開始します。Installation Manager のインストール・ディレクトリーの /eclipse サブディレクトリーに移動し、次のコマンドを入力して Installation Manager を開始します。

./IBMIM

2. ダウンロード・パッケージが存在するローカル・リポジトリまたは IBM パスポート・アドバンテージ・リポジトリのいずれかを指すように Installation Manager を構成します。詳しくは、Installation Manager に関する IBM Knowledge Center のコンテンツで、トピック『ウィザード・モードの使用によるパッケージのインストール』を参照してください。以下の URL で Installation Manager に関する IBM Knowledge Center コンテンツを参照してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSDV2W/im_family_welcome.html

3. Installation Manager のメイン・ウィンドウで、「更新」をクリックし、次のタイプのインストール・ウィザードの手順に従って、更新パッケージのインストールを実行します。
 - a. 「更新パッケージ」タブで、関連する更新パッケージを検索するための製品グループを選択し、「次へ」をクリックします。使用可能な更新パッケージのリストが表示されます。
 - b. 使用可能な更新パッケージのリストで、インストールする更新パッケージを 1 つ選択して「次へ」をクリックします。一度にインストールできる更新パッケージは 1 つだけであることに注意してください。
 - c. 「ライセンス」タブで、ライセンスの内容を確認します。「使用条件の条項に同意します。」を選択し、「次へ」をクリックします。
 - d. 「機能」タブで、更新パッケージの機能を選択して「次へ」をクリックします。
 - e. 構成の詳細を指定して「次へ」をクリックします。
 - f. 「要約」タブで、要約の詳細を確認します。詳細を変更する必要がある場合は、「戻る」をクリックします。要約の詳細に問題がなければ「更新」をクリックし、更新パッケージのインストールが完了するまで待ちます。
 - g. 更新パッケージのインストールが完了するとウィンドウが更新され、インストールの詳細が表示されます。「完了」をクリックします。
4. IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 にアップグレードする前に作成された季節性イベント レポートが表示されることを確認するために、以下のように SE_CLEANUPDATA ポリシーを実行してください。
 - a. IBM Tivoli Netcool/Impact が保管され実行されているサーバーに管理者としてログインします。
 - b. 「ポリシー」タブにナビゲートし、SE_CLEANUPDATA ポリシーを検索します。
 - c. ポリシーを開くために、そのポリシーをダブルクリックします。
 - d. ポリシーを実行するには、「ポリシー」画面のツールバーの「実行」ボタンを使用します。

5. 「季節性イベントの表示」ポートレットにイベント構成を表示するには、その構成を再実行してください。イベント構成の実行について詳しくは、 151 ページの『「分析の構成」ポートレット』トピックを参照してください。

次のタスク

1. 正しいパッケージがインストールされていることを確認します。各パッケージの更新後に、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 の Event Analytics 用の正しい環境が存在することを確認するために、以下のパッケージがインストールされていることを確認してください。
 - IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
 - IBM Netcool パッケージ。
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6
 - IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2
2. Event Analytics 用の ObjectServer を構成します。Event Analytics 用の ObjectServer の構成について詳しくは、 228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』を参照してください。
3. IBM Tivoli Netcool/Impact 内から、有効なデータベースに接続します。Event Analytics がサポートするいずれかのデータベースへの接続を構成するには、以下のトピックを参照してください。
 - DB2: 231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』
 - Oracle: 229 ページの『Impact での Oracle データベース接続の構成』
 - MS SQL: 233 ページの『Impact での MS SQL データベース接続の構成』
4. Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、 242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。
5. Event Analytics のパターン汎用化機能を使用したい場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact でイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティを構成する必要があります。IBM Tivoli Netcool/Impact でのイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティの構成について詳しくは、 220 ページの『Netcool/Impact でイベント・パターンの作成に使用するタイプのプロパティの構成』を参照してください。

IBM Tivoli Netcool/OMNIBus および IBM Tivoli Netcool/Impact のスタンドアロンのインストール済み環境から IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 Event Analytics へのアップグレード:

IBM Netcool/OMNIBus Web GUI および IBM Tivoli Netcool/Impact が存在する IBM Tivoli Netcool/OMNIBus のスタンドアロンのインストール済み環境を使用している場合は、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 用の Event Analytics にアップグレードすることができます。

始める前に

以下の製品パッケージが既にインストールされていることを確認してください。

- IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
- IBM Netcool パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6

このタスクについて

このアップグレード・シナリオの対象ユーザーは、Tivoli Netcool/OMNIBus と Netcool/Impact を既に使用しており、Event Analytics 機能を使用する必要があるが、Event Analytics 機能に必要な Netcool Operations Insight パッケージを持っていないユーザーです。

このアップグレード・シナリオを実行する場合は、IBM Installation Manager を使用して Event Analytics 機能に必要な製品パッケージをインストールしてから、製品パッケージを更新する必要があります。製品パッケージを「インストール」する際に、以下の 2 つのパッケージを探してインストールします。

IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for Netcool Operations
Insight_7.1.0.6
Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web
GUI_1.4.0.2

IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 Event Analytics にアップグレードするには、以下の手順を実行します。

手順

1. Installation Manager を開始します。Installation Manager のインストール・ディレクトリーの /eclipse サブディレクトリーに移動し、次のコマンドを入力して Installation Manager を開始します。

./IBMIM
2. ダウンロード・パッケージが存在するローカル・リポジトリまたは IBM パスポート・アドバンテージ・リポジトリのいずれかを指すように Installation Manager を構成します。詳しくは、Installation Manager に関する IBM

Knowledge Center のコンテンツで、トピック『ウィザード・モードの使用によるパッケージのインストール』を参照してください。以下の URL で Installation Manager に関する IBM Knowledge Center コンテンツを参照してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSDV2W/im_family_welcome.html

3. メインの Installation Manager でパッケージをインストールするには、「インストール」をクリックし、インストール・ウィザードの手順に従って、パッケージのインストールを実行します。
 - a. 「インストール」タブで、以下の製品グループと製品のインストール・パッケージを選択して「次へ」をクリックします。
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for Netcool Operations Insight
バージョン 7.1.0.6
 - Tivoli Netcool/OMNIbus Web GUI
バージョン 8.1.0.6
 - Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIbus Web GUI
バージョン 1.4.0.2
 - b. 「ライセンス」タブで、ライセンスの内容を確認します。ライセンスの内容に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
 - c. 「ロケーション」タブで、既存のパッケージ・グループとロケーションを使用します。
 - d. 「機能」タブで、パッケージの機能を選択して「次へ」をクリックします。
 - e. 「要約」タブで、要約の詳細を確認します。詳細を変更する必要がある場合は、「戻る」をクリックします。要約の詳細に問題がなければ「インストール」をクリックし、パッケージのインストールが完了するまで待ちます。
 - f. パッケージのインストールが完了するとウィンドウが更新され、インストールの詳細が表示されます。「完了」をクリックします。
4. ロールアップ構成をマイグレーションします。ロールアップ構成の更新について詳しくは、142 ページの『ロールアップ構成の更新』を参照してください。

次のタスク

1. 正しいパッケージがインストールされていることを確認します。各パッケージの更新後に、IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.2 の Event Analytics 用の正しい環境が存在することを確認するために、以下のパッケージがインストールされていることを確認してください。
 - IBM Tivoli Netcool/Impact パッケージ:
 - IBM Tivoli Netcool/Impact GUI Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server_7.1.0.6
 - IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.6

- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus パッケージ:
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus_8.1.0.8
 - IBM Netcool パッケージ。
IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_8.1.0.6
IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli
Netcool/OMNIBus Web GUI_1.4.0.2
2. Event Analytics 用の ObjectServer を構成します。Event Analytics 用の ObjectServer の構成について詳しくは、 228 ページの『Event Analytics ObjectServer の構成』を参照してください。
 3. IBM Tivoli Netcool/Impact 内から、有効なデータベースに接続します。Event Analytics がサポートするいずれかのデータベースへの接続を構成するには、以下のトピックを参照してください。
 - DB2: 231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』
 - Oracle: 229 ページの『Impact での Oracle データベース接続の構成』
 - MS SQL: 233 ページの『Impact での MS SQL データベース接続の構成』
 4. Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1 のデータ・ソースを更新する必要があります。詳しくは、 242 ページの『Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加』を参照してください。
 5. Event Analytics のパターン汎用化機能を使用したい場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact でイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティを構成する必要があります。IBM Tivoli Netcool/Impact でのイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティの構成について詳しくは、 220 ページの『Netcool/Impact でイベント・パターンの作成に使用するタイプのプロパティの構成』を参照してください。

ロールアップ構成の更新

季節性イベント・レポートおよび関連イベント・レポートに列を追加できます。ロールアップ構成を更新して、レポートに列を追加します。

始める前に

現在の構成をプロパティ・ファイルにエクスポートする必要があります。

1. IBM Tivoli Netcool/Impact が格納され実行されているサーバーにログインします。
2. `<Impact install location>/bin` ディレクトリーに移動します。
3. 以下のコマンドを入力します。

```
./nci_trigger NCI <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Export FILENAME
<Full Path to the file name>.properties
```

<UserID>

Impact ユーザーの ID を指定します。

<password>

Impact ユーザーのパスワードを指定します。

<Full Path to the file name>

プロパティ・ファイルが保管されるディレクトリーを指定します。

このタスクについて

ロールアップ構成を更新するには、以下の手順に従います。

手順

1. 『始める前に』で作成したプロパティ・ファイルを更新します。

- a. レポートに追加する列の数を指定します。

季節性イベントの `number_of_rollup_configuration=2` パラメーターの値を増やします。

関連イベントの `reevent_number_of_rollup_configuration=2` パラメーターの値を増やします。

例えば、レポートに 1 つの列を追加するには、パラメーターの値を 1 つ大きくして 2 を 3 にします。

- b. 新しいロールアップ列の場合は、プロパティ情報を追加します。

- 新しい季節性イベント・レポート列の場合は、以下のプロパティを追加します。

```
rollup_<rollup number>_column_name=<column name>  
rollup_<rollup number>_display_name=<display name>  
rollup_<rollup number>_type=<type>
```

- 新しい関連イベント・レポート列の場合は、以下のプロパティを追加します。

```
reevent_rollup_<rollup number>_column_name=<column name>  
reevent_rollup_<rollup number>_display_name=<display name>  
reevent_rollup_<rollup number>_type=<type>  
reevent_rollup_<rollup number>_actionable=<true/false>
```

<rollup number>

新しい列のロールアップ番号を指定します。

<column name>

新しい列の名前を指定します。この列の名前は、履歴テーブルの列の名前と一致する必要があります。

<display name>

新しい列の表示名を指定します。この表示名は、レポートの列の名前と一致する必要があります。

<type>

これは、以下のいずれかのタイプを指定します。

MAX 列で観測される最大値。値が観測されない場合、この値はデフォルトで `integer` の最小値に設定されます。

MIN 列で観測される最小値。値が観測されない場合、この値はデフォルトで `integer` の最大値に設定されます。

SUM 列で観測されたすべての値の合計。

NON_ZERO

イベントの非ゼロ の出現を数えるカウント列。この列は、アクションのあったイベントの比率や、チケット番号が関連付けられていたイベントの数を追跡する場合に便利です。

DISTINCT

このキーと値のペアについて表示されている個別の値の数。

EXAMPLE

このキーが格納されているフィールドの最初の非ブランクの例を表示します。EXAMPLE タイプが有用となるのは、ALERT_IDENTIFIER など人間が意味を理解できないフィールドについて季節性レポートを実行しており、問題のタイプを示すためには人間が理解できる SUMMARY のような例が必要、という場合です。

actionable=<true/false>

ロールアップのこのプロパティを true に設定すると、そのロールアップを使用して、関連ルールの考えられる根本原因が判別されます。この根本原因の判別は、最も多くのアクションが実行されたロールアップに基づいて行われます。例えば、Acknowledge がロールアップ構成の一部であり、actionable=true のプロパティ値が指定されている場合は、Acknowledge が最も多く発生したイベントが、考えられる根本原因であると判別されます。可能性が高い根本原因の判別では、actionable のロールアップの降順が使用されるため、最初の actionable のロールアップは、2 番目の actionable のロールアップより優先順位が高くなります。根本原因について有効とされるのは、使用可能な <type> キーワードのうち、MAX、MIN、SUM、NON_ZERO の 4 つだけです。

ロールアップのこのプロパティを false に設定すると、そのロールアップは、ルールの考えられる根本原因の判別では使用されなくなります。すべてのロールアップ構成で actionable=false のプロパティ値が設定されている場合、検出された最初のイベントが親イベントとして識別されます。

関連ルールの根本原因イベントを手動で変更する方法については、207 ページの『関連ルールの根本原因イベントの選択』を参照してください。

2. 以下のコマンドを実行して、現在の構成を更新します。

```
./nci_trigger NCI <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Configure  
FILENAME <Full Path to the file name>.properties
```

タスクの結果

ロールアップ構成が更新されます。

例

例 1. 季節性イベント・レポートに 3 番目の列を追加するには、ロールアップ構成値を 3 に変更し、プロパティを追加します。

```
number_of_rollup_configuration=3  
rollup_1_column_name=SEVERITY  
rollup_1_display_name=MINSeverity  
rollup_1_type=MIN  
rollup_2_column_name=SEVERITY  
rollup_2_display_name=MAXSeverity
```

```
rollup_2_type=MAX
rollup_3_column_name=TYPE
rollup_3_display_name=TYPE
rollup_3_type=MAX
```

例 2. デフォルトの関連イベント・レポートの構成パラメーター。

```
reevent_rollup_1_column_name=ORIGINALSEVERITY
reevent_rollup_1_display_name=MINSeverity
reevent_rollup_1_type=MAX
reevent_rollup_1_actionable=true
reevent_rollup_2_column_name=ACKNOWLEDGED
reevent_rollup_2_display_name=Acknowledged
reevent_rollup_2_type=NON_ZERO
reevent_rollup_2_actionable=true
reevent_rollup_3_column_name=ALERTGROUP
reevent_rollup_3_display_name=AlertGroup
reevent_rollup_3_type=EXAMPLE
reevent_rollup_3_actionable=false
```

次のタスク

季節性イベント・レポート、「履歴上のイベント」ポートレット、関連イベント・レポート、または「関連イベントの詳細」ポートレットに列を追加するには、以下の手順を実行します。

1. Tivoli Netcool/Impact UI にログインします。
2. 「ポリシー」タブに移動します。
3. 変更するポリシーを開きます。一度に 1 つのポリシーを変更できます。
 - 履歴上のイベントの場合は、**SE_GETHISTORICALEVENTS** ポリシーを開きます。
 - 季節性イベントの場合は、**SE_GETEVENTDATA** ポリシーを開きます。
 - 関連イベント・グループの場合は、以下のいずれかのポリシーを開きます。

```
RE_GETGROUPS_ACTIVE
RE_GETGROUPS_ARCHIVED
RE_GETGROUPS_EXPIRED
RE_GETGROUPS_NEW
RE_GETGROUPS_WATCHED
```

注: 各ポリシーは個々に更新されます。2 つ以上のポリシーを更新するには、各ポリシーを個々に変更する必要があります。

- 関連イベントの場合は、以下のいずれかのポリシーを開きます。

```
RE_GETGROUPEVENTS_ACTIVE
RE_GETGROUPEVENTS_ARCHIVED
RE_GETGROUPEVENTS_EXPIRED
RE_GETGROUPEVENTS_NEW
RE_GETGROUPEVENTS_WATCHED
```

注: 各ポリシーは個々に更新されます。2 つ以上のポリシーを更新するには、各ポリシーを個々に変更する必要があります。

- 関連イベントの詳細グループ・インスタンス・テーブルについて、次のポリシーを開きます。

RE_GETGROUPINSTANCEV1

4. 「ポリシー設定の構成」アイコンをクリックします。
5. 「ポリシー出力パラメーター」で、「編集」をクリックします。
6. カスタムのスキーマ定義を作成するため、「スキーマ定義エディターを開く」アイコンをクリックします。
7. 新規フィールドを作成するため、「新規」をクリックします。
8. 新規フィールドの名前とフォーマットを指定します。

新規フィールド名は、構成ファイルの表示名と一致している必要があります。

この形式は、**AlertsHistory** テーブルの形式と一致していなければなりません。

ロールアップを正しく表示するには、ロールアップの形式がストリングである必要があります。

フィールドが追加された履歴上のイベントテーブルで Event Analytics を実行する前に、**SE_GETHISTORICALEVENTS_DB2** テーブル (または他のデータベース・モデル) を更新してください。

RE_GETGROUPS_ ポリシーの場合は、<type> の値が MAX、MIN、SUM、NON_ZERO であるロールアップの列だけがサポートされます。そのため、数値フィールドのみをスキーマに追加してください。

9. この手順を完了するには、開いている各ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックし、「ポリシー」タブで「保存」をクリックします。

注: Netcool Operations Insight リリース 1.4.0.1 より前の関連イベントの詳細用に作成された列は、設計どおりに表示されます。Netcool Operations Insight リリース 1.4.0.1 へのアップグレード後に作成された構成およびグループは、履歴上のイベントにあるイベントを表示します。「関連イベントの詳細」に列を追加することで、**owner ID**、**ticketnumber** などの追加情報を表示できます。

10. 「関連イベントの詳細」に列を追加するには、Impact の RE_CONSTANTS ポリシー内の RE_COLUMN_EVENT_INSTANCES 変数を更新します。静的配列に対してフィールドの追加または削除を行います。例えば、以下のようになります。

```
var RE_COLUMN_EVENT_INSTANCES = "NODE,SUMMARY,ALERTGROUP,SEVERITY,OWNERUID,ACKNOWLEDGED,TALLY";
```

「関連イベントの詳細」内のグループ・インスタンスに以下の列を追加することもできます。

- SERVERSERIAL
- SERVERNAME
- TALLY
- OWNERUID

デフォルトでは、上にリストした列は「関連イベントの詳細」内のグループ・インスタンスでは非表示になっています。これらの列を「関連イベントの詳細」で表示するには、Policy_RE_GETGROUPINSTANCEV1_RE_GETGROUPINSTANCEV1.properties ファイルを編集する必要があります。このファイルは、\$IMPACT_HOME/uiproviderconfig/properties ディレクトリー内にあります。

具体的には、Policy_RE_GETGROUPINSTANCEV1_RE_GETGROUPINSTANCEV1.properties ファイル内の以下のプロパティを、デフォルト値である true から値 false に設定します (または、該当するフィールドをコメント化します)。

```
SERVERSERIAL.hidden=true  
SERVERNAME.hidden=true  
TALLY.hidden=true  
OWNERUID.hidden=true
```

例えば、以下のようになります。

```
OWNERUID.hidden=false
```

または、次の例のようにします。

```
#OWNERUID.hidden=true
```

「詳細情報」パネルに表示する列の構成

「詳細情報」パネルに表示する列を構成できます。

このタスクについて

「詳細情報」パネルは関連イベントの詳細ポートレット内から開始でき、「グループ名」または「ピボット・イベント」のいずれかのハイパーリンクをクリックすると、その「グループ名」または「ピボット・イベント」についての詳細情報がパネルに表示されます。Event Analytics のインストールでは、「詳細情報」パネルに表示される列のデフォルト構成がインストールされますが、表示される列の構成を変更することができます。「詳細情報」パネルに表示される列を構成するには、以下の手順に従います。

手順

1. 現在の構成をプロパティ・ファイルにエクスポートします。
 - a. IBM Tivoli Netcool/Impact が格納され実行されているサーバーにログインします。
 - b. `<Impact install location>/bin` ディレクトリーに移動します。
 - c. 以下のコマンドを入力します

```
./nci_trigger NCI <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Export  
FILENAME <Full Path to the file name>.properties
```

<UserID>

Impact ユーザーの ID を指定します。

<password>

Impact ユーザーのパスワードを指定します。

<Full Path to the file name>

ファイルが保管されるディレクトリーを指定します。

2. 「詳細情報」パネルに表示する列のプロパティを使用してプロパティ・ファイルを更新します。
 - 「詳細情報」パネルの「グループ名」に関連した列については、以下のプロパティがプロパティ・ファイルのデフォルト・プロパティです。デフォルトのプロパティを追加、削除、および変更できます。

```
reevent_num_groupinfo=3
reevent_groupinfo_1_column=PROFILE
reevent_groupinfo_2_column=EVENTIDENTITIES
reevent_groupinfo_3_column=INSTANCES
```

reevent_num_groupinfo=3

このプロパティは、表示するグループ情報列の数を表します。デフォルト値は 3 列です。8 列まで表示できるため、1 から 8 までの任意の数値を指定できます。

reevent_groupinfo_1_column=PROFILE

このプロパティ行項目を列ごとに入力します。このプロパティ行項目の変数は 1 および *PROFILE* です。

1 はこの列が 1 番目の列であることを示します。8 列まで表示できるため、この値はプロパティ行項目ごとに 8 まで増やすことができます。

PROFILE は列を表します。以下の 8 列を使用できます。

PROFILE

関係プロファイル (グループの強度) を指定します。

EVENTIDENTITIES

イベント ID を作成するコンマ区切りリストを指定します。

INSTANCES

グループ・インスタンスの総数を指定します。

CONFIGNAME

グループの作成時に使用した構成名を指定します。

TOTALEVENTS

グループ内のイベントの総数を指定します。

UNIQUEEVENTS

グループ内の固有イベントの総数を指定します。

REVIEWED

ユーザーによるグループのレビュー状況を指定します。

GROUPTTL

最初のイベントが発生した後でグループがアクティブ状態を保持する秒数を指定します。

- 「詳細情報」パネルの「ピボット・イベント」に関連した列については、以下のプロパティがプロパティ・ファイルのデフォルト・プロパティです。デフォルトのプロパティを追加、削除、および変更できます。

```
reevent_num_eventinfo=1
reevent_eventinfo_1_column=INSTANCES
```

reevent_num_eventinfo=1

このプロパティは、表示するグループ情報列の数を表します。デフォルト値は 1 列です。6 列まで表示できるため、1 から 6 までの任意の数値を指定できます。

reevent_eventinfo_1_column=INSTANCES

このプロパティ行項目を列ごとに入力します。このプロパティ行項目の変数は 1 および INSTANCES です。

1 はこの列が 1 番目の列であることを示します。6 列まで表示できるため、この値はプロパティ行項目ごとに 6 まで増やすことができます。

INSTANCES は列を表します。以下の 6 列が可能です。

INSTANCES

関連イベントについてのインスタンスの総数を指定します。

PROFILE

関係プロファイル (関連イベントの強度) を指定します。

EVENTIDENTITY

関連イベントについての固有イベント ID を指定します。

EVENTIDENTITIES

イベント ID を作成するコンマ区切りリストを指定します。

CONFIGNAME

関連イベントの作成時に使用した構成名を指定します。

GROUPNAME

関連イベントの作成時に使用したグループ名を指定します。

3. 以下のコマンドを実行して、更新したプロパティを使用して現在の構成を更新します。

```
./nci_trigger NCI <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Configure  
FILENAME <Full Path to the file name>.properties
```

Event Analytics UI のテーブルのカスタマイズ

Event Analytics UI 内のテーブルをカスタマイズするには、uiproviderconfig ファイルを使用します。

Event Analytics UI におけるテーブルの表示方法をカスタマイズするには、更新対象のポリシーまたはデータ・タイプに固有の \$IMPACT_HOME/uiproviderconfig/properties ファイルと \$IMPACT_HOME/uiproviderconfig/translation ファイルを更新します。

\$IMPACT_HOME/uiproviderconfig/properties ファイルおよび \$IMPACT_HOME/uiproviderconfig/translation ファイルを更新する場合は、更新を加える前に、これらのファイルのバックアップを取っておいてください。

Event Analytics のアンインストール

Event Analytics のアンインストールは、IBM Installation Manager GUI またはコンソールを使用して、あるいはサイレント・アンインストールで実行できます。

IBM Installation Manager のインストール方法および使用方法について詳しくは、以下の IBM インフォメーション・センターを参照してください。

<http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/install/v1r7/index.jsp>

Event Analytics のアンインストール

IBM Installation Manager を使用して Event Analytics を除去します。

始める前に

以下のアクションを実行します。

- すべての Event Analytics プロセスを停止します。
- 保持するデータまたは構成ファイルをすべてバックアップします。
- サイレント・アンインストールを行うには、Installation Manager 応答ファイルを作成するか記録します。

`-record response_file` オプションを使用します。

製品をインストールせずに応答ファイルを作成するには、`-skipInstall` オプションを使用します。例えば、以下のようになります。

1. `skipInstall` を次のようにして作成または記録します。

```
IBMIM.exe -record C:\response_files\install_1.xml -skipInstall  
C:\Temp\skipInstall
```

2. 作成した `skipInstall` を使用してアンインストールの応答ファイルを作成するには、次のように指定します。

```
IBMIM.exe -record C:\response_files\uninstall_1.xml -skipInstall  
C:\Temp\skipInstall
```

このタスクについて

注: IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 8.1.0.0 をアンインストールするには、最初に IBM Netcool Operations Insight Extensions Web GUI 1.2.0.0 パッケージを、Event Analytics 機能を含めてアンインストールする必要があります。

手順

GUI による除去

1. Installation Manager GUI を使用して Event Analytics を除去するには、以下の手順を実行します。
 - a. Installation Manager インストール・ディレクトリーの `/eclipse` サブディレクトリーに移動します。
 - b. 以下のコマンドを使用して Installation Manager ウィザードを開始します。


```
./IBMIM
```
 - c. Installation Manager のメインウィンドウで、「アンインストール」をクリックします。
 - d. 除去するオフファリングを選択し、Installation Manager ウィザードの指示に従って除去を完了します。

コンソールによる除去

2. Installation Manager コンソールを使用して Event Analytics を除去するには、以下の手順を実行します。
 - a. Installation Manager インストール・ディレクトリーの /eclipse/tools サブディレクトリーに移動します。
 - b. 以下のコマンドを使用して Installation Manager を開始します。

```
./imcl -c
```

- c. メインメニューから「アンインストール」を選択します。
- d. 除去するオフリングを選択し、Installation Manager の指示に従って除去を完了します。

サイレント方式による除去

3. Event Analytics をサイレント・モードで除去するには、以下のようになります。
 - a. Installation Manager インストール・ディレクトリーの /eclipse/tools サブディレクトリーに移動します。
 - b. 以下のコマンドを使用して Installation Manager を開始します。

```
./imcl -input response_file -silent -log /tmp/install_log.xml  
-acceptLicense
```

ここで、*response_file* は、除去構成を定義する応答ファイルのディレクトリー・パスです。

タスクの結果

Installation Manager によってインストールされたファイルとディレクトリーが除去されます。

次のタスク

Installation Manager によってインストールされたのではないファイルと、変更が加えられた構成ファイルはそのまま残ります。それらのファイルを確認し、必要に応じて削除するかバックアップしてください。

「分析の構成」ポートレット

「分析の構成」ポートレットには、既存のイベント構成のリストやレポートが含まれています。このポートレットを使用して、イベント構成を表示、作成、変更、削除、実行、または停止できます。

注: 「分析の構成」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

「分析の構成」ポートレットを使用することで、イベントが再発するかどうかを特定できるほか、最も頻繁に再発する時期も特定できます。例えば、あるイベントが毎週月曜日の午前 9 時に頻繁に発生する、などの情報を得ることができます。イベントのタイプや再発のパターンを認識することで、イベントの発生回数を減らすために必要なアクションを判別しやすくなります。

分析の構成の表には、イベント構成ごとに以下の列の情報が表示されます。

名前 イベント構成の固有の名前を示します。

イベント ID

データベース内の固有イベントを識別するデータベース・フィールドを示します。イベントの季節性は、「イベント ID」ドロップダウン・リストから選択したすべてのイベントに対して実行されます。「イベント ID」値が「グローバル設定を使用します」の場合、構成ファイル内に「イベント ID」がセットアップされます。

季節性が有効

イベント構成の季節性イベントの分析が有効化されているかどうかを示します。この列には以下のいずれかの値が表示されます。

- True: 季節性分析は有効です。
- False: 季節性分析は無効です。

季節性分析が有効な場合、列には値 `true` が表示されます。

関連イベントが有効

イベント構成の関連イベントの分析が有効化されているかどうかを示します。この列には以下のいずれかの値が表示されます。

- True: 関連イベント分析は有効です。
- False: 関連イベント分析は無効です。

季節性状況

季節性イベント構成の状況を示します。列には「待機中」、「稼働中」、「完了」、または「エラー」のいずれかの状況アイコンが表示されることがあります。

関連イベント状況

関連イベント構成の状況を示します。列には「待機中」、「稼働中」、「完了」、または「エラー」のいずれかの状況アイコンが表示されることがあります。

開始時刻

イベント構成の履歴データの開始日を示します (対象日を含む)。

終了時刻

イベント構成の履歴データの終了日を示します (対象日を含む)。

季節性フェーズ

季節性イベント構成実行のフェーズを示します。合計では、この列には季節性イベント構成の実行中の 5 つのフェーズが表示されます。例えば、季節性イベント構成完了フェーズが発生した場合、列には「完了」という値が表示されます。

季節性フェーズの進捗

季節性イベントのフェーズの進捗がパーセンテージで表示されます。例えば、季節性イベント構成完了フェーズが完了した場合、列には 100% という値が表示されます。

関連イベント・フェーズ

関連イベント構成実行のフェーズを示します。合計では、この列には関連イ

イベント構成の実行中の 5 つのフェーズが表示されます。例えば、関連イベント構成完了フェーズが発生した場合、列には「完了」という値が表示されます。

関連イベント・フェーズの進捗

関連イベントのフェーズの進捗がパーセンテージで表示されます。例えば、関連イベント構成完了フェーズが完了した場合、列には 100% という値が表示されます。

スケジュール済み

イベント構成の実行が、x 日ごと、x 週ごと、または x か月ごとに実行するようにスケジュールされているかどうかを示します。イベント構成の実行がスケジュールされている場合は、列内に値 Yes が表示されます。

関係プロファイル

この列の項目は、アルゴリズムによって判別された、イベント・グループ内のイベント間の関係の強さを示します。値は 1 つ示されます。

「強」は、イベント間の関係の信頼性レベルが高いが、イベントとイベント・グループの数が少ないことを表します。関連性がより弱いイベントがイベント・グループに入っていない可能性があります。

「中」は、イベント間の関係の信頼性レベルが中程度であり、イベントの数は平均的で、イベント・グループの数が少ないことを表します。関連性が弱いイベントがイベント・グループに入っていない可能性があります。

「弱」は、より多くのイベントとイベント・グループが表示されますが、より多くの誤検出が発生する可能性があります。

重要: Netcool/Impact では、アラビア語とヘブライ語がサポートされていません。Event Analytics ユーザーがアラビア語またはヘブライ語を使用して作業を行う場合は、翻訳されていない英語のテキストが表示されることがあります。

Impact のデータ・プロバイダー設定およびその他のポートレット設定

Impact データ・プロバイダーとの接続が複数ある場合は、使用する Impact データ・プロバイダーを指定する必要があります。

このタスクについて

Impact データ・プロバイダーとの接続が 1 つのみ存在する場合は、その接続を使用して、季節性レポートのリストをコンパイルして表に表示します。Impact データ・プロバイダーとの接続が複数ある場合は、ポートレット設定を編集してオプションのいずれかを選択する必要があります。

手順

1. ポートレット設定を編集する場合、または管理者としてポートレットのデフォルト値を編集するには、以下のようにします。

- ポートレット設定を編集するには、「ページ・アクション」 > 「ページのパーソナライズ」 > 「ウィジェット」 > 「パーソナライズ」をクリックします。

- すべてのユーザーのポートレットのデフォルト値を編集するには、「ページ・アクション」  > 「ページの編集」 > 「ウィジェット」 > 「編集」をクリックします。

「分析の構成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「データ・プロバイダー」ドロップダウン・リストからデータ・プロバイダーを選択します。
3. 「**BIDI** 設定」タブで、以下の双方向テキストの表示設定を指定します。

コンポーネント方向

ポートレットでの項目の配置（「左から右」または「右から左」）を選択します。デフォルトの設定では、ページまたはコンソールに対して定義された値が使用されます。ページとコンソールが両方ともデフォルト設定を使用する場合は、ブラウザのロケールによってレイアウトが決定されます。

テキスト方向

ポートレットでのテキストの方向を選択します。デフォルトの設定では、ページまたはコンソールに対して定義された値が使用されます。ページとコンソールが両方ともデフォルト設定を使用する場合は、ブラウザのロケールによってテキストの方向が決定されます。「コンテキスト入力」の設定では、入力したテキストがグローバリゼーション設定に応じた適切な方向で表示されます。

4. 変更内容を保存するには、以下の手順を実行します。
 - a. 「分析の構成」ダイアログ・ボックスの「保存」を選択します。「分析の構成」ダイアログ・ボックスが閉じられます。
 - b. ウィンドウの右上にある「保存」を選択します。

現在の分析構成の表示

管理者は、現在の分析構成のリストと、これらの構成に関連した、分析に関する一部の基本情報（関連イベントと季節性イベント）を表示することができます。

このタスクについて

Event Analytics には、デフォルト値を使用して基本構成を実行するためのデフォルトの分析構成が含まれています。この分析構成を実行、変更、または削除することができます。分析構成を表示するには、以下の手順を実行します。このタスクでは、ユーザーが `ncw_analytics_admin` 役割を持つユーザーとして Dashboard Application Services Hub にログインしていることが前提となります。

手順

1. 「分析の構成」ポートレットを開始します。
 - a. Dashboard Application Services Hub のナビゲーション・メニューで、「見通し」メニューを選択します。
 - b. 「分析の構成」を選択します。

2. 「分析の構成」ポートレットのテーブルに、既に構成されている分析構成のリストが表示されます。すべての分析構成を表示するには、リストをスクロールダウンします。このテーブルは 60 秒ごとに自動的に最新表示され、選択した列見出しの情報が表示されます。

- 特定の分析構成の構成パラメーターを表示するには、構成を選択して、「選択した構成の変更」アイコンを選択します。
- 分析構成に対して最後に実行されたアクションの進行状況を調べるには、以下の各列に表示される内容を確認します。

季節性状況

季節性イベント構成の状況を示します。列には「待機中」、「稼働中」、「完了」、または「エラー」のいずれかの状況アイコンが表示されることがあります。

関連イベント状況

関連イベント構成の状況を示します。列には「待機中」、「稼働中」、「完了」、または「エラー」のいずれかの状況アイコンが表示されることがあります。

開始時刻

イベント構成の履歴データの開始日を示します (対象日を含む)。

終了時刻

イベント構成の履歴データの終了日を示します (対象日を含む)。

季節性フェーズ

季節性イベント構成実行のフェーズを示します。合計では、この列には季節性イベント構成の実行中の 5 つのフェーズが表示されます。例えば、季節性イベント構成完了フェーズが発生した場合、列には「完了」という値が表示されます。

季節性フェーズの進捗

季節性イベントのフェーズの進捗がパーセンテージで表示されます。例えば、季節性イベント構成完了フェーズが完了した場合、列には 100% という値が表示されます。

関連イベント・フェーズ

関連イベント構成実行のフェーズを示します。合計では、この列には関連イベント構成の実行中の 5 つのフェーズが表示されます。例えば、関連イベント構成完了フェーズが発生した場合、列には「完了」という値が表示されます。

関連イベント・フェーズの進捗

関連イベントのフェーズの進捗がパーセンテージで表示されます。例えば、関連イベント構成完了フェーズが完了した場合、列には 100% という値が表示されます。

- 分析構成に関するその他の詳細情報については、他の列に表示される情報を参照してください。

名前

イベント構成の固有の名前を示します。

イベント ID

データベース内の固有イベントを識別するデータベース・フィールドを

示します。イベントの季節性は、「イベント ID」ドロップダウン・リストから選択されたすべてのイベントで実行されます。

スケジュール済み

履歴イベント・データベースを照会するように分析構成がスケジュールされているかどうかを示します。

季節性が有効

イベント構成の季節性イベントの分析が有効化されているかどうかを示します。この列には以下のいずれかの値が表示されます。

- True: 季節性分析は有効です。
- False: 季節性分析は無効です。

関連イベントが有効

イベント構成の関連イベントの分析が有効化されているかどうかを示します。この列には以下のいずれかの値が表示されます。

- True: 関連イベント分析は有効です。
- False: 関連イベント分析は無効です。

関係プロファイル

この列の項目は、アルゴリズムによって判別された、イベント・グループ内のイベント間の関係の強さを示します。値は 1 つ示されます。

「強」は、イベント間の関係の信頼性レベルが高いが、イベントとイベント・グループの数が少ないことを表します。関連性がより弱いイベントがイベント・グループに入っていない可能性があります。

「中」は、イベント間の関係の信頼性レベルが中程度であり、イベントの数は平均的で、イベント・グループの数が少ないことを表します。関連性が弱いイベントがイベント・グループに入っていない可能性があります。

「弱」は、より多くのイベントとイベント・グループが表示されますが、より多くの誤検出が発生する可能性があります。

新規分析構成の作成または既存の分析構成の変更

管理者は、新規分析構成を作成したり、既存の分析構成を変更したりすることができます。新規分析構成の作成操作中に実行する分析タイプ (関連イベント、季節性イベント、またはその両方) を選択します。

始める前に

既存の分析構成を変更する場合、ダイアログ・ボックスの以下のパラメーター・フィールドを変更することはできません。

- 名前:
- 名前
- 分析タイプ
- イベント ID
- イベント ID:
- 季節性イベントの分析

- 関連イベントの分析

手順

1. 分析の構成ポートレットを開始します。 154 ページの『現在の分析構成の表示』を参照してください。
2. 「新規構成の作成」アイコンを選択して新規分析構成を作成するか、既存の分析構成を強調表示し、「選択した構成の変更」アイコンを選択して既存の分析構成を変更します。 UI に、新規または既存の分析構成のパラメーター・フィールドを含むダイアログ・ボックスが表示されます。
3. ダイアログ・ボックスの「一般」タブのパラメーター・フィールドに、分析構成に適用可能な詳細を設定します。

名前 分析構成の名前を入力します。この名前は、作成する分析構成のタイプを反映するものでなければなりません。

例えば、`TestSeasonality1` や `TestRelatedEvents1` は、季節性イベントと関連イベントの分析構成に割り当てる名前になります。分析構成の名前は、固有でなければならず、特定の無効な文字を含めることはできません。無効な文字のリストは、`webgui_home/etc/illegalChar.prop` ファイルにリストされている文字のリストです。

分析タイプ

「季節性イベントの分析」、「関連イベントの分析」、またはその両方を選択します。

イベント ID

ドロップダウン・リストから、データベース内の固有イベントを特定するデータベース・フィールドを選択します。イベント季節性は、「イベント ID」ドロップダウン・リストで選択したすべてのイベントで実行されます。ドロップダウン・リスト内のフィールドを変更する方法については、162 ページの『イベント ID のフィールドの選択の変更』を参照してください。

日付範囲

「相対」「固定日付範囲」または「固定」「相対日付範囲」のいずれかを選択します。

相対: 分析構成に含める時間フレームを入力します。相対時間フレームは、「カ月間」、「週間」、または「日間」で測定されます。

固定: 「開始日」および「終了日」のパラメーター・フィールドがアクティブです。分析構成の「開始日」および「終了日」を入力します (対象日を含む)。

固定日付範囲: 「開始日」および「終了日」のパラメーター・フィールドがアクティブです。分析構成の「開始日」および「終了日」を入力します (対象日を含む)。

相対日付範囲: 分析構成に含める時間フレームを入力します。

実行間隔

分析構成が特定の時間間隔で実行されるようにスケジュールを設定するには、構成の実行頻度を入力します。0 より大きい値を入力すると、分析構成はスケジュールされた構成になります。

注: このオプションは、相対日付範囲のみに適用されます。このオプションは、固定日付範囲に適用することはできません。

フィルター

分析構成に適用可能なフィルターを詳述します。例えば、Summary NOT LIKE '%maintenance%' などを入力します。

* 実行する分析タイプを選択します

「季節性イベントの分析」、「関連イベントの分析」、またはその両方を選択します。

4. ダイアログ・ボックスの「関連イベント」タブのパラメーター・フィールドに、分析構成に適用可能な詳細を設定します。

関係プロファイル

分析構成内のイベント間の関係の強度を選択します。この値が **Strong** に設定された場合、結果の信頼性が高まり、生成されるグループ数が少なくなります。

この構成によってディスカバーされたルールを自動的にデプロイ

このオプションは、この分析構成でディスカバーされたルールを自動的にデプロイする場合に選択します。

関係プロファイル: 分析構成内のイベント間の関係の強度を選択します。この値が **Strong** に設定された場合、結果の信頼性が高まり、生成されるグループ数が少なくなります。

この構成によってディスカバーされたルールを自動的にデプロイ: このオプションは、この分析構成でディスカバーされたルールを自動的にデプロイする場合に選択します。

5. ダイアログ・ボックスの「拡張」タブのパラメーター・フィールドに、分析構成に適用可能な詳細を設定します。定義したイベント ID を使用し、「グローバル・イベント ID のオーバーライド」を選択して、データベース内の固有のイベントを特定できます。

グローバル・イベント ID のオーバーライド

「イベント ID」ドロップダウン・リストを使用可能にする場合、このオプションを選択します。

「グローバル・イベント ID のオーバーライド」チェック・ボックスを選択したときは、構成からパターンを作成できません。ただし、関連イベント・グループをデプロイすることはできます。

イベント ID

「イベント ID」ドロップダウン・リストから、データベース内の固有イベントを特定するデータベース・フィールドを選択します。イベント季節性は、「イベント ID」ドロップダウン・リストで選択したすべてのイベントで実行されます。ドロップダウン・リスト内のフィールドを変更する方法については、162 ページの『イベント ID のフィールドの選択の変更』を参照してください。

6. 「保存」をクリックして、レポートを保存するが実行はしないか、「保存して実行」をクリックして、レポートを保存してから実行します。「キャンセル」をクリックして、操作をキャンセルすることもできます。

タスクの結果

- 分析構成の内容について、システム検証でエラーが検出されなかった場合、新規または更新済みの分析構成と、そのパラメーターがテーブルに表示されます。
- 分析構成内容のシステム検証によってエラーが検出された場合、構成を保存することができず、無効なパラメーターを再設定することを要求されます。

予定外の分析構成の手動実行

管理者は、予定外の分析構成をあらゆるステージで手動実行できます。予定外の分析操作の実行中に実行する、分析タイプ (関連イベントまたは季節性イベント) を選択します。

始める前に

手動で実行しようとする分析構成は、「関連イベント状況」または「季節性状況」が「実行中」であってはなりません。既に実行中の分析構成を手動で実行しようとすると、GUI に警告メッセージが表示されます。

手順

1. 分析の構成ポートレットを開始します。 154 ページの『現在の分析構成の表示』を参照してください。
2. 表示されている分析構成のリスト内で、1 つの構成を選択します。
3. ツールバーから、「選択した構成の実行」アイコンをクリックします。選択した分析構成について、一部の列が更新されます。

「季節性状況」列または「関連イベント状況」列のアイコンが砂時計のアイコンに変わります。

「季節性フェーズ」列または「関連イベント・フェーズ」列のテキストが「開始待機中」に変わります。

「季節性フェーズの進捗」列または「関連イベント・フェーズの進捗」列のパーセンテージが 0% から開始し、フェーズの完了率を反映して変化します。

タスクの結果

分析構成は、スケジューラーによる実行のためにキューに入れられます。スケジューラーは、日付および時刻が最も早い分析構成を最初に実行します。分析構成が実行されると、以下の列が更新されて、実行の進捗状況が通知されます。

- 「季節性状況」または「関連イベント状況」
- 「季節性フェーズ」または「関連イベント・フェーズ」
- 「季節性フェーズの進捗」または「関連イベント・フェーズの進捗」

次のタスク

状況が「実行中」の分析構成を停止する場合は、ツールバーから「選択した構成の停止」アイコンをクリックします。

分析構成の停止

実行中の分析構成を停止できます。

このタスクについて

分析構成を作成し、その構成の実行を選択した場合に、構成がまだ実行中であるが一部の構成値が正しくないことに気付く場合があります。その場合、構成を削除したり構成の実行が完了するまで待機したりする代わりに、分析構成を停止することができます。実行中の分析構成を停止するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「関連イベントの構成」ポートレットを開始します。 154 ページの『現在の分析構成の表示』を参照してください。
2. 表示された分析構成のリストから、実行中の構成を選択します。
3. ツールバーから、「選択した構成の停止」アイコンをクリックします。

分析構成の削除

分析構成は、それらの状況に関係なく個別に削除できます。

手順

1. 分析の構成 ポートレットを開始し、 154 ページの『現在の分析構成の表示』を参照してください。
2. 削除する分析構成の名前を選択し、ツールバーから「選択した構成の削除」アイコンをクリックします。
3. 表示された確認ダイアログで、「OK」を選択します。 分析構成を、それに対して作成された 1 つ以上のルールと共に削除しようとする、テキストを含む警告ダイアログ・ボックスが表示され、その分析構成の現行ルール状況が示されます。以下の例は、警告ダイアログ・ボックスに含まれる可能性があるテキストを示します。

Configuration EventAnalytics_Report_1 contains the following rules:

Seasonality Rules:

0 watched rules, 1 active rules, 0 expired rules and 0 archived

Related Event Rules:

0 watched rules, 0 active rules, 0 expired rules and 0 archived

Delete the rules manually before deleting the configuration.

メッセージが示すように、指定した分析構成を削除する前に、その分析構成に関連付けられたルールを手動で削除します。上記の例では、EventAnalytics_Report_1 という分析構成に関連付けられた 1 つのアクティブ・ルールを最初に削除する必要があります。

タスクの結果

- 分析構成のテーブルが最新表示され、削除された構成が分析構成のリストに表示されなくなります。

- 結果が「デプロイ済み」または「有効期限切れ」の状態の場合、分析構成を削除しても関連する結果は削除されません。ただし、分析構成を削除すると、「新規」または「アーカイブ済み」の状態になっている関連する結果は削除されます。
- 削除された分析構成の名前は、削除された構成の名前を含むすべての関連イベント・グループがシステムから削除されない限り、再使用できません。

関連イベント・グループの有効期限の変更

「ウォッチ対象」または「アクティブ」の関連イベント・グループの有効期限は変更できます。有効期限に到達すると、有効期限が切れたグループおよび関連イベントは関連イベントの表示ポートレットの「有効期限切れ」タブに表示されます。

このタスクについて

有効期限が切れたグループまたはパターンが含まれるグループは、相関を続行します。システム管理者は、グループと、有効期限が切れたグループまたはイベントをレビューする必要があります。

デフォルトでは、関連イベントの有効期限は 6 カ月です。関連イベントの有効期限を変更するには、以下の手順を実行します。

手順

1. Netcool/Impact UI にログインします。
2. 「関連イベント」プロジェクトを選択します。
3. 「ポリシー」タブを選択します。
4. 「ポリシー」タブで、**RE_CONSTANTS** ポリシーを選択して編集します。
5. RE_CONSTANTSポリシーで、RE_EXPIRE_TIME 定数の値を変更します。新しい値 (月単位) を入力します。
6. ポリシーを保存します。

タスクの結果

この変更は、「ウォッチ対象」または「アクティブ」タブの、新規にディスカバーされた関連イベント・グループのみで有効になります。

次のタスク

デプロイされたグループの有効期限が切れないように有効期限を構成する場合は、RE_EXPIRE_TIME 定数の値を 0 に変更し、ポリシーを保存してこの変更を有効化します。Impact サーバーを再始動する必要はありません。

任意の段階でこの有効期限を有効にする場合は、この変数の設定を 0 より大きい値に戻します。

イベント ID のフィールドの選択の変更

イベント履歴データベースからイベント ID としてどのフィールドを選択できるようにするかを変更できます。

このタスクについて

「イベント ID」は、イベント履歴データベースで固有のイベントを識別するデータベース・フィールドです。関連イベント構成を構成するときには、使用可能なフィールドのドロップダウン・リストから、「イベント ID」に使用するデータベース・フィールドを選択します。Netcool/Impact 内の例外リストの構成により、ドロップダウン・リストで選択できるフィールドを変更できます。例外リストに含まれるフィールドは、分析の構成ポートレットには表示されません。

Netcool/Impact の設計では、「イベント ID」ドロップダウン・リストに以下のデフォルト・フィールドが表示されます。

Alert Group
Alert Key
Node
Summary
ID
LOCALNODEALIAS
LOCALPRIOBJ
LOCALROOTOBJ
LOCALSECOBJ
REMOTENODEALIAS
REMOTEPRIOBJ
ROOTOBJ
REMOTESECOBJ

例外リストに存在しない別のデータベース・フィールドがある場合は、それらのフィールドもドロップダウン・リストに表示されます。例外リストを変更するには、以下の手順に従います。

手順

1. Netcool/Impact にログインします。
2. 使用可能なプロジェクトのリストから「**RelatedEvents**」プロジェクトを選択します。
3. 「ポリシー」タブを選択します。このタブで、**RE_CONSTANTS** ポリシーを選択して編集します。
4. **RE_OBJECTSERVER_EXCLUDEDFIELDS** 変数を更新します。静的配列に対してフィールドの追加または削除を行います。大/小文字は区別されません。
5. ポリシーを保存します。
6. ポリシーを実行します。エラーがある場合は構文を確認します。

タスクの結果

変更は、ポリシーの保存時に行われます。Netcool/Impact の再始動は不要です。

「季節性イベントの表示」ポートレット

「季節性イベントの表示」ポートレットには、構成のリスト、季節性イベントのリスト、および季節性イベントの詳細情報が含まれています。

季節性イベントの表示に加え、イベントをレビュー済みとしてマークし、他のユーザーによってレビューされたイベントを識別することができます。

「季節性イベントの表示」ポートレットには、グループ・テーブル内に以下のデフォルト列が表示されます。

構成 季節性イベント構成のリストを表示します。

イベント・カウント

季節性イベント構成ごとの季節性イベントの数のカウントを表示します。

ノード

季節性イベントの生成元の管理対象エンティティを表示します。管理対象エンティティは、デバイスまたはホストの名前、サービス名、またはその他のエンティティである場合があります。

要約 季節性イベントの説明を表示します。

アラート・グループ

季節性イベントが属するアラート・グループを表示します。

レビュー担当者

季節性イベントをレビューしたユーザーのユーザー名のリストを表示します。

信頼性レベル

季節性イベントに関連付けられた信頼性のレベルに基づくアイコンとテキストを表示します。信頼性レベルは、高、中、低と表示され、イベントが高信頼度の季節性なのか、中信頼度の季節性なのか、低信頼度の季節性なのかを示します。

最大重大度

選択された季節性イベントの季節性に寄与するイベントの最大重大度を表示します。

作成されたルール

季節性イベントのために作成された季節性イベント・ルールの名前を表示します。

関連イベント・カウント

季節性イベントごとの関連イベントの数を表示します。

最初の発生

季節性イベントが最初に発生した日時を表示します。タイム・スタンプはユーザーによって構成可能で、以下のフォーマットで表示されます。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS

例:

季節性イベント構成およびイベントのリストの表示

季節性イベント構成および季節性イベントのリストは「季節性イベントの表示」ポートレットに表示できます。

始める前に

季節性イベントの表示ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

季節性イベント構成および季節性イベントのリストを表示するには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. デフォルトでは、季節性イベント構成が「構成」テーブルにリストされます。
3. 構成に関連付けられた季節性イベントのリストを表示するには、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - a. 「すべて」を選択すると、すべての構成についての季節性イベントのリストが表示されます。
 - b. 特定の構成を選択すると、その構成についての季節性イベントのリストが表示されます。

季節性イベントは「要約」テーブルに表示されます。

タスクの結果

季節性イベント構成および関連付けられた季節性イベントは「季節性イベントの表示」ポートレットにリストされます。

季節性イベントのレビュー

季節性イベントにレビュー済みのマークを付けたりマークを解除したりできます。

このタスクについて

「季節性イベントの表示」ポートレットの「レビュー担当者」列には、レビューアーのユーザー名が表示されます。

手順

イベントのレビュー状況を更新するには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルで特定の構成または「**ALL**」を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックし、「レビュー済みとしてマーク」または「レビュー済みのマークを解除」を選択します。

季節性イベントは、それぞれ複数のユーザーによってレビューできます。レビューアーは「レビュー担当者」列にリストされます。

タスクの結果

選択された季節性イベントは、「レビュー済み」としてマーク付けされるか、マーク解除されます。「レビュー担当者」列が更新されて、レビューアーのユーザー名が表示されます。

「季節性イベントの表示」ポートレットでの列のソート

「季節性イベントの表示」ポートレットの列をソートして、表示されるデータを編成できます。

始める前に

季節性イベントの表示ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

「季節性イベントの表示」ポートレットの行は構成名によってソートされています。列を使用して行の順序を変更し、データをソートできます。

ソートした列は、列を昇順でソートしたか、降順でソートしたかによって、列ヘッダーに上向き矢印または下向き矢印が表示されます。

手順

行を列によってソートするには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 単一の列をソートするには、以下の手順を実行します。
 - a. 列をソートするには、列見出しを 1 回クリックします。行が昇順にソートされます。
 - b. 降順にソートするには、列見出しを再度クリックします。
 - c. 列のソートを解除するには、列見出しをさらに 1 回クリックします。
3. 複数の列をソートするには、以下の手順を実行します。
 - a. 第 1 の列を単一の列としてソートします。
 - b. ソートする次の列の列見出しの上にマウス・ポインターを移動します。2 つのアイコンが表示されます。1 つは標準のソート・アイコンで、もう 1 つはネスト対象のソート・アイコンです。ネスト対象のソート・アイコンには、このオプションを選択した結果としていくつの列がソートされるかを示す数字が付いています。例えば、これがソートする 2 番目の列の場合、2 という数字が表示されます。
 - c. ネスト対象のソート・アイコンをクリックします。第 1 のソート済み列について列がソートされます。

ヒント: マウス・ポインターをネスト対象のソート・アイコンの上に移動すると、ネスト対象のソート・オプションであることが吹き出しヘルプに表示されます。例えば、アイコンの吹き出しヘルプには、「ネストされたソート

- クリックして昇順にソート」と表示されます。結果として、ソート順序は、ソート順序が指定された前の列について昇順となります。
- d. ネストされたソートの順序を逆方向にするには、ネスト対象のソート・アイコンを再びクリックします。順序が逆方向になり、ネスト対象のソート・アイコンはソート解除アイコンに変更されます。
- e. ネストされたソートを列から解除するには、マウス・ポインターを列見出しの上に移動し、「ソートしない」アイコンをクリックします。

注: ソート可能な任意の列で、ネストされたソートが選択された後、標準のソート・アイコンをクリックすると、その列がテーブル内で唯一のソート列になり、ネストを含む既存のすべてのソートが解除されます。

タスクの結果

ソートした列の見出しには、列を昇順でソートしたか降順でソートしたかを示すために、上向き矢印または下向き矢印のマークが付きます。このソートは一時的なものであり、保持されません。

特定の構成についてのすべての季節性イベントの Microsoft Excel へのエクスポート

特定の構成についてのすべての季節性イベントを、サポート対象ブラウザから Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートできます。

始める前に

1 つ以上の構成の季節性イベントを、「季節性イベントの表示」ポートレットに表示します。「季節性イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

特定の構成についてのすべての季節性イベントを Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成を選択します。
3. ツールバーの「季節性イベントのエクスポート」ボタンをクリックします。しばらくすると、「エクスポート結果のダウンロード」リンクが表示されます。
4. リンクをクリックして Microsoft Excel ファイルをダウンロードし、保存します。

タスクの結果

この Microsoft Excel ファイルには、以下のタブのあるスプレッドシートが含まれています。

- **Report Summary:** このタブには、選択した構成のサマリー・レポートが含まれています。
- **Seasonal Events:** このタブには、選択した構成の季節性イベントが含まれています。

- **Export Comments:** このタブには、エクスポートに関するコメントが通知のために格納されています (例えば、スプレッドシートの見出しが切り捨てられている場合や、スプレッドシートの行が切り捨てられている場合などです)。

特定の構成についての選択した季節性イベントの **Microsoft Excel** へのエクスポート

特定の構成についての選択した季節性イベントを、サポート対象ブラウザから Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートできます。

始める前に

1 つ以上の構成の季節性イベントを、「季節性イベントの表示」ポートレットに表示します。「季節性イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

特定の構成についての選択した季節性イベントを Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成を選択します。
3. **Ctrl** キーと選択方式を使用して、複数の季節性イベントを選択します。(クリック・アンド・ドラッグ方式を使用して複数の季節性イベントを選択することもできます。)
4. 複数の季節性イベントを選択した後、選択した季節性イベントのいずれかを右クリックして、ツールバーの「選択したイベントのエクスポート (**Export Selected Events**)」ボタンを選択します。しばらくすると、「エクスポート結果のダウンロード」リンクが表示されます。
5. リンクをクリックして Microsoft Excel ファイルをダウンロードし、保存します。

タスクの結果

この Microsoft Excel ファイルには、以下のタブのあるスプレッドシートが含まれています。

- **Report Summary:** このタブには、選択した構成のサマリー・レポートが含まれています。
- **Seasonal Events:** このタブには、選択した構成の季節性イベントが含まれています。
- **Export Comments:** このタブには、エクスポートに関するコメントが通知のために格納されています (例えば、スプレッドシートの見出しが切り捨てられている場合や、スプレッドシートの行が切り捨てられている場合などです)。

季節性イベント・ルール

季節性イベント・ルールを使用して、特定のイベントにアクションを適用できます。

選択した季節性イベントにアクションを適用するか、季節性イベントおよびその関連イベントの一部またはすべてにアクションを適用するかを選択できます。

季節性イベント・ルールを使用して、アクションを適用することにより、イベントを抑止および抑止解除したり、イベントを変更またはエンリッチしたり、選択したイベントが予期された時刻に発生しなかった場合にイベントを作成したりすることができます。

季節性イベント・ルールの作成

監視またはデプロイの対象となる季節性イベント・ルールは、季節性イベントの表示ポートレットから作成できます。

始める前に

季節性イベントの表示ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

季節性イベントの表示ポートレットで季節性イベント・ルールを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルで特定の構成または「**ALL**」を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「ルールの作成」を選択します。
5. 「ルールの作成」ウィンドウで、固有のルール名を入力します。
6. 「ルールの作成」ウィンドウで、イベントおよびアクションの以下のルール基準を入力します。
 - a. イベントおよび時刻の条件にルール・アクションを適用するには、169 ページの『イベントおよび時間条件へのルール・アクションの適用』を参照してください。
 - b. イベントが発生した場合にアクションを適用するには、170 ページの『イベントが発生した場合のアクションの適用』を参照してください。
 - c. イベントが発生しない場合にアクションを適用するには、172 ページの『イベントが発生しない場合のアクションの適用』を参照してください。
7. 季節性イベント・ルールを保存するには、以下のいずれかの基準を選択します。
 - a. ルールをデプロイする前にそのパフォーマンスをモニターする場合は、「監視」を選択します。
 - b. ルールをアクティブにするには、「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

季節性イベント・ルールが作成されます。現在の季節性イベント・ルールのリストを表示するには、「季節性イベント・ルール」ポートレットを開きます。

イベントおよび時間条件へのルール・アクションの適用

季節性イベント・ルールを作成するには、選択されたイベント、時間条件、またはその両方を「ルールの作成」または「既存のルールの変更」ウィンドウで指定する必要があります。

始める前に

季節性イベント・ルールを作成するか、既存の季節性イベント・ルールを変更します。季節性イベント・ルールを作成するには、168 ページの『季節性イベント・ルールの作成』を参照してください。既存の季節性イベント・ルールを変更するには、176 ページの『既存の季節性イベント・ルールの変更』を参照してください。

このタスクについて

「イベント選択」ペインでデフォルトで選択される季節性イベントは、「ルールの作成」または「既存のルールの変更」ウィンドウが開くときの対象となる季節性イベントです。

注: デプロイされた関連イベント・グループについてイベントが発生した場合、季節性イベント・ルールによってイベントが抑止されます。季節性ルール・アクションは、作成された親の合成イベントには適用されません。

注: イベントやアラームの抑止を解除する季節性イベント・ルールを作成できます。抑止アラームがない場合は、このルールには何もアクションがありません。

手順

選択されたイベントおよび時間条件を指定するには、「ルールの作成」ウィンドウで以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントに関連するすべてのイベントまたは 1 つ以上のイベントを選択するには、以下の手順を実行します。
 - a. 関連するすべてのイベントを選択するには、「すべての関連イベントの選択」チェック・ボックスを選択します。
 - b. 関連する 1 つ以上のイベントを編集または選択するには、「選択の編集」をクリックし、1 つ以上の関連イベントを選択します。
2. 関連イベントの選択を保存するには、「OK」をクリックします。
3. 時間条件を選択するには、以下の手順を実行します。
 - a. 以下に示す時間条件のフィルター条件のうち、いずれかを選択します。

AND 選択された時間条件のそれぞれにルール・アクションを適用するには、「AND」を選択します。

OR 個別の時間条件にルール・アクションを適用するには、「OR」を選択します。

- b. ドロップダウン・メニューから、「分」、「時間」、「曜日」、または「日」を選択します。
- c. ドロップダウン・メニューから、「次と等しい」または「次と等しくない」を選択します。
- d. ドロップダウン・メニューから適切な分、時、曜日、または日付を選択します。このドロップダウン・メニューからは複数の値を選択できます。

注: そのときに発生するイベントの季節性を示すために、高、中、および低い季節性ラベルがこの時間選択ドロップダウン・メニューに適用されます。

- 4. 「追加」ボタンをクリックして別の時間条件を追加します。
- 5. イベント選択および時間条件を保存するには、以下のいずれかの基準を選択します。
 - a. ルールをデプロイする前にそのパフォーマンスをモニターする場合は、「監視」を選択します。
 - b. ルールをアクティブにするには、「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

季節性イベント・ルール条件が、選択されたイベント、時間条件、または両方に適用されます。

イベントが発生した場合のアクションの適用

特定の時間枠内にイベントが発生した場合に実行する特定のアクションを適用できます。

始める前に

季節性イベント・ルールを作成するか、既存の季節性イベント・ルールを変更します。季節性イベント・ルールを作成するには、168 ページの『季節性イベント・ルールの作成』を参照してください。既存の季節性イベント・ルールを変更するには、176 ページの『既存の季節性イベント・ルールの変更』を参照してください。

注: イベントを抑止または抑止解除するには、`noi_default_values` ファイルを更新する必要があります。`noi_default_values` ファイルについて詳しくは、180 ページの『イベントの抑止および抑止解除のための NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルの更新』を参照してください。

このタスクについて

「イベント選択」ペイン内で選択されたイベントには、特定の時間枠内にイベントが発生した場合にアクションが適用されます。イベントの選択について詳しくは、169 ページの『イベントおよび時間条件へのルール・アクションの適用』を参照してください。

直接のアクションの実行を必要としないイベントを抑止し、指定された期間の後でイベントを抑止解除することができます。

イベントが発生した場合に列値を設定し、指定された期間の後で再設定することができます。

手順

イベントが発生した場合に適用するアクションを指定するには、「指定の時間枠でイベントが発生した場合のアクション」ペインで以下の手順を実行します。

1. イベントが発生した場合にアクションが実行されないようにイベントを抑止するには、以下の手順を実行します。
 - a. 「イベントの抑止」チェック・ボックスを選択します。
 - b. (オプション) 列値を選択するには、以下のステップ 3 を参照してください。
2. アクションが実行された後でイベントを抑止解除するには、以下の手順を実行します。
 - a. アクションが実行された後でイベントを抑止解除するまでの時間を選択するには、「アクションを実行するまでの時間」リストから数値を選択するか、フィールドに数値を入力します。「アクションを実行するまでの時間」ドロップダウン・リストから「秒」、「分」、または「時」を選択します。
 - b. 「イベントの抑止の解除」チェック・ボックスを選択します。
 - c. (オプション) 列値を選択するには、以下のステップ 4 を参照してください。
3. アクションが実行された後で列値を設定するには、以下の手順を実行します。
 - a. 「列値の設定」チェック・ボックスを選択し、「イベントが発生した場合にアクションを実行」の「列値の設定」ボタンをクリックします。
 - b. 「列値の設定」ページで、ObjectServer 列に値を入力します。
 - c. 列値を保存するには、「OK」をクリックします。
4. 指定された期間の後で列値をリセットするには、以下の手順を実行します。
 - a. 期間を指定するには、「アクションを実行するまでの時間」リストから数値を選択するか、フィールドに数値を入力します。「アクションを実行するまでの時間」ドロップダウン・リストから「秒」、「分」、または「時」を選択します。
 - b. 「列値の設定」チェック・ボックスを選択し、「アクションを実行するまでの時間」の「列値の設定」ボタンをクリックします。
 - c. 「列値の設定」ページで、ObjectServer 列に値を入力します。
 - d. 列値を保存するには、「OK」をクリックします。
5. 季節性イベント・ルールを保存するには、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - a. ルールをデプロイする前にそのパフォーマンスをモニターする場合は、「監視」を選択します。
 - b. ルールをアクティブにするには、「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

特定の時間枠内に発生したルールに適用されるアクションが保存されます。

イベントが発生しない場合のアクションの適用

特定の時間枠内にイベントが発生しない場合、特定のアクションが発生するように適用することができます。

始める前に

季節性イベント・ルールを作成するか、既存の季節性イベント・ルールを変更します。季節性イベント・ルールを作成するには、168 ページの『季節性イベント・ルールの作成』を参照してください。既存の季節性イベント・ルールを変更するには、176 ページの『既存の季節性イベント・ルールの変更』を参照してください。

このタスクについて

「イベント選択」ペインで選択されるイベントは、イベントが特定の時間枠内に発生しない場合にアクションが適用される対象のイベントです。イベントの選択について詳しくは、169 ページの『イベントおよび時間条件へのルール・アクションの適用』を参照してください。

手順

イベントが発生しない場合に適用するアクションを指定するには、「指定の時間枠でイベントが発生しなかった場合のアクション」ペインで以下の手順を実行します。

1. イベントがその間に発生しない場合にアクションを適用する時間を選択するには、以下の手順を実行します。
 - a. 「アクションを実行するまでの時間」リストから数値を選択するか、フィールドに数値を入力します。
 - b. 「アクションを実行するまでの時間」ドロップダウン・リストから、「秒」、「分」、または「時」を選択します。
2. 発生しない場合に合成イベントを作成するには、「イベントの作成」チェック・ボックスを選択して「イベントの作成」をクリックします。
3. イベントを定義するには、新しい「イベントの作成」ウィンドウのフィールドに入力します。
4. 合成イベントを保存するには、「OK」をクリックします。
5. 季節性イベント・ルールを保存するには、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - a. ルールをデプロイする前にそのパフォーマンスをモニターする場合は、「監視」を選択します。
 - b. ルールをアクティブにするには、「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

特定の時間枠内に発生しないルールに対して適用するアクションが保存されます。

季節性イベント・ルールの状態

季節性イベント・ルールは、「季節性イベント・ルール」ポートレットで状態別にグループ化されます。

季節性イベント・ルールの状態

季節性イベント・ルールは、以下の状態にグループ化されます。

ウォッチ対象

ウォッチ対象の季節性イベント・ルールはアクティブではありません。

季節性イベント・ルールをデプロイするかどうかを決定する前に、そのルールを監視して、ルールのパフォーマンスをモニターできます。

ウォッチ対象の季節性イベント・ルールは、イベントに対してアクションを実行しません。これは、着信イベントのルール一致の統計を収集するために使用されます。

アクティブ

デプロイ済みの季節性イベント・ルールはアクティブです。アクティブな季節性イベント・ルールは、稼働中イベントに対して定義済みアクションを実行します。

有効期限切れ

有効期限切れの季節性イベント・ルールはアクティブなままです。季節性イベント・ルールがトリガーされた場合、稼働中イベントに対して定義済みアクションを実行します。デフォルトの有効期限は **6 カ月間**です。季節性イベント・ルールが有効であることを確認するには、ルールの状態とパフォーマンスを定期的にレビューします。季節性イベント・ルールの有効期限をカスタマイズできます。詳しくは、『デフォルトの季節性イベント・ルールの有効期限の変更』を参照してください。

アーカイブ済み

アーカイブ済みの季節性イベント・ルールはアクティブではありません。ウォッチ対象、アクティブ、または有効期限切れの季節性イベント・ルールをアーカイブすることを選択できます。季節性イベント・ルールを削除するには、まず、そのルールをアーカイブする必要があります。

季節性イベント・ルールの状態の変更について詳しくは、177 ページの『季節性イベント・ルール状態の変更』を参照してください。

デフォルトの季節性イベント・ルールの有効期限の変更

デフォルトの季節性イベント・ルールの有効期限を特定の時刻に変更したり、有効期限を選択しないことによって季節性イベント・ルールの有効期限が切れないようにしたりすることができます。

このタスクについて

季節性イベント・ルールが有効であるようにするには、ルールの状態を定期的にレビューして更新する必要があります。

手順

デフォルトの季節性イベント・ルールの有効期限を変更または削除するには、以下の手順を実行します。

1. コマンド行インターフェースからプロパティ・ファイルを生成するために、以下のコマンドを使用します。

```
./nci_trigger SERVER <UserID>/<Password> NOI_DefaultValues_Export FILENAME  
directory/filename
```

Where

SERVER

Event Analytics がインストールされているサーバー。

<UserID>

Event Analytics ユーザーのユーザー名。

<Password>

Event Analytics ユーザーのパスワード。

directory

ファイルが保管されているディレクトリ。

filename

プロパティ・ファイルの名前。

例えば、次のようにします。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impact NOI_DefaultValues_Export FILENAME  
/space/noi_default_values
```

2. デフォルトの季節性イベント・ルールの有効期限を変更するために、以下のパラメーターのデフォルト値を編集します。

seasonality.rules.expiration.time.value=6

季節性イベント・ルールの有効期限が切れるまでの日数、時間数、または月数。デフォルト値は 6 です。

seasonality.rules.expiration.time.unit=MONTH

季節性イベント・ルールの有効期限の頻度。デフォルトの頻度は MONTH です。以下の時間単位がサポートされています。

- HOUR
- DAY
- MONTH

3. 変更したプロパティ・ファイルを IBM Tivoli Netcool/Impact にインポートするため、以下のコマンドを使用します。

```
./nci_trigger SERVER <UserID>/<Password> NOI_DefaultValues_Configure FILENAME  
directory/filename
```

例えば、次のようにします。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impact NOI_DefaultValues_Configure FILENAME  
/space/noi_default_values
```

タスクの結果

デフォルトの季節性イベント・ルールの有効期限が変更されます。

季節性イベント・ルールのパフォーマンス統計の表示

「季節性イベント・ルール」ポートレットで、グループ・テーブルの「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」のいずれかのタブ内に、季節性イベント・ルールのパフォーマンス統計を表示できます。

グループ・テーブル内の列

「季節性イベントの表示」ポートレットのグループ・テーブルには、作成した季節性イベント・ルールが表示されます。グループ・テーブルの左側には、以下の列があります。

構成: 季節性イベント・ルールが作成されている構成名のリストを表示します。

ルール・カウント: 特定の構成のそれぞれに対して作成された季節性イベント・ルールの数を表示します。この数は、「すべて」項目で、すべての構成に対して作成された季節性イベント・ルールの総数も示します。

ルール名: 季節性イベント・ルールの名前を表示します。

最後の実行: 季節性イベント・ルールが最後に実行された日時を表示します。この列が空白である場合、季節性イベント・ルールは実行されていません。

デプロイ済み: 季節性イベント・ルールがデプロイされた日時を表示します。「デプロイ済み」という用語は、季節性イベント・ルールが使用可能であり、ルール統計をアクティブに集計していること、およびルールに適用されたすべてのアクションが実行されていることを意味します。

注: 「最後の実行」列および「デプロイ済み」列では、日付は、月、日、年 として表されます。同様に、時刻は、時:、分:、秒 として表されます。時刻では、AM または PM のどちらであるかも示されます。例えば、Apr 13, 2015 4:45:17 PM です。

グループ・テーブル内のパフォーマンス統計

パフォーマンス統計は、「季節性イベント・ルール」ポートレットの「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」のいずれかのタブで、グループ・テーブルの次の列に表示されます。

抑止されたイベント: 季節性イベント・ルールがデプロイされた後で、そのルールが抑止したイベントの総数を表示します。

抑止解除されたイベント: 季節性イベント・ルールがデプロイされた後で、そのルールが抑止解除したイベントの総数を表示します。

エンリッチ/変更されたイベント: 季節性イベント・ルールがデプロイされた後で、そのルールがエンリッチまたは変更したイベントの総数を表示します。

発生しなかった場合に生成されたイベント: 季節性イベント・ルールがデプロイされた後で、イベント選択基準を満たさないイベントのために (つまり、ルールのイベント選択条件の範囲外である一致イベントのために)、そのルールが生成したイベントの総数を表示します。

パフォーマンス統計のリセット

「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」タブで、グループのパフォーマンス統計をゼロにリセットできます。パフォーマンス統計をリセットするには、(「ルール名」列から) 季節性イベント・ルール名を右クリックし、メニュー

ーから「パフォーマンス統計のリセット」を選択します。この操作を行うと選択した季節性イベント・ルールの統計データがリセットされることを示すメッセージが表示されます。このメッセージには、このデータを回収できなくなることも示されます。「OK」をクリックして、操作を続行するか、「キャンセル」をクリックして、操作を停止します。「OK」を選択すると、成功メッセージが表示されます。

季節性イベント・ルールのパフォーマンス統計をゼロにリセットすると、「最後の実行」列および「デプロイ済み」列もクリアされます。「アーカイブ済み」タブではパフォーマンス統計が収集されないことに注意してください。ルールが 1 つの状態から別の状態に移行すると、パフォーマンス統計がリセットされます。アクションがルールによってトリガーされるたびに、パフォーマンス統計が増加します。

既存の季節性イベント・ルールの変更

既存の季節性イベント・ルールを変更して、イベント選択基準やアクションを更新したり、変更したりすることができます。

始める前に

「季節性イベント・ルール」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

1. 季節性イベント・ルールポートレットを開きます。

「季節性イベント・ルール」ポートレットの左側にあるテーブルに、季節性イベント・ルールの構成がリストされ、右側にあるテーブルには、季節性イベント・ルールがリストされます。

2. ルール・テーブルから変更するルールを選択します。
3. 右クリックして、「ルールの編集」を選択します。
4. 「既存のルールの変更」ウィンドウで、イベント選択基準またはアクションを変更します。
5. 季節性イベント・ルールを保存するには、以下のいずれかの基準を選択します。
 - a. ルールをデプロイする前にそのパフォーマンスをモニターする場合は、「監視」を選択します。
 - b. ルールをアクティブにするには、「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

季節性イベント・ルールが変更されます。現在の季節性イベント・ルールのリストを表示するには、「季節性イベント・ルール」ポートレットを開きます。

状態別にグループ化された季節性イベント・ルールを表示

「季節性イベント・ルール」ポートレットで、状態別にグループ化された季節性イベント・ルールを表示できます。

始める前に

「季節性イベント・ルール」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

状態別にグループ化された季節性イベント・ルールを表示するには、以下のステップを実行します。

1. 季節性イベント・ルールポートレットを開きます。

「季節性イベント・ルール」ポートレットの左側にあるテーブルに、季節性イベント・ルールの構成がリストされ、右側にあるテーブルには、季節性イベント・ルールがリストされます。

2. 状況タブから、表示する季節性イベント・ルールの状態を選択します。

季節性イベント・ルールは、それらの状況に関連するタブに保管されます。例えば、アクティブな季節性イベント・ルールの構成とルールを表示するには、「アクティブ」タブを選択します。

タスクの結果

「季節性イベント・ルール」ポートレットに、選択した状況の季節性イベント・ルールの構成とルールがリストされます。

季節性イベント・ルール状態の変更

季節性イベント・ルールの状態は、「季節性イベント・ルール」ポートレットから、ウォッチ対象、アクティブ、またはアーカイブ済みに変更することができます。

始める前に

「季節性イベント・ルール」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

季節性イベント・ルールは、それらの状態に関連するタブに保管されます。ルールの総数がこれらのタブに表示されます。例えば、「ウォッチ対象」のルールを「アーカイブ」すると、ルールは、季節性イベント・ルール・ポートレットの「ウォッチ対象」タブから「アーカイブ済み」タブに移動し、ルールの総数が更新されます。

ルールについてのパフォーマンス統計が記録されています。パフォーマンス統計を使用すると、デプロイされたルールがトリガーされていること、およびモニター対象ルールが着信イベントのルール一致についての統計を収集していることを確認で

きます。パフォーマンス統計は、季節性イベント・ルールの状態を変更するとリセットされます。

手順

季節性イベント・ルール・ポートレットで季節性イベント・ルールの状態を変更するには、以下のステップを実行します。

1. 季節性イベント・ルールポートレットを開きます。

「季節性イベント・ルール」ポートレットの左側にあるテーブルに、季節性イベント・ルールの構成がリストされ、右側にあるテーブルには、季節性イベント・ルールがリストされます。

2. 季節性イベント・ルールの状態を変更するには、以下のアクションを実行します。

- a. ウォッチ対象の季節性イベント・ルールの状態を変更するには、「ウォッチ対象」タブを選択します。ルール・テーブルからルールを選択します。ルールの状態を変更するには、そのルールを右クリックして、「デプロイ」または「アーカイブ」を選択します。
- b. アクティブな季節性イベント・ルールの状態を変更するには、「アクティブ」タブを選択します。ルール・テーブルからルールを選択します。ルールの状態を変更するには、そのルールを右クリックして、「監視」または「アーカイブ」を選択します。
- c. 有効期限切れの季節性イベント・ルールの状態を変更するには、「有効期限切れ」タブを選択します。ルール・テーブルからルールを選択します。ルールの状態を変更するには、そのルールを右クリックして、「検証」、「監視」、または「アーカイブ」を選択します。
- d. アーカイブ済みの季節性イベント・ルールの状態を変更するには、「アーカイブ済み」タブを選択します。ルール・テーブルからルールを選択します。ルールの状態を変更するには、そのルールを右クリックして、「監視」または「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

季節性イベント・ルールの状態が、その現在の状態から新しい状態に変わります。季節性イベント・ルールの新しい状態を反映して、ルールの総数が更新されます。

イベントのリストへのルール・アクションの適用

季節性イベント・ルールを作成するときに、定義済みアクションをイベントのリストに適用できます。

始める前に

季節性イベントの表示ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

「関連イベントの選択」ウィンドウ上のリスト内のイベントの 1 つは、「ルールの作成」ダイアログ・ボックスを起動するときに選択した季節性イベントです。作成

したルールが起動される場合、ルールは、選択した季節性イベントおよび関連イベントに対して起動されます。ルールは季節性イベントに対して起動されるため、「関連イベントの選択」ウィンドウに表示されている関連イベントのリストからこの季節性イベントを選択解除することはできません。

手順

定義済みアクションが適用されるイベントのリストを選択するには、以下のステップを実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルで特定の構成または「**ALL**」を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「ルールの作成」を選択します。
5. すべての関連イベントを選択するには、以下のようになります。
 - a. 「ルールの作成」ページの「イベント選択」ペインで、「すべての関連イベントを選択」チェック・ボックスをクリックします。
6. あるいは、1 つ以上の関連イベントを選択するには、以下のようになります。
 - a. 「ルールの作成」ページの「イベント選択」ペインで、「編集の選択...」コントロール・ボタンをクリックします。「関連イベントの選択」ウィンドウが表示されます。「ルールの作成」ダイアログ・ボックスを起動するときを選択した季節性イベントには、選択解除できないチェック・マークが付いていることに注意してください。
 - b. 「関連イベントの選択」ウィンドウに表示されたリストから 1 つ以上の関連イベントを選択します。
 - c. 「**OK**」をクリックします。
7. 変更内容を保存するには、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - a. ルールをデプロイする前にそのパフォーマンスをモニターする場合は、「監視」を選択します。
 - b. ルールをアクティブにするには、「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

更新された季節性イベント・ルールが保存され、選択した関連イベントに定義済みアクションが適用されます。

イベントの列値の設定

ルールのアクションを設定する際に、イベントの列値を設定できます。

始める前に

季節性イベントの表示ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

列値を設定するには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。

2. 構成テーブルで特定の構成または「**ALL**」を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「ルール作成」を選択します。
5. 「指定の時間枠でイベントが発生した場合のアクション」ペインで、以下のオプションから選択します。
 - a. イベントを抑止する列値を設定するには、「列値の設定」チェック・ボックスを選択し、「イベントが発生した場合にアクションを実行」の「列値の設定」ボタンをクリックします。
 - b. イベントを抑止解除する列値を設定するには、「列値の設定」チェック・ボックスを選択し、「アクションを実行するまでの時間」の「列値の設定」ボタンをクリックします。
6. 「列値の設定」ページで、ObjectServer 列に値を入力します。
 - a. 「正符号 (+)」および「負符号 (-)」ボタンを使用して、列を追加または削除できます。
7. 列値を保存するには、「**OK**」をクリックします。
8. 季節性イベント・ルールを保存するには、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - a. ルールをデプロイする前にそのパフォーマンスをモニターする場合は、「監視」を選択します。
 - b. ルールをアクティブにするには、「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

列値を変更した季節性イベント・ルールが保存されます。

イベントの抑止および抑止解除のための NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルの更新

イベントを抑止または抑止解除するには、抑止するイベントや抑止を解除するイベントに関する詳細を NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルに追加する必要があります。

このタスクについて

イベントの抑止および抑止解除に関する詳細情報を追加するには、
<Impact_install_location>/bin ディレクトリーにある NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルを変更する必要があります。

手順

1. IBM Tivoli Netcool/Impact が格納され実行されているサーバーにログインします。
2. <Impact_install_location>/bin ディレクトリーに移動します。
3. 以下のコマンドを入力します。./nci_trigger <server_name>
<UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Export FILENAME <Full Path to the file name><name_of_propsfile>

<server_name>

Netcool/Impact が保管され実行されているサーバーの名前を指定します。

<UserID>

Netcool/Impact ユーザーの ID を指定します。

<password>

Netcool/Impact ユーザーのパスワードを指定します。

<Full Path to the file name><name_of_propsfile>

NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルが存在するディレクトリーを指定します。ディレクトリーの指定には、NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルの名前が含まれます。

例:

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Configure  
/tmp/bin/noi_def_values.props
```

4. NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルに、次のテキスト行を追加します。

```
seasonality.supressevent.column.name=SuppressEsc1  
seasonality.supressevent.column.type=NUMERIC  
seasonality.supressevent.column.value=4  
seasonality.unsupressevent.column.name=SuppressEsc1  
seasonality.unsupressevent.column.type=NUMERIC  
seasonality.unsupressevent.column.value=0
```

5. NOI_DefaultValues プロパティ・ファイルを更新するために、次のコマンドを実行します。

```
./nci_trigger <server_name> <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Configure  
FILENAME <Full Path to the file name><name_of_propsfile>
```

例:

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Configure  
FILENAME /tmp/bin/noi_def_values.props
```

季節性イベント・グラフ

季節性イベント・グラフには、季節性イベントの棒グラフと信頼性レベル・イベントしきい値が表示されます。

「季節性イベント・グラフ」ポートレットは、以下の 4 つのグラフで構成されています。

- 分 イベントが発生した分数。
- 時間 イベントが発生した時間数。
- 曜日 イベントが発生した曜日の数。
- 日付 イベントが発生した日数。

グラフ内のデータの信頼性レベルは、以下の 3 とおりの方法で表示されます。

1. 各グラフの上部に、各グラフの全体的な分布スコアが高 (赤)、中 (オレンジ)、または低 (緑) として表示されます。
2. グラフ上で、イベントの偏差度が高 (赤) と中 (オレンジ) の季節性しきい値の線で示されます。

3. それぞれのバーの最大信頼性レベルが高 (赤)、中 (オレンジ)、または低 (緑) と表示されます。

信頼性レベルのデフォルトのしきい値は以下のとおりです。

- 高: 99 から 100%
- 中: 95 から 99%
- 低: 0 から 95%

グラフの信頼性レベルのデフォルトのしきい値を変更する方法については、185 ページの『季節性イベント・グラフの信頼性しきい値の編集』を参照してください。

グラフについて

4 つの 季節性イベント・グラフによって、イベントの季節性が示されます。これらのグラフは、それぞれ独立した観測値を表します。例えば、「時間」グラフでは午後 5 時が高信頼性として示され、「分」グラフでは 35 分が高信頼性として示される場合、すべてのイベントが必ずしも午後 5 時 35 分に発生することを意味しているわけではありません。午後 5 時という値には、他の分の値も含まれている場合があります。

注: 場合によっては、「分」が高信頼性レベルとして示されていても、季節性の全体的な信頼性レベルは低いことがあります。これは、モニターのポーリング周期が原因で、上位の統計に分が含まれていないからです。

注: 場合によっては、グラフのどのバーも赤のゾーンに到達していない場合でも、グラフの全体的な信頼性レベルが高と示されることがあります。例えば、高負荷とピーク時間が原因でシステム障害が発生したが、これらの時間以外には障害が発生しなかった場合などが考えられます。

季節性イベント・グラフの「カウント」は、各グラフで記録された観測値の数を表します。それぞれの分、時、日、および日付範囲について、最大 1 つの観測値があります。このため、カウントはグラフごとに異なる場合があります。例えば、あるイベントが以下の時刻に発生したとします。

2013 年 6 月 1 日の午前 10 時 31 分

2013 年 6 月 2 日の午前 10 時 31 分

2013 年 6 月 2 日の午前 10 時 35 分

この場合、午前 10 時の観測値のカウントは 2、31 分の観測値のカウントは 2、35 分の観測値のカウントは 1 となります。

季節性イベントの季節性イベント・グラフの表示

「季節性イベントの表示」ポートレットに表示される季節性イベントについての季節性イベント・グラフを表示できます。

始める前に

季節性イベントの表示ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

季節性イベント・グラフを表示するには、以下のステップを実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルで特定の構成または「**ALL**」を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「季節性イベント・グラフの表示」を選択します。

タスクの結果

季節性イベント・グラフ・ポートレットに、選択した季節性イベントの棒グラフと信頼性レベルが表示されます。グラフとしきい値レベルについて詳しくは、181 ページの『季節性イベント・グラフ』のトピックを参照してください。

季節性グラフからの履歴上のイベントの表示

季節性グラフから履歴上のイベントのリストを表示できます。

始める前に

季節性イベントの表示ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

季節性グラフから履歴上のイベントのリストを表示するには、以下のステップを実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルで特定の構成または「**ALL**」を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「季節性イベント・グラフの表示」を選択します。
5. 「季節性イベント・グラフ」タブでは、季節性イベントの履歴上のイベントをすべて表示するように選択したり、グラフのバーを選択して履歴上のイベントをフィルタリングしたりすることができます。
 - a. 季節性イベントの履歴上のイベントをすべて表示するには、「アクション」ドロップダウン・リストで「履歴上のイベントの表示」を選択します。
 - b. 特定の時間についての履歴上のイベントを表示するには、**Ctrl** キーを押したまま、グラフ内の特定のバーをクリックします。「アクション」ドロップダウン・リストで「選択したバーの履歴上のイベントの表示」を選択します。

1 つのグラフから選択された複数のバーは、OR 条件によってフィルタリングされます。例えば、「時間」グラフで 9am または 5pm のバーを選択した場合、9am から 10am までに発生したすべてのイベントと、5pm から 6pm までに発生したすべてのイベントが、「履歴上のイベント」ポートレットに表示されます。

複数のグラフから選択された複数のバーは、AND 条件でフィルタリングされます。例えば、「時間」グラフで 9am のバーを選択し、「曜日」グラフで月曜日を選択した場合、月曜日の 9am から 10am までに発生したすべてのイベントが、「履歴上のイベント」ポートレットに表示されます。

タスクの結果

「履歴上のイベント」ポートレットに、履歴上のイベントがリストされます。

特定の季節性イベントについての季節性イベント・グラフの Microsoft Excel へのエクスポート

特定の季節性イベントについての季節性イベント・グラフを、サポート対象ブラウザーから Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートできます。

始める前に

「季節性イベントの表示」ポートレットに表示される季節性イベントについての季節性イベント・グラフを表示します。「季節性イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに ncw_analytics_admin 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

季節性イベント・グラフを Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートすることに加えて、履歴上のイベントのデータおよび選択した季節性イベントの季節性イベント・データと信頼性レベルもエクスポートします。現在、季節性イベント・グラフのみをエクスポートする方法はありません。

手順

特定の季節性イベントの季節性イベント・グラフを Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「季節性イベント・グラフの表示」を選択します。
5. 「アクション」メニューから、「季節性イベント・グラフのエクスポート」を選択します。しばらくすると、「エクスポート結果のダウンロード」リンクが表示されます。
6. リンクをクリックして Microsoft Excel ファイルをダウンロードし、保存します。

タスクの結果

この Microsoft Excel ファイルには、以下のタブのあるスプレッドシートが含まれています。

- **Seasonal Data:** このタブには、選択した季節性イベントの季節性イベント・データおよび信頼性レベルが格納されています。

- **Seasonality Charts:** このタブには、選択した季節性イベントの季節性イベント・グラフが格納されています。
- **Historical Events:** このタブには、選択した季節性イベントの履歴上のイベント・データが格納されています。
- **Export Comments:** このタブには、エクスポートに関するコメントが通知のために格納されています (例えば、スプレッドシートの見出しが切り捨てられている場合や、スプレッドシートの行が切り捨てられている場合などです)。

グラフとしきい値レベルについて詳しくは、181 ページの『季節性イベント・グラフ』のトピックを参照してください。

季節性イベント・グラフの信頼性しきい値の編集

季節性イベント・グラフのデフォルトの信頼性レベルしきい値は、編集することができます。

このタスクについて

グラフ内のデータの信頼性レベルは、以下の 2 とおりの方法で表示されます。

1. 各グラフの上部に、各グラフの全体的な分布スコアが高 (赤)、中 (オレンジ)、または低 (緑) として表示されます。
2. グラフ上で、イベントの偏差度が高 (赤) と中 (オレンジ) の季節性しきい値の線で示されます。
3. それぞれのバーの最大信頼性レベルが高 (赤)、中 (オレンジ)、または低 (緑) として表示されます。

信頼性レベルのデフォルトのしきい値は以下のとおりです。

- 高: 99 から 100%
- 中: 95 から 99%
- 低: 0 から 95%

グラフの信頼性レベルのデフォルトのしきい値を変更する方法については、『季節性イベント・グラフの信頼性しきい値の編集』を参照してください。

手順

デフォルトの信頼性レベルしきい値を編集するには、以下の手順を実行します。

1. コマンド行インターフェースからプロパティ・ファイルを生成するため、以下のコマンドを使用します。

```
nci_trigger server <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Export
FILENAME directory/filename
```

ここで、

SERVER

Event Analytics がインストールされているサーバー。

<UserID>

Event Analytics ユーザーのユーザー名。

<password>

Event Analytics ユーザーのパスワード。

directory

ファイルが保管されているディレクトリー。

filename

プロパティー・ファイルの名前。

例えば、次のようにします。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Export
FILENAME
/tmp/seasonality.props
```

- 信頼性レベルしきい値を変更するには、以下のパラメーターのデフォルト値を編集します。

- level_threshold_high = 99
- level_threshold_medium = 95
- level_threshold_low = 0

注: 他のプロパティー値は、生成されたプロパティー・ファイルによって上書きされます。他のプロパティー値を更新することが必要な場合があります。プロパティーの完全なリストについては、236 ページの『生成されたプロパティー・ファイル』を参照してください。

- 変更したプロパティー・ファイルを Netcool/Impact にインポートするため、以下のコマンドを使用します。

```
nci_trigger SERVER <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME
directory/filename
```

例えば、次のようにします。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME
/tmp/seasonality.props
```

履歴上のイベント

「履歴上のイベント」ポートレットに表示されるテーブルに、1 つ以上の季節性イベントの履歴上のイベントのリストを表示できます。関連付けられた季節性イベントの履歴上のイベントのリストに関連付けられたデータを、スプレッドシートにエクスポートすることもできます。

「履歴上のイベント」ポートレットには、以下のデフォルト列を含むテーブルが表示されます。

Summary

履歴上のイベントの説明を表示します。

ノード

履歴上のイベントの生成元の管理対象エンティティーを表示します。管理対象エンティティーは、デバイスまたはホストの名前、サービス名、またはその他のエンティティーである場合があります。

重大度

履歴上のイベントの重大度を表示します。以下のリストは、「重大度」列に表示される可能性がある値を示しています。

- 0: クリア
- 1: 不確定
- 2: 警告
- 3: 軽微
- 4: 重要
- 5: 重大

最初の発生

履歴上のイベントが作成されたか、最初に発生した日時を表示します。日付は、月、日、年 として表されます。時刻は、時:、分:、秒 として表されます。時刻では、AM または PM のどちらであるかも示されます。例えば、Apr 13, 2015 4:45:17 PM です。

LastOccurrence

履歴上のイベントが最後に更新された日時を表示します。日付は、月、日、年 として表されます。時刻は、時:、分:、秒 として表されます。時刻では、AM または PM のどちらであるかも示されます。例えば、Jun 2, 2015 5:54:49 PM です。

確認済

履歴上のイベントが確認されたかどうかを示します。

- 0: いいえ
- 1: はい

履歴上のイベントは、手動で確認するか、相関ルールを設定して自動的に確認することができます。

Tally 季節性イベントに関連付けられた履歴上のイベントの数の自動的に保守されたカウントを表示します。

季節性イベントの履歴上のイベントの表示

季節性イベントの履歴上のイベントのリストは、「履歴上のイベント」ポートレットに表示されるテーブル内に表示できます。

始める前に

「季節性イベントの表示」ポートレットに、履歴上のイベントのリストが必要な季節性イベントを表示します。「季節性イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

季節性イベントの履歴上のイベントのリストを表示するには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成または「**ALL**」を選択します。

3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「履歴上のイベントの表示」を選択します。

タスクの結果

「履歴上のイベント」ポートレットに表示されるテーブルに、履歴上のイベントがリストされます。

履歴上のイベント・データのエクスポート

履歴上のイベント・データは、Firefox または Internet Explorer からスプレッドシートにエクスポートできます。

始める前に

最初に「季節性イベントの表示」ポートレットに、履歴上のイベントのリストが必要な季節性イベントを表示します。「季節性イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

履歴上のイベント・データをエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成または「**ALL**」を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「履歴上のイベントの表示」を選択します。
「履歴上のイベント」ポートレットに表示されるテーブルに、履歴上のイベントがリストされます。
5. 「履歴上のイベント」ポートレットに表示されるテーブルから、1 つ以上の履歴上のイベントを選択します。
6. 選択された履歴上のイベントをコピーするには、以下のようになります。
 - a. Firefox の場合、表示されたクリップボードからデータをコピーするには、「**Ctrl+C**」をクリックしてから「**Enter**」をクリックします。
 - b. Internet Explorer の場合、表示されたクリップボードからデータをコピーするには、選択された履歴上のイベントを右クリックして、ドロップダウン・メニューから「コピー **Ctrl+C**」を選択します。
7. 履歴上のイベント・データをスプレッドシートに貼り付けます。

特定の季節性イベントについての履歴上のイベント・データの Microsoft Excel へのエクスポート

特定の季節性イベントについての履歴上のイベント・データを、サポート対象ブラウザから Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートできます。

始める前に

最初に「季節性イベントの表示」ポートレットに、履歴上のイベントのリストが必要な季節性イベントを表示します。「季節性イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

履歴上のイベント・データを Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートすることに加えて、季節性イベントのグラフおよび選択した季節性イベントの季節性イベント・データと信頼性レベルもエクスポートします。現在、履歴上のイベント・データのみをエクスポートする方法はありません。

手順

履歴上のイベント・データを Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成を選択します。
3. イベント・テーブルから季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「季節性イベント・グラフの表示」を選択します。
5. 「アクション」メニューから、「季節性イベント・グラフのエクスポート」を選択します。しばらくすると、「エクスポート結果のダウンロード」リンクが表示されます。
6. リンクをクリックして Microsoft Excel ファイルをダウンロードし、保存します。

タスクの結果

この Microsoft Excel ファイルには、以下のタブのあるスプレッドシートが含まれています。

- **Seasonal Data:** このタブには、選択した季節性イベントの季節性イベント・データおよび信頼性レベルが格納されています。
- **Seasonality Charts:** このタブには、選択した季節性イベントの季節性イベント・グラフが格納されています。
- **Historical Events:** このタブには、選択した季節性イベントの履歴上のイベント・データが格納されています。
- **Export Comments:** このタブには、エクスポートに関するコメントが通知のために格納されています (例えば、スプレッドシートの見出しが切り捨てられている場合や、スプレッドシートの行が切り捨てられている場合など)。

関連イベント

関連イベント機能を使用すると、過去に関連性のあるイベントを特定して表示し、選択された相関ルールをデプロイすることができます。これらの相関ルールは、関連イベントの構成から導出されます。関連イベント・グループに基づいてパターンを作成できます。パターンは、リソースに固有であるグループ内のイベントに適用されますが、いずれのリソースに対しても適用されます。

関連イベント機能は、3 つのポートレットからアクセス可能です。

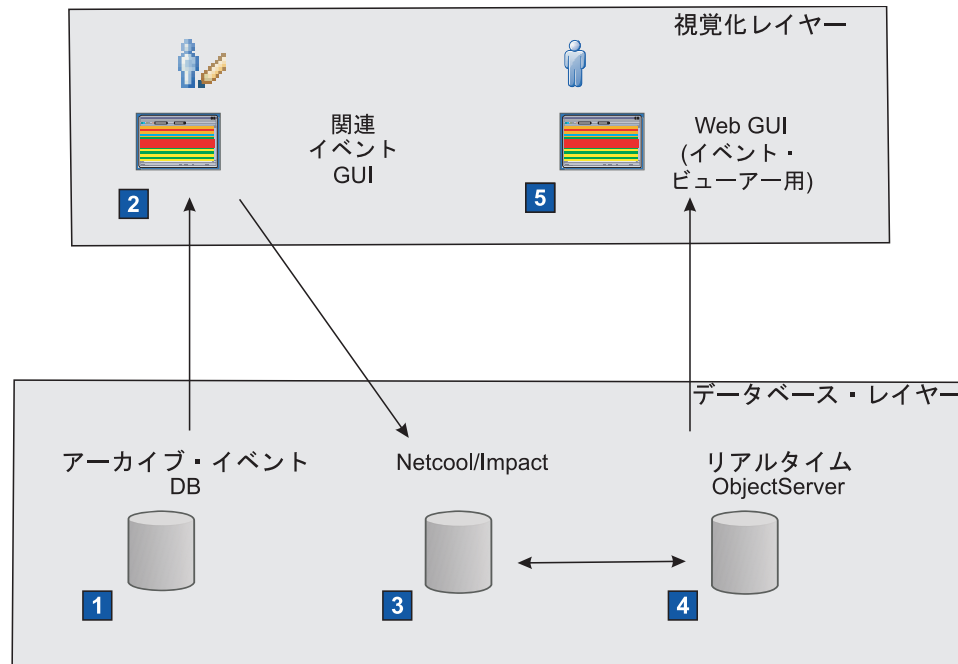
- 分析の構成ポートレット。このポートレットを使用して、関連イベントの構成を作成、変更、実行、および削除します。
- 関連イベントの表示ポートレット。このポートレットを使用して、関連イベントの構成から導出されたイベントおよびイベント・グループをレビューし、相関ルールをデプロイします。
- 関連イベントの詳細ポートレット。このポートレットを使用して、イベントやイベント・グループについての詳細情報にアクセスします。

「関連イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

関連イベント機能は、ユーザーが選択したイベント・データベース列と共にアルゴリズムを使用してイベント間の関係を決定します。

関連イベントによって、過去のイベント・ストリーム内で同時に出現するシグニチャーおよびパターンが検出されます。このディスカバリーによって、対象分野の専門家は、検出されたシグニチャーを容易にレビューして関連イベントの構成から相関ルールを導出できます。相関トリガーや相関ポリシーを記述する必要はありません。

以下の図は、関連イベント機能のコンポーネント間の関係を示しています。



- 1 Netcool/OMNibus は、リアルタイム・イベントをアーカイブ・イベント・データベースに継続的にアーカイブします。
- 2 管理者が関連イベントの構成を作成します。この構成では、アーカイブ・データベースの関連イベントを識別し、グループ化して、相関ルールを導き出します。管理者は、このルールを監視してデプロイするか、このルールを自動的にデプロイする構成を作成します。
- 3 デプロイされた相関ルールから、Netcool/Impact ポリシーが自動的に作成されます。
- 4 Netcool/Impact ポリシーによって、リアルタイム・イベントに対してアクションが実行され、親の合成イベントの下で子イベントがグループ化されます。
- 5 イベント・ビューアーでオペレーターに表示されるイベントの数が減ります。

図 8. 関連イベント・アーキテクチャの概要

関連イベントの処理

関連イベントの表示ポートレットを使用して、関連イベントの構成から導出された関連イベントおよび関連イベントのグループを処理します。

「関連イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

関連イベントの表示ポートレットの「新規」、「監視対象」、「アクティブ」、「有効期限切」、または「アーカイブ済み」タブには、関連イベントに関する情報が 3 つのテーブルに表示されます。

「構成」テーブル。「すべて」コンテナーが表示されます。このコンテナーを展開すると、関連イベント構成のリストが表示されます。

「グループ」テーブル。すべての関連イベント・グループが表示されるか、選択した構成の関連イベント・グループが表示されます。

「イベント」テーブル。すべての関連イベントが表示されるか、選択した構成または選択したグループの関連イベントが表示されます。

テーブル内でグループ、構成、または「すべて」コンテナを右クリックすると、メニューが表示されます。このメニューには、以下のアクションのいくつかが選択対象としてリストされます。

「監視」。このアクションについて詳しくは、208 ページの『[関連ルール](#)の監視』を参照してください。

「デプロイ」。このアクションについて詳しくは、209 ページの『[関連ルール](#)のデプロイ』を参照してください。

「アーカイブ」。このアクションについて詳しくは、204 ページの『[関連イベント](#)のアーカイブ』を参照してください。

「削除」。このアクションは、「アーカイブ済み」タブ内からのみ選択できます。システムからイベント・グループを削除する場合は、このアクションを選択します。

「パフォーマンス統計のリセット」。このアクションについて詳しくは、210 ページの『[関連ルール](#)のパフォーマンス統計の表示』を参照してください。

「新規」。このアクションは、「アーカイブ済み」タブ内からのみ選択できます。このアクションを選択すると、選択した行が「新規」タブに戻ります。

「コピー」。このアクションは、行をコピーする場合に選択します。コピーした行は、他の文書に貼り付けることができます。

関連イベントの表示ポートレットの「新規」、「監視対象」、「アクティブ」、「有効期限切」、または「アーカイブ済み」の各タブには、関連イベントに関する情報が 4 つのテーブルに表示されます。

「構成」テーブル

関連イベント構成のリストを表示します。

「グループ・ソース」テーブル

構成および作成されたパターンに基づいて関連イベント・グループのソース情報を表示します。

「グループ」テーブル

選択した構成の関連イベント・グループが表示されます。

「イベント」テーブル

選択した構成または選択したグループの関連イベントが表示されます。

「グループ・ソース」、「グループ」、および「イベント」の各テーブルにリストされる情報は、「構成」テーブルで選択した構成に基づいて更新されます。「グループ」および「イベント」の各テーブルにリストされる情報は、「グループ・ソース」テーブルで選択したグループ・ソースに基づいて更新されます。「イベント」テーブルは、「グループ」テーブルのグループを選択すると、さらにフィルターに掛けられます。

「構成」テーブルで構成を右クリックして、メニュー項目のリストを表示します。メニュー・リストから次のアクションを選択できます。

「監視」。このアクションについて詳しくは、208 ページの『[関連ルール](#)の監視』を参照してください。

「デプロイ」。このアクションについて詳しくは、209 ページの『[関連ルール](#)のデプロイ』を参照してください。

「アーカイブ」。このアクションについて詳しくは、204 ページの『関連イベントのアーカイブ』を参照してください。

「コピー」。このアクションは、行をコピーする場合に選択します。コピーした行は、他の文書に貼り付けることができます。

「グループ・ソース」テーブルでパターンを右クリックして、メニュー項目のリストを表示します。メニュー・リストから次のアクションを選択できます。

「パターンの編集」。このアクションについて詳しくは、218 ページの『既存のパターンの編集』を参照してください。

「パターンの削除」。このアクションについて詳しくは、219 ページの『既存のパターンの削除』を参照してください。

「コピー」。このアクションは、行をコピーする場合に選択します。コピーした行は、他の文書に貼り付けることができます。

「グループ」テーブルでグループ名を右クリックして、メニュー項目のリストを表示します。メニュー・リストから次のアクションを選択できます。

「詳細の表示」。このアクションについて詳しくは、194 ページの『季節性イベントの関連イベントの詳細の表示』を参照してください。

「パターンの作成」。このアクションについて詳しくは、211 ページの『パターンの作成』を参照してください。

「レビュー済みのマークを解除」。このアクションについて詳しくは、195 ページの『関連イベント・グループへのレビュー済みのマーク付け』を参照してください。

「レビュー済みとしてマーク」。このアクションについて詳しくは、195 ページの『関連イベント・グループへのレビュー済みのマーク付け』を参照してください。

「監視」。このアクションについて詳しくは、208 ページの『関連ルールの監視』を参照してください。

「デプロイ」。このアクションについて詳しくは、209 ページの『関連ルールのデプロイ』を参照してください。

「アーカイブ」。このアクションについて詳しくは、204 ページの『関連イベントのアーカイブ』を参照してください。

「削除」。このアクションは、「アーカイブ済み」タブ内からのみ選択できます。システムからイベント・グループを削除する場合は、このアクションを選択します。

「パフォーマンス統計のリセット」。このアクションについて詳しくは、210 ページの『関連ルールのパフォーマンス統計の表示』を参照してください。

「新規」。このアクションは、「アーカイブ済み」タブ内からのみ選択できます。このアクションを選択すると、選択した行が「新規」タブに戻ります。

「コピー」。このアクションは、行をコピーする場合に選択します。コピーした行は、他の文書に貼り付けることができます。

「イベント」テーブルでイベントを右クリックして、メニュー項目のリストを表示します。メニュー・リストから次のアクションを選択できます。

「詳細の表示」。このアクションについて詳しくは、『季節性イベントの関連イベントの詳細の表示』を参照してください。

「コピー」。このアクションは、行をコピーする場合に選択します。コピーした行は、他の文書に貼り付けることができます。

関連イベントの表示ポートレット内では、以下のタイプのタスクも実行できます。

- 関連イベント表示します。
- 関連イベントをグループ別に表示します。
- 関連イベント・ビューをソートします。
- デプロイした関連ルールのパフォーマンス統計を表示します。

関連イベントの詳細ポートレット内では、以下のタイプのタスクも実行できます。

- ピボット・イベントを変更します。
- 関連ルールおよび関連イベントを処理します。
- 関連ルールを形成するイベントを表示します。
- 関連ルールの根本原因イベントを選択します

関連イベントの表示

「関連イベントの表示」ポートレットで、実行された関連イベント構成によって決定される関連イベントのリストを表示することができます。

手順

1. ncw_analytics_admin 役割を持つユーザーとして Dashboard Application Services Hub にログインします。
2. Dashboard Application Services Hub のナビゲーション・メニューで、「見通し」メニューを選択します。
3. 「分析の表示」で「関連イベントの表示」を選択します。
4. デフォルトでは、「関連イベントの表示」ポートレットで「新規」タブが開きます。このタブには、状況が「新規」になっている関連イベントがリストされます。

次のタスク

別の状況の関連イベントを表示する場合は、「関連イベントの表示」ポートレットのツールバーで、該当するツールバー・ボタンを選択します。

季節性イベントの関連イベントの詳細の表示

季節性イベントの関連イベントの詳細は、関連イベントの詳細ポートレットで表示できます。

始める前に

季節性イベント・ルール・ポートレットにアクセスするには、ユーザーに ncw_analytics_admin 役割が割り当てられている必要があります。

手順

季節性イベントの履歴上のイベントのリストを表示するには、以下のステップを実行します。

1. 季節性イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルで特定の構成または「**ALL**」を選択します。
3. イベント・テーブルで季節性イベントを選択します。
4. 季節性イベントを右クリックして、「関連イベントの詳細の表示」を選択します。

タスクの結果

関連イベントの詳細ポートレットに、関連イベントの詳細が表示されます。

グループ別の関連イベントの表示

関連イベントのリスト全体から、特定のグループに関連付けられた関連イベントのみ表示することができます。

このタスクについて

関連イベント構成には、1 つまたは複数の関連イベント・グループを含めることができます。関連イベント・グループは関連イベント構成で判別され、関連イベント・グループは 1 つ以上の関連イベント構成の子にすることができます。

手順

1. 関連イベントの表示 ポートレットを開始し、194 ページの『関連イベントの表示』を参照してください。
2. いずれかのタブの「構成」テーブルで、ルート・ノードである「すべて」を展開します。関連イベント構成のリストが表示されます。
3. 「構成」テーブルで、関連イベント構成を選択します。関連イベント・グループのリストが「グループ」テーブルに表示され、関連イベントが「イベント」テーブルに表示されます。
4. 「構成」テーブルで、関連イベント構成を選択します。関連イベント・グループのリストが「ソースのグループ化」テーブルおよび「グループ」テーブルに表示され、関連イベントが「イベント」テーブルに表示されます。
5. 「グループ」テーブルでグループを選択します。「イベント」テーブルが更新され、選択したグループに関連付けられているイベントだけが表示されます。

関連イベント・グループへのレビュー済みのマーク付け

関連イベント・グループのレビュー状況を、「関連イベントの表示」ポートレットで更新できます。

このタスクについて

「関連イベントの表示」ポートレットのグループ・テーブルで、関連イベント・グループのレビュー状況を変更できます。表示されるレビュー状況の値は、関連イベント・グループがレビュー済みかどうかを管理者に示します。

「関連イベントの表示」ポートレットの「グループ」テーブルで、関連イベント・グループのレビュー状況を変更できます。表示されるレビュー状況の値は、関連イベント・グループのレビュー状況を管理者に示します。

関連イベント・グループに、これらのレビュー状況の値を表示できます。

「はい」。グループはレビュー済みです。

「いいえ」。グループはレビューされていません。

関連イベント・グループにレビュー済みまたはレビュー未実行のマークを付けるには、以下の手順に従います。

手順

1. 関連イベントを表示します。 194 ページの『関連イベントの表示』を参照してください。
2. 「関連イベントの表示」ポートレットのグループ・テーブルで、グループを示す行項目を選択し、右クリックします。メニューが表示されます。
3. メニューから「レビュー済みとしてマーク」または「レビュー済みのマークを解除」を選択します。成功メッセージが緑のダイアログ・ボックスに表示されます。

タスクの結果

「レビュー済み」列の値が、次のいずれかの値に更新されます。「はい」、「いいえ」。

グループ・テーブルのソートを有効にした場合、「はい」または「いいえ」の値でソートできます。

関連イベント・ビューのソート

関連イベント・ビュー内では、表示されている情報をソートすることができます。

始める前に

「関連イベントの表示」ポートレットで、ソートを適用するタブ・ビューを選択します。

このタスクについて

「構成」テーブル、「グループ」テーブル、「イベント」テーブルでは、1 つの列でソートすることも、複数の列でソートすることもできます。テーブルの列見出しに表示されているソート矢印を使用して、「グループ」テーブルまたは「イベント」テーブルのソートを単独で実行したり並行して実行したりすることができます。「構成」テーブル内でソートを適用すると構成の階層が表示されなくなりますが、ソートを解除すると、構成の階層が再表示されます。ロールアップの詳しい情報については、142 ページの『ロールアップ構成の更新』を参照してください。

「構成」テーブル、「ソースのグループ化」テーブル、「グループ」テーブル、「イベント」テーブルでは、1 つの列でソートすることも、複数の列でソートすることもできます。テーブルの列見出しに表示されているソート矢印を使用して、「グループ」テーブルまたは「イベント」テーブルのソートを単独で実行したり並

行して実行したりすることができます。「構成」テーブル内でソートを適用すると構成の階層が表示されなくなりますが、ソートを解除すると、構成の階層が再表示されます。ロールアップの詳しい情報については、142 ページの『ロールアップ構成の更新』を参照してください。

手順

1. 「構成」テーブル、「グループ」テーブル、「イベント」テーブルのいずれかで、列見出しにマウス・カーソルを移動します。矢印が表示されたら、その矢印にマウス・カーソルを移動します。以下のいずれかのソート・オプションが表示されます。
 - クリックして昇順にソート
 - クリックして降順にソート
 - この列をソートしない
2. 「構成」テーブル、「ソースのグループ化」テーブル、「グループ」テーブル、「イベント」テーブルのいずれかで、列見出しにマウス・カーソルを移動します。矢印が表示されたら、その矢印にマウス・カーソルを移動します。以下のいずれかのソート・オプションが表示されます。
 - クリックして昇順にソート
 - クリックして降順にソート
 - この列をソートしない
3. ソート・オプションを選択して適用するには、そのソート・オプションを左クリックします。別のいずれかのソート・オプションを表示して適用するには、2 回目または 3 回目の左クリックを行います。
4. 複数の列でソートするには、ソート・オプションを他の列見出しに適用します。ソートはすべての列に適用できるため、複数列でのソートに制限はありません。

タスクの結果

列見出しにカーソルを移動すると、適用したソート・オプションの順序が表示されます。適用したソート・オプションはポートレット・セッション全体で保持されるわけではないため、ポートレットを閉じると、適用したソート・オプションは無効になります。

関連イベントのフィルタリング

フィルター機能は、関連イベントの表示ポートレット内の関連イベントのリストに対して使用できます。

手順

1. 関連イベントの表示 ポートレットを開始し、194 ページの『関連イベントの表示』を参照してください。
2. ツールバー内のフィルター・テキスト・ボックスに、使用するフィルター・テキストを入力します。入力するとフィルタリングが開始されます。

タスクの結果

イベント・リストのイベントが減少し、表示される少なくとも 1 つの列でフィルター・テキストと一致するイベントのみがリストされます。

次のタスク

フィルター・テキストをクリアするには、フィルター・テキスト・ボックスで「x」をクリックします。フィルター・テキストをクリアすると、イベント・リストにすべてのイベントが表示されます。

特定の構成についての関連イベントの **Microsoft Excel** へのエクスポート

特定の構成についての関連イベントを、サポート対象ブラウザから Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートできます。

始める前に

1 つ以上の構成の関連イベントを、「関連イベントの表示」ポートレットに表示します。「関連イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

特定の構成についての関連イベントを Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. 関連イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成を選択します。
3. ツールバーの「関連イベントのエクスポート」ボタンをクリックします。しばらくすると、「エクスポート結果のダウンロード」リンクが表示されます。
4. リンクをクリックして Microsoft Excel ファイルをダウンロードし、保存します。

タスクの結果

この Microsoft Excel ファイルには、以下のタブのあるスプレッドシートが含まれています。

- **Report Summary:** このタブには、選択した構成のサマリー・レポートが含まれています。
- **Groups Information:** このタブには、選択した構成の関連イベント・グループが含まれています。
- **Groups Instances:** このタブには、選択した構成のすべての関連イベント・グループについての、すべての関連イベント・インスタンスが含まれています。
- **Group Events:** このタブには、選択した構成の関連イベント・グループで発生したすべてのイベントのリストが含まれています。
- **Instance Events:** このタブには、選択した構成のすべての関連イベント・グループのすべての関連イベント・インスタンスで発生したすべてのイベントが含まれています。
- **Export Comments:** このタブには、エクスポートに関するコメントが通知のために格納されています (例えば、スプレッドシートの見出しが切り捨てられている場合や、スプレッドシートの行が切り捨てられている場合など)。

選択した関連イベント・グループの **Microsoft Excel** へのエクスポート

特定の構成についての関連イベント・グループを、サポート対象ブラウザから Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートできます。

始める前に

1 つ以上の構成の関連イベントを、「関連イベントの表示」ポートレットに表示します。「関連イベントの表示」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

特定の構成についての関連イベント・グループを Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. 関連イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成を選択します。
3. **Ctrl** キーと選択方式を使用して、複数の関連イベント・グループを選択します。(クリック・アンド・ドラッグ方式を使用して複数の関連イベント・グループを選択することもできます。)
4. 複数の関連イベント・グループを選択した後、選択したグループのいずれかを右クリックして、ツールバーの「選択したグループのエクスポート」ボタンを選択します。しばらくすると、「エクスポート結果のダウンロード」リンクが表示されます。
5. リンクをクリックして Microsoft Excel ファイルをダウンロードし、保存します。

タスクの結果

この Microsoft Excel ファイルには、以下のタブのあるスプレッドシートが含まれています。

- **Report Summary:** このタブには、選択した構成のサマリー・レポートが含まれています。
- **Groups Information:** このタブには、選択した構成の関連イベント・グループが含まれています。
- **Groups Instances:** このタブには、選択した構成のすべての関連イベント・グループについての、すべての関連イベント・インスタンスが含まれています。
- **Group Events:** このタブには、選択した構成の関連イベント・グループで発生したすべてのイベントのリストが含まれています。
- **Instance Events:** このタブには、選択した構成のすべての関連イベント・グループのすべての関連イベント・インスタンスで発生したすべてのイベントが含まれています。
- **Export Comments:** このタブには、エクスポートに関するコメントが通知のために格納されています (例えば、スプレッドシートの見出しが切り捨てられている場合や、スプレッドシートの行が切り捨てられている場合など)。

有効期限が切れた関連イベント

関連イベント・グループの自動有効期限が経過すると、そのグループと関連イベントは、「関連イベントの表示」ポートレットの「有効期限切れ」タブに表示されます。

グループと関連イベントが「有効期限切れ」タブに表示されていても、そのグループが有効期限切れであることを確認する必要があります。「有効期限切れ」タブで、確認するグループを右クリックします。表示されるメニューから、「検証」を選択します。アクティブな構成のデフォルトの自動設定有効期限は 6 カ月です。有効期限を変更する方法については、161 ページの『関連イベント・グループの有効期限の変更』を参照してください。

「有効期限切れ」タブ内の関連イベントに対して他のアクションを実行するには、グループまたはイベントを右クリックして、メニューを表示します。メニューで、実行したいアクションを選択します。

新規にディスカバーされたグループが既存のグループに及ぼす影響

新規にディスカバーされた関連イベント・グループで既存の関連イベント・グループを置換するか、新規にディスカバーされたグループを無視することができます。

以下の箇条書きでは、新規にディスカバーされたグループおよび既存のグループを管理するための Event Analytics 機能について説明します。

- 新規にディスカバーされたグループが、「ウォッチ対象」、「アクティブ」、「有効期限切れ」、または「アーカイブ済み」にある既存のグループのサブセットであるかそれらのグループと同じである場合、Event Analytics は、新規にディスカバーされたグループを無視します。
- 新規にディスカバーされたグループが、「新規」にある既存のグループのスーパーセットである場合、Event Analytics は既存のグループを削除し、新規にディスカバーされたグループを「新規」に表示します。それ以外の場合、既存のグループは変更されません。
- 新規にディスカバーされたグループが、「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」にある既存のグループのスーパーセットである場合、Event Analytics は、その既存のグループを「アーカイブ済み」に移動し、新規にディスカバーされたグループを「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」に表示します。
- 新規にディスカバーされたグループが、「アーカイブ済み」にある既存のグループのスーパーセットである場合、Event Analytics は、新規にディスカバーされたグループを「新規」に追加し、「アーカイブ済み」グループは変更しません。

関連イベントに関する追加の詳細

関連イベントに関するその他の詳細情報にアクセスするには、「関連イベントの詳細」ポートレットを使用します。

「関連イベントの詳細」ポートレットでは、以下のようなタスクを実行できます。

- イベントの発生時刻を表示します。
- 表形式のイベント情報とグラフ形式のイベント情報を切り替えます。
- 関連イベント・グループからイベントを削除する。

開くことができる「関連イベントの詳細」ポートレットのインスタンスは、どの段階でも 1 つだけです。「関連イベントの詳細」ポートレットが既に開いている状態で、「関連イベントの表示」ポートレットでイベントまたはイベント・グループに対して「詳細の表示」を選択すると、「関連イベントの詳細」ポートレット内の詳細情報が最新表示され、選択したイベントまたはイベント・グループが反映されます。

イベントの発生時刻の表示

イベントの発生時刻に関する詳細情報を取得できます。

このタスクについて

イベントの発生時刻を確認したときに、そのイベントを、同じ時刻の前後に発生した他のイベントに関連付けることができる場合があります。特定のイベント・グループの中で、同じイベントが複数回発生する場合があります。例えば、関連イベント・レポートが実行された時間範囲の中でグループが 10 回出現した場合は、そのグループの 10 個のインスタンスが存在します。それらの各グループ・インスタンスでイベントが発生すると、そのイベントは 10 回発生することになります。関連性が強いイベント・グループのイベントはすべてのグループ・インスタンスに出現しますが、関連性が中程度または弱いイベント・グループのイベントはグループ・インスタンスのサブセットに出現する場合があります。この情報は、以下の手順に従って「イベント・グループ・インスタンス・テーブル」の各種インスタンスを切り替えることにより、「関連イベントの詳細」ポートレットで表示することができます。

手順

1. 関連イベントの表示 ポートレットを開始し、194 ページの『関連イベントの表示』を参照してください。
2. 「関連イベントの表示」ポートレットで、イベントを「イベント」テーブルで選択して右クリックするか、イベント・グループを「グループ」テーブルで選択して右クリックします。メニューが表示されます。
3. メニューから、「詳細の表示」を選択します。「関連イベントの詳細」ポートレットが開きます。
4. 「関連イベントの詳細」ポートレットの「イベント」タブに 2 つのテーブルが表示されます。
 - イベント・グループ・インスタンス・テーブル: このテーブルには、イベント・グループの各インスタンスと、そのインスタンスの発生時刻がリストされます。グループ・インスタンスの時刻は、選択したイベントの発生時刻に設定されます。

- 「固有イベント」列には、各グループ・インスタンスの固有イベントの数が表示されます。
- イベント・テーブル: このテーブルには、選択したグループ・インスタンスのイベントと、各イベントの発生時刻がリストされます。
 - 選択したグループ・インスタンスにピボット・イベントが存在しない場合は、「オフセット」列に「適用外」が表示されます。選択したグループ・インスタンスにピボット・イベントが存在する場合は、そのピボット・イベントに関連するオフセット時間が「オフセット」列に表示されます。ピボット・イベントについて詳しくは、205 ページの『ピボット・イベントの変更』を参照してください。
 - 「インスタンス」列には、各イベントが属するグループ・インスタンスの数が表示されます。

次のタスク

「イベント・グループ・インスタンス・テーブル」で、イベント・グループの別のインスタンスを選択します。「イベント・テーブル」に、新しく選択したグループ・インスタンスのイベントが表示されます。

表形式のイベント情報とグラフ形式のイベント情報の切り替え

「関連イベントの詳細」ポートレットでは、イベント情報を表形式で表示することも、グラフ形式で表示することもできます。

このタスクについて

ピボット・イベントとは、ピボット・イベントの発生に関連して関連イベントの発生を推定できる軸として機能するイベントです。ピボット・イベントのイベント分布を表示するには、以下の手順を実行し、「関連イベントの詳細」ポートレットで表形式のイベント情報からグラフ形式のイベント情報に切り替えます。

手順

1. 関連イベントの表示 ポートレットを開始し、154 ページの『現在の分析構成の表示』を参照してください。
2. 「関連イベントの表示」ポートレットで、イベントを「イベント」テーブルで選択して右クリックするか、イベント・グループを「グループ」テーブルで選択して右クリックします。メニューが表示されます。
3. メニューから、「詳細の表示」を選択します。「関連イベントの詳細」ポートレットが開きます。
4. 「関連イベントの詳細」ポートレットの「イベント」タブに 2 つのテーブルが表示されます。

イベント・グループ・インスタンス・テーブル: このテーブルには、イベント・グループの各インスタンスと、そのインスタンスの発生時刻がリストされます。グループ・インスタンスの時刻は、選択したイベントの発生時刻に設定されます。

イベント・テーブル: このテーブルには、選択したグループ・インスタンスのイベントがリストされます。

5. 「イベント」タブのツールバーで、「タイムライン」を選択します。イベント情報がグラフ形式で表示されます。

タイムライン・チャートについて詳しくは、245 ページの『タイムライン・チャートについて』を参照してください。

注: タイムライン・チャートのスケールは、「秒」(s)、「分」(m)、または「時」(h) として表示されます。多数のタイムラインが表示される場合、すべてのタイムラインを表示するために、ユーザーがスクロールダウンしなければならないことがあります。タイムライン・チャートのスケールは、「タイムライン」ビューの上部の適切な位置に固定されています。

タスクの結果

タイムライン・チャートに、グループ内のイベント・タイプごとに、ピボット・イベントに対する相対的なイベント分布が表示されます。タイムライン・チャートのくしはそれぞれイベント・タイプを表し、歯はイベント・タイプのインスタンスの数を表します。ピボット・イベントはくしで表されませんが、ピボット・イベント・インスタンスは常に 0 秒、0 分、または 0 時間の位置にあります。選択状態のイベント・グループ・インスタンスにおいて、それぞれのくしで強調表示されている歯は、ピボット・イベントに対するイベント・タイプ・インスタンスの秒単位、分単位、または時間単位での相対位置を示しています。

タイムライン・チャートのくしの下の変換ラベルが長い場合は切り捨てられます。切り捨てられた変換ラベルにマウス・カーソルを移動すると、変換ラベル全体を示すツールチップが表示されます。

次のタスク

- 多くのイベント・タイプが表示される場合、スクロールのほかにページ編集機能を使用します。ページ編集ツールバーで、表示するページおよびページ・サイズを選択します。
- ピボット・イベントを変更する場合は、205 ページの『ピボット・イベントの変更』を参照してください。
- 表形式のイベント情報に戻すには、「イベント」タブのツールバーで「イベント」を選択します。

関連イベント・グループからのイベントの削除

関連イベント・グループからイベントを削除することができます。

このタスクについて

関連イベント・グループ内の特定のイベントが他のイベントに関連しなくなったことが事実である場合は、そのイベントをイベント・グループから削除することができます。関連イベント・グループからイベントを削除すると、そのイベントは UI と関連プロセスには表示されなくなりますが、システムから削除されるわけではありません。関連イベント・グループからイベントを削除するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「関連イベントの表示」ポートレットで、イベント・グループとイベントを表示します。 194 ページの『関連イベントの表示』と 195 ページの『グループ別の関連イベントの表示』を参照してください。
2. 「関連イベントの表示」ポートレットで、「グループ」テーブルからイベント・グループを選択して右クリックするか、「イベント」テーブルでイベントを選択して右クリックします。メニューが表示されます。
3. メニューから、「詳細の表示」を選択します。「関連イベントの詳細」ポートレットが開きます。
4. 「関連イベントの詳細」ポートレットで、イベント・テーブルの「イベント」タブでイベントを右クリックするか、「相関ルール」タブでイベントを右クリックします。メニューが表示されます。
5. メニューから、「イベントの削除」を選択します。
6. 確認メッセージが表示されたら、「はい」または「いいえ」を選択します。

タスクの結果

イベントがグループから削除され、「イベント」タブのイベント・リストにも、「相関ルール」タブのイベント・リストにも表示されなくなります。

関連イベントのアーカイブ

関連イベント・グループをアーカイブすることによって関連イベントをアーカイブできます。

始める前に

「関連イベントの表示」ポートレットで、イベント・グループとイベントを表示します。 194 ページの『関連イベントの表示』と 195 ページの『グループ別の関連イベントの表示』を参照してください。

このタスクについて

関連イベント・グループ内のイベントが関連しなくなったと思われる場合、そのグループをアーカイブできます。関連イベント・グループをアーカイブするには、以下の手順に従います。

手順

- 関連イベントの表示ポートレット内で関連イベント・グループをアーカイブするには、以下の手順に従います。
 1. 関連イベントの表示ポートレット内で、「新規」、「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」タブを選択します。
 2. 選択したタブの「グループ」テーブルでイベント・グループを選択して右クリックします。メニューが表示されます。
 3. メニューから、「アーカイブ」を選択します。
- 関連イベントの詳細ポートレット内で関連イベント・グループをアーカイブするには、以下の手順に従います。

1. 関連イベントの表示ポートレット内で、「新規」、「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」タブを選択します。
2. 選択したタブの「グループ」テーブルでイベント・グループを選択するか、「イベント」テーブルでイベントを選択して右クリックします。メニューが表示されます。
3. メニューから「詳細の表示」を選択すると、関連イベントの詳細ポートレットが開きます。
4. 関連イベントの詳細ポートレット内の「イベント」または「関連ルール」タブで、「アーカイブ」を選択します。成功メッセージが表示されます。

タスクの結果

関連イベント・グループが関連イベントの表示ポートレットの「アーカイブ済み」タブに移動します。

次のタスク

「アーカイブ済み」タブで、アーカイブ済みグループのリストからグループを選択して右クリックします。メニューが表示され、選択したグループに対して選択できるタスクが示されます。

- 「アーカイブ済み」タブからグループを「新規」タブに移動するには、メニューから「新規」を選択します。「新規」タブ内のグループおよびイベントに対して、さまざまなアクションを実行できます。 191 ページの『関連イベントの処理』を参照してください。
- システムから関連イベント・グループを削除する場合は、メニューから「削除」を選択します。システムから関連イベント・グループを削除する方法は、これ以外にありません。

ピボット・イベントの変更

ピボット・イベントを変更して、関心のある関連イベントを表示することができます。

このタスクについて

ピボット・イベントは、グループ内のイベントのシーケンスを判別するためのベースラインとして使用します。ピボット・イベントは、関連イベントの詳細ポートレット内に表示されます。関連イベントの詳細ポートレット内でピボット・イベントを変更できます。また、最近の 20 件のピボット・イベントからなるピボット・イベント履歴を利用して、再度アクセスすることができます。

- 関連イベントの表示ポートレット内のイベントから関連イベントの詳細ポートレットを開くと、そのイベントが関連イベントの詳細ポートレット内のピボット・イベントになります。
- 関連イベントの表示ポートレット内のグループから関連イベントの詳細ポートレットを開くと、そのグループのイベントの 1 つが関連イベントの詳細ポートレット内のピボット・イベントになります。ピボット・イベントは、常に親イベントであるとは限りません。

ピボット・イベントを変更するには、以下の手順に従います。

手順

1. 関連イベントの表示ポートレット内で、イベントまたはグループを右クリックします。メニューが表示されます。
2. メニューから、「詳細の表示」を選択します。「関連イベントの詳細」ポートレットが開きます。
3. 関連イベントの詳細ポートレットには、ピボット・イベントに関する情報が表示されます。
 - イベント・グループ・インスタンス・テーブルの「ピボット・イベントを含む」列に、グループ・インスタンスがピボット・イベントを持つかどうかが表示されます。
 - イベント・テーブルでは、ピボット・イベントが赤枠で示されます。
 - 「グループ名」項目の横に「ピボット・イベント」リンクが表示されます。ピボット・イベントの詳細を表示するには、「ピボット・イベント」リンクをクリックします。「詳細情報」ウィンドウが開き、ピボット・イベントの詳細が表示されます。
4. 関連イベントの詳細ポートレット内の「イベント」タブの「イベント」テーブルで、ピボット・イベントとして識別するイベントを右クリックします。メニューが表示されます。
5. メニューから、「ピボット・イベントとして設定」を選択します。

タスクの結果

選択したイベントは、赤枠が付いたピボット・イベントになります。タイムライン・チャート、「ピボット・イベント」リンク、「イベント・グループ・インスタンス」テーブル、「イベント」テーブルのデータが更新されます。

次のタスク

関連イベントの詳細ポートレット内で、最近の 20 件のピボット・イベントのいずれかを現在のピボット・イベントとして再選択できます。「イベント」タブ・ツールバーで、前矢印または後矢印を使用して、最近の 20 件のピボット・イベントのいずれかを選択します。

相関ルールおよび関連イベント

相関ルールとは、トリガー条件が満たされた場合、ObjectServer によって受信されるリアルタイム・イベントに対する自動アクションを可能にするメカニズムです。結果として、オペレーターがトラブルシューティングを行うイベント・ビューアー内のイベントの数が少なくなります。

相関ルールをコードで記述するのは複雑ですが、関連イベント機能を使用すれば、管理者が相関ルールのコーディングを行う必要がなくなります。その代わり、関連イベント機能によって関連イベントの構成から相関ルールを導出して相関ルールをデプロイすることを、すべて GUI 操作で実行できます。相関ルールが稼働環境にデプロイされた後、トリガー条件が満たされた場合、自動アクションが発生します。

- Tivoli Netcool/OMNIbus ObjectServer 上での 1 つのイベント・グループからの 1 つ以上の関連イベント・タイプの発生がトリガー条件となります。親イベントは 1 つのイベントのみである必要があります。関連イベント・タイプは関連イベントの構成から導出されます。
- 自動アクションとは、親イベントの一部のプロパティを使用して合成イベントを自動的に作成し、この合成イベントのもとでイベント・グループのイベントを自動的にグループ化することです。

相関ルールを形成するイベントの表示

「関連イベントの詳細」ポートレットで、相関ルールを形成する関連イベントを表示することができます。

このタスクについて

管理者は、相関ルールを形成する関連イベントを表示して、イベント間の関連を把握することができます。相関ルールを形成する関連イベントを表示するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 関連イベントの表示 ポートレットを開始し、154 ページの『現在の分析構成の表示』を参照してください。
2. 「関連イベントの表示」ポートレットで、イベントを「イベント」テーブルで選択して右クリックするか、イベント・グループを「グループ」テーブルで選択して右クリックします。メニューが表示されます。
3. メニューから、「詳細の表示」を選択します。「関連イベントの詳細」ポートレットが開きます。
4. 「関連イベントの詳細」ポートレットで、「相関ルール」タブを選択します。

タスクの結果

相関ルールを形成する関連イベントのリストを含むテーブルが表示されます。

相関ルールの根本原因イベントの選択

相関ルールの根本原因イベントを選択できます。

このタスクについて

相関ルールの根本原因イベントを選択すると、選択したイベントが親イベントになります。親イベントの一部のプロパティを使用して親合成イベントが作成され、親合成イベントと関連イベントとの間に親子関係が作成されます。これらのイベントが稼働環境内で発生した場合、親合成イベントの子イベントとして 1 つのグループにまとめられて、イベント・ビューアーに表示されます。このようにイベントが表示されるため、他の関連イベントを調べなくても、イベントの根本原因を迅速に特定できます。

相関ルールの根本原因イベントを選択するには、以下の手順を実行します。グループの根本原因イベントに関する自動的な提案を表示する場合は、構成の詳細を 142 ページの『ロールアップ構成の更新』で参照してください。

手順

1. 相関ルールを形成するすべてのイベントを表示します。 207 ページの『相関ルールを形成するイベントの表示』を参照してください。
2. 「関連イベントの詳細」ポートレットの「相関ルール」タブで、イベントを右クリックして「親合成イベントの値を使用」を選択します。

タスクの結果

「相関ルール」タブのテーブルが更新され、選択したイベントの「親合成イベントの値を使用」列が「はい」に更新されます。これは、このイベントが親イベントになったことを示しています。

関連イベント・グループの場合、親合成イベントのすべての子をイベント・ビューアーでクリアすると、親合成イベントもイベント・ビューアー内でクリアされます。同じグループに別の関連イベントが追加された場合、親合成イベントの状況に応じて、親合成イベントがイベント・ビューアーで再オープンされるか再作成されます。

相関ルールの監視

相関ルールをデプロイしてルールでライブ・データを相関させる前に、相関ルールを監視してルールのパフォーマンスをモニターできます。

始める前に

相関ルールを形成する関連イベントと親イベントをレビューしておきます。必要な場合は、相関ルールまたは関連イベントの構成を変更します。

このタスクについて

相関ルールに問題がない場合は、相関ルールの「監視」を選択することができます。

相関ルールの「監視」を選択すると、ルールが「関連イベントの表示」ポートレットの現在のタブから「ウォッチ対象」タブに移動します。ルールが「ウォッチ対象」になっている間は、ルールによる合成イベントの作成や相関は実行されませんが、パフォーマンス統計の記録は実行されます。ルールをデプロイしてルールでライブ・データを相関させる前に、ルールのパフォーマンスを確認できます。

相関ルールを「監視」するには、以下の手順を実行します。

手順

- ・ 「関連イベントの表示」ポートレットで、以下の手順を実行します。
 1. グループ別に関連イベントを表示します。 195 ページの『グループ別の関連イベントの表示』を参照してください。
 2. 「関連イベントの表示」ポートレットのグループ・テーブルで、関連イベント・グループまたは関連イベント構成を選択して右クリックします。メニューが表示されます。
 3. メニューから、「監視」を選択します。

- グループまたはイベントの「関連イベントの詳細」ポートレットで、以下の手順を実行します。
 1. 関連イベントまたは関連イベント・グループを表示します。 194 ページの『関連イベントの表示』と 195 ページの『グループ別の関連イベントの表示』を参照してください。
 2. イベントまたは関連イベント・グループを選択します。
 - 「関連イベントの表示」ポートレットのグループ・テーブルで、関連イベント・グループを選択して右クリックします。メニューが表示されます。
 - 「関連イベントの表示」ポートレットのイベント・テーブルで、イベントを選択して右クリックします。メニューが表示されます。
 3. メニューから、「詳細の表示」を選択します。「関連イベントの詳細」ポートレットが開きます。
 4. 「関連イベントの詳細」ポートレットの任意のタブで、「監視」を選択します。

タスクの結果

ルールが、「ウォッチ対象」タブに表示されます。

次のタスク

「ウォッチ対象」タブで、ルールのパフォーマンス統計をモニターします。パフォーマンス統計に問題がない場合は、『関連ルールのデプロイ』を検討します。

関連ルールのデプロイ

関連ルールをデプロイして、ルールでライブ・データを関連させることができます。

始める前に

関連ルールを形成する関連イベントと親イベントをレビューしておきます。必要な場合は、関連ルールまたは関連イベントの構成を変更します。

このタスクについて

関連ルールに問題がない場合は、関連ルールの「デプロイ」を選択することができます。

関連ルールの「デプロイ」を選択すると、ルールが「関連イベントの表示」ポートレットの現在のタブから「アクティブ」タブに移動します。「アクティブ」ルールのアルゴリズムは、有効な着信イベント内の関連イベントを特定して関連させます。そのためオペレーターは、どのイベントに重点を置くべきかを知ることができます。ルールについてのパフォーマンス統計が記録されます。その統計を使用して、デプロイされたルールが起動されているかどうかを確認できます。

関連ルールを「デプロイ」するには、以下の手順を実行します。

手順

- 「関連イベントの表示」ポートレットで、以下の手順を実行します。

1. グループ別に関連イベントを表示します。 195 ページの『グループ別の関連イベントの表示』を参照してください。
 2. 「関連イベントの表示」ポートレットのグループ・テーブルで、関連イベント・グループまたは関連イベント構成を選択して右クリックします。メニューが表示されます。
 3. メニューから、「デプロイ」を選択します。
- グループまたはイベントの「関連イベントの詳細」ポートレットで、以下の手順を実行します。
 1. 関連イベントまたは関連イベント・グループを表示します。 194 ページの『関連イベントの表示』と 195 ページの『グループ別の関連イベントの表示』を参照してください。
 2. イベントまたは関連イベント・グループを選択します。
 - 「関連イベントの表示」ポートレットのグループ・テーブルで、関連イベント・グループを選択して右クリックします。メニューが表示されます。
 - 「関連イベントの表示」ポートレットのイベント・テーブルで、イベントを選択して右クリックします。メニューが表示されます。
 3. メニューから、「詳細の表示」を選択します。「関連イベントの詳細」ポートレットが開きます。
 4. 「関連イベントの詳細」ポートレットの任意のタブで、「デプロイ」を選択します。

タスクの結果

ルールが、「関連イベントの表示」ポートレットの「新規」タブから「アクティブ」タブに移動します。

次のタスク

関連イベントの構成によって生成されるルールおよびグループで信頼性を確立する際に、将来、生成されるすべてのグループを自動的にデプロイする必要がある場合があります。生成されたすべてのグループを自動的にデプロイする場合は、156 ページの『新規分析構成の作成または既存の分析構成の変更』に戻り、「関連イベントの構成」ウィンドウのオプション「この構成によってディスカバーされたルールを自動的にデプロイ」にチェック・マークを付けます。

相関ルールのパフォーマンス統計の表示

「関連イベントの表示」ポートレットの「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」タブに、相関ルールのパフォーマンス統計を表示できます。

グループ・テーブル内のパフォーマンス統計

起動回数: ルールがアクティブになってからルールが実行された回数の合計。

先月の起動回数: 当月にルールが起動した回数の合計。月はグループの作成日から計算されます。新しい月が始まると、この値はリセットされて 0 に戻ります。

最終起動: ルールが起動した最後の日付または時刻。

最後の発生 I: 最後に起動したルール内でグループから発生したイベントのパーセント。

最後の発生 II: 最後から 2 番目に起動したルール内でグループから発生したイベントのパーセント。

最後の発生 III: 最後から 3 番目に起動したルール内でグループから発生したイベントのパーセント。

イベント・テーブル内のパフォーマンス統計

発生: ルールが起動したすべての時期についてイベントが発生した回数。

パフォーマンス統計のリセット

「ウォッチ対象」、「アクティブ」、または「有効期限切れ」タブで、グループのパフォーマンス統計をゼロにリセットできます。パフォーマンス統計をリセットするには、グループ名を右クリックし、メニューから「パフォーマンス統計のリセット」を選択します。この操作を行うと選択した関連ルールの統計データがリセットされることを示すメッセージが表示されます。このメッセージには、このデータを回収できなくなることも示されます。「はい」をクリックして、操作を続行するか、「いいえ」をクリックして、操作を停止します。「はい」を選択すると、成功メッセージが表示されます。

グループのパフォーマンス統計をゼロにリセットすると、「起動回数」、「先月の起動回数」、および「最終起動」の各列もクリアされます。「アーカイブ済み」タブではパフォーマンス統計が収集されないことに注意してください。ルールが 1 つの状態から別の状態に移行すると、パフォーマンス統計がリセットされます。アクションがルールによってトリガーされるたびに、パフォーマンス統計が増加します。

パターンの作成

関連イベントのグループは、関連イベント分析を使用してディスカバーされます。ディスカバーされたグループを基盤として使用して、パターンを作成できます。

「関連イベントの表示」ポートレット内の自動的にディスカバーされたグループを使用して、パターンを作成できます。ディスカバーされたグループが特定のリソースに固有であるのに対して、イベント・パターンは単一のリソースに固有のものではありません。例えば、ディスカバーされたグループは、特定のサーバー上の 3 つのイベントで構成されています。関連付けられた作成済みのイベント・パターンは、特定のリソースに対して固有ではないため、これら 3 つの特定のイベントがいずれかのサーバーで発生すると、「関連イベントの表示」ポートレットの「グループ・ソース」テーブルにグループが作成されます。

作成されたパターンは、以下の点で関連イベント・グループより優れています。

- 単一のパターン定義に、複数のイベント・グループを含めることができます。単一のパターン定義は、いずれのリソースで発生したイベントでも取り込むことができます。
- パターンには、前はイベント履歴になかったイベントのグループ化を含めることができます。これまで特定のリソース上で発生しなかったイベント・グループは、パターンによって識別されます。これは、パターンがリソースに依存していないためです。

- パターン定義には、定義したイベント・タイプのイベントのグループを含めることができます。パターンには、パターン定義内のイベント・タイプのサブセットである、イベントのすべてのグループを含めることもできます。いずれのパターンのインスタンスについても、パターンを適用するのに、定義内のすべてのイベントが発生する必要があるわけではありません。これは「トリガー・アクション」設定に依存します。「トリガー・アクション」設定について詳しくは、213 ページの『イベント・パターンの作成』を参照してください。

「イベント・パターン」ポートレットの開始

管理者は、Event Analytics の UI 上のいくつかの場所から「イベント・パターン」ポートレットを開始できます。

始める前に

「関連イベントの表示」、「関連イベントの詳細」、および「イベント・パターン」の各ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

「イベント・パターン」ポートレットは、「関連イベントの表示」ポートレットまたは「関連イベントの詳細」ポートレットから開始できます。「関連イベントの詳細」ポートレットから「イベント・パターン」ポートレットを直接開始した場合、グループの詳細を確認してから「関連イベントの表示」ポートレットに戻って「イベント・パターン」ポートレットを開始する必要はありません。

手順

「イベント・パターン」ポートレットは、「関連イベントの表示」ポートレットまたは「関連イベントの詳細」ポートレットから開始できます。

1. 「関連イベントの表示」ポートレットから「イベント・パターン」ポートレットを開始するには、「関連イベントの表示」ポートレットを開始して、以下のいずれかのオプションを選択します。「関連イベントの表示」ポートレットの開始について詳しくは、194 ページの『関連イベントの表示』を参照してください。
 - a. パターンを作成するには、次の手順を実行します。
 - 1) 「グループ」テーブルで関連イベント・グループを選択します。
 - 2) 関連イベント・グループを右クリックして、「パターンの作成」を選択します。
 - b. 既存のパターンを編集するには、以下の手順を実行します。
 - 1) 「グループ・ソース」テーブルでパターンを選択します。
 - 2) パターンを右クリックして、「パターンの編集」を選択します。
2. 「関連イベントの詳細」ポートレットから「イベント・パターン」ポートレットを開始するには、以下の手順を実行します。
 - a. 関連イベントの詳細ポートレットを開始します。詳しくは、194 ページの『季節性イベントの関連イベントの詳細の表示』を参照してください。
 - b. 「パターンの作成」をクリックします。

注: 「イベント・パターン」ポートレットが新規に選択した各グループで更新されます。

3.

次のタスク

「イベント・パターン」ポートレットにパターンの詳細を入力します。「イベント・パターン」ポートレットへの入力について詳しくは、『イベント・パターンの作成』を参照してください。

イベント・パターンの作成

自動的にディスカバーされたグループに基づいて、パターンを作成できます。

始める前に

「関連イベントの表示」ポートレットと「イベント・パターン」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

関連イベント構成により、特定の管理対象リソースに適用されるイベントのグループが自動的にディスカバーされます。自動的にディスカバーされたグループに基づいて、リソースに固有ではないイベント・パターンを作成できます。

手順

1. グループの「イベント・パターン」ポートレットを開始します。ポートレットの開始について詳しくは、212 ページの『「イベント・パターン」ポートレットの開始』を参照してください。
2. 「イベント・パターン」ポートレットの「パターン基準」タブで、パラメーター・フィールドに入力します。

マージ先

関連イベント・グループを既存のパターンにマージするか、「**NONE**」を選択して新規パターンを作成します。グループをパターンにマージするには、両者間に共通のイベント・タイプが 1 つ以上含まれているパターンのリストから選択します。「なし」はデフォルトのオプションです。

名前 パターンの名前。名前には英数字を使用する必要があります。特殊文字は使用できません。

パターン・フィルター

パターンに適用される ObjectServer の SQL フィルター。このフィルターは、パターンを適用するイベントを制限するために使用されます。例えば、`Summary NOT LIKE '%maintenance%'` などを入力します。

最初のイベントと最後のイベントの間隔

このパターン内で、最初のイベントから最後のイベントまでの発生間に経過することが許容される最大時間 (分単位で計測)。デフォルト値は、

パターンが基になっている「関連イベント・グループ」によって決まります。この時間枠外に発生するイベントは、このグループの一部とはみなされません。

トリガー・アクション

選択したイベントが ObjectServer へと送信されるときにライブ・イベントをグループ化するには、「トリガー・アクション」チェック・ボックスを選択します。選択したイベント・タイプのイベントが発生したときに、グループ化の開始がトリガーされます。作成されるグループ化には、選択したすべてのイベント・タイプを含むイベントが含まれます。

例えば、A、B、および C の 3 つのイベント・タイプがパターン基準に含まれていて、イベント C に対してのみ「トリガー・アクション」チェック・ボックスが選択されている場合、イベント・タイプ C のイベントが発生したときにのみグループ化が発生します。グループ化には、3 つのイベント・タイプすべてのイベントが含まれます。

イベント・タイプ

パターンに含まれるイベント・タイプ (複数可)。「イベント・タイプ」には、選択したパターンの既存のイベント・タイプが事前に取り込まれていますが、これは変更することができます。

リソース列

アクションが適用されるリソース (複数可)。「リソース列」には、選択したパターンの既存のイベント・タイプ・リソースが事前に取り込まれていますが、これは変更することができます。

注: 三角形、円、および正方形のアイコンは、グループが既存のパターンにマージされるとき、イベント・タイプの発生元を示します。

三角形 (Triangle)

既存のパターンとグループの両方に共通。

円 (Circle)

グループの一部。

正方形 (Square)

既存のパターンの一部。

注: 「イベント・タイプ」と「リソース列」のペアは、重複できません。

正規表現

(オプション) 正規表現アイコンをクリックして、選択した列からリソース情報を抽出するための正規表現パターンを指定します。

注: リソースに対する正規表現を構成するには、リソース列でリソースを 1 つ選択します。

例えば、: myhost.xxxxxxx.xxx.com : のアプリケーション abc でリカバリー不能エラーが発生したとします。

リソース情報が常にコロン (:) の間に配置されており、ホスト名の末尾が xxx.com であると想定した場合、以下の正規表現により、イベント・パターンの作成時にこのリソース情報が抽出されます。

[^:]*.com

正規表現の作成と編集について詳しくは、216 ページの『パターン基準への正規表現の適用』および 217 ページの『パターン基準の正規表現の編集』を参照してください。

3. 「イベント・パターン」ポートレットの「親イベント」タブで、以下のいずれかの親イベント・オプションを選択します。

タイプ別の最重要イベント

システムは、イベントの発生時にそのイベントを検査します。イベントは、UI で定義された順序に基づいてランキングされます。最高ランキングのイベントが親イベントです。親イベントは、低いランキングのイベント後にそれより高いランキングのイベントが発生すると変更されます。親イベントが動的に変更されないようにするには、「合成イベント」を選択します。

イベントを選択して「上へ移動」矢印や「下へ移動」矢印をクリックすると、ランキングを手動で再配列できます。

合成イベント

親イベントとして動作するイベントを作成するか、「選択したイベントをテンプレートとして使用」を選択して既存のイベントを親イベントとして使用します。

合成イベントを作成または変更するには、必要に応じて次のパラメーター・フィールドに値を設定します。合成イベントのフィールドはすべてオプションです。

ノード

イベントの発生元の管理対象エンティティ。季節性イベントの発生元の管理対象エンティティが表示されます。

要約 イベント記述。

重大度

イベントの重大度。「重大度」ドロップダウン・リストから、以下のいずれかの値を選択します。

重大

重要

軽微

警告

不確定

クリア

アラート・グループ

イベントが属するアラート・グループ。

フィールドの追加

「フィールドの追加」チェック・ボックスを選択して、合成親イベントにさらにフィールドを追加します。

4. 「イベント・パターン」ポートレットの「テスト」タブでテストを行うと、自動的にディスカバーされた、パターン基準を満たす既存のグループを表示できます。テストによって、選択した基準で突き合わせたイベントのタイプが表示されます。テストを実行するには、「テストの実行」をクリックします。「テストのキャンセル」を選択すると、いつでもテストをキャンセルできます。

5. パターンを保存、監視、またはデプロイするには、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - 「保存」をクリックして、パターンの詳細を「関連イベントの表示」の「新規」タブに保存します。
 - 「監視」を選択して、パターンを「関連イベントの表示」の「ウォッチ対象」タブに追加します。
 - 「デプロイ」を選択して、パターンを「関連イベントの表示」の「アクティブ」タブに追加します。

タスクの結果

イベント・パターンが作成され、「関連イベントの表示」ポートレットの「グループ・ソース」テーブルに表示されます。

注: パターンに 0 グループおよび 0 イベントと表示されている場合、パターン作成プロセスが完了していません。プロセスが実行されていることを確認するには、以下の手順を実行します。

1. 「サービス」タブの「ポリシー・ロガー」サービスから、ポリシー・ロガー・ファイルにポリシー名を追加します。ポリシー・ロガーの構成については、『ポリシー・ロガー・サービスの構成』を参照してください。
2. 以下のログ・ファイルを確認します。

```
$IMPACT_HOME/logs/<serverName>_policylogger_PG_ALLOCATE_PATTERNS_GROUPS.log
```

プロセスが実行されていない場合は、「Event Analytics のトラブルシューティング」ガイドを参照してください。

パターン基準への正規表現の適用

パターン基準に正規表現を適用することにより、選択したリソース列の非構造化データから情報を抽出できます。

始める前に

「関連イベントの表示」ポートレットと「イベント・パターン」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

正規表現により、選択したリソース列内の非構造化データから具体的な情報が抽出されます。

手順

1. グループの「イベント・パターン」ポートレットを開始します。ポートレットの開始について詳しくは、212 ページの『「イベント・パターン」ポートレットの開始』を参照してください。
2. 「イベント・パターン」ポートレットの「パターン基準」タブで、正規表現記号を選択します。「正規表現」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 正規表現を「式」フィールドに挿入します。

4. 正規表現を適用するイベント・タイプを変更または選択するには、「テスト・データ」フィールドのドロップダウン・リストからイベント・タイプを選択します。
5. 正規表現をテストするには、「テスト」を選択します。テスト結果が「結果」フィールドに表示されます。

注: 指定した正規表現に一致するものが複数ある場合は、それらが「結果」フィールドにコンマ区切りのリストとして表示されます。

6. 正規表現を保存して適用するには、「保存」を選択します。「正規表現」ダイアログ・ボックスが閉じられます。リソース列の横に確認記号が表示されます。

パターン基準の正規表現の編集

選択したリソース列の非構造化データから情報を抽出するためにパターン基準に適用された既存の正規表現を編集できます。

始める前に

「関連イベントの表示」ポートレットと「イベント・パターン」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

正規表現により、選択したリソース列内の非構造化データから具体的な情報が抽出されます。

手順

1. グループの「イベント・パターン」ポートレットを開始します。ポートレットの開始について詳しくは、212 ページの『「イベント・パターン」ポートレットの開始』を参照してください。
2. 「イベント・パターン」ポートレットの「パターン基準」タブで、確認記号を選択します。「正規表現」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「式」フィールド内の正規表現を編集します。
4. 正規表現を適用するイベント・タイプを変更または選択するには、「テスト・データ」フィールドのドロップダウン・リストからイベント・タイプを選択します。
5. 正規表現をテストするには、「テスト」を選択します。テスト結果が「結果」フィールドに表示されます。

注: 指定した正規表現に一致するものが複数ある場合は、それらが「結果」フィールドにコンマ区切りのリストとして表示されます。

6. 正規表現を保存して適用するには、「保存」を選択します。「正規表現」ダイアログ・ボックスが閉じられます。リソース列の横に確認記号が表示されます。

「イベント・パターン」ポートレットでの関連イベントの詳細の表示

グループに対して新しいパターンを作成するときに、選択した関連イベント・グループについて、関連イベントの詳細を「イベント・パターン」ポートレットに表示できます。

始める前に

「関連イベントの表示」ポートレットと「イベント・パターン」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

「イベント・パターン」ポートレットで関連イベントの詳細を表示するには、以下の手順を実行します。

1. 関連イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 「グループ」テーブルで関連イベント・グループを選択します。
3. 関連イベント・グループを右クリックして、「パターンの作成」を選択します。
「イベント・パターン」ポートレットが表示されます。

タスクの結果

「イベント・パターン」ポートレットの「パターン基準」タブの「グループ・インスタンス」テーブルと「イベント」テーブルに、関連イベントの詳細が表示されます。

注: 「イベント・パターン」ポートレットの「パターン基準」タブ内の関連イベントの詳細の列は、「関連イベントの詳細」ポートレットの列に一致しています。

既存のパターンの編集

既存のパターンを編集して、パターン基準を変更することができます。

始める前に

「関連イベントの表示」ポートレットと「イベント・パターン」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

1. 関連イベントの表示ポートレットを開始します。関連イベントの表示ポートレットの開始について詳しくは、194 ページの『関連イベントの表示』を参照してください。
2. 「グループ・ソース」テーブルでパターンを選択します。
3. パターンを右クリックして、「パターンの編集」を選択します。
4. 「パターン基準」タブと「親イベント」タブで、パラメーター・フィールドを変更します。パラメーターの変更について詳しくは、213 ページの『イベント・パターンの作成』を参照してください。

5. パターンを保存、監視、またはデプロイするには、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - 「保存」をクリックして、パターンの詳細を「関連イベントの表示」の「新規」タブに保存します。
 - 「監視」を選択して、パターンを「関連イベントの表示」の「ウォッチ対象」タブに追加します。
 - 「デプロイ」を選択して、パターンを「関連イベントの表示」の「アクティブ」タブに追加します。

既存のパターンの削除

既存のパターンを削除して、「グループ・ソース」テーブルから除去することができます。

始める前に

「関連イベントの表示」ポートレットと「イベント・パターン」ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

手順

1. 関連イベントの表示ポートレットを開始します。関連イベントの表示ポートレットの開始について詳しくは、194 ページの『関連イベントの表示』を参照してください。
2. 「グループ・ソース」テーブルで、削除するパターンを選択します。
3. パターンを右クリックして、「パターンの削除」を選択します。
4. パターンを削除するには、確認ダイアログ・ウィンドウで「はい」を選択します。

タスクの結果

選択したパターンが削除されます。

パターン汎用化テスト結果の Microsoft Excel へのエクスポート

特定の構成についてのパターン汎用化テスト結果を、サポート対象ブラウザから Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートできます。

始める前に

「関連イベントの表示」、「関連イベントの詳細」、および「イベント・パターン」の各ポートレットにアクセスするには、ユーザーに `ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります。

このタスクについて

「イベント・パターン」ポートレットは、「関連イベントの表示」ポートレットまたは「関連イベントの詳細」ポートレットから開始できます。「関連イベントの詳細」ポートレットから「イベント・パターン」ポートレットを直接開始した場合、グループの詳細を確認してから「関連イベントの表示」ポートレットに戻って「イ

メント・パターン」ポートレットを開始する必要はありません。

手順

特定の構成についてのパターン汎用化テスト結果を Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. 関連イベントの表示ポートレットを開きます。
2. 構成テーブルから特定の構成を選択します。
3. パターン基準を入力し、「イベント・パターン」ポートレットの「テスト」タブにナビゲートして、「テストの実行」を選択します。
4. ツールバーの「汎用化テスト結果のエクスポート (**Export Generalization Test Results**)」ボタンをクリックします。しばらくすると、「エクスポート結果のダウンロード」リンクが表示されます。
5. リンクをクリックして Microsoft Excel ファイルをダウンロードし、保存します。

タスクの結果

この Microsoft Excel ファイルには、以下のタブのあるスプレッドシートが含まれています。

- **Groups Information:** このタブには、選択した構成の関連イベント・グループが含まれています。
- **Groups Instances:** このタブには、選択した構成のすべての関連イベント・グループについての、すべての関連イベント・インスタンスが含まれています。
- **Group Events:** このタブには、選択した構成の関連イベント・グループで発生したすべてのイベントのリストが含まれています。
- **Instance Events:** このタブには、選択した構成のすべての関連イベント・グループのすべての関連イベント・インスタンスで発生したすべてのイベントが含まれています。
- **Export Comments:** このタブには、エクスポートに関するコメントが通知のために格納されています (例えば、スプレッドシートの見出しが切り捨てられている場合や、スプレッドシートの行が切り捨てられている場合などです)。

Netcool/Impact でイベント・パターンの作成に使用するタイプのプロパティの構成

生成された NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルを編集すると、イベント・パターンの作成を Netcool/Impact でどのように処理するかを構成できます。

始める前に

注: この構成タスクを実行してから、イベント・パターンの作成に関連付けられたグローバル・タイプのプロパティを使用する関連イベント構成を実行してください。この構成タスクは、イベント内でのタイプ情報の場所に影響するような変更が環境内で行われたときにのみ実行されると予期されています。

デフォルトの NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルは複数のセクションに分かれており、各セクションにはいくつかのプロパティが含まれています。これらのプロパティを使用すると、Netcool/Impact でさまざまな操作を処理する方法 (イベント・パターンの作成を処理する方法など) を指示することができます。以下のように、NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルで定義されるイベント・パターン作成プロパティのカテゴリは 3 つあります。

- Netcool/Impact でイベント・パターン分析を行う際に使用する必要がある、イベント履歴データベースのテーブル列の構成に関連したプロパティ。
- イベント履歴データベース内のデフォルトの固有のイベント ID とイベント・タイプの構成に関連したプロパティ。これらは、イベント・タイプ・インデックスに関連したプロパティの中で一致するものがない場合に Netcool/Impact で使用する必要があります。
- 1 つ以上のイベント ID とイベント・タイプ・インデックスの構成に関連したプロパティ。

表 20 に、NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルで定義されたイベント・パターン作成プロパティを示します。以下の説明に従って、ご使用の環境に適した値を構成してください。

表 20. イベント・パターン作成プロパティ

グローバル・タイプ	説明	例
イベント履歴データベース内のテーブル列の構成に関連したプロパティ		
type.resourcelist	Netcool/Impact がイベント・パターン分析の実行に使用する必要があるイベント履歴データベース内のテーブル列の名前を指定します。	nci_trigger コマンドで生成する NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルには、以下のデフォルト値が用意されています。 type.resourcelist=NODE 注: デフォルト値 NODE を使用してください。
type.servername.column	イベント履歴データベースに到着する特定のイベントに関連付けられたサーバーの名前が含まれている、イベント履歴データベース内のテーブル列の名前を指定します。	nci_trigger コマンドで生成する NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルには、以下のデフォルト値が用意されています。 type.servername.column=SERVERNAME 注: デフォルト値 SERVERNAME を使用してください (可能な場合)。

表 20. イベント・パターン作成プロパティ (続き)

グローバル・タイプ	説明	例
type.serverserial.column	イベント履歴データベースに到着する特定のイベントに関連付けられたサーバーのシリアル番号が含まれている、イベント履歴データベース内のテーブル列の名前を指定します。サーバーのシリアル番号は固有でなければならないことに注意してください。	nci_trigger コマンドで生成する NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルには、以下のデフォルト値が用意されています。 type.serverserial.column=SERVERSERIAL 注: デフォルト値 SERVERSERIAL を使用してください (可能な場合)。
イベント履歴データベース内のデフォルトの固有 ID とイベント・タイプの構成に関連したプロパティ		
type.default.eventid	このプロパティには、デフォルトのイベント ID として指定する必要がある、イベント履歴データベース内のデータベース・フィールドが含まれています。イベント ID は、イベント履歴データベース内の固有のイベントを識別するデータベース・フィールドです。関連イベント構成を構成するときに、使用可能なフィールドのドロップダウン・リストから、イベント ID に使用するデータベース・フィールドを選択します。構成ファイル内の設定をオーバーライドするときは、ユーザー・インターフェースの「拡張」タブからこれを実行します。 Netcool/Impact では、type.index.eventid プロパティで指定した値の中で一致するものがない場合、このプロパティで指定したデータベース・フィールドがデフォルトのイベント ID として使用されます。 注: このプロパティに指定されているデータベース・フィールドに、タイム・スタンプ・コンポーネントを含めることはできません。	nci_trigger コマンドで生成する NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルには、以下のデフォルト値が用意されています。 type.default.eventid=IDENTIFIER

表 20. イベント・パターン作成プロパティ (続き)

グローバル・タイプ	説明	例
type.default.eventtype	汎用化するイベント・パターンを作成するときに使用する、デフォルトの関連イベント・タイプを指定します。 Netcool/Impact では、type.index.eventtype プロパティの中で一致するものがない場合、このデフォルトの関連イベント・タイプを使用します。 注: 汎用化パターンを作成するフィールドに基づいて、関連イベント・タイプの値を選択します。例えば、パターンを作成して、イベントの「イベント ID」に基づいてそのパターンを汎用化する場合は、その値をこのプロパティに指定します。 関連イベント構成が完了し、汎用化のパターンを作成すると、パターン汎用化画面にドロップダウン・メニューが表示されます。このドロップダウン・メニューには、イベント履歴データベースで見つかったすべてのイベント ID がリストされます。その後、そのパターン用に選択したすべてのイベント ID に適用するパターン/ルールを作成できます。つまり、パターンの定義を拡張して、関連イベント・グループのタイプのみではなく、すべてのタイプを含めることができます。	nci_trigger コマンドで生成する NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルには、以下のデフォルト値が用意されています。 type.default.eventtype=EVENTID
1 つ以上のイベント ID とイベント・タイプ・インデックスの構成に関連したプロパティ。このセクションで説明されているプロパティごとに値を指定する必要があります。		

表 20. イベント・パターン作成プロパティ (続き)

グローバル・タイプ	説明	例
type_number_of_ type_configurations	NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルでグ ローバル・タイプ構成に使用 するタイプの数を指定しま す。構成できるタイプ数に制 限はありません。	次の例では、グローバル・タ イプ構成に 2 つのタイプを 指定しています。 type_number_of_ type_configurations=2 したがって、次のようにし て、他の type.index 関連プ ロパティを定義します。イン デックスの番号付けは、0 (ゼロ) で始まることに注意し てください。 type.0.eventid=Identifier type.0.eventtype=ACMEType type.0.filterclause= Vendor='ACME' type.0.osfilterclause= Vendor='ACME' type.1.eventid=SUMMARY, NODE type.1.eventtype= TAURUSType type.1.filterclause= Vendor = 'TAURUS' type.1.osfilterclause= Vendor = 'TAURUS'
type.index.eventid	イベント ID として指定する イベント履歴データベース内 のデータベース・フィールド を指定します。複数のフィー ルドは、コンマで区切りま す。	以下に、イベント ID として 使用されるデータベース・フ ィールドの例を示します。 type.0.eventid=SUMMARY イベント ID として使用され る複数のデータベース・フィ ールドの例を次に示します。 type.0.eventid=NODE, SUMMARY, ALERTGROUP
type.index.eventtype	パターン汎用化に返すイベ ント・タイプを指定します。 注: 返されたイベント・タイ プは、パターン汎用化画面の イベント・タイプのドロップ ダウン・メニューに表示され ます。	パターン汎用化に対して返す イベント・タイプの例を次に 示します。 type.0.eventtype=EVENTID

表 20. イベント・パターン作成プロパティ (続き)

グローバル・タイプ	説明	例
<code>type.index.filterclause</code>	イベントのセットを定義するイベント履歴データベース・フィルターを指定します。このフィルターによって定義されるイベントのセットに対するイベント・タイプは、<code>type.index.eventtype</code> プロパティのテーブル列にあります。 注: 照会を迅速に行うため、<code>type.index.filterclause</code> で使用されるフィールドについて、<code>reporter status</code> テーブルに 1 つ以上のデータベース索引を作成することをお勧めします。	<code>type.0.filterclause=Vendor = 'ACME'</code>
<code>type.index.osfilterclause</code>	一致するイベント・タイプをフィルターに掛けるための <code>ObjectServer</code> フィルターを指定します。 注 : <code>type.index.osfilterclause</code> プロパティに指定するフィルターは、このプロパティでは <code>ObjectServer</code> 構文を使用することを除き、<code>type.index.filterclause</code> プロパティに指定するフィルターと意味が同一である必要があります。	<code>type.0.osfilterclause=Vendor = 'ACME'</code>

このタスクについて

Netcool/Impact で汎用化のために使用するイベント・パターン作成プロパティを構成するには、デフォルトの NOI Shared Configuration プロパティ・ファイルを変更する必要があります。このファイルは `<Impact_install_location>/bin` ディレクトリーにあります。

手順

1. IBM Tivoli Netcool/Impact が格納され実行されているサーバーにログインします。
2. `<Impact install location>/bin` ディレクトリーに移動します。
3. 以下のコマンドを入力します。`./nci_trigger <server_name> <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Export FILENAME <Full Path to the file name><name_of_propsfile>`

<server_name>

Netcool/Impact が保管され実行されているサーバーの名前を指定します。

<UserID>

Netcool/Impact ユーザーの ID を指定します。

<password>

Netcool/Impact ユーザーのパスワードを指定します。

<Full Path to the file name><name_of_propsfile>

デフォルトの NOI Shared Configuration プロパティー・ファイルが存在するディレクトリーを指定します。ディレクトリーの指定には、デフォルトの NOI Shared Configuration プロパティー・ファイルの名前も含まれます。

例:

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Export
/tmp/bin/noi_def_values.props
```

4. NOI Shared Configuration プロパティー・ファイルを生成したディレクトリーに移動し、編集のためにこのファイルを開きます。
5. 生成された NOI Shared Configuration プロパティー・ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
6. 任意のエディターで、生成された NOI Shared Configuration プロパティー・ファイルを編集のために開きます。
7. 221 ページの表 20に記載されているイベント・パターン作成プロパティーに関する情報を参照して、ご使用の環境に適した値を指定します。以下のプロパティーのデフォルト値は変更しないでください。
 - type.resourcelist
 - type.servername.column
 - type.serverserial.column
8. 該当する値をイベント・パターン作成プロパティーに指定した後で、NOI Shared Configuration プロパティー・ファイルを作成して、終了します。
9. デフォルトの NOI Shared Configuration プロパティー・ファイルでイベント・パターン作成プロパティーに指定した値を更新するには、次のコマンドを実行します。

```
./nci_trigger <server_name> <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME <Full Path to the file name><name_of_propsfile>
```

例:

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME /tmp/bin/noi_def_values.props
```

例

次の例では、イベント ID が設定され、イベントのセットが定義され、イベント履歴データベースの指定したテーブル列にあるタイプ情報が検出されます。

```
type_number_of_type_configurations=1
type.0.eventid=NODE,SUMMARY,ALERTGROUP
type.0.eventtype=ACMEType
type.0.filterclause=Vendor = 'ACME'
type.0.osfilterclause=Vendor = 'ACME'
```


具体的には、この例では、イベントが存在し、そのイベントの Vendor の値が ACME である場合、ACMEType というテーブル列を調べてイベント・タイプを見つけます。

次の例では、前の例が拡張されて、2 つの構成

(type_number_of_type_configurations プロパティの値 2 が示すとおり) が表示されます。

```
type_number_of_type_configurations=2
type.0.eventid=NODE
type.0.eventtype=ACMEType
type.0.filterclause=Vendor = 'ACME'
type.0.osfilterclause=Vendor = 'ACME'
type.1.eventid=NODE,SUMMARY,ALERTGROUP
type.1.eventtype=TAURUSType
type.1.filterclause=Vendor = 'TAURUS'
type.1.osfilterclause=Vendor = 'TAURUS'
```

注: Netcool/Impact は、各イベントを、まず構成 0 に定義されているフィルターと突き合わせます。イベントが構成 0 に定義されているフィルターと一致すると、Netcool/Impact はそのイベントのタイプをフィルターに定義されているとおりに定義します。イベントが 構成 0 に定義されているフィルターと一致しない場合、Netcool/Impact は、そのイベントを、構成 1 に定義されているフィルターと突き合わせます。イベントが構成 1 に定義されているフィルターと一致すると、Netcool/Impact はそのイベントのタイプをフィルターに定義されているとおりに定義します。Netcool/Impact は、定義した構成タイプの数だけこの処理シーケンスを続行します。

定義した構成タイプ内のフィルターに一致するイベントがない場合、Netcool/Impact は、デフォルトの構成を使用して、タイプと ID の場所を判別します。

リファレンス

Event Analytics に関するリファレンス情報を以下に示します。

Netcool/Impact のインストール・コンポーネント

インストールする Netcool/Impact コンポーネントを選択します。

IBM Netcool Operations Insight を購入した場合は、Impact サーバー拡張機能コンポーネントがリストに表示され、自動的に選択されます。このコンポーネントには、IBM Netcool Operations Insight と連動する追加の Impact サーバーのフィーチャーが含まれています。

デフォルトの選択を受け入れる場合、GUI サーバーと Impact サーバーが両方とも同じコンピューター上にインストールされます。実稼働環境では、Impact サーバーと GUI サーバーを別個のコンピューターにインストールします。したがって、例えば、Impact サーバーが別のコンピューター上に既にインストール済みである場合は、GUI サーバーを単独でインストールするように選択できます。

Installation Manager を使用してまだインストールされていないシステムでは、コンポーネント Installation Manager が自動的に選択されています。

Netcool/Impact ではアラビア語およびヘブライ語がサポートされていないため、Event Analytics ユーザーがアラビア語またはヘブライ語を使用して作業を行う場合は、翻訳されていない英語のテキストが表示されることがあります。

Event Analytics ObjectServer の構成

SQL を実行し、関連イベント機能について Event Analytics ObjectServer を更新する必要があります。

このタスクについて

ObjectServer オブジェクトとデータを作成および変更するためのコマンドが SQL で提供されます。以下の手順を実行して、ObjectServer を更新するために SQL を実行します。

手順

1. SQL ファイル `IMPACT_HOME/add-ons/RelatedEvents/db/relatedevents_objectserver.sql` を Netcool/Impact から ObjectServer 上の `tmp` ディレクトリーにコピーします。
2. ObjectServer に対して SQL を実行し、以下のコマンドを入力します。
Windows の場合は、以下のコマンドを入力します。`%OMNIHOME%\bin\redisql -U <username> -P <password> -S <server_name> <C:\tmp\relatedevents_objectserver.sql`
Linux および UNIX の場合は、以下のコマンドを入力します。
`$OMNIHOME/bin/nco_sql -user <username> -password <password> -server <server_name> < /tmp/relatedevents_objectserver.sql`
3. これまでに Event Analytics ObjectServer を構成していない場合は、次のコマンドを入力する必要があります。
Windows の場合は、以下のコマンドを入力します。`%OMNIHOME%\bin\redisql -U <username> -P <password> -S <server_name> <C:\tmp\relatedevents_objectserver.sql`
Linux および UNIX の場合は、以下のコマンドを入力します。
`$OMNIHOME/bin/nco_sql -user <username> -password <password> -server <server_name> < /tmp/relatedevents_objectserver.sql`
4. すべてのユーザーが ObjectServer に対して SQL を実行し、以下のコマンドを入力する必要があります。
Windows の場合は、以下のコマンドを入力します。`%OMNIHOME%\bin\redisql -U <username> -P <password> -S <server_name> <C:\tmp\relatedevents_objectserver_update_fp5.sql`
Linux および UNIX の場合は、以下のコマンドを入力します。
`$OMNIHOME/bin/nco_sql -user <username> -password <password> -server <server_name> < /tmp/relatedevents_objectserver_update_fp5.sql`

次のタスク

Event Analytics の関連イベント機能のイベント相関では、ObjectServer が追加された `ParentIdentifier` 列を使用します。インストール済み環境でこの ID フィールドのサイズが変更された場合は、イベント・グループの自動化

relatedevents_objectserver.sql を作成する ObjectServer SQL ファイル内で ParentIdentifier 列の値を変更して、両方の値を同じにする必要があります。更新した SQL は自動的に取り込まれます。

関連タスク:

40 ページの『Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact のインストール』

Impact での Oracle データベース接続の構成

有効な Oracle データベースへの接続を IBM Tivoli Netcool/Impact 内から構成できます。

始める前に

アーカイブ・データベースとして Oracle を使用するには、Netcool/Impact へのリモート接続をセットアップする必要があります。詳しくは、235 ページの『Netcool/Impact リモート接続』を参照してください。

このタスクについて

ユーザーは、Oracle で時刻範囲および名前を指定して、季節性イベント・レポートおよび関連イベントの構成を実行することができます。ObjectServer データ・ソースまたはデータ型を構成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. Netcool/Impact UI にログインします。
`https://impacthost:port/ibm/console`
2. ObjectServer データ・ソースおよびデータ型を構成します。
 - a. Netcool/Impact UI の使用可能プロジェクト・リストで、「**NOI** プロジェクト」を選択します。
 - b. 「データ・モデル」タブを選択してから「**ObjectServerForNOI**」を選択します。
 - 1) 「編集」をクリックし、<username>、<password>、<host name>、および <port> の情報を入力します。
 - 2) Netcool/Impact データ・ソースを保存します。「接続のテスト」をクリックし、次に「保存」アイコンをクリックします。
 - c. データ型を編集します。データ・ソース **ObjectServerForNOI** を展開し、ObjectServer イベント履歴データベース・タイプに対応するようにデータ型を編集します。例: AlertsForNOITable。
 - d. Base Table に対して、<database table> を選択します。
 - e. スキーマおよび表を更新するため、「最新表示」をクリックして、「保存」をクリックします。
 - f. 「データ・モデル」タブを選択してから「**ObjectServerHistoryOrclForNOI**」を選択します。
 - 1) 「編集」をクリックし、<username>、<password>、<host name>、<port>、および <sid> の情報を入力します。
 - 2) Netcool/Impact データ・ソースを保存します。「接続のテスト」をクリックし、次に「保存」アイコンをクリックします。

- g. データ型を編集します。データ・ソース **ObjectServerHistoryOrcIForNOI** を展開し、AlertsHistoryOrcITable データ型を編集します。
- h. Base Table に対して、<database name> と <database table name> を選択します。
- i. スキーマおよび表を更新するため、「最新表示」をクリックして、「保存」をクリックします。
- j. 「サービス」タブを選択し、以下のサービスが開始されていることを確認します。

```
ProcessRelatedEvents
ProcessSeasonalityEvents
ProcessRelatedEventConfig
```

- 3. レポート生成で Oracle データベースを使用するように構成します。デフォルトのプロパティをエクスポートし、デフォルト構成を変更して、プロパティを更新します。

- a. プロパティ・ファイルを生成します。<Impact install location>/bin ディレクトリに移動して nci_trigger ユーティリティを見つけ、コマンド行インターフェースから以下のコマンドを実行します。

```
nci_trigger <server> <username>/<password> NOI_DefaultValues_Export
FILENAME directory/filename
```

Where

<server>

Event Analytics がインストールされているサーバー。

<user name>

Event Analytics ユーザーのユーザー名。

<password>

Event Analytics ユーザーのパスワード。

directory

プロパティ・ファイルが保管されているディレクトリ。

filename

プロパティ・ファイルの名前。

例えば、次のようにします。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Export
FILENAME /tmp/seasonality.props
```

- b. 生成されたプロパティ・ファイルによって上書きされたプロパティ値を変更する必要があります。プロパティの完全なリストについては、236 ページの『生成されたプロパティ・ファイル』を参照してください。
 - これらのプロパティについて以下の値が設定されていない場合、プロパティ・ファイルを更新してこれらのプロパティ値を反映してください。

```
history_datasource_name=ObjectServerHistoryOrcIForNOI
history_datatype_name=AlertsHistoryOrcITable
history_database_table=<database table name>
history_database_type=Oracle
```

- ポリシーからの Oracle データベースのタイム・スタンプ・フォーマットである以下の値を `history_db_timestampformat` プロパティに入力します。

```
history_db_timestampformat=yyyy-mm-dd hh24:mi:ss
```

注: `history_db_timestampformat` プロパティのプロパティ・ファイルでのデフォルト値は、`yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS` です。

`history_db_timestampformat` プロパティのこのデフォルトのタイム・スタンプ・フォーマットは Oracle では処理されません。したがって、前の手順を実行して、このデフォルト値を、ポリシーからの Oracle データベースのタイム・スタンプ・フォーマット (`yyyy-mm-dd hh24:mi:ss`) に変更する必要があります。

- 以下のコマンドを使用して、変更したプロパティ・ファイルを Netcool/Impact にインポートします。

```
nci_trigger <Server> <username>/<password> NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME directory/filename
```

例えば、次のようにします。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME /tmp/seasonality.props
```

Impact 内の DB2 データベース接続の構成

IBM Tivoli Netcool/Impact 内からの、有効な DB2 データベースへの接続を構成することができます。

このタスクについて

DB2 で時刻範囲と名前を指定して、季節性イベント・レポートと関連イベントの構成を実行することができます。ObjectServer データ・ソースまたはデータ型を構成するには、以下の手順を実行します。

手順

- Netcool/Impact UI にログインします。
`https://impacthost:port/ibm/console`
- ObjectServer データ・ソースおよびデータ型を構成します。
 - Netcool/Impact UI の使用可能プロジェクト・リストで、「**NOI** プロジェクト」を選択します。
 - 「データ・モデル」タブを選択してから「**ObjectServerForNOI**」を選択します。
 - 「編集」をクリックし、`<username>`、`<password>`、`<host name>`、`<port>` の情報を入力します。
 - Netcool/Impact データ・ソースを保存するため、「接続のテスト」をクリックし、次に「保存」アイコンをクリックします。
 - データ型を編集します。データ・ソースを展開し、ObjectServer イベント履歴データベース・タイプに対応するようにデータ型を編集します。例: `AlertsForNOITable`
 - Base Table に対して、`<database table>` を選択します。

- e. スキーマおよび表を更新するため、「最新表示」をクリックして、「保存」をクリックします。
- f. 「データ・モデル」タブを選択してから「ObjectServerHistoryDB2ForNOI」を選択します。
 - 1) 「編集」をクリックし、<username>、<password>、<host name>、<port>の情報を入力します。
 - 2) Netcool/Impact データ・ソースを保存するため、「接続のテスト」をクリックし、次に「保存」アイコンをクリックします。
- g. データ型を編集します。ObjectServerHistoryDB2ForNOI データ・ソースを展開して AlertsHistoryDB2Table を編集します。
- h. Base Table に対して、<database name> と <database table name> を選択します。
- i. スキーマおよび表を更新するため、「最新表示」をクリックして、「保存」をクリックします。
- j. 「サービス」タブを選択し、以下のサービスが開始されていることを確認します。

ProcessRelatedEvents

ProcessSeasonalityEvents

ProcessRelatedEventConfig

3. 以前に Oracle または MSSQL 用に DB2 データベース接続が構成されていた場合は、Netcool/Impact でその接続を構成します。以下の手順により、DB2 データベースを使用するレポート生成を構成します。デフォルトのプロパティをエクスポートし、デフォルト構成を変更して、プロパティを更新します。

- a. プロパティ・ファイルを生成し、<Impact のインストール・ロケーション>/bin ディレクトリに移動して nci_trigger を見つけ、コマンド行インターフェースから以下のコマンドを実行します。

```
nci_trigger <server> <username>/<password> NOI_DefaultValues_Export
FILENAME directory/filename
```

ここで、

<server>

Event Analytics がインストールされているサーバー。

<user name>

Event Analytics ユーザーのユーザー名。

<password>

Event Analytics ユーザーのパスワード。

directory

ファイルが保管されているディレクトリ。

filename

プロパティ・ファイルの名前。

例えば、次のようにします。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Export
FILENAME /tmp/seasonality.props
```

- b. プロパティ・ファイルを更新します。一部のプロパティ値は、生成されたプロパティ・ファイルによって上書きされますが、生成されたプロパティ・ファイル内のその他のプロパティ値については、更新する必要があります。影響を受ける全プロパティのリストについては、236 ページの『生成されたプロパティ・ファイル』を参照してください。

- 以下のパラメーター値が設定されていない場合、プロパティ・ファイルを更新してこれらのパラメーター値を反映してください。

```
history_datasource_name=ObjectServerHistoryDB2ForNOI
history_datatype_name=AlertsHistoryDB2Table
history_database_table=<database table name>
history_database_type=DB2
```

- c. 変更したプロパティ・ファイルを Netcool/Impact にインポートするために、以下のコマンドを入力します。

```
nci_trigger <Server> <username>/<password> NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME directory/filename
```

例えば、次のようにします。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME /tmp/seasonality.props
```

関連タスク:

40 ページの『Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact のインストール』

Impact での MS SQL データベース接続の構成

有効な MS SQL データベースへの接続を IBM Tivoli Netcool/Impact 内から構成できます。

始める前に

MS SQL をサポートするには、少なくとも IBM Tivoli Netcool/Impact 7.1.0.1 が必要です。

アーカイブ・データベースとして MS SQL を使用するには、Netcool/Impact へのリモート接続をセットアップする必要があります。詳しくは、235 ページの『Netcool/Impact リモート接続』を参照してください。

このタスクについて

ユーザーは、MS SQL で時刻範囲および名前を指定して、季節性イベント・レポートおよび関連イベントの構成を実行することができます。ObjectServer データ・ソースとデータ型を構成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. Netcool/Impact UI にログインします。
`https://impacthost:port/ibm/console`
2. ObjectServer データ・ソースおよびデータ型を構成します。
 - a. Netcool/Impact UI の使用可能プロジェクト・リストで、「**NOI** プロジェクト」を選択します。
 - b. 「データ・モデル」タブを選択してから「**ObjectServerForNOI**」を選択します。

- 1) 「編集」をクリックし、<username>、<password>、<host name>、<port> の情報を入力します。
- 2) Netcool/Impact データ・ソースを保存します。「接続のテスト」をクリックし、次に「保存」アイコンをクリックします。
- c. データ型を編集するため、データ・ソースを展開し、ObjectServer のイベント履歴データベース・タイプに対応するようにデータ型を編集します。 例: AlertsForNOITable
- d. Base Table に対して、<database table> を選択します。
- e. スキーマおよび表を更新するため、「最新表示」をクリックして、「保存」をクリックします。
- f. 「データ・モデル」タブを選択してから
「ObjectServerHistoryMSSQLForNOI」を選択します。
 - 1) 「編集」をクリックし、<username>、<password>、<host name>、<port>、<sid> の情報を入力します。
 - 2) Netcool/Impact データ・ソースを保存します。「接続のテスト」をクリックし、次に「保存」アイコンをクリックします。
- g. データ型を編集します。データ・ソース
ObjectServerHistoryMSSQLForNOI を展開して AlertsHistoryMSSQLTable を編集します。
- h. Base Table に対して <database table name> を選択します。
- i. スキーマおよび表を更新するため、「最新表示」をクリックして、「保存」をクリックします。
- j. 「サービス」タブを選択し、以下のサービスが開始されていることを確認します。
 - ProcessRelatedEvents
 - ProcessSeasonalityEvents
 - ProcessRelatedEventConfig
3. レポート生成で MS SQL データベースを使用するように構成します。
 - a. プロパティ・ファイルを生成するため、<Impact のインストール・ロケーション>/bin ディレクトリに移動して nci_trigger を見つけ、コマンド行インターフェースで以下のコマンドを入力します。


```
nci_trigger <server> <username>/<password> NOI_DefaultValues_Export
FILENAME directory/filename
```

 - <server>
Event Analytics がインストールされているサーバー。
 - <user name>
Event Analytics ユーザーのユーザー名。
 - <password>
Event Analytics ユーザーのパスワード。
 - directory
ファイルが保管されているディレクトリ。
 - filename
プロパティ・ファイルの名前。

例えば、「./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass
NOI_DefaultValues_Export FILENAME /tmp/seasonality.props」 のように
入力します。

- b. プロパティ・ファイルを更新します。一部のプロパティ値は、生成されたプロパティ・ファイルによって上書きされますが、生成されたプロパティ・ファイル内のその他のプロパティ値については、更新する必要があります。影響を受ける全プロパティのリストについては、236 ページの『生成されたプロパティ・ファイル』を参照してください。

- 以下のパラメーター値が設定されていない場合、プロパティ・ファイルを更新してこれらのパラメーター値を反映してください。

```
history_datasource_name=ObjectServerHistoryMSSQLForNOI  
history_datatype_name=AlertsHistoryMSSQLTable  
history_database_table=<database table name>  
history_database_type=MSSQL
```

- c. 変更したプロパティ・ファイルを Netcool/Impact にインポートするために、以下のコマンドを入力します。

```
nci_trigger <Server> <username>/<password> NOI_DefaultValues_Configure  
FILENAME directory/filename
```

例えば、以下のようになります。

```
./nci_trigger NCI impactadmin/impactpass NOI_DefaultValues_Configure  
FILENAME /tmp/seasonality.props
```

Netcool/Impact リモート接続

デフォルトのアーカイブ・データベースは DB2 です。アーカイブ・データベースとして Oracle または MS SQL を使用するには、Netcool/Impact へのリモート接続をセットアップする必要があります。

このタスクについて

IBM Dashboard コンソールと Netcool/Impact の接続では HTTPS を使用する必要があります。

手順

1. IBM Dashboard コンソールにログインします。Dashboard コンソールに接続できない場合は、コンピューターのファイアウォールを無効にしてください。
2. 「コンソール」アイコンをクリックします。
3. 「接続」を選択します。
4. 「新規リモート・プロバイダーの作成」アイコンをクリックします。
5. Netcool/Impact UI サーバーのホスト名、ポート、名前、パスワード を入力します。
6. 「検索」をクリックします。
7. 使用するデータ・プロバイダーとして **Impact_NCICLUSTER** を選択します。
8. 「OK」をクリックします。

生成されたプロパティ・ファイル

生成されたプロパティ・ファイルで、上書きされたプロパティ値を更新できます。

生成されたプロパティ・ファイルを編集し、季節性イベントと関連イベントに対応するように Netcool/Impact をセットアップおよびカスタマイズできます。生成されたプロパティ・ファイルで定義されているプロパティは以下のとおりです。

```
#
#####
####          NOI Shared Configuration          ####
#####
#
# If you are updating the Rollup configuration, go to
# The end of the file
# Following section holds the configuration for accessing
# Alerts historical information and storing results
# history_datasource_name Contains the Impact datasource name
# history_datatype_name Contains the Impact datatype name
# history_database_type Contains the Impact datasource type (DB2, Oracle, MSSQL)
# history_database_table Contains the database table and if required, the schema,
to access the event history
# results_database_type Contains the database type for storing results.
#
# Most likely you do not have to change this configuration
#
history_datasource_name=ObjectServerHistoryDB2ForNOI
history_datatype_name=AlertsHistoryDB2Table
history_database_table=DB2INST1.REPORTER_STATUS
history_database_type=DB2
#
#
#
results_database_type=DERBY
#
# Column name for the analysis
#
history_column_names_analysis=SUMMARY
#
# The column name where the timestamp associated with the records is stored
#
history_column_name_timestamp=FIRSTOCCURRENCE
#
#
#
history_db_timestampformat=yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS
configuration_db_timestampformat=yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS
#
#####
####          Seasonality Only Configuration          ####
#####
#
# Will only save and process events of this confidence level or higher
#
save_event_threshold=.85
#
# Used in determining the confidentiality level ranges, by determining the
threshold values.
# level_threshold_high Level is high, when confidentiality is greater than
or equal to
# level_threshold_medium Level is medium, when confidentiality is greater
than or equal to
# level_threshold_low Level is low, when confidentiality is greater than or
```

```

equal to
# If the confidentiality doesn't meet any of these conditions, level will be
set to unknown.
#
level_threshold_high=99
level_threshold_medium=95
level_threshold_low=0
#
# Rollup configuration adds additional information to the Seasonal Report data
# number_of_rollup_configuration Contains the number of additional rollup
構成
# rollup_ <number where its 1 to n >_column_nameContains the column name from
which the data is retrieved
# rollup_ <number where its 1 to n >_type Contains the type value
# rollup_ <number where its 1 to n >_display_name A name that needs to be
defined in the UI
# Types can be defined as follows :
#     MAX, MIN, SUM, NON_ZERO, DISTINCT and EXAMPLE
#     MAX: The maximum value observed for the column, if no value is ever seen
this will default to Integer.MIN_VALUE
#     MIN: The minimum value observed for the column, if no value is ever seen
this will default to Integer.MAX_VALUE
#     SUM: The sum of the values observed for the column.
#     NON_ZERO: A counting column, that counts "Non-Zero"/"Non-Blank"
occurrences of events, this can be useful to
#         track the proportion of events that have been actioned,
or how many events had a ticket number associated
#         with them.
#     DISTINCT: The number of distinct values that have been seen for this key,
value pair
#     EXAMPLE: Show the first non-blank "example" of a field that contained this
key, useful when running seasonality on a
#         non-digestible field such as ALERT_IDENTIFIER, and you want an
example human readable
#         SUMMARY to let you understand the type of problem
#
number_of_rollup_configuration=2
rollup_1_column_name=SEVERITY
rollup_1_type=MIN
rollup_1_display_name=MINSeverity
rollup_2_column_name=SEVERITY
rollup_2_type=MAX
rollup_2_display_name=MAXSeverity
#
#####
####                               Related Events Only Configuration                               ####
#####
#
# Rollup configuration adds additional information to the Related Events data
# reevent_number_of_rollup_configuration Contains the number of additional
rollup configuration
# reevent_rollup_ <number where its 1 to n >_column_nameContains the column
name from which the data is retrieved
# reevent_rollup_ <number where its 1 to n >_type Contains the type value
# reevent_rollup_ <number where its 1 to n >_display_name A name that needs
to be defined in the UI
# reevent_rollup_ <number where its 1 to n >_actionable Numeric only column
that determines the weight for probable root cause
# Types can be defined as follows :
#     MAX, MIN, SUM, NON_ZERO, DISTINCT and EXAMPLE
#     MAX: The maximum value observed for the column, if no value is ever
seen this will default to Integer.MIN_VALUE
#     MIN: The minimum value observed for the column, if no value is ever
seen this will default to Integer.MAX_VALUE
#     SUM: The sum of the values observed for the column.
#     NON_ZERO: A counting column, that counts "Non-Zero"/"Non-Blank"
occurrences of events, this can be useful to

```

```

#           track the proportion of events that have been actioned, or
how many events had a ticket number associated
#           with them.
#   DISTINCT: The number of distinct values that have been seen for this
key, value pair
#   EXAMPLE: Show the first non-blank "example" of a field that contained
this key, useful when running Seasonality on a
#           non-digestible field such as ALERT_IDENTIFIER, and you want
an example human readable
#           SUMMARY to let you understand the type of problem
#
reevent_number_of_rollup_configuration=3
reevent_rollup_1_column_name=ORIGINALSEVERITY
reevent_rollup_1_type=MAX
reevent_rollup_1_display_name=MAXSeverity
reevent_rollup_1_actionable=true
reevent_rollup_2_column_name=ACKNOWLEDGED
reevent_rollup_2_type=NON_ZERO
reevent_rollup_2_display_name=Acknowledged
reevent_rollup_2_actionable=true
reevent_rollup_3_column_name=ALERTGROUP
reevent_rollup_3_type=EXAMPLE
reevent_rollup_3_display_name=AlertGroup
reevent_rollup_3_actionable=false
#
# Group Information adds additional group information under the Show Details ->
Group More Information portion of the UI
# reevent_num_groupinfo Contains the number of group information columns to
display
# reevent_groupinfo_<number where its 1 to n>_columnContains the column
name from which the data is retrieved
# The following columns are allowed :
#   PROFILE, EVENTIDENTITIES, INSTANCES, CONFIGNAME, TOTALEVENTS,
UNIQUEEVENTS, REVIEWED, GROUPTTL
#   PROFILE: The relationship profile, or strength of the group.
#   EVENTIDENTITIES: A comma separated list that creates the event identity.
#   INSTANCES: The total number of group instances.
#   CONFIGNAME: The configuration name the group was created under.
#   TOTALEVENTS: The total number of events within the group.
#   UNIQUEEVENTS: The total number of unique events within the group.
#   REVIEWED: Whether the group has been reviewed by a user or not.
#   GROUPTTL: The number of seconds the group will stay active after the
first event occurs.
#
reevent_num_groupinfo=3
reevent_groupinfo_1_column=PROFILE
reevent_groupinfo_2_column=EVENTIDENTITIES
reevent_groupinfo_3_column=INSTANCES
#
# Event Information adds additional event information under the Show Details ->
Event More Information portion of the UI
# reevent_num_eventinfo Contains the number of event information columns to
display
# reevent_eventinfo_<number where its 1 to n>_columnContains the column name
from which the data is retrieved
# The following columns are allowed :
#   PROFILE, INSTANCES, EVENTIDENTITY, EVENTIDENTITIES, CONFIGNAME, and GROUPNAME
#   PROFILE: The relationship profile, or strength of the related event.
#   INSTANCES: Total number of instance for the related event.
#   EVENTIDENTITY: The unique event identity for the related event.
#   EVENTIDENTITIES: A comma separated list that creates the event identity.
#   CONFIGNAME: The configuration name the related event was created under.
#   GROUPNAME: The group name the related event is created under.
#
reevent_num_eventinfo=1
reevent_eventinfo_1_column=INSTANCES

```

```

#
#####
###                               NOI Shared Configuration                               ###
#####
#
# If you are updating the Rollup configuration, go to
# The end of the file
# Following section holds the configuration for accessing
# Alerts historical information and storing results
# history_datasource_name Contains the Impact datasource name
# history_datatype_name Contains the Impact datatype name
# history_database_type Contains the Impact datasource type (DB2, Oracle, MSSQL)
# history_database_table Contains the database table and if required, the schema,
to access the event history
# results_database_type Contains the database type for storing results.
#
# Most likely you do not have to change this configuration
#
history_datasource_name=ObjectServerHistoryDB2ForNOI
history_datatype_name=AlertsHistoryDB2Table
history_database_table=DB2INST1.REPORTER_STATUS
history_database_type=DB2
#
#
#
results_database_type=DERBY
#
# Column name for the analysis
#
history_column_names_analysis=SUMMARY
#
# The column name where the timestamp associated with the records is stored
#
history_column_name_timestamp=FIRSTOCCURRENCE
#
#
#
history_db_timestampformat=yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS
configuration_db_timestampformat=yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS
#
#####
###                               Seasonality Only Configuration                               ###
#####
#
# Will only save and process events of this confidence level or higher
#
save_event_threshold=.85
#
# Used in determining the confidentiality level ranges, by determining the
threshold values.
# level_threshold_high Level is high, when confidentiality is greater than
or equal to
# level_threshold_medium Level is medium, when confidentiality is greater
than or equal to
# level_threshold_low Level is low, when confidentiality is greater than or
equal to
# If the confidentiality doesn't meet any of these conditions, level will be
set to unknown.
#
level_threshold_high=99
level_threshold_medium=95
level_threshold_low=0
#
# Rollup configuration adds additional information to the Seasonal Report data
# number_of_rollup_configuration Contains the number of additional rollup
構成
# rollup_ <number where its 1 to n >_column_name Contains the column name from

```

```

which the data is retrieved
# rollup_ <number where its 1 to n >_type Contains the type value
# rollup_ <number where its 1 to n >_display_name A name that needs to be
defined in the UI
# Types can be defined as follows :
#     MAX, MIN, SUM, NON_ZERO, DISTINCT and EXAMPLE
#     MAX: The maximum value observed for the column, if no value is ever seen
this will default to Integer.MIN_VALUE
#     MIN: The minimum value observed for the column, if no value is ever seen
this will default to Integer.MAX_VALUE
#     SUM: The sum of the values observed for the column.
#     NON_ZERO: A counting column, that counts "Non-Zero"/"Non-Blank"
occurrences of events, this can be useful to
#         track the proportion of events that have been actioned,
or how many events had a ticket number associated
#         with them.
#     DISTINCT: The number of distinct values that have been seen for this key,
value pair
#     EXAMPLE: Show the first non-blank "example" of a field that contained this
key, useful when running seasonality on a
#         non-digestible field such as ALERT_IDENTIFIER, and you want an
example human readable
#         SUMMARY to let you understand the type of problem
#
number_of_rollup_configuration=2
rollup_1_column_name=SEVERITY
rollup_1_type=MIN
rollup_1_display_name=MINSeverity
rollup_2_column_name=SEVERITY
rollup_2_type=MAX
rollup_2_display_name=MAXSeverity
#
#####
###                               Related Events Only Configuration                               ###
#####
#
# Rollup configuration adds additional information to the Related Events data
# reevent_number_of_rollup_configuration Contains the number of additional
rollup configuration
# reevent_rollup_ <number where its 1 to n >_column_name Contains the column
name from which the data is retrieved
# reevent_rollup_ <number where its 1 to n >_type Contains the type value
# reevent_rollup_ <number where its 1 to n >_display_name A name that needs
to be defined in the UI
# reevent_rollup_ <number where its 1 to n >_actionable Numeric only column
that determines the weight for probable root cause
# Types can be defined as follows :
#     MAX, MIN, SUM, NON_ZERO, DISTINCT and EXAMPLE
#     MAX: The maximum value observed for the column, if no value is ever
seen this will default to Integer.MIN_VALUE
#     MIN: The minimum value observed for the column, if no value is ever
seen this will default to Integer.MAX_VALUE
#     SUM: The sum of the values observed for the column.
#     NON_ZERO: A counting column, that counts "Non-Zero"/"Non-Blank"
occurrences of events, this can be useful to
#         track the proportion of events that have been actioned, or
how many events had a ticket number associated
#         with them.
#     DISTINCT: The number of distinct values that have been seen for this
key, value pair
#     EXAMPLE: Show the first non-blank "example" of a field that contained
this key, useful when running Seasonality on a
#         non-digestible field such as ALERT_IDENTIFIER, and you want
an example human readable
#         SUMMARY to let you understand the type of problem
#
reevent_number_of_rollup_configuration=3

```

```

reevent_rollup_1_column_name=ORIGINALSEVERITY
reevent_rollup_1_type=MAX
reevent_rollup_1_display_name=MAXSeverity
reevent_rollup_1_actionable=true
reevent_rollup_2_column_name=ACKNOWLEDGED
reevent_rollup_2_type=NON_ZERO
reevent_rollup_2_display_name=Acknowledged
reevent_rollup_2_actionable=true
reevent_rollup_3_column_name=ALERTGROUP
reevent_rollup_3_type=EXAMPLE
reevent_rollup_3_display_name=AlertGroup
reevent_rollup_3_actionable=false
#
# Group Information adds additional group information under the Show Details ->
Group More Information portion of the UI
# reevent_num_groupinfo Contains the number of group information columns to
display
# reevent_groupinfo_<number where its 1 to n>_columnContains the column
name from which the data is retrieved
# The following columns are allowed :
#     PROFILE, EVENTIDENTITIES, INSTANCES, CONFIGNAME, TOTALEVENTS,
UNIQUEEVENTS, REVIEWED, GROUPTTL
#     PROFILE: The relationship profile, or strength of the group.
#     EVENTIDENTITIES: A comma separated list that creates the event identity.
#     INSTANCES: The total number of group instances.
#     CONFIGNAME: The configuration name the group was created under.
#     TOTALEVENTS: The total number of events within the group.
#     UNIQUEEVENTS: The total number of unique events within the group.
#     REVIEWED: Whether the group has been reviewed by a user or not.
#     GROUPTTL: The number of seconds the group will stay active after the
first event occurs.
#
reevent_num_groupinfo=3
reevent_groupinfo_1_column=PROFILE
reevent_groupinfo_2_column=EVENTIDENTITIES
reevent_groupinfo_3_column=INSTANCES
#
# Event Information adds additional event information under the Show Details ->
Event More Information portion of the UI
# reevent_num_eventinfo Contains the number of event information columns to
display
# reevent_eventinfo_<number where its 1 to n>_columnContains the column name
from which the data is retrieved
# The following columns are allowed :
#     PROFILE, INSTANCES, EVENTIDENTITY, EVENTIDENTITIES, CONFIGNAME, and GROUPNAME
#     PROFILE: The relationship profile, or strength of the related event.
#     INSTANCES: Total number of instance for the related event.
#     EVENTIDENTITY: The unique event identity for the related event.
#     EVENTIDENTITIES: A comma separated list that creates the event identity.
#     CONFIGNAME: The configuration name the related event was created under.
#     GROUPNAME: The group name the related event is created under.
#
reevent_num_eventinfo=1
reevent_eventinfo_1_column=INSTANCES
#
#####
# The following properties are used to configure event pattern creation      ##
# type.resourcelist=<columns include information. Comma separated list >      ##
# type.servername.column=<SERVERNAME column name if different than default>    ##
# type.serverserial.column=<SERVERSERIAL column name if different than default> ##
# type.default.eventid=<default event identities when there is no mactch      ##
#                               found in the types configuration. Comma separated list ##
#                               The id should not include a timestamp component.    ##
# type.default.eventtype=<default event type when there is no match            ##
#                               found in the types configuration.                  ##
# type index starts with 0                                                    ##
# type_number_of_type_configurations=number of type configurations            ##

```

```

# type.index.eventid=event identity column name ##
# type.index.eventtype=event column includes the type to use ##
# type.index.filterclause=History DB filter to filter events to find the types ##
# type.index.osfilterclause=ObjectServer filter tp filter matching events types ##
# ##
# ##
# NOTE : It is recommended to create database index(s) on the reporter status ##
#         table for the fields used in the filtercaluse to speed the query(s). ##
#         Example to create an index: ##
#         create index types_index on db2inst1.reporter_stuats (Severity) ##
# ##
# ##
#Use the following as an example creating one type only ##
# ##
#type_number_of_type_configurations=1 ##
#type.0.eventid=NODE,SUMMARY,ALERTGROUP ##
#type.0.eventtype=ACMEType ##
#type.0.filterclause=Vendor = 'ACME' ##
#type.0.osfilterclause=Vendor = 'ACME' ##
#####
type.resourcelist=NODE
type.default.eventid=IDENTIFIER
type.default.eventtype=ALERTGROUP
type.servername.column=SERVERNAME
type.serverserial.column=SERVERSERIAL

type_number_of_type_configurations=1
type.0.eventid=SUMMARY
type.0.eventtype=ALERTGROUP
type.0.filterclause=Severity >=3
type.0.osfilterclause=Severity >=3

```

Netcool/Impact 環境へのクラスターの追加

Netcool/Impact 環境にクラスターを追加する場合は、IBM Tivoli Netcool/Impact のデータ・ソースを更新する必要があります。

このタスクについて

クラスターを Netcool/Impact 環境に追加する際に、以下のデータ・ソースを更新します。

```

seasonalReportDataSource
RelatedEventsDataSource
NOIRReportDataSource

```

以下の手順を実行して、データ・ソースを更新します。

手順

1. Netcool/Impact で、「データベース障害ポリシー」に移動します。
2. 必要な高可用性のタイプに応じて、「フェイルオーバー」または「フェイルバック」を選択します。詳しくは、フェイルオーバーおよびフェイルバックに関する説明を参照してください。
3. 「バックアップ・ソース」に移動します。
4. 2 次 Impact サーバーの Derby の ホスト名、ポート、およびデータベース の 情報を入力します。

標準フェイルオーバー

標準フェイルオーバーとは、1 次サーバーが使用不可になった場合に、

SQL データベース DSA が 2 次データベース・サーバーに切り替わり、その後は Netcool/Impact が再始動するまで 2 次データベース・サーバーを継続して使用するという構成です。

フェイルバック

フェイルバックとは、1 次サーバーが使用不可になった場合に、SQL データベース DSA が 2 次データベース・サーバーに切り替わり、その後は 1 次サーバーが再び使用可能になったかどうかを判別するために 1 次サーバーへの再接続を周期的に試行するという構成です。

次のタスク

エラー ATKRST132E が返された場合は、245 ページの『Event Analytics のトラブルシューティング』で詳細を参照してください。

イベントを処理している Netcool/Impact クラスターに同じキャッシュを保持させ、同じ時刻またはそれに近い時刻にキャッシュを更新させる場合は、nco_sql を指定してファイル relatedevents_objectserver.sql を実行する必要があります。relatedevents_objectserver.sql ファイルには、以下のコマンドが含まれています。

```
create database relatedevents;
create table relatedevents.cacheupdates persistent (name varchar (20) primary key,
updates integer);
insert into relatedevents.cacheupdates (name, updates) values ('RE_CACHE', 0);
```

追加のフェイルオーバー機能

関連イベントでは、標準の ObjectServer コンポーネントを使用して、高可用性ソリューションが提供されます。Netcool/Impact ノード上のキャッシュがリフレッシュされる前に、ObjectServer ペアの 1 次 ObjectServer が停止した場合でも高可用性を確保できるように、これらの ObjectServer コンポーネントに対して追加の構成を行う必要があります。

このシナリオでは、相関ルールをデプロイした場合に、ObjectServer テーブル間で複製をセットアップしていれば、そのルールが適用されます。それ以外の場合は、新規ルールが適用されず、別の新規ルールをデプロイするまで、この状態が続きます。ObjectServer テーブル間で複製をセットアップするには、以下のステップを実行します。

- .GATE.map ファイルに、以下の行を追加します。

```
CREATE MAPPING RE_CACHMAP
(
  'name' = '@name' ON INSERT ONLY,
  'updates' = '@updates'
);
```

- 使用している構成で標準の StatusMap ファイルを使用しない場合は、alerts.status を制御するために使用している StatusMap ファイルに以下の行を追加します。StatusMap ファイルは、.tblrep.def ファイル内にあります。

```
'ParentIdentifier' = '@ParentIdentifier'
```

- .tblrep.def ファイルに、以下の行を追加します。

```
REPLICATE ALL FROM TABLE 'relatedevents.cacheupdates'
USING map 'RE_CACHMAP';
```

収集 ObjectServer と表示 ObjectServer を環境に追加する方法について詳しくは、IBM Tivoli Netcool/OMNIBus の IBM Knowledge Center (<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ/landingpage/NetcoolOMNIBus.html?lang=en>) の以下のトピックを参照してください。

標準の複数階層環境のセットアップ

双方向集約 ObjectServer ゲートウェイの構成

単一方向 1 次収集 ObjectServer ゲートウェイ

イベント・ビューアーでの履歴上のイベントの表示

履歴上のイベントをイベント・ビューアーで表示することができます。

このタスクについて

履歴上のイベントをイベント・ビューアーで表示するには、IBM Tivoli Netcool/Impact の履歴データベースへの接続を作成する必要があります。以下の手順を実行します。

手順

1. Netcool/Impact GUI にログインして「**NOI** プロジェクト」を選択します。
2. 「データ・モデル」タブを選択して「新規データ・ソース」アイコンをクリックします。
3. 「データベース **SQL**」を指して、ご使用のデータベース・タイプを選択します。例えば、DB2 を選択します。
4. 「データ・ソース名」フィールドに、`historicalEventsDatasource` と入力します。
5. 指定されたフィールドにユーザー名とパスワードを入力して、「保存」アイコンをクリックします。
6. ナビゲーション・ペインで、「**historicalEventsDatasource**」を右クリックし、「新規データ・タイプ」を選択します。
7. 「データ・タイプ名」フィールドで、`historicalEventData` と入力します。
8. 「**UI** データ・プロバイダー経由でデータにアクセスする」チェック・ボックスを有効にします。
9. 「最新表示」をクリックして、テーブルの説明を更新します。
10. テーブルの説明で、1 つ以上のフィールドをキー・フィールドとして選択します。次に、「保存」アイコンをクリックします。
11. IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI で、イベント・ビューアーの「パーソナライズ」画面を使用して、イベント・ビューアーのデータ・プロバイダーを変更します。Web GUI でのイベントの表示をカスタマイズする方法について詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIBus.doc_8.1.0/webtop/wip/task/web_cust_jsel_settingportletpreferences.htmlを参照してください。

タイムライン・チャートについて

「関連イベントの詳細」ポートレットのイベント情報は、図表フォーマットで表示されます。

「関連イベントの詳細」ポートレットを使用すると、関連イベントの詳細を確認できます。例えば、タイムライン・チャートでは、グラフ形式のイベント情報を見ることができます。グラフ形式のイベント情報を表示する方法について詳しくは、202 ページの『表形式のイベント情報とグラフ形式のイベント情報の切り替え』を参照してください。

タイムライン・チャートに、グループ内のイベント・タイプごとに、ピボット・イベントに対する相対的なイベント分布が表示されます。ピボット・イベントは常に 0 秒、0 分、または 0 時間の位置にあります。

タイムライン・チャートのくしはそれぞれイベント・タイプを表し、歯はイベント・タイプのインスタンスの数を表します。青のイベント・マーカーは、ピボット・イベントに対して相対的な、すべてのイベント発生時刻を表します。赤のイベント・マーカーは、選択したグループ・インスタンスでのイベント発生時刻を表します。

Event Analytics のトラブルシューティング

以下のトラブルシューティング情報を使用して、Event Analytics の構成に関する問題を解決してください。

大量の検索結果が原因で低下した Event Analytics パフォーマンスの向上

Event Analytics の前のバージョンからのアップグレードを実行する場合、アップグレードによって、前のバージョンから既存のデータが再度取り込まれ、このデータが新しいスキーマ、テーブル、およびビューと整合されます。これにより、Event Analytics 操作のパフォーマンスが低下する可能性があります。パフォーマンスの低下の例を以下に示しますが、問題はこれだけには限定されません。

- レポートがハングする可能性があります。
- レポートが完了しても、季節性イベントのデータが表示されません。

1.3.1 以降のリリースへのアップグレードによって低下した Event Analytics 操作のパフォーマンスを向上させるには、次のように SE_CLEANUPDATA ポリシーを実行します。

1. IBM Tivoli Netcool/Impact が格納され実行されているサーバーにログインします。管理者としてログインする必要があります (つまり、ncw_analytics_admin 役割が割り当てられている必要があります)。
2. 「ポリシー」タブにナビゲートし、SE_CLEANUPDATA ポリシーを検索します。
3. このポリシーをダブルクリックして開きます。
4. 「ポリシー」画面のツールバーの「実行」ボタンを使用して、ポリシーを実行します。

SE_CLEANUPDATA ポリシーは、データをクリーンアップします。具体的には、SE_CLEANUPDATA ポリシーは、以下のように動作します。

- 結果テーブルからデータを除去および削除しません。結果テーブルは、分析に関する元の情報をすべて保持します。
- パフォーマンスを向上させるために、元のテーブルに加えていくつかの追加ビューおよび追加テーブルを提供します。
- 関連イベント、季節性イベント、ルール、および統計からの一部の情報を結合します。
- 追加テーブルおよび追加ビューのみをクリーンアップします。

季節性イベント・レポートが完了前に実行を停止する

季節性イベント・レポートの実行は完了しません。エラーは表示されません。レポートの進行状況は進みません。

この問題は、季節性イベント・レポートの実行中に Netcool/Impact バックエンド・サーバーがオフラインになった一方で Impact UI サーバーは使用可能なままである、という場合に発生します。Impact UI にはエラーが表示されず、ウィジェット/ダッシュボードにもデータが表示されません。

この問題を解決するには、Netcool/Impact サーバーを確実に稼働させるようにします。季節性イベント・レポートを編集して再実行します。

季節性イベント・レポートを複数実行すると Netcool/Impact バックエンド・サーバーで障害が発生する

複数の季節性イベント・レポートの実行が完了しません。エラーは表示されません。レポートの進行状況は進みません。

この問題は、Netcool/Impact のヒープ・サイズ設定をデフォルトより増加させないまま、複数の季節性イベント・レポートを同時に実行した場合に発生します。Netcool/Impact のデフォルトのヒープ・サイズ設定は 1200 MB です。このヒープ・サイズを超えると、Netcool/Impact バックエンド・サーバーに障害が発生します。

この問題を解決するには、ヒープ・サイズ設定値を大きくします。ガイドラインとしては、ご使用のシステム上の空きメモリーの 80% までヒープ・サイズ設定値を増加させます。

詳しくは、Netcool/Impact のトピック『Impact サーバー上の Java 仮想マシンのメモリーの増加』および『Impact Liberty プロファイルでの Java 仮想マシン用メモリーの設定』を参照してください。これらの資料へは、IBM Tivoli Network Management IBM Knowledge Center (<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHYH/welcome>) からアクセスできます。

Microsoft Internet Explorer ブラウザーでの季節性イベント・グラフの表示でエラーが発生する

季節性イベント・グラフが Microsoft Internet Explorer ブラウザーで表示されません。

この問題は、Microsoft Internet Explorer で季節性イベント・グラフを表示するには Microsoft Silverlight プラグインを必要とするために発生します。

この問題を解決するには、Microsoft Silverlight プラグインをインストールしてください。

送信済み季節性イベント・レポートが 0% のままである

季節性イベント・レポートが実行されません。0% のままです。

この問題は、Event Analytics が ProcessSeasonalityEvents サービスにアクセスできない場合に発生します。季節性イベント・レポートは、ProcessSeasonalityEvents サービスにアクセスせずに作成することはできません。

この問題を解決するには、ProcessSeasonalityEvents サービスが Impact サーバー上で確実に実行させるようにします。

季節性イベント・レポートの作成でエラー・メッセージ「レポートの作成エラー。季節性の構成が無効です」が表示される

季節性イベント・レポートが実行されません。エラー・メッセージが表示されます。

レポートの作成エラー。
季節性の構成が無効です。 設定を確認してから再試行してください。

この問題は、季節性イベント・レポートを実行する前に Event Analytics が正しく構成されていない場合に発生します。

この問題を解決するには、Event Analytics のインストールおよび構成ガイドを確認して、前提条件がすべて満たされ、かつ構成の手順がすべて完了していることを確認してください。また、標準の REPORTER_STATUS 以外のテーブル名を使用する場合は、以下の構成トピックで説明されている設定を確認する必要があります。

231 ページの『Impact 内の DB2 データベース接続の構成』

229 ページの『Impact での Oracle データベース接続の構成』

233 ページの『Impact での MS SQL データベース接続の構成』

Event Analytics のファイルとディレクトリーが欠落している

スタンドアロンの Netcool/Impact GUI サーバーに、正しくない列名と翻訳されていないテキスト・ストリングが含まれています。

この問題は、スタンドアロンの Netcool/Impact GUI サーバーがインストールされている場合に発生します。Event Analytics の一部のファイルとディレクトリーが正しくインストールされていません。

この問題を解決するには、バックエンド・サーバーの以下に示すディレクトリーにあるファイルとディレクトリーを、スタンドアロンの Netcool/Impact GUI サーバーにコピーします。

`$IMPACT_HOME/uiproviderconfig`

大規模なデータ・セットを使用すると季節性レポートがタイムアウトになる

季節性ポリシーは、レポートの処理を開始する前に、データベース照会を発行して、処理する必要のあるデータの行数を確認します。データベースに多数の行があり、データベースがこの照会を処理するように調整されていない場合は、このデータベース照会がタイムアウトになります。<install>/logs/impact_server.log ファイルには、以下のメッセージが表示されます。

```
02 Sep 2014 13:00:28,485 ERROR [JDBCVirtualConnectionWithFailOver] JDBC Connection Pool recieved  
error trying to connect to data source at: jdbc:db2://localhost:50000/database  
02 Sep 2014 13:02:28,500 ERROR [JDBCVirtualStatement] JDBC execute failed twice.  
com.micromuse.common.util.NetcoolTimeoutException: TransBlock [Executing SQL query:  
select count(*)  
as COUNT from DB2INST1.PRJ_REPORTER where ((Severity >= 4) AND ( FIRSTOCCURRENCE >  
'2007-  
09-02 00:00:00.000' )) AND ( FIRSTOCCURRENCE < '2014-09-02 00:00:00.000')] timed  
out after  
120000ms.
```

FIRSTOCCURRENCE フィールドと、指定したすべての追加フィルター・フィールド (Severity など) に索引があることを確認します。データベース調整ユーティリティを使用するか、データベース統計を最新表示するか、またはデータベース管理者に連絡してください。impact.server のタイムアウト値をデフォルトの 120s より大きい値にしてください。http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21621488 を参照してください。

季節性レポートの完了率が 0% のままで進行しない

<install>/impact/logs/NCI_policylogger.log 内で、以下のトレース項目が表示され、それより後のトレース項目が表示されません。

```
12 Sep 2014 11:23:08,817: [ConfigureResults][pool-3-thread-18]Parser log: About to  
Add a new Data
```

この問題は、季節性サービスが開始されていない場合に発生します。

この問題を解決するには、以下の手順に従ってください。

1. Netcool/Impact の UI で、「季節性」プロジェクトを選択します。
2. 「季節性」プロジェクト内で、「サービス」タブを選択します。
3. 「サービス」タブで、以下のポリシーを開始します。

StartSeasonalityProcessing

ProcessSeasonalityEvents

季節性レポートまたは関連イベント構成が停止し、エラー ATKRST132E がログに記録される

クラスター・メンバーを開始すると、複製が開始され、Netcool/Impact データベースがダウンします。実行中の季節性レポートまたは関連イベント構成はすべて停止し、以下のエラー・メッセージが Netcool/Impact サーバー・ログに記録されます。

```
ATKRST132E An error occurred while transferring a request to the following remote  
provider: 'Impact_NCICLUSTER.server.company.com'. Error Message is  
'Cannot access data provider - Impact_NCICLUSTER.server.company.com'.
```

この問題を解決するには、影響を受けたレポートまたは構成を手動で再始動するか、またはスケジュールで再始動します。

イベント・ビューアーに季節性イベントを表示できず、**ATKRST103E** がログに記録される

以下のタイプの手順を実行すると、イベント・ビューアーに季節性イベントが表示されず、エラー **ATKRST103E** がログに記録されます。

1. イベント・ビューアーを開き、ウィジェット・メニューからウィジェットを選択して編集します。
2. 編集画面上のリストから、Impact Cluster データ・プロバイダーを選択します。
3. 季節性レポートとレポート名のいずれかを選択して表示します。
4. 構成を保存します。

この問題を解決するには、用意された季節性イベント・ページを使用して季節性イベントを表示し、Tivoli Netcool/OMNIBus データ・プロバイダーを使用して関連イベントの親子関係を表示します。

ObjectServer フェイルオーバーのための Netcool/Impact の構成

Netcool/Impact は、ObjectServer フェイルオーバーの後で Event Analytics の新規イベントを処理しません。新規イベントが処理されるときに、Netcool/Impact サーバーが ObjectServer フェイルオーバーのために正しく構成されていない場合、季節性イベント・ルール・アクションは適用されません。例えば、季節性イベント・ルールが合成イベントを作成した場合に、その合成イベントがイベント・リスト内に表示されません。あるいは、季節性イベント・ルールがイベントの列値を変更した場合に、その値が変更されません。

この問題は、Netcool/Impact が ObjectServer フェイルオーバーのために正しく構成されていない場合に発生します。

この問題を解決するには、ObjectServer フェイルオーバーのための追加の Netcool/Impact 構成が必要です。Netcool/Impact を正しく構成するには、Netcool/Impact V 7.1.0.3 資料の『新規イベントまたは挿入に対する ObjectServer ペアを使用した OMNIBusEventReader の管理』のトピック (https://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHYH_7.1.0.3/com.ibm.netcoolimpact.doc/common/dita/ts_serial_value_omnibus_eventreader_failover_failback.html) の手順を実行してください。

構成された場合、Netcool/Impact は、フェイルオーバー ObjectServer を使用してイベントを処理します。

7.1.0.2 から 7.1.0.3 以降へのアップグレード後に季節性イベントの日付範囲を更新する

Netcool/Impact および Web GUI の 7.1.0.2 から 7.1.0.3 以降にアップグレードした後に、季節性イベント構成の日付範囲を更新する必要があります。7.1.0.2 では、季節性イベント構成の日付範囲は固定されています。7.1.0.3 以降では、デフォルトの日付範囲は相対的です。

7.1.0.3 以降へのアップグレード後に日付範囲を更新するには、以下の手順を実行します。

- 「分析の構成」ポートレットで季節性イベント構成を選択します。
- 「固定日付範囲」ラジオ・ボタンをクリックします。
- 「保存」をクリックして、構成を実行せずに保存するか、または「保存して実行」をクリックして、構成を保存して実行します。

正しい固定日付範囲値が 7.1.0.2 からインポートされます。

Netcool/Impact 7.1.0.3 以降へのアップグレード後に季節性レポートの情報が欠落している

Netcool/Impact 7.1.0.1 および 7.1.0.2 から Netcool/Impact 7.1.0.3 以降にアップグレードした後、「季節性イベントの表示」ポートレットのグループ・テーブル内の列から情報が欠落しています。

アップグレードした後、「季節性イベントの表示」ポートレットに表示されるグループ・テーブル内の特定の列から情報が欠落しています。7.1.0.3 以降で欠落している情報は、Netcool/Impact および Netcool Operations Insight の以前のバージョンでは表示されませんでした。

これらの列で欠落している情報を表示するには、マイグレーション済みの構成を最新ビルドで再実行します。

注: マイグレーション済みの構成を最新ビルドで再実行することにより、以前に実行された構成に存在したデータが上書きされます。

Netcool Operations Insight 1.4.0.1 以降にアップグレードする前に作成した構成に対してパターンを作成できない

Netcool Operations Insight 1.4.0.1 以降にアップグレードする前に作成した構成では、分析構成ファイルに定義されている「グローバル・イベント ID のオーバーライド」設定を使用していました。この分析構成内のグループに対してパターンを作成することはできません。

Netcool Operations Insight 1.4.0.1以降へのアップグレード後、SERVERSERIAL フィールドおよび SERVERNAME フィールド、またはそれらに相当する使用フィールドに基づいてイベント履歴データベースに索引が付けられていることを確認してください。履歴データベースがデフォルトの履歴データベースから作成された場合は、索引が付けられています。

既存の構成にパターンを適用するには、元の構成設定とグローバル・イベント ID を使用して、Netcool Operations Insight 1.4.0.1 以降で構成を再作成してください。

季節性イベントの分析の構成に関する警告メッセージが出る

イベント構成の構成時に季節性イベントの分析が有効になっていると、ログ・ファイルに以下の警告メッセージが出力されます。

WARNING: Follow this instruction: This error is after the analysis is done.
The last step is to reinsert the data for UI views.

You login to the Impact UI, go to the Policies tab, and execute the following policy:

SE_CLEANUPDATA

Following these steps corrects the error and reinserts the data.

一般に、この警告メッセージがログ・ファイルに出力されるのは、季節性の構成が完了していて、エラーが発生した場合です。

このエラーを修正してデータを再挿入するには、以下の手順で SE_CLEANUPDATA ポリシーを実行します。

注: SE_CLEANUPDATA ポリシーを実行する前に、`$IMPACT_HOME/etc/ServerName_server.props` プロパティー・ファイル内に定義されている `impact.server.timeout` プロパティーの指定値を大きくすることをお勧めします。具体的には、`impact.server.timeout=120000` を `impact.server.timeout=3600000` で置き換えます。値 3600000 を指定すると、Apache Derby データベースが複雑な照会を処理するための時間が 60 分に増えます。`impact.server.timeout` プロパティーの編集後に Netcool/Impact サーバーを再始動する必要があります。

1. IBM Tivoli Netcool/Impact が格納され実行されているサーバーにログインします。管理者としてログインする必要があります (つまり、`ncw_analytics_admin` 役割が割り当てられている必要があります)。
2. 「ポリシー」タブにナビゲートし、SE_CLEANUPDATA ポリシーを検索します。
3. このポリシーをダブルクリックして開きます。
4. 「ポリシー」画面のツールバーの「実行」ボタンを使用して、ポリシーを実行します。

SE_CLEANUPDATA ポリシーは、データをクリーンアップします。具体的には、SE_CLEANUPDATA ポリシーは、以下のように動作します。

- 結果テーブルからデータを除去および削除しません。結果テーブルは、分析に関する元の情報をすべて保持します。
- パフォーマンスを向上させるために、元のテーブルに加えていくつかの追加ビューおよび追加テーブルを提供します。
- 関連イベント、季節性イベント、ルール、および統計からの一部の情報を結合します。
- 追加テーブルおよび追加ビューのみをクリーンアップします。

SE_CLEANUPDATA ポリシーを実行できない

季節性レポートの実行時に Netcool/Impact サーバーのタイムアウトに達すると、「分析の構成」ポートレットに以下のメッセージが表示されます。

Finished with Errors

この場合に SE_CLEANUPDATA ポリシーを実行しようとする、Netcool/Impact サーバーでポリシーがロックされます。この問題を回避するには、SE_CLEANUPDATA ポリシーを含むファイルのロックを手動で解除する必要があります。その後、SE_CLEANUPDATA ポリシーを再度実行します。SE_CLEANUPDATA ポリシーのロックを解除するには、以下の手順を実行します。

1. IBM Tivoli Netcool/Impact が格納され実行されているサーバーにログインします。管理者としてログインする必要があります (つまり、ncw_analytics_admin 役割が割り当てられている必要があります。)
2. 「ポリシー」タブにナビゲートし、SE_CLEANUPDATA ポリシーを検索します。
3. SE_CLEANUPDATA ポリシーを右クリックして、ドロップダウン・メニューから「ロックを解除」を選択します。

「タイプの構成が見つかりません」というエラー・メッセージが出る

Event Analytics を IBM Netcool Operations Insight 1.4.0.1 にアップグレードすると、Event Analytics のパターン汎用化機能を使用できます。Event Analytics のパターン汎用化機能を使用するには、IBM Tivoli Netcool/Impact でのイベント・パターン作成に使用されるタイプ・プロパティを構成する必要があります。IBM Tivoli Netcool/Impact でのイベント・パターン作成用のタイプ・プロパティを構成せずに、構成を作成または実行しようすると、以下のエラー・メッセージが表示されます。

タイプの構成が見つかりません

IBM Tivoli Netcool/Impact でのイベント・パターン作成に使用するタイプ・プロパティの構成について詳しくは、220 ページの『Netcool/Impact でイベント・パターンの作成に使用するタイプのプロパティの構成』を参照してください。

パターンに 0 件のグループと 0 件のイベントが表示される

作成され、「関連イベントの表示」ポートレットの「グループ・ソース」テーブルに表示されるイベント・パターンに、0 件のグループと 0 件のイベントが表示されます。

以下のいずれかの理由で、パターンに 0 件のグループと 0 件のイベントが表示されます。

- パターン作成プロセスが完了していない。データ・セットが大きく、推奨されるパターンが多数あると、パターン作成プロセスに時間がかかる場合があります。
- パターン作成プロセスが、完了前に停止した。

パターンに 0 件のグループと 0 件のイベントが表示される理由を確認するには、以下の手順を実行します。

1. プロセスが実行されていることを確認するには、以下の手順を実行します。

- a. 「サービス」タブの「ポリシー・ロガー」サービスから、ポリシー・ロガー・ファイルにポリシー名を追加します。ポリシー・ロガーの構成について詳しくは、『ポリシー・ロガー・サービスの構成』を参照してください。
- b. 以下のログ・ファイルを確認します。

`$IMPACT_HOME/logs/<serverName>_policylogger_PG_ALLOCATE_PATTERNS_GROUPS.log`

プロセスが実行中であるとログ・ファイルに示されている場合は、プロセスが完了するのを待ってください。プロセスが完了しないで停止したとログ・ファイルに示されている場合は、ステップ 2 に進んでください。

2. UI からパラメーターを指定せずにグローバル・プロジェクト・ポリシーの `PG_ALLOCATE_PATTERNS_GROUPS_FORCE` を実行して、すべての構成およびパターンの再割り振りを強制します。
3. `$IMPACT_HOME/logs/`
`<serverName>_policylogger_PG_ALLOCATE_PATTERNS_GROUPS_FORCE.log` ログ・ファイルをモニターして、プロセスの完了を追跡します。

構成が未完了で停止し、開始されない

「分析の構成」ポートレットで構成が完了せず、停止するか、開始に失敗します。

この問題は、Event Analytics のインストール後、または Netcool/Impact サーバーの再始動後に、サービスが開始されていない場合に発生します。

これらの問題を解決するには、以下の手順を実行します。

1. Netcool/Impact UI で、「**Impact** サービス」タブを選択します。
2. 以下の各サービスが開始されていることを確認します。サービスを開始するには、サービスを右クリックし、「開始」を選択します。

ProcessClosedPatternInstances
ProcessPatternGroupsAllocation
ProcessRelatedEventConfig
ProcessRelatedEventPatterns
ProcessRelatedEventTypes
ProcessRelatedEvents
ProcessSeasonalityAfterAction
ProcessSeasonalityConfig
ProcessSeasonalityEvents
ProcessSeasonalityNonOccurrence
UpdateSeasonalityExpiredRules

Event Analytics: イベント・カウント照会に時間がかかりすぎるため、レポートを実行できない

データ・セットが大きすぎたり、最適化されていないために、Netcool/Impact サーバーのタイムアウトが発生してレポートが完了しないと、レポートの実行が失敗します。

この問題を解決するには、Netcool/Impact サーバーのタイムアウト値を大きくして、これらのイベントがタイムアウトになる前に、Netcool/Impact サーバーがそれらを確実に処理できるようにします。このサーバー・タイムアウト値を増やした結果として、Netcool/Impact サーバーはイベントがカウントされるまで待機し、レポートが完了して適切なポートレットに表示されるようになります。

以下にある、Netcool/Impact の `impact.server.timeout` 値を編集してください。

`$IMPACT_HOME/etc/ServerName_server.props`

デフォルトでは、`impact.server.timeout` プロパティは 120000 ミリ秒に設定されており、これは 2 分に相当します。サーバー・タイムアウト値は少なくとも 5 分に設定することが推奨されます。それでも問題が解決しない場合は、レポートが正常に完了して適切なポートレットに表示されるまで、サーバー・タイムアウト値を増やしてください。

Event Analytics 1.4.0.1 にアップグレードする前の Apache Derby データベースのバックアップ

Event Analytics を Netcool Operations Insight 1.4.0.1 にアップグレードする前に、Apache Derby データベースのバックアップを作成してください。

Apache Derby データベースのバックアップを作成するには、以下の手順を実行します。

1. ImpactDatabase サービスを停止します。
2. `$NCHOME/db/<SERVER_NAME>/derby` ディレクトリーからファイルをバックアップします。
3. ImpactDatabase サービスを再始動します。

Apache Derby データベースをバックアップ・ファイルからリストアするには、以下の手順を実行します。

1. ImpactDatabase サービスを停止します。バックアップ・ファイルをリストアする前に、既存の ImpactDB データベースのコピーを作成してください。
2. バックアップ・ファイルを `$NCHOME/db/<SERVER_NAME>/derby` ディレクトリーにコピーします。
3. ImpactDatabase サービスを再始動します。

障害後に Apache Derby データベースをリストアするには、アップグレード・バージョンに基づいて、以下の手順を実行します。

1. 次のディレクトリーに移動します。

```
cd $IMPACT_HOME/add-ons/NOI/db
```
2. `$IMPACT_HOME/add-ons/NOI/db` ディレクトリーにあるファイルをリスト表示します。例:

```
ls
.
.
.
noi_derby_updatefp03.sql
noi_derby_updatefp04.sql
noi_derby_updatefp05.sql
```

```
noi_derby_upgrade_71fp2.sql
```

```
.  
. .
```

3. 編集前に各ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
4. テキスト・エディターを使用して各ファイルを編集するために開き、以下の行を見つけます。

```
connect 'jdbc:derby://__PRIMARY_HOST__:__  
PRIMARY_PORT__/  
__PRIMARY_DB__;  
user=__DBUSER__;password=__DBPASSWORD__';
```

5. 各ファイルの接続パラメーターを変更します。
6. 各ファイルに書き込んだ後、それらのファイルを閉じます。
7. 以下のコマンドを実行します。

```
$IMPACT_HOME/bin/nci_db connect -sqlfile <one of the sql files>
```

注: 以下のように、旧バージョンのファイルをフィックスパック 5 まですべて実行します。

- noi_derby_upgrade_71fp2.sql -- フィックスパック 1 からアップグレードする場合はここから開始します。
- noi_derby_updatefp03.sql -- フィックスパック 2 からアップグレードする場合はここから開始します。
- noi_derby_updatefp04.sql -- フィックスパック 3 からアップグレードする場合はここから開始します。
- noi_derby_updatefp05.sql

8. Netcool/Impact サーバーを再始動します。

親イベントと子イベントがフィルターに一致する場合にのみイベント・ビューアーにイベント関係が表示される

イベント・ビューアーにイベント間の関係を表示できるのは、親イベントと子イベントが、フィルターに一致するすべてのイベントである場合のみです。親イベントまたは子イベントがフィルターに一致しないという、関連イベントのユース・ケースがいくつか存在します。

背景

使用中のイベント・ビューアーに関連付けられた Web GUI 関係が存在する場合、Netcool/OMNIbus Web GUI はイベント・ビューアーにイベント間の関係を表示することができます。この関係では、イベントの親の ID を格納するフィールドと、現在のイベントの ID を格納するフィールドが定義されます。イベント関係の定義について詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSHTQ_8.1.0/com.ibm.netcool_OMNIbus.doc_8.1.0/webtop/wip/task/web_cust_jsel_evtrelationshipmanage.html を参照してください。

関係機能はイベント・リストに含まれている一連のイベントに基づいて動作し、関連する Web GUI フィルターに一致するイベントがイベント・リストに表示されます。以下の例を参照してください。すべての重大イベントを表示する **Critical** という名前のフィルターがある場合、このフィルター節は **Severity = 5** です。この

場合、親イベントと子イベントの関係がすべて `Severity = 5` であれば、該当するイベント間の関係が表示されます。親イベントがフィルター `Severity = 5` に一致するが、子イベントへの関係の重大度が「重要」(`Severity = 4`) である場合、このような子の関係はイベント・リストに表示されません。なぜなら、子イベントがフィルターに一致していないからです。さらに、このような子の関係は、サーバーからイベント・ビューアーに返される一連のイベントに含まれません。

解決策

この問題を解決するには、サーバーからイベント・ビューアーに返されるデータに関連イベントが確実に含まれるような、適切なフィルター条件が指定されたフィルターを定義する必要があります。以下の例を参照してください。この例は、『背景』セクションで使用した例に基づいて作成されています。

1. `Critical` フィルターのコピーを作成し、そのコピーに `CriticalAndRelated` という名前を付けます。これで、フィルターが 2 つになりました。重大イベントのみを表示する場合は、元のフィルターを使用します。関連イベントが重大イベントでない場合でも、関連イベントを表示するには、新しいフィルターを使用します。
2. 関連イベントを含むように、`CriticalAndRelated` フィルターのフィルター条件を手動で変更します。このフィルター条件を手動で変更するには、`Web GUI Filter Builder` の拡張モードを使用します。以下のサンプルの条件は、現在の例に基づいています。

主要フィルター条件は `Severity = 5` です。

イベント内で、親イベントの ID を示すフィールドの名前は `ParentSerial` です。

`ParentSerial` フィールドの値 (設定された場合) は、イベントの `Serial` (シリアル番号) です。

`ParentSerial` が 0 の場合、この値はデフォルト値であり、他のイベントを参照しません。

- 関連する子イベントを含めます。イベントの直接の子イベントであり、主要フィルターに一致するイベントを含めるには、以下のフィルター条件を設定します。

```
Severity = 5
OR
ParentSerial IN (SELECT Serial FROM alerts.status WHERE Severity = 5)
```

- 関連する親イベントを含めます。イベントの直接の親であり、主要フィルターに一致するイベントを含めるには、以下のフィルター条件を設定します。

```
Severity = 5
OR
Serial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE Severity = 5)
```

- 関連する兄弟イベントを含めます。イベントの直接の親の他の子イベントであり、主要フィルターに一致するイベント (主要フィルターに一致するイベントの兄弟) を含めるには、以下のフィルター条件を設定します。

```
Severity = 5
OR
ParentSerial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE
Severity = 5 AND ParentSerial > 0)
```

- 関連する親、子、および兄弟をすべて含めます。新しい CriticalAndRelated フィルターによって、重大イベント、重大イベントの直接の子、重大イベントの直接の親、およびこれらの親イベントの直接の子 (兄弟) を取得するように、前述のすべてのフィルター条件タイプを組み合わせます。以下のフィルターを定義する必要があります。

```
Severity = 5
OR
ParentSerial IN (SELECT Serial FROM alerts.status WHERE Severity = 5)
OR
Serial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE Severity = 5)
OR
ParentSerial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE
Severity = 5 AND ParentSerial > 0)
```

- 2 世代以上離れた関連イベントを含めます。前述の例では、新しいフィルター条件は、初期の重大イベント・セットから、1 つ上または 1 つ下のレベルのみに適用されました。しかし、追加のフィルターを定義して、主要フィルターに一致するイベントから 2 世代以上離れたイベントを取得することができます。重大イベントの孫イベント (つまり、主要フィルター条件に一致するイベントから 2 つ下のレベル) と直接の子を取得する場合は、以下のフィルター条件を設定します。

```
-- The initial set of Critical events
Severity = 5
OR
-- Children of the Critical events
ParentSerial IN (SELECT Serial FROM alerts.status WHERE Severity = 5)
-- Children of the previous "child events"
OR
ParentSerial IN (SELECT Serial FROM alerts.status WHERE
    ParentSerial IN (SELECT Serial FROM alerts.status WHERE Severity = 5) )
```

同じ原則を使用して、2 つ上のレベルの親イベントと、その親イベントの兄弟を取得します。このシナリオを準備するには、以下のフィルター条件を設定します。

```
-- The initial set of Critical events
Severity = 5

OR

-- Children of the Critical events
ParentSerial IN (SELECT Serial FROM alerts.status WHERE
Severity = 5)

OR

-- Children of the previous "child events"
ParentSerial IN (SELECT Serial FROM alerts.status WHERE
    ParentSerial IN (SELECT Serial FROM alerts.status WHERE
Severity = 5) )

OR

-- Parents of the Critical events
Serial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE Severity = 5)

OR

-- Parents of the previous "parent events"
Serial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE
    Serial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE Severity = 5) )
```

OR

```
-- Other children of the Critical events' parents
ParentSerial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE
Severity = 5 AND ParentSerial > 0)
```

OR

```
-- Other children of the Critical events' grandparents
ParentSerial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE
    Serial IN (SELECT ParentSerial from alerts.status WHERE
Severity = 5 AND ParentSerial > 0) AND ParentSerial > 0)
```

この原則を使用して、階層内の 3 つ以上のレベルへとさらに進むことができます。ただし、節を追加するごとに、埋め込まれたサブ照会により、照会のパフォーマンスが低下します。したがって、関連イベントをどの範囲まで含めるかについては、実質的な限界が存在する可能性があります。

IBM Networks for Operations Insight

Networks for Operations Insight は、Netcool Operations Insight ソリューションにネットワーク管理機能を追加します。これらの機能によって、ネットワークのデイスカバリー、可視化、イベント相関、および根本原因分析と、構成およびコンプライアンスの管理が可能となり、それによって動的ネットワーク・インフラストラクチャーでのサービス保証が実現します。このフィーチャーを使用することで、アプリケーションおよびネットワークのパフォーマンス管理に対する包括的な運用上の洞察を得ることができます。

Networks for Operations Insight 機能を使用可能にするには、Netcool Operations Insight で以下の製品をセットアップします。

- Network Manager。 http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK/landingpage/product_welcome_itnm.htmlを参照してください。
- Netcool Configuration Manager。 <http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9/welcome>を参照してください。

Networks for Operations Insight のインストール方法について説明した資料については、32 ページの『フレッシュ・インストールの実行』を参照してください。既存の Networks for Operations Insight からのアップグレード方法、または Networks for Operations Insight への移行方法について説明した資料については、93 ページの『最新の Netcool Operations Insight へのアップグレード』を参照してください。

Networks for Operations Insight によって提供される主な機能は、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードです。新しいネットワーク・ヘルス・ダッシュボードは、Netcool Operations Insight の一部として Network Manager を使用している場合にのみ利用できます。ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードは、選択されたネットワーク・ビューをモニターし、そのネットワーク・ビュー内のデバイスおよびインターフェースの可用性を表示します。また、モニター対象のデバイスおよびインターフェースの KPI データのグラフ、テーブル、およびトレースを表示することにより、パフォーマンスについても報告します。ダッシュボード・タイムラインは、デバイスの構成変更およびイベント・カウントについて報告します。これにより、構成変更とイベントの相関付けが可能になります。ダッシュボードには、より詳細なイベント情報を提供するイベント・ビューアーが組み込まれています。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード の管理

ユーザーのネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを構成および管理するためにこれらのタスクを実行します。

始める前に

Netcool Configuration Manager との統合がセットアップされている場合、デバイス構成変更データは構成およびイベント・タイムラインのみに表示できます。

Netcool Configuration Manager との統合について詳しくは、Network Manager Knowledge Center 内の次のトピックを参照してください。 <http://www->

01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/install/task/nmip_con_configintegrationwithncm.html

このタスクについて

注: ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを表示するための最小画面解像度は 1536 x 864 です。ご使用の画面がこの最小解像度よりも低い場合は、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード内の 1 つ以上のウィジェットにスクロール・バーが表示されます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード の構成

管理者は、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードにどのようにデータを表示するか、およびどのデータを表示するかを構成できます。

このタスクについて

ウィジェットの数を 1 画面に収めるには、1536 x 864 以上の解像度が必要です。

管理者は、オペレーターのニーズを満たすために、さまざまな方法でネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを構成できます。

ダッシュボードのレイアウトの変更

ダッシュボードのレイアウトを変更できます。例えば、ウィジェットの位置またはサイズを変更できます。詳しくは、Network Manager Knowledge Center で次のトピックを参照してください。 http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/isc/edit_page.html

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのすべてのウィジェットのリフレッシュ期間の変更

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード内の Network Manager ウィジェットは、デフォルトで 20 秒ごとに更新されます。以下の手順を実行して、この更新頻度を変更できます。

注: イベント・ビューアー・ウィジェットは、デフォルトで 60 秒ごとに更新されます。

1. 構成ファイル `$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm/nethealth.properties` を編集します。
2. 次の行を見つけて、更新期間を希望する値 (秒単位) に更新します。
`nethealth.refresh.period=60`
3. ファイルを保存します。
4. 「ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード」タブを閉じてからもう一度開き、変更を有効にします。

構成およびイベント・タイムラインで使用されるイベント重大度値に関連付けられた色の変更

以下の手順を実行して、構成およびイベント・タイムラインで使用されるイベント重大度値に関連付けられている色を更新できます。

1. 構成ファイル `$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm/status.properties` を編集します。

2. プロパティ `status.color.background.severity_number` を見つけます。`severity_number` は、重大度の数値に対応します。例えば、5 は「重大」の重大度に対応します。
3. 重大度値の RGB 値を希望する値に変更します。
4. ファイルを保存します。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードでネットワーク・ビューを選択したときの「ネットワーク・ビュー」タブの起動を無効化

ユーザーがネットワーク・ヘルス・ダッシュボードでネットワーク・ビューを選択したとき、デフォルトでは「ネットワーク・ビュー」という別のタブが開きます。このタブには、ネットワーク・ビュー GUI、イベント・ビューアー、および構造ブラウザーで構成されたダッシュボードが組み込まれており、選択したネットワーク・ビューが表示されます。ネットワーク・ビューが非常に大きい場合にこの第 2 のタブが表示されると、システムのパフォーマンスに影響を及ぼす場合があります。このようなパフォーマンスへの影響を避けるために、以下の手順を実行して、「ネットワーク・ビュー」タブの起動を無効にすることができます。

1. 構成ファイル `$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm/topoviz.properties` を編集します。
2. 以下の行を検索します。

```
# Defines whether the dashboard network view tree fires a launchPage event when the user clicks a view in the tree
topoviz.networkview.dashboardTree.launchpage.enabled=true
```
3. プロパティ `topoviz.networkview.dashboardTree.launchpage.enabled` を `false` に設定します。
4. ファイルを保存します。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード のトラブルシューティング

この情報は、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのトラブルシューティングに役立ちます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード のログ・ファイル

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのログ・ファイルを調べて、トラブルシューティング作業に役立てます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのログ・ファイルは以下の場所にあります。

表 21. ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのログ・ファイルの場所

ファイル	場所
ログ・ファイル	<code>\$NMGUI_HOME/profile/logs/tnm/ncp_nethealth.0.log</code>
トレース・ファイル	<code>\$NMGUI_HOME/profile/logs/tnm/ncp_nethealth.0.trace</code>

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのウィジェットのデータ・ソース

以下の情報は、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのウィジェットがどこからデータを取得するかを説明しています。この情報は、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードでデータ表示に関する問題のトラブルシューティングに役立つ可能性があります。

構成およびイベント・タイムライン・ウィジェット

このウィジェットには、以下の統合によってデータが取り込まれます。

- Tivoli Netcool/OMNIbus のイベントを分析し、指定した期間のイベント重大度に基づいてカウントを表示する Tivoli Netcool/OMNIbus 統合。
- 構成変更の配布を取得する Netcool Configuration Manager 統合。

可用性パーセンテージ・ウィジェット

このウィジェットのデータ・ソースは、ヒストリカル・ポーリング・データ・テーブル `pdEwmaForDay` です。ウィジェットには、以下のスコープで、`pdEwmaForDay` テーブルからのデバイス・ポーリング `PingResult` からのデータが表示されます。

- ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードから呼び出されている場合、スコープは選択されているネットワーク・ビューです。
- トポロジー・マップ内の右クリック・コマンドから呼び出されている場合、スコープはコンテキスト内のデバイスかインターフェースです。

注: このウィジェットは、データが適用される時間の終了時にのみ更新されます。

トップ・パフォーマー・ウィジェット

このウィジェットのデータ・ソースは、以下のようなさまざまなヒストリカル・ポーリング・データ・テーブルです。

- `pdEwmaForDay`
- `pdEwmaForWeek`
- `pdEwmaForMonth`
- `pdEwmaForYear`

データのスコープは以下のとおりです。

- ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードから呼び出されている場合、スコープは選択されているネットワーク・ビューです。
- トポロジー・マップ内の右クリック・コマンドから呼び出されている場合、スコープはコンテキスト内のデバイスかインターフェースです。

使用不可リソース・ウィジェット

このウィジェットには、Tivoli Netcool/OMNIbus イベントを分析し、イベント・データを使用して、デバイスまたはインターフェースが影響を受けるかどうか、および問題が ICMP または SNMP のどちらに起因しているかを判別する Tivoli Netcool/OMNIbus 統合によってデータが取り込まれます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードでのデータ表示に関する問題の調査

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのいずれかのウィジェットでデータが表示されない場合、表示するデータがない可能性があります。しかし、解決する必要のある根本的な問題がある場合もあります。管理者はポーリング・ポリシーとポーリング定義を構成して、ユーザーがネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示する必要のあるデータを表示できるようにすることができます。また、ヒストリカル・ポーリング・データを処理および保管する基本システムに関する問題など、その他の潜在的な根本的問題を調べることもできます。

このタスクについて

ポーリング・ポリシーを構成するには、Network Manager Knowledge Center で次のトピックを参照してください。 http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/poll/task/nmip_poll_creatingpollswithmultiplepolldefinitions.html

ポーリング・ポリシー・エディターを編集するときは、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードにポーリング・ポリシーからのデータを表示できるかどうかを判別するために、ポーリング・ポリシー・エディターでの次の操作が重要になります。

ポーリング有効

ポーリング・ポリシーを有効にするときは、このオプションにチェック・マークを付けます。

保管しますか?

ポーリング・ポリシーのヒストリカル・データを保管する場合は、このオプションにチェック・マークを付けます。

注: このオプションにチェック・マークを付けると、ヒストリカル・ポーリング・データのストレージ・システムがアクティブ化されます。これにより、システムに大容量のデータが保管されます。ヒストリカル・ポーリング・データのストレージ・システムについて詳しくは、Network Manager Knowledge Center の次のトピックを参照してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/poll/task/nmip_poll_administeringstorm.html

ネットワーク・ビュー

このタブでは、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードでモニターするネットワーク・ビュー内でポーリング・ポリシーがアクティブであることを確認します。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのさまざまなウィジェットでデータを使用できるようにするには、以下のようにポーリング・ポリシーを構成します。

さまざまな Network Manager ポーリング・ポリシーとポーリング定義について詳しくは、Network Manager Knowledge Center の次のトピックを参照してください。 http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/ref/reference/nmip_ref_pollingref.html

使用不可リソース・ウィジェット

使用不可リソース・ウィジェットでデータを使用できるようにするには、次のポーリング・ポリシーを構成します。

表 22. 使用不可リソース・ウィジェット: 構成するポーリング・ポリシー

応答データを表示する対象	該当するネットワーク・ビューで有効になっていることを確認する必要がある 1 つ以上のポーリング・ポリシー
ping ポーリングに基づくシャーシ・デバイス	1 つ以上のシャーシ ping ポーリング定義を使用するすべてのポーリング・ポリシー。例えば、デフォルト・シャーシ ping ポーリング・ポリシーなどが、このタイプのポーリング・ポリシーです。
ping ポーリングに基づくインターフェース	1 つ以上のシャーシ ping ポーリング定義を使用するすべてのポーリング・ポリシー。例えば、デフォルト・インターフェース ping ポーリング・ポリシーなどが、このタイプのポーリング・ポリシーです。
SNMP ポーリングに基づくシャーシ・デバイス	1 つ以上の SNMP ポーリング定義を使用するすべてのポーリング・ポリシー。例えば、snmpInBandwidth ポーリング・ポリシーなどが、このタイプのポーリング・ポリシーです。
SNMP ポーリングに基づくインターフェース	SNMP リンク状態ポーリング・ポリシー。

可用性パーセンテージ・ウィジェット

可用性パーセンテージ・ウィジェットでシャーシの全体的な可用性データを表示するために、デフォルト・シャーシ ping ポーリング・ポリシーを有効にします。

トップ・パフォーマー・ウィジェット

トップ・パフォーマー・ウィジェットのメトリック

トップ・パフォーマー・ウィジェットの「メトリック」ドロップダウン・リストに特定のメトリックを表示するには、そのメトリックに関連するポーリング定義を含むポーリング・ポリシーを有効にする必要があります。あるいは、新しいポーリング定義を作成し、有効なポーリング・ポリシーにそれを追加します。

注: これらは、保管可能で、次のいずれかのタイプに分類されるポーリング定義である必要があります。

- 基本しきい値
- Ping
- SnmpLinkState

例えば、Network Manager で提供されているデフォルトのポーリング・ポリシーとポーリング定義を使用して、有効化するポーリン

グ・ポリシーと、「メトリック」ドロップダウン・リストで利用できるようになる、対応するメトリックの例を示します。

表 23. トップ・パフォーマー・ウィジェット: 構成するポーリング・ポリシーの例

表示対象のメトリック	有効にするポーリング・ポリシー	このポーリング定義を含むもの
ifInDiscards	ifInDiscards	ifInDiscards
ifOutDiscards	ifOutDiscards	ifOutDiscards
snmpInBandwidth	snmpInBandwidth	snmpInBandwidth

トップ・パフォーマー・ウィジェットのヒストリカル・ポーリング・データ「直近の 1 日」、「先週」、「先月」、および「昨年」ボタンをクリックして、トップ・パフォーマー・ウィジェットでメトリックのヒストリカル・ポーリング・データを表示できます。この方法で表示するヒストリカル・ポーリング・データを収集するには、メトリックに関連する関連ポーリング定義のヒストリカル・データを保管するオプションを選択する必要があります。例えば、**Network Manager** で提供されているデフォルトのポーリング・ポリシーとポーリング定義を使用する、構成対象のポーリング定義の例を示します。

注: ヒストリカル・データは、NCPOLLDATA データベースで収集、処理、および保管された後、トップ・パフォーマーで表示できるようになります。例えば、これを読んでいるときに、1 カ月前のポーリング定義のポーリング・データを保管するオプションを選択した場合、「昨年」オプションには 1 カ月分のデータのみが表示されます。

表 24. トップ・パフォーマー・ウィジェット: 構成するポーリング定義の例

ヒストリカル・データを表示するメトリック	「保管しますか?」オプションを選択するポーリング定義	包含するポーリング・ポリシー
ifInDiscards	ifInDiscards	ifInDiscards
ifOutDiscards	ifOutDiscards	ifOutDiscards
snmpInBandwidth	snmpInBandwidth	snmpInBandwidth

重要: 関心のあるメトリックのヒストリカル・ポーリング・データのストレージを正しく構成していたのに、「直近の 1 日」、「先週」、「先月」、および「昨年」ボタンのいずれかをクリックしてもデータが表示されない場合、ヒストリカル・ポーリング・データを処理および保管する基本システムに問題が生じている可能性があります。特に、ヒストリカル・ポーリング・データを処理する Apache Storm システムが稼働していない可能性や、Apache Storm でヒストリカル・ポーリング・データが保管されている NCPOLLDATA データベースへの接続が失われている可能性があります。詳しくは、Network Manager Knowledge Center で次のトピックを参照してください。 http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/poll/task/nmip_poll_administeringstorm.html

構成およびイベント・タイムライン

Netcool Configuration Manager を使用した構成がインストール時に設定されていた場合に、構成変更データが構成およびイベント・タイムラインに表示されない場合、統合に関する問題が原因である可能性があります。

Netcool Configuration Manager との統合について詳しくは、Network Manager Knowledge Center 内の次のトピックを参照してください。

http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/install/task/nmip_con_configintegrationwithncm.html

トップ・パフォーマー・ウィジェットが 32 ビットを超える値を表示できない場合

トップ・パフォーマー・ウィジェットは 32 ビットを超える値を表示できません。選択したメトリックのデータがトップ・パフォーマー・ウィジェットに表示されない場合は、いくつかの原因が考えられます。1 つの可能性として、そのメトリックのデータの値が 32 ビットを超えていることが挙げられます。

選択したメトリックのデータがトップ・パフォーマー・ウィジェットに表示されない場合は、以下の SQL 照会を実行してエラーが出るかどうか調べます。エラーが出る場合は、そのエラー・コードを確認します。

```
SELECT      errorcode, value, datalabel
FROM        ncpolldata.polldata pd
INNER JOIN  ncpolldata.monitoredobject mo ON mo.monitoredobjectid = pd.monitoredobjectid
WHERE datalabel =poll_of_interest
```

エラー・コードについては、KNP_POLL_DATA_COLLECTION サポート資料 (<http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21422092>) に記載されている ERROR_CODE の値を参照してください。エラー・コードが 112 の場合は、ポーリングされてメトリックに入れられた値が、32 ビット整数フィールドに格納できる数値を超えています。

可用性パーセンテージ・ウィジェットの最新表示に時間がかかる場合

可用性パーセンテージ・ウィジェットの最新表示に時間がかかる場合の 1 つの解決策は、このウィジェットで使用可能なスレッドの数を増やすことです。この解決策は、大規模ネットワークを使用する顧客に最適です。

このタスクについて

使用可能なスレッドの数を増やすには、以下の手順を実行します。

手順

1. 構成ファイル `$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm/nethealth.properties` を編集します。
2. 以下の行を検索します。

```
## Widget thread count for availability widget
nethealth.threads.availability=5
```
3. `nethealth.threads.availability` プロパティの値を増加させます。指定可能な最大値は 10 です。
4. ファイルを保存します。

カスタム・ダッシュボードの作成

ネットワークの各部の状況に関する情報を表示するための「ダッシュボード」として機能するページを作成したり、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードなどの既存ダッシュボードを編集したりすることができます。Network Manager、Tivoli Netcool/OMNIbus Web GUI で提供されているウィジェットから選択すること、Dashboard Application Services Hub 環境にデプロイされているその他の製品から選択することもできます。

このタスクについて

Dashboard Application Services Hub でのページの作成および編集の基本的な情報については、Network Manager Knowledge Center で次のトピックを参照してください。 http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/isc/edit_page.html Dashboard Application Services Hub について詳しくは、Jazz for Service Management インフォメーション・センター (<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSEKCU/welcome>) を参照してください。

開始する前に

- - ページに表示するウィジェットを決定します。
 - ページにカスタム Web GUI ゲージを表示する場合は、ゲージ表示をフィードするメトリックを作成します。
 - ページにアクセスできるユーザー、グループ、またはユーザー役割を決定し、それに基づいて役割を割り当てます。
 - カスタム・ワイヤーでのウィジェット間の通信を行う場合は、ウィジェット間の通信を制御するワイヤーを作成します。

ネットワークのイベント・ドリブン・ビューの表示

ネットワーク・アラート・データによって駆動されるダッシュボード・ネットワーク・ビュー・ウィジェットとその他のウィジェットが含まれるようにダッシュボードを構成できます。ここで説明されている構成では、ユーザーがダッシュボード・ネットワーク・ビュー・ウィジェットのネットワーク・ビュー・ツリーでノードをクリックすると、ダッシュボード内の他のウィジェットが更新され、選択したネットワーク・ビュー内のエンティティに対するイベントに基づいてデータが表示されます。このダッシュボードではネットワーク・アラートのリアルタイム・ビューや、デバイスおよびインターフェースの可用性のリアルタイム・ビューを使用するため、ネットワークのリアルタイムの状況を確認する必要があるネットワーク・オペレーション・センターに有用です。このダッシュボードのウィジェットではヒストリカル・ポーリング・データは使用されないため、ポーリング・データが保管されていない場合、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードの代替として使用できます。

始める前に

ページに関する要件がある場合は、それに基づいて、『カスタム・ダッシュボードの作成』に記載されているタスクの一部またはすべてを実行します。

このタスクについて

ネットワーク・アラート・データによって駆動されるダッシュボード・ネットワーク・ビュー・ウィジェットと他のウィジェットをワイヤリングするページを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. iscadmins 役割を持つユーザーとしてログインします。
2. ページを作成し、それをナビゲーション内のロケーションに割り当て、ユーザーがページを表示するために必要な役割を指定します。デフォルトの場所は「デフォルト」であり、このタスクではこのデフォルトの場所を使用することを想定しています。別の場所を使用する場合、このタスクで「デフォルト」が使用されている箇所では、必ず選択した場所に置き換えてください。
3. ダッシュボード・ネットワーク・ビュー・ウィジェットをページに追加します。
4. 構成およびイベント・タイムラインをページに追加します。Network Manager と Netcool Configuration Manager との統合が構成されている場合、このウィジェットには最大で 24 時間のタイムラインが表示され、イベントの最初のオカレンスによる構成変更データとイベント・データが表示されます。統合を設定していない場合、ウィジェットにはタイムラインにイベント・データがそのまま表示されます。
5. 使用不可リソース・ウィジェットをページに追加します。このウィジェットには、選択したネットワーク・ビュー内でいくつかのデバイスとインターフェースが使用不可であるかが表示されます。
6. イベント・ビューアーをページに追加します。
7. 「保存して終了」をクリックして、ページを保存します。

注: このページにはワイヤリングは必要ありません。ダッシュボード・ネットワーク・ビュー・ウィジェットによって NodeClickedOn イベントが自動的にブロードキャストされ、他のウィジェットはこのイベントを自動的にサブスクライブし、それに応じてデータを更新します。

タスクの結果

ダッシュボード・ネットワーク・ビュー・ウィジェットのネットワーク・ビュー・ツリーでネットワーク・ビューをクリックすると、他のウィジェットが自動的に更新され、イベント・データを表示できるようになりました。

- 使用不可リソース・ウィジェットには、選択したネットワーク・ビュー内で使用不可になっているデバイスとインターフェースの数を示す棒グラフが表示されます。このウィジェットに表示される正確なデータは、以下のポーリング・ポリシーが有効であるかどうかによって異なります。
 - デバイス: デフォルト・シャーシ ping および SNMP ポーリングの失敗ポーリング・ポリシーは有効にする必要があります。
 - インターフェース: デフォルト・インターフェース ping および SNMP リンク状態ポーリング・ポリシーは有効である必要があります。

- 構成およびイベント・タイムラインには、最初のオカレンスによるイベントを示すタイムラインが表示されます。また、Netcool Configuration Manager 統合が構成されている場合、ネットワーク・ビュー内のすべてのエンティティに関する構成変更データが表示されます。
- イベント・ビューアーには、ネットワーク・ビュー内のすべてのエンティティに関するイベントが表示されます。

注: 使用不可リソース・ウィジェットのバーをクリックすると、イベント・ビューアーがさらにフィルタリングされ、そのバーのデバイスまたはインターフェースに関連する可用性イベントのみが表示されます。

ネットワーク・ビューのエンティティに関するトップ・パフォーマー・データの表示および比較

複数のトップ・パフォーマー・ウィジェットを含むダッシュボードを作成し、選択したネットワーク・ビュー内の複数のエンティティとメトリックにわたってヒストリカル・ポーリング・データを比較できます。このダッシュボードは、特定の期間にわたってデバイスとインターフェースがどのように機能しているかということや、根本的な問題があるかどうかを判別するためのバックグラウンド調査や分析に特に有用です。

始める前に

ページに関する要件がある場合は、それに基づいて、267 ページの『カスタム・ダッシュボードの作成』に記載されているタスクの一部またはすべてを実行します。

このタスクについて

ネットワーク・ビュー・ウィジェットと複数のトップ・パフォーマー・ウィジェットをワイヤリングするページを作成して、選択したネットワーク・ビュー内の複数のエンティティとメトリックにわたってヒストリカル・ポーリング・データを比較できるようにするには、以下の手順を実行します。

手順

1. iscadmins 役割を持つユーザーとしてログインします。
2. ページを作成し、それをナビゲーション内のロケーションに割り当て、ユーザーがページを表示するために必要な役割を指定します。デフォルトの場所は「デフォルト」であり、このタスクではこのデフォルトの場所を使用することを想定しています。別の場所を使用する場合、このタスクで「デフォルト」が使用されている箇所では、必ず選択した場所に置き換えてください。
3. ネットワーク・ビュー・ウィジェットをページに追加します。
4. 2 つのトップ・パフォーマー・ウィジェットをページに追加します。

注: 2 つのトップ・パフォーマー・ウィジェットを追加すると、基本的な比較を行えます。例えば、2 つの異なる期間にわたって、同じデバイスまたはインターフェースでのメトリック・トレースを表示できます。3 つ以上のトップ・パフォーマー・ウィジェットを追加することもできます。これにより、より広範囲にわたるデータに対して比較を実行できるようになります。例えば、4 つのトッ

プ・パフォーマー・ウィジェットを追加して、4 つの異なる期間にわたって同じデバイスまたはインターフェースのメトリック・トレースを表示できます。

5. 「保存して終了」をクリックして、ページを保存します。

注: このページにはワイヤリングは必要ありません。ネットワーク・ビュー・ウィジェットによって `NodeClickedOn` イベントが自動的にブロードキャストされ、他のウィジェットはこのイベントを自動的にサブスクライブし、それに応じてデータを更新します。

次のタスク

このダッシュボードを使用して、メトリック・トレースまたはグラフを比較できます。

例: 異なる期間にわたる同じデバイスまたはインターフェースのメトリック・トレースの比較

2 つのトップ・パフォーマー・ウィジェットを含むカスタム・ダッシュボードを使用して、異なる期間での同じデバイスまたはインターフェースのメトリック・トレースを比較します。例えば、特定のインターフェースで `snmpInBandwidth` などのメトリックの現在の生データ・トレースで急上昇が見つかる場合があります。これが独立した急上昇であるか、より深刻な進行中の問題であるかを判別するために、同じダッシュボードで直近の 1 日間や直近の 1 週間など、より長期間にわたり、同じインターフェース上の同じ `snmpInBandwidth` メトリックに対するトレースを表示し、直近の 1 日または 1 週間にわたり、このインターフェースで高い `snmpInBandwidth` が継続的に発生しているかどうかを視覚的に判別できます。

このタスクについて

ダッシュボードを使用して、同じデバイスまたはインターフェースでの異なる期間のメトリック・トレースを比較するには、以下の手順を実行します。

手順

1. ネットワーク・ビュー・ウィジェットでネットワーク・ビューを選択します。2 つのトップ・パフォーマー・ウィジェットが更新され、選択したネットワーク・ビューのデータが表示されます。
2. 各トップ・パフォーマー・ウィジェットから「メトリック」ドロップダウン・リストをクリックし、対象のメトリック (`snmpInBandwidth` など) を選択します。両方のトップ・パフォーマー・ウィジェットで同じメトリックを選択します。これにより、両方のグラフのトップ・エンティティが常に同じになります。
3. いずれかのトップ・パフォーマー・ウィジェットで、トップバーをクリックしてそのグラフ内で最高値を持つエンティティのトレースを表示します。これにより、`snmpInBandwidth` メトリックに関する現在の生データの時間ベースのトレースが表示されます。
4. もう一方のトップ・パフォーマー・ウィジェットで、トップバーをクリックしてそのグラフ内で最高値を持つエンティティのトレースを表示します。これで、両方のウィジェットに同一の時間トレースが表示されます。

5. 2 番目のトップ・パフォーマー・ウィジェットで、時間フレームを変更します。例えば、「直近の 1 日」をクリックします。これで、最初のウィジェットに `snmpInBandwidth` データの現在の生データ・トレースが表示され、2 番目のウィジェットに同じインターフェースの `snmpInBandwidth` データの過去 1 日分のトレースが表示されます。最初のウィジェットの短時間の生データを、過去 1 日間のデータ平均と比較できます。

例: 同じデバイスまたはインターフェースでの異なるメトリック・トレースの比較

2 つのトップ・パフォーマー・ウィジェットを含むカスタム・ダッシュボードを使用して、同じデバイスまたはインターフェースで異なるメトリック・トレースを比較します。例えば、直近の 1 日間に特定のインターフェースで高い `snmpInBandwidth` が生じた回数を確認できます。このインターフェースでの高い着信 SNMP 帯域幅使用量が同じインターフェース上の出力 SNMP 帯域幅使用量に影響を及ぼしているかどうかを判別するには、同じダッシュボードで、同じインターフェースの `snmpOutBandwidth` メトリックに対するトレースを表示し、直近の 1 日間のトレースも表示して、2 つのトレースを視覚的に比較できます。

このタスクについて

ダッシュボードを使用して、同じデバイスまたはインターフェースの異なるメトリック・トレースを比較するには、以下の手順を実行します。

手順

1. ネットワーク・ビュー・ウィジェットでネットワーク・ビューを選択します。
2. 各トップ・パフォーマー・ウィジェットから「メトリック」ドロップダウン・リストをクリックし、対象のメトリック (`snmpInBandwidth` など) を選択します。両方のトップ・パフォーマー・ウィジェットで同じメトリックを選択します。これにより、両方のグラフのトップ・エンティティが常に同じになります。
3. いずれかのトップ・パフォーマー・ウィジェットで、トップバーをクリックしてそのグラフ内で最高値を持つエンティティのトレースを表示します。これにより、`snmpInBandwidth` メトリックに関する現在の生データの時間ベースのトレースが表示されます。
4. もう一方のトップ・パフォーマー・ウィジェットで、トップバーをクリックしてそのグラフ内で最高値を持つエンティティのトレースを表示します。これで、両方のウィジェットに同一の時間トレースが表示されます。
5. 2 番目のトップ・パフォーマー・ウィジェットで「メトリック」ドロップダウン・リストをクリックして `snmpOutBandwidth` を選択します。これで、1 つのウィジェットのネットワーク・ビューに最高の着信 SNMP 帯域幅使用量を持つインターフェースでの着信 SNMP 帯域幅使用量のトレースと、同じインターフェースでの出力 SNMP 帯域幅使用量のトレースが表示されます。2 つのトレースを視覚的に比較して、相関関係があるかどうかを確認できます。

例: 異なるトップ 10 メトリック・グラフの比較

2 つのトップ・パフォーマー・ウィジェットを含むカスタム・ダッシュボードを使用して、異なるトップ 10 メトリック・グラフを比較します。これにより、あるメトリックで著しいパフォーマンス低下を示している複数のデバイスにわたって、そのメトリックの、別のメトリックに対する潜在的な影響を確認できます。例えば、上位 10 件の着信 SNMP 帯域幅使用量の値を示しているデバイスを示すグラフと、上位 10 件の出力 SNMP 帯域幅使用量の値を示しているデバイスを示すグラフを比較できます。

このタスクについて

ダッシュボードを使用して異なるトップ 10 メトリック・グラフを比較するには、以下の手順を実行します。

手順

1. ネットワーク・ビュー・ウィジェットでネットワーク・ビューを選択します。
2. いずれかのトップ・パフォーマー・ウィジェットで「メトリック」ドロップダウン・リストをクリックし、対象のメトリック (snmpInBandwidth など) を選択します。 トップ・パフォーマー・ウィジェットが更新され、最も高い着信 SNMP 帯域幅使用量の値を持つ、ネットワーク・ビュー内の 10 個のインターフェースの棒グラフが表示されます。
3. もう一方のトップ・パフォーマー・ウィジェットで「メトリック」ドロップダウン・リストをクリックし、対象の 2 番目のメトリック (snmpOutBandwidth など) を選択します。 トップ・パフォーマー・ウィジェットが更新され、最高の出力 SNMP 帯域幅使用量の値を持つ、ネットワーク・ビュー内の 10 個のインターフェースの棒グラフが表示されます。

タスクの結果

これで、2 つのグラフを比較して、データに相関関係があるかどうかを確認できます。

ゲージ・グループ内のネットワーク・ビュー・イベント・データの表示

ワイヤーを使用してネットワーク・ビュー・ウィジェットと Dashboard Application Services Hub ゲージ・グループを構成し、お互いにデータを渡せるようにすることができます。ここで説明されている構成では、ネットワーク・ビュー・ウィジェットのネットワーク・ビュー・ツリーでノードをクリックすると、ゲージ・グループが更新されて多数の状況ゲージが表示されます。必要な数の状況ゲージを構成できます。ここで説明されている例では、重大度 3 (軽微)、重大度 4 (重要)、および重大度 5 (重大) という 3 つのゲージが構成され、さらにネットワーク・ビュー内のデバイスにその重大度のイベントが現在いくつ存在するかを示す数が各状況ゲージ内に表示されます。このトピックでは、2 つのウィジェットをワイヤリングする場合のオプションの 1 つを説明しています。

始める前に

ページに関する要件がある場合は、それに基づいて、267 ページの『カスタム・ダッシュボードの作成』に記載されているタスクの一部またはすべてを実行します。

このタスクについて

ネットワーク・ビュー・ウィジェットと Dashboard Application Services Hub ゲージ・グループをワイヤリングするページを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. iscadmins 役割を持つユーザーとしてログインします。
2. ページを作成し、それをナビゲーション内のロケーションに割り当て、ユーザーがページを表示するために必要な役割を指定します。デフォルトの場所は「デフォルト」であり、このタスクではこのデフォルトの場所を使用することを想定しています。別の場所を使用する場合、このタスクで「デフォルト」が使用されている箇所では、必ず選択した場所に置き換えてください。
3. ネットワーク・ビュー・ウィジェットをページに追加します。
4. Dashboard Application Services Hub ゲージ・グループをページに追加します。
5. ゲージ・グループ・ウィジェットを編集します。
6. ゲージ・グループのデータ・セットを選択します。「ゲージ・グループ: データ・セットの選択」ウィンドウで、「Netcool/OMNIbus WebGUI」 > 「すべてのデータ」 > 「フィルター・サマリー」データ・セットを検索します。これを行う方法の 1 つとして、以下を実行します。
 - a. 「ゲージ・グループ: データ・セットの選択」ウィンドウの左上にある検索テキストボックスに、「filter」と入力します。
 - b. 「検索」をクリックします。この検索により、2 つの「フィルター・サマリー」データ・セットが取得されます。
 - c. 「プロバイダー: Netcool/OMNIbus WebGUI」 > 「データ・ソース: すべてのデータ」というラベルの付いたプロバイダー・タイトルを持つデータ・セットを選択します。
7. ゲージ・グループをどのように表示するかを構成します。「ゲージ・グループ: 視覚化設定」ウィンドウで、以下の手順を実行して 3 つの値の状況ゲージを追加します。
 - a. 「ウィジェットの選択」をクリックし、ドロップダウン・リストから「ValueStatus ゲージ」を選択します。次に、「追加」をクリックします。
 - b. 前の手順の説明に従って、さらに 2 つの「ValueStatus ゲージ」ウィジェットを追加します。これで、「選択したウィジェット」リストに 3 つの「ValueStatus ゲージ」ウィジェットが表示されます。
8. 以下を表示する 3 つの値の状況ゲージを構成します。

- 最初の値の状況ゲージは、重大度 3 (軽微) シンボル  内に重大度 3 (軽微) イベントの数を表示します。
- 2 番目の値の状況ゲージは、重大度 4 (重要) シンボル  内に重大度 4 (重要) イベントの数を表示します。
- 3 番目の値の状況ゲージは、重大度 5 (重大) シンボル  内に重大度 5 (重大) イベントの数を表示します。

以下の手順を実行して、重大度 3 (軽微) の値の状況ゲージを構成します。

- 「選択したウィジェット」リストで最初の値の状況ゲージ項目を選択します。
- 「必要な設定」をクリックします。
- 「値」ドロップダウン・リストをクリックし、ドロップダウン・リストから「重大度 3 イベント数」を選択します。
- 「オプション設定」をクリックします。
- 「ゲージ上のラベル」ドロップダウン・リストをクリックし、ドロップダウン・リストから「重大度 3 イベント数の名前」を選択します。
-  「軽微」スピナーで、0 を入力してしきい値を 0 に設定します。このしきい値により、重大度 3 (軽微) のイベントが 1 つでもあれば重大度 3 の値の状況ゲージが生成されるようになります。

以下の手順を実行して、重大度 4 (重要) の値の状況ゲージを構成します。

- 「選択したウィジェット」リストで最初の値の状況ゲージ項目を選択します。
- 「必要な設定」をクリックします。
- 「値」ドロップダウン・リストをクリックし、ドロップダウン・リストから「重大度 4 イベント数」を選択します。
- 「オプション設定」をクリックします。
- 「ゲージ上のラベル」ドロップダウン・リストをクリックし、ドロップダウン・リストから「重大度 4 イベント数の名前」を選択します。
-  「重要」スピナーで、0 を入力してしきい値を 0 に設定します。このしきい値により、重大度 4 (重大) のイベントが 1 つでもあれば重大度 4 の値の状況ゲージが生成されるようになります。

以下の手順を実行して、重大度 5 (重大) の値の状況ゲージを構成します。

- 「選択したウィジェット」リストで最初の値の状況ゲージ項目を選択します。
- 「必要な設定」をクリックします。
- 「値」ドロップダウン・リストをクリックし、ドロップダウン・リストから「重大度 5 イベント数」を選択します。
- 「オプション設定」をクリックします。
- 「ゲージ上のラベル」ドロップダウン・リストをクリックし、ドロップダウン・リストから「重大度 5 イベント数の名前」を選択します。

- f.  「重大」スピナーで、0 を入力してしきい値を 0 に設定します。このしきい値により、重大度 5 (重大) のイベントが 1 つでもあれば重大度 5 の値の状況ゲージが生成されるようになります。
9. 「保存して終了」をクリックして、ページを保存します。
10. ページ・アクション・リストから、「ページの編集」を選択します。
11. 「ワイヤーの表示」  をクリックし、次にウィンドウの「ワイヤーの要約」セクションで「新規ワイヤー」をクリックします。
12. ネットワーク・ビュー・ウィジェットをDashboard Application Services Hub ゲージ・グループに接続するワイヤーを指定します。
- ・ 「新規ワイヤーのソース・イベントを選択」ウィンドウで「ネットワーク・ビュー」 > 「NodeClickedOn」をクリックし、「OK」をクリックします。
 - ・ 「新規ワイヤーのターゲットを選択」ウィンドウで「デフォルト」 > *name_of_page* > 「イベント・ビューアー」をクリックします。
name_of_page は、手順 2 で作成したページの名前です。
 - ・ 「変換」ウィンドウで「ゲージ・イベントの表示」を選択し、「OK」をクリックします。
13. 右上隅にある X 記号をクリックして、ウィンドウの「ワイヤーの要約」セクションを閉じます。
14. 「保存して終了」をクリックして、ページを保存します。

タスクの結果

ネットワーク・ビュー・ウィジェットでネットワーク・ビュー・ツリーのネットワーク・ビューをクリックし、ゲージ・グループを更新して、重大度 3 (軽微)、重大度 4 (重要)、および重大度 5 (重大) という 3 つの状況値に加え、選択したネットワーク・ビュー内のデバイスにその重大度のイベントが現在いくつ存在するかを示す数字が各状況ゲージ内に表示されます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード・ウィジェットのイベント情報

この表を参照して、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード・ウィジェットのパブリッシュ・イベントとサブスクライブ・イベントに関する情報を得てください。新しいカスタム・ウィジェットを作成し、カスタム・ウィジェットを既存のネットワーク・ヘルス・ダッシュボード・ウィジェットとワイヤリングする場合は、このイベント情報を使用してください。

表 25. ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード・ウィジェットのイベント情報

ウィジェット名	イベント・タイプ	イベント名	イベント記述
構成およびイベント・タイムライン	サブスクライブ・イベント	NodeClickedOn	NodeClickedOn イベントをサブスクライブし、イベントの <i>ViewId</i> と <i>datasource</i> に基づいてデータを表示します。
可用性パーセンテージ	サブスクライブ・イベント	NodeClickedOn	NodeClickedOn イベントをサブスクライブし、イベントの <i>ViewId</i> と <i>datasource</i> に基づいてデータを表示します。
Network Manager ポーリング・グラフ	サブスクライブ・イベント	NodeClickedOn	NodeClickedOn イベントをサブスクライブし、イベントの <i>ViewId</i> と <i>datasource</i> に基づいてデータを表示します。
使用不可リソース	パブリッシュ・イベント	showEvents	表示されているグラフのバーをクリックすると、ウィジェットによって、一時フィルターの名前を含む showEvents イベントがパブリッシュされます。
	サブスクライブ・イベント	NodeClickedOn	NodeClickedOn イベントをサブスクライブし、イベントの <i>ViewId</i> と <i>datasource</i> に基づいてデータを表示します。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを使用したネットワークのモニター

この情報を使用し、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを使用して何らかのネットワーク問題が発生していないかを判別する方法と、ダッシュボードから製品の他の部分に移動してより詳細な情報を取得する方法を理解してください。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードは、選択されたネットワーク・ビューをモニターし、そのネットワーク・ビュー内のデバイスおよびインターフェースの可用性を表示します。また、モニター対象のデバイスおよびインターフェースの KPI データのグラフ、テーブル、およびトレースを表示することにより、パフォーマンスについても報告します。ダッシュボード・タイムラインは、デバイスの構成変更およびイベント・カウントについて報告します。これにより、構成変更とイベントの相関付けが可能になります。ダッシュボードには、より詳細なイベント情報を提供するイベント・ビューアーが組み込まれています。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのモニタリング

担当している領域 (地理的領域など) や特定のネットワーク・サービス (BGP や VPN など) 内のネットワーク・ビューを選択し、ダッシュボードの他のウィジェットに表示されるデータを確認して、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードをモニターします。担当する領域内のネットワーク・ビューを含むデフォルトのネットワーク・ビュー・ブックマークをセットアップしていた場合は、そのブックマークのネットワーク・ビューはダッシュボード内のネットワーク・ビュー・ツリーに表示されます。

始める前に

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのネットワーク・ビュー・ツリーについて詳しくは、287 ページの『ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示されるネットワーク・ビュー・ツリーの構成』を参照してください。

このタスクについて

注: ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを表示するための最小画面解像度は 1536 x 864 です。ご使用の画面がこの最小解像度よりも低い場合は、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード内の 1 つ以上のウィジェットにスクロール・バーが表示されます。

ネットワーク・ビューでのデバイスおよびインターフェースの可用性の表示

使用不可リソース・ウィジェットを使用すると、選択したネットワーク・ビュー内の、構成可能な時間を超えて開かれているデバイスおよびインターフェースの可用性アラートの数モニターできます。デフォルトでこのウィジェットに図示されるのは、開かれてから 10 分以内、10 分超で 1 時間以内、および 1 時間超のデバイスおよびインターフェースの可用性アラートの数です。

このタスクについて

選択したネットワーク・ビュー内の開かれたデバイスおよびインターフェースの可用性アラートをモニターするには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「インシデント」アイコンをクリックし、「ネットワーク可用性」 > 「ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード」を選択します。
2. ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードで、左上にあるネットワーク・ビューのネットワーク・ビュー・ツリーからネットワーク・ビューを選択します。他のウィジェットが更新され、選択したネットワーク・ビューに基づいて情報が表示されます。特に、使用不可リソース・ウィジェットが更新され、選択したネットワーク・ビューでのデバイスとインターフェースの可用性が表示されます。2 番目のタブ「ネットワーク・ビュー」が開きます。このタブには、ネットワーク・ビュー GUI、イベント・ビューアー、および構造ブラウザーで構成されたダッシュボードが組み込まれており、選択したネットワーク・ビューが表示されます。この 2 番目のタブを使用して、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示しているネットワーク・ビューのトポロジーを検討できます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示するネットワーク・ビュー・ツリーの指定については、287 ページの『ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示されるネットワーク・ビュー・ツリーの構成』を参照してください。

3. 使用不可リソース・ウィジェットで、以下の手順を実行します。

使用不可のデバイスおよびインターフェース・アラート数を判別するには、グラフの以下のセクションを使用し、積み重ねバー・セグメントの色、および各セグメント内の数値を確認します。

制約事項: デフォルトでは、以下で説明するすべてのバーが表示されるように構成されます。しかし、特定のバーのみを表示するように「使用不可リソース」ウィジェットを構成できます。例えば、「デバイス **ping**」バーおよび「インターフェース **ping**」バーのみを表示するようにウィジェットを構成した場合は、それらのバーのみがウィジェット内に表示されます。

注: デフォルトでは、「使用不可リソース」ウィジェット内のデータは、20 秒ごとに更新されます。

SNMP ポーリングの失敗

色分けされた積み重ねバーを使用して、指定時間フレーム内の SNMP ポーリングの失敗アラートの数を表示します。

SNMP リンク状態

色分けされた積み重ねバーを使用して、指定時間フレーム内の SNMP リンク状態アラートの数を表示します。

インターフェース **ping**

色分けされた積み重ねバーを使用して、指定時間フレーム内のインターフェース **ping** アラートの数を表示します。

デバイス **ping**

色分けされた積み重ねバーを使用して、指定時間フレーム内のデバイス **ping** アラートの数を表示します。

積み重ねバーの色分けは以下のとおりです。

表 26. 「使用不可リソース」ウィジェット内の色分け

	黄	オープンされてから 10 分以内のアラートの数。
	ピンク	オープンされてから 10 より長く 1 時間以内のアラートの数。
	青	オープンされてから 1 時間を超えているアラートの数。

これらのいずれかのバーをクリックすると、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードの下部にあるイベント・ビューアー内にデバイスおよびインターフェースの対応するアラートが表示されます。

注: このウィジェットに表示される時間しきい値を変更できます。デフォルトのしきい値設定は 10 分および 1 時間です。可用性要件が厳しくない場合は、これを 30 分および 3 時間などの値に変更できます。変更は、ユーザーごとに適用されます。

現在のネットワーク・ビュー内に、これらのいずれかのポーリングによってポー

リングされているデバイスがない場合、対応する積み重ねバーには常にゼロ値が表示されます。例えば、現在のネットワーク・ビュー内に、「SNMP ポーリングの失敗」ポーリングによってポーリングされているデバイスがない場合、「SNMP ポーリングの失敗」バーには常にゼロ値が表示されます。ネットワーク・ポーリング GUI 内の「ポーリング・ポリシーの構成」パネルにアクセスできる場合は、そのテーブル上の「デバイス・メンバーシップ」フィールドを使用して、さまざまなポーリング・ポリシーによってポーリングされるすべてのネットワーク・ビューでのすべてのデバイスのリストを表示できます。

全体的なネットワーク・ビューの可用性の表示

可用性パーセンテージ・ウィジェットを使用して、選択したネットワーク・ビュー内のシャーシ・デバイスの全体的な可用性をモニターできます。

このタスクについて

選択したネットワーク・ビュー内のシャーシ・デバイスの全体的な可用性を表示するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「インシデント」アイコンをクリックし、「ネットワーク可用性」 > 「ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード」を選択します。
2. ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードで、左上にあるネットワーク・ビューのネットワーク・ビュー・ツリーからネットワーク・ビューを選択します。他のウィジェットが更新され、選択したネットワーク・ビューに基づいて情報が表示されます。特に、可用性パーセンテージ・ウィジェットが更新され、ネットワーク・ビューのシャーシ・デバイスの全体的な可用性が表示されます。2 番目のタブ「ネットワーク・ビュー」が開きます。このタブには、ネットワーク・ビュー GUI、イベント・ビューアー、および構造ブラウザーで構成されたダッシュボードが組み込まれており、選択したネットワーク・ビューが表示されます。この 2 番目のタブを使用して、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示しているネットワーク・ビューのトポロジを検討できます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示するネットワーク・ビュー・ツリーの指定については、287 ページの『ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示されるネットワーク・ビュー・ツリーの構成』を参照してください。

3. 可用性パーセンテージ・ウィジェットで、以下の手順を実行します。

「可用性パーセンテージ」ウィジェットは、24 個の個別の時間バーを表示します。各バーには、直前の 1 時間の ping 結果の指数加重移動平均が表示されます。このバーは、その 1 時間が経過した後にしか表示されません。バーの値は、その時間内の合計数ではなく、可用性率のパーセントを表しています。バーの色は、以下を意味します。

- 緑: 80% 以上。
- オレンジ: 50% から 80%。
- 赤: 50% 未満。

ネットワーク・ビューでの最高および最低パフォーマンスの表示

トップ・パフォーマー・ウィジェットを使用して、選択したネットワーク・ビュー内のすべてのデバイスとインターフェースにわたって、最高および最低のポーリング・データ・メトリックをモニターできます。

このタスクについて

選択したネットワーク・ビュー内のすべてのデバイスとインターフェースの最高および最低ポーリング・データ・メトリックを表示するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「インシデント」アイコンをクリックし、「ネットワーク可用性」 > 「ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード」を選択します。
2. ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードで、左上にあるネットワーク・ビューのネットワーク・ビュー・ツリーからネットワーク・ビューを選択します。他のウィジェットが更新され、選択したネットワーク・ビューに基づいて情報が表示されます。特に、トップ・パフォーマー・ウィジェットが更新され、ネットワーク・ビューのシャーシ・デバイスの全体的な可用性が表示されます。2 番目のタブ「ネットワーク・ビュー」が開きます。このタブには、ネットワーク・ビュー GUI、イベント・ビューアー、および構造ブラウザーで構成されたダッシュボードが組み込まれており、選択したネットワーク・ビューが表示されます。この 2 番目のタブを使用して、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示しているネットワーク・ビューのトポロジを検討できます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示するネットワーク・ビュー・ツリーの指定については、287 ページの『ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示されるネットワーク・ビュー・ツリーの構成』を参照してください。

3. トップ・パフォーマー・ウィジェットで、以下の手順を実行します。

「トップ・パフォーマー」ウィジェットに表示するグラフ、テーブル、またはトレースのデータの種類およびその表示方法を以下のコントロールから選択します。

メトリック

選択されたポーリング・データ・メトリックのセットを表示するには、このドロップダウン・リストをクリックします。ドロップダウン・リストに表示されるメトリックは、選択されたネットワーク・ビューで有効になっているポーリング・ポリシーによって異なります。これらのいずれかのメトリックを選択して、関連付けられたデータをウィンドウのメイン部分に表示します。

順序

選択されたポーリング・データ・メトリックに適用する統計を表示するには、このドロップダウン・リストをクリックします。

- 統計は、SnmpLinkStatus メトリックを除くすべてのメトリックで使用できます。

上から: 選択されたメトリックの上位 10 件の値を表示する棒グラフまたはテーブルを表示します。これらの最大値を持つデバイスまたはインターフェースが、棒グラフまたはテーブルにリストされます。

下から: 選択されたメトリックの下位 10 件の値を表示する棒グラフまたはテーブルを表示します。これらの最小値を持つデバイスまたはインターフェースが、棒グラフまたはテーブルにリストされます。

- 統計は、SnmpLinkStatus メトリックで使用できます。いずれの場合も、棒グラフまたはテーブルが表示され、選択された統計のデバイスが表示されます。

使用不可: この統計はデフォルトで表示されます。この統計が表示されたデバイスには、問題があります。

管理者によるダウン: デバイスは管理者によってこの状態に変更されるため、この統計が表示されたデバイスには、問題がありません。

使用可能: この統計が表示されたデバイスには、問題がありません。

注: ウィジェットには、選択されたメトリックに応じて、デバイスまたはインターフェースがリストされます。

- デバイスに適用されるメトリック (memoryUtilization など) が選択された場合、上位 10 件のリストにはデバイスが含まれます。
- インターフェースに適用されるメトリック (ifInDiscards など) が選択された場合、上位 10 件のリストにはインターフェースが含まれます。



グラフの表示

10 件の最大値または最小値を含む棒グラフを表示します。「グラフの表示」は、ウィジェットを初めて開いたときの表示オプションです。



テーブルの表示

10 件の最大値または最小値に関連付けられたデータのテーブルを表示します。



フィルターの定義

このボタンは、「テーブルの表示」 モードの場合にのみ表示されます。「トップ・パフォーマー」テーブル・データに適用するフィルターを定義するには、ここをクリックします。

ウィンドウのメイン部分には、以下のいずれかの形式のデータが含まれます。

グラフ

10 件の最大値または最小値を含む棒グラフ。グラフ内のいずれかのバーをクリックすると、対応するデバイスまたはインターフェースの時間トレースが表示されます。

テーブル

10 件の最大値または最小値に関連付けられたデータのテーブル。このテーブルには、以下の列があります。

- エンティティ名: デバイスまたはインターフェースの名前。
- トレースの表示: いずれかの行内のリンクをクリックすると、対応するデバイスまたはインターフェースの時間トレースが表示されます。
- 最後のポーリング時刻: このエンティティが最後にポーリングされた時刻。
- 値: このエンティティが最後にポーリングされたときのメトリックの値。

トレース

単一のデバイスまたはインターフェースのデータの時間トレース。このトレース内をナビゲートするには、以下の操作を実行します。

- トレースにズームインするには、マウス・ホイールを前に動かします。
- トレースからズームアウトするには、マウス・ホイールを後に動かします。
- 通常のズーム・レベルを復元するには、ダブルクリックします。
- 任意の時点での正確な値を表示する移動可能な縦線を表示するには、トレース領域内をクリックします。

ウィンドウのメイン部分に表示する現在のポーリング・データまたはヒストリカル・ポーリング・データを指定するには、以下のいずれかのボタンをクリックします。このボタンは、現在表示されているモード (棒グラフ、テーブル、または時間トレース) に関係なくデータを更新します。

制約事項: 「メトリック」ドロップダウン・リスト内のいずれかのポーリング・データ・メトリックのポーリング・データを保管しないことを管理者が選択した場合、ヒストリカル・ポーリング・データは、以下のいずれかのボタンをクリックしても使用できません。

- 直近の 1 日
- 先週
- 先月
- 昨年

現在 現在の生ポーリング・データを表示するには、このボタンをクリックします。時間トレース・モードの場合、時間トレースには、関連付けられたポーリング・ポリシーのポーリングの頻度に応じて、最大で 2 時間分のすべてのデータが表示されます。

直近の 1 日

定期的に計算された日次平均に基づいたデータを表示するには、このボタンをクリックします。

- 棒グラフ・モードまたはテーブル・モードでは、日次指数加重移動平均 (EWMA) に基づいて、上位 10 件の最大値または最小値が表示されます。

- 時間トレース・モードでは、平均値に基づいて、過去 24 時間の時間トレースが表示されます。

ウィジェットの「直近の 1 日」セクションでは、EWMA 値はデフォルトで 15 分ごとに計算され、生ポーリング・データの直前の 15 分間に基づいています。その後、ウィジェットのこのセクションに表示されているデータは、15 分ごとに最新の EWMA 値で更新されます。

先週 定期的に計算された週次平均に基づいたデータを表示するには、このボタンをクリックします。

- 棒グラフ・モードまたはテーブル・モードでは、週次指数加重移動平均 (EWMA) に基づいて、上位 10 件の最大値または最小値が表示されます。
- 時間トレース・モードでは、平均値に基づいて、過去 7 日の時間トレースが表示されます。

ウィジェットの「先週」セクションでは、EWMA 値はデフォルトで 30 分ごとに計算され、生ポーリング・データの直前の 30 分間に基づいています。その後、ウィジェットのこのセクションに表示されているデータは、30 分ごとに最新の EWMA 値で更新されます。

先月 定期的に計算された月次平均に基づいたデータを表示するには、このボタンをクリックします。

- 棒グラフ・モードまたはテーブル・モードでは、月次指数加重移動平均 (EWMA) に基づいて、上位 10 件の最大値または最小値が表示されます。
- 時間トレース・モードでは、平均値に基づいて、過去 30 日の時間トレースが表示されます。

ウィジェットの「先月」セクションでは、EWMA 値はデフォルトで 2 時間ごとに計算され、生ポーリング・データの直前の 2 時間に基づいています。その後、ウィジェットのこのセクションに表示されているデータは、2 時間ごとに最新の EWMA 値で更新されます。

昨年 定期的に計算された年次平均に基づいたデータを表示するには、このボタンをクリックします。

- 棒グラフ・モードまたはテーブル・モードでは、年次指数加重移動平均 (EWMA) に基づいて、上位 10 件の最大値または最小値が表示されます。
- 時間トレース・モードでは、平均値に基づいて、過去 365 日の時間トレースが表示されます。

ウィジェットの「昨年」セクションでは、EWMA 値はデフォルトで毎日計算され、生ポーリング・データの直前の 24 時間に基づいています。その後、ウィジェットのこのセクションに表示されているデータは、最新の EWMA 値で毎日更新されます。

構成およびイベント・タイムラインの表示

構成およびイベント・タイムライン・ウィジェットを使用して、選択したネットワーク・ビュー内のすべてのデバイスに関して、最大 24 時間にわたるデバイスの構成変更やネットワーク・アラート・データを示すタイムラインを表示できます。このタイムライン上でデバイスの構成変更とネットワーク・アラートを相関させることで、構成の変更によってネットワーク問題が生じる可能性のある場合を特定するのに役立てることができます。

このタスクについて

選択したネットワーク・ビュー内のすべてのデバイスに関するデバイスの構成変更とネットワーク・アラート・データを示すタイムラインを表示するには、以下の手順に従います。

手順

1. 「インシデント」アイコンをクリックし、「ネットワーク可用性」 > 「ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード」を選択します。
2. ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードで、左上にあるネットワーク・ビューのネットワーク・ビュー・ツリーからネットワーク・ビューを選択します。他のウィジェットが更新され、選択したネットワーク・ビューに基づいて情報が表示されます。特に、構成およびイベント・タイムラインが更新され、選択したネットワーク・ビューのイベント・データと構成の変更が表示されます。2 番目のタブ「ネットワーク・ビュー」が開きます。このタブには、ネットワーク・ビュー GUI、イベント・ビューアー、および構造ブラウザーで構成されたダッシュボードが組み込まれており、選択したネットワーク・ビューが表示されます。この 2 番目のタブを使用して、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示しているネットワーク・ビューのトポロジを検討できます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示するネットワーク・ビュー・ツリーの指定については、287 ページの『ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示されるネットワーク・ビュー・ツリーの構成』を参照してください。

3. 構成およびイベント・タイムライン・ウィジェットで、以下の手順を実行します。

構成およびイベント・タイムラインに表示される構成変更は、以下のいずれかになります。タイムライン上で任意の時点に行われたさまざまなタイプの構成変更をリストしているツールチップを表示するには、構成変更バーの上にマウスを移動します。

注: Netcool Configuration Manager をインストールしていない場合、このタイムラインに構成データは表示されません。

Netcool Configuration Manager によって管理される変更

これらの変更は、Netcool Configuration Manager の完全な制御の下で行われます。タイムラインでは、成功（「適用済み」）または失敗（「未適用」）になる可能性があるスケジュールされた（ポリシー・ベースの）変更と、Netcool Configuration Manager 内の IDT 監査端末機能を使用して行われた一回限りの変更とが区別されます。

適用済み

Netcool Configuration Manager の制御の下で行われて成功した、スケジュールされた (ポリシー・ベースの) デバイス構成変更のセット。

未適用

Netcool Configuration Manager の制御の下で行われて失敗した、スケジュールされた (ポリシー・ベースの) デバイス構成変更のセット。

IDT Netcool Configuration Manager 内の監査端末機能を使用して行われたデバイス構成変更。この機能を使用すると、デバイスへの一回限りのコマンド行ベースの構成変更を行うことができます。

管理されない変更

OABC

アウト・オブ・バンド変更。Netcool Configuration Manager の制御の範囲外でデバイスに対して行われた手動構成変更。

イベントは、タイムライン内で積み重ねバーとして表示されます。ここで、積み重ねバー内の各エレメントの色は、対応するイベントの重大度を示しています。各重大度レベルのイベントの数をリストしているツールチップを表示するには、積み重ねバーの上にマウスを移動します。イベントおよび構成変更の両方の X 軸の細分度は、タイムラインで選択する時刻範囲によって異なります。

表 27. 構成およびイベント・タイムラインでの X 軸の細分度

選択する時刻範囲	X 軸の細分度
6 時間	15 分
12 時間	30 分
24 時間	1 時間

さまざまなタイプの構成変更について詳しくは、Netcool Configuration Manager Knowledge Center (<http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9/welcome>) を参照してください。

構成およびイベント・タイムラインに表示するデータを定義するには、以下のコントロールから選択します。

時刻 タイムラインの期間を選択します。

- **6 時間:** 6 時間のタイムライン期間を設定するには、ここをクリックします。
- **12 時間:** 12 時間のタイムライン期間を設定するには、ここをクリックします。
- **24 時間:** 24 時間のタイムライン期間を設定するには、ここをクリックします。

オカレンス別のイベント

- **最初のオカレンス:** イベントの最初のオカレンス時刻に基づいてタイムライン上のイベントを表示するには、ここをクリックします。

- 最後のオカレンス: イベントの最後のオカレンス時刻に基づいてタイムライン上のイベントを表示するには、ここをクリックします。



テーブルの表示

構成変更データを表形式で表示します。このテーブルには、以下の列があります。

注: Netcool Configuration Manager をインストールしていない場合、このボタンは表示されません。

- 番号: 行番号を示すシリアル値。
- デバイス: 影響を受けるデバイスのホスト名または IP アドレス。
- 作業単位 (UoW): 自動化された Netcool Configuration Manager 構成変更の場合に、この構成変更が処理された Netcool Configuration Manager 作業単位。
- 結果: 変更が成功したかどうかを示します。
- 開始時刻: 構成変更が開始された時刻。
- 終了時刻: 構成変更が完了した時刻。
- ユーザー: 変更を適用したユーザー。
- 説明: この変更に関連付けられたテキスト形式の説明。



グラフの表示

元のデフォルトのグラフ・ビューに切り替えるには、ここをクリックします。

注: Netcool Configuration Manager をインストールしていない場合、このボタンは表示されません。

タイムラインでズームインおよびズームアウトするには、タイムラインの下にあるスライダーを使用します。タイムラインの下の方例は、次の項目を表示するためにタイムラインで使用されている色を示しています。

- イベント重大度の値。
- 構成変更タイプ。

注: Netcool Configuration Manager との統合がセットアップされたが、Netcool Configuration Manager からのデータ取得に関して問題がある場合、凡例に表示される構成変更タイプには次のアイコンでマークが付けられ

ます。 

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード の構成

エンド・ユーザーは、希望するデータが表示されるようにネットワーク・ヘルス・ダッシュボードを構成できます。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示されるネットワーク・ビュー・ツリーの構成

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのユーザーは、デフォルトのブックマークを構成して、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードに表示されるデータを、担当領域内のネットワーク・ビューに限定することができます。

このタスクについて

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのネットワーク・ビュー・ツリーに、デフォルトのネットワーク・ビュー・ブックマーク内のネットワーク・ビューが自動的に表示されます。デフォルトのブックマークにネットワーク・ビューがない場合は、メッセージとともにネットワーク・ビュー GUI へのリンクが表示されます。このリンクから、ネットワーク・ビューをデフォルトのブックマークに追加できます。デフォルトのブックマークに追加したネットワーク・ビューは、ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード内のネットワーク・ツリーに表示されます。

ネットワーク・ビューをデフォルトのブックマークに追加するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 表示されたメッセージ内で、提供されているリンクをクリックします。 ネットワーク・ビュー GUI が別のタブで開きます。
2. Network Manager Knowledge Center のトピックhttp://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.2.0/itnm/ip/wip/visualize/task/nmip_vis_addingnetworkviewstobookmark.html での説明に従ってください。

タスクの結果

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのネットワーク・ビュー・ツリーに、新たに構成されたデフォルト・ブックマーク内のネットワーク・ビューが表示されます。

使用不可リソース・ウィジェットの構成

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボードのユーザーは、使用不可リソース・ウィジェットによってネットワーク・ヘルス・ダッシュボードにどの可用性データを表示するかを構成できます。例えば、SNMP ポーリングには基づかず、ping ポーリングのみに基づいて可用性データを表示するようにウィジェットを構成できます。このウィジェットに表示される可用性データに適用される時間しきい値も構成できます。例えば、デフォルトでウィジェットに図示されるのは、開かれてから 10 分以内、10 分超、および 1 時間超のデバイスおよびインターフェースの可用性アラートの数です。これらのしきい値を変更できます。

このタスクについて

使用不可リソース・ウィジェットによってどの可用性データを表示するかを構成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「インシデント」アイコンをクリックし、「ネットワーク可用性」 > 「ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード」を選択します。
2. 使用不可リソース・ウィジェットで、「ユーザー設定」  をクリックします。
3. 「使用不可リソース」ウィジェットを構成するには、以下のチェック・ボックスおよび数値ステッパを使用します。

デバイス

デバイス可用性に関する情報を取得するために、「使用不可リソース」ウィジェット内でモニターするデバイス・アラートを構成します。デフォルトで、これらのボックスはすべてオンに設定されています。

デバイス ping

「デフォルト・シャーシ ping」アラートをモニターするには、このボックスにチェック・マークを付けます。このオプションを選択すると、「使用不可リソース」ウィジェットは、オープンされているデバイス ICMP (ping) ポーリング・アラートの数を表示します。

SNMP ポーリングの失敗

「SNMP ポーリングの失敗」アラートをモニターするには、このボックスにチェック・マークを付けます。このオプションを選択すると、「使用不可リソース」ウィジェットは、オープンされている SNMP ポーリングの失敗アラートの数を表示します。

インターフェース

インターフェースの可用性に関する情報を取得するために、使用不可リソース・ウィジェットでどのインターフェース・アラートをモニターするかを構成します。デフォルトで、これらのボックスはすべてオンに設定されています。

インターフェース ping

「デフォルト・インターフェース ping」アラートをモニターするには、このボックスにチェック・マークを付けます。このオプションを選択すると、「使用不可リソース」ウィジェットは、オープンされているインターフェース ICMP (ping) ポーリング・アラートの数を表示します。

リンク状態

「SNMP リンク状態」アラートをモニターするには、このボックスにチェック・マークを付けます。このオプションを選択すると、「使用不可リソース」ウィジェットは、オープンされている SNMP リンク状態アラートの数を表示します。

しきい値

- 上限 上位しきい値を時間および分単位で指定します。デフォルトで、上位しきい値は 1 時間に設定されています。このしきい値により、「使用不可リソース」ウィジェットのグラフが次のように更新されます。選択したネットワーク・ビューで使用可能なアラートがオープン状態のまま 1 時間のしきい値を超えた場合、「使用不可リソース」グラフの関連するバーが更新され、この使用不可状態が青色で色分けされたバー・セクションとして表示されます。
- 下限 下位しきい値を時間および分単位で指定します。デフォルトで、下位しきい値は 10 分に設定されています。このしきい値により、「使用不可リソース」ウィジェットのグラフが次のように更新されます。選択したネットワーク・ビューで使用可能なアラートがオープン状態のまま 10 分のしきい値を超えた場合、「使用不可リソース」グラフの関連するバーが更新され、この使用不可状態がピンク色で色分けされたバー・セクションとして表示されます。

構成およびイベント・タイムライン の構成

構成およびイベント・タイムラインにどのイベント重大度値を表示するかを構成できます。

このタスクについて

構成およびイベント・タイムラインにどのイベント重大度値を表示するかを構成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「インシデント」アイコンをクリックし、「ネットワーク可用性」 > 「ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード」を選択します。
2. 構成およびイベント・タイムライン・ウィジェットで、「ユーザー設定」をクリックします。
3. 構成およびイベント・タイムラインを構成するには、以下のリストを使用します。

使用可能な重大度

デフォルトで、すべてのイベント重大度の値がリストされます。これらのイベント重大度の値は、すべて構成およびイベント・タイムラインに表示されます。

このリストから項目を削除するには、項目を選択し、右向き矢印をクリックします。複数の値を同時に選択して移動できます。

選択された重大度

デフォルトで、このリストにはイベント重大度値は表示されません。

「使用可能な重大度」リストからこのリストに項目を移動し、それらの値のみを構成およびイベント・タイムラインに表示します。例えば、構成およびイベント・タイムラインの「重大」と「重要」項目のみを表示する場合は、「重大」と「重要」項目を「使用可能な重大度」リストから「選択した重大度」リストに移動します。

このリストから項目を削除するには、項目を選択し、左向き矢印をクリックします。複数の値を同時に選択して移動できます。

トポロジー検索

トポロジー検索機能は、Networks for Operations Insight フィーチャーの拡張機能です。これは、Operations Analytics - Log Analysis の検索機能と分析機能を適用して、ネットワーク・パフォーマンスに対する洞察を提供します。ネットワーク・データによってエンリッチされたイベントは、Network Manager Insight Pack によって分析され、ネットワーク・トポロジー上の 2 つのエンドポイント間の経路について一定期間において最もコストが低いものを計算するために使用されます。指定された期間にそれらの経路上で発生したイベントが識別され、重大度別に表示されます。トポロジー検索を使用するには、Networks for Operations Insight のフィーチャーをインストールして構成することが必要です。トポロジー検索機能は、ネットワーク内の 2 つのエンドポイント間について最もコストの低い経路をプロットし、経路上のデバイスで発生するすべてのイベントを表示することができます。

Network Manager 製品は、ネットワーク・トポロジー上のデバイスによって生成されたすべてのイベント・データをエンリッチします。このデータは、Tivoli Netcool/OMNIBus に保管されます。これにより、Operations Analytics - Log Analysis 製品が、デバイスとイベントを相互参照できるようになります。Gateway for Message Bus を使用して、Tivoli Netcool/OMNIBus から Operations Analytics - Log Analysis にイベント・データが渡されます。また、Network Manager Insight Pack は、Network Manager の NCIM データベースからトポロジー・データを読み取り、デバイス間のトポロジー内のパスを識別します。

トポロジー検索機能の有効範囲は、すべての NCIM ドメインを含むトポロジー・ネットワーク全体の有効範囲です。トポロジー検索を単一ドメインに制限するには、Network Manager Insight Pack に含まれているプロパティー・ファイルを構成することができます。

Insight Pack をインストールすると、Operations Analytics - Log Analysis UI からアプリケーションを実行できます。Network Manager をインストールして構成すると、ネットワーク・ビューの右クリック・ツールとしてアプリケーションを実行することもできます。Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI をインストールして構成すると、イベント・ビューアーやアクティブ・イベント・リスト (AEL) の右クリック・ツールとしてアプリケーションを実行できます。

カスタム・アプリケーションは、Network Manager NCIM データベースのネットワーク拡張イベント・データとトポロジー・データを使用します。カスタム・アプリケーションは、2 つのノード (ネットワーク・エンティティー) 間のネットワーク全体で最もコストの低い経路をプロットし、その経路上のノードで発生したイベントをカウントします。経路およびイベントに対しては、さまざまな時間枠を指定できます。このアルゴリズムでは、経路上のインターフェースの速度を使用して、最もコストの低い経路が算出されます。つまり、起点から終点までパケットを最も速く送信できる経路が、最もコストの低い経路になります。ネットワーク・トポロジーは、最新のディスカバリーに基づいています。過去の履歴経路は考慮されません。変更可能なネットワーク・トポロジーを使用している場合、時間の経過に伴って、ノード間の経路も変わっていく可能性があります。ネットワークが安定している場合、経路は常に最新の状態に保たれます。

始める前に

ネットワークを十分に理解してからトポロジー検索機能を実装するようにしてください。大規模ネットワーク・トポロジー全体にわたって、トポロジー検索がパフォーマンスに負荷を掛ける可能性があります。したがって、ネットワークのどの部分にトポロジー検索を使用するかを決定することが重要です。ネットワークのそれらの部分を単一ドメインとして定義できます。あるいは、Network Manager のクロスドメイン・ディスカバリー機能を実装して、検索する複数のドメインの単一集約ドメインを作成することもできます。トポロジー検索の範囲をそのドメインまたは集約ドメインに制限することができます。小規模、中規模、および大規模ネットワークからなるネットワークをモニターするために、Network Manager をデプロイすることについて詳しくは、「IBM Tivoli Network Manager IP Edition 製品概要」を参照してください。クロスドメイン・ディスカバリー機能について詳しくは、「IBM Tivoli Network Manager IP Edition ディスカバリー・ガイド」を参照してください。

サポートされる製品とコンポーネント

トポロジー検索機能は、製品とコンポーネントの特定の組み合わせでサポートされます。トポロジー検索を有効にする前に、必要なサポートが環境に備わっていることを確認してください。これらの要件は、新しい環境およびアップグレードされた環境の両方に当てはまります。

トポロジー検索機能に必要な製品およびコンポーネントは以下のとおりです。

- Operations Analytics - Log Analysis V1.3 以降 (OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 および NetworkManagerInsightPack_V1.3.0.0 を備える)。
- Tivoli Netcool/OMNIBus コア V8.1.0.2 および Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI V8.1.0.2 以降。IBM SmartCloud Analytics - Log Analysis を使用したイベント検索用のツールおよびメニューのインストール フィーチャーを Web GUI のインストールの一部としてインストールします。
- Gateway for Message Bus・パッケージのバージョン 6.0 以降。これ以前のパッケージ・バージョンには、トポロジー検索機能に必要な構成が含まれていません。
- Network Manager V4.1.1.1 以降。トポロジー検索機能を使用するには、ネットワーク・トポロジー用の NCIM データベースとして、IBM DB2 9.7 または 10.1 が使用されている必要があります。Oracle 10g と 11g もサポートされていますが、DB2 よりも多くの構成が必要です。Network Manager 製品は、トポロジーを保管するために他のデータベースをサポートしますが、トポロジー検索機能はこれらのデータベースでのみサポートされます。

関連タスク:

27 ページの『Netcool Operations Insight のインストール』

トポロジー検索の構成

トポロジー検索機能を使用するには、Tivoli Netcool/OMNIBus コア、Web GUI コンポーネント、Gateway for Message Bus、Network Manager を構成する必要があります。

始める前に

各製品の環境を以下のように設定します。

- サポートされている製品とコンポーネントの組み合わせがあることを確認します。 292 ページの『サポートされる製品とコンポーネント』を参照してください。
- イベント検索機能 (Gateway for Message Busを含む) を構成します。 100 ページの『イベント検索の構成』を参照してください。トポロジー検索機能では、Gateway for Message Busがイベント・データを Operations Analytics - Log Analysis に転送するように構成されていることが必要です。
- Operations Analytics - Log Analysis が以前のバージョンからアップグレードされている場合、データを V1.3 インスタンスにマイグレーションしてください。 <https://ibm.biz/BdEQmi>を参照してください。
- イベント・データを Operations Analytics - Log Analysis に転送する ObjectServer が、alerts.status テーブル内に **NmosObjInst** 列を持つようにしてください。**NmosObjInst** はデフォルトで提供されており、この構成に必須です。ObjectServer SQL コマンドを使用して列の有無を調べ、列がない場合に追加することができます。その方法は以下のとおりです。
 - alerts.status テーブルの列を読み取るには、DESCRIBE コマンドを使用します。
 - alerts.status テーブルに **NmosObjInst** を追加するには、ALTER TABLE コマンドに ALTER COLUMN 設定を指定して使用します。

alerts.status テーブルおよび ObjectServer SQL コマンドについて詳しくは、「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus 管理ガイド」を参照してください。

- 以下のようにして Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI V8.1.0.4 を構成します。
 - **Netcool Operations Insight Extensions for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI** パッケージをインストールします。IBM Installation Manager により、このパッケージが Web GUI から個別にインストールされます。パッケージは明示的に選択する必要があります。
 - server.init ファイルを開き、**scala*** プロパティが以下のように設定されていることを確認します。

```
scala.app.keyword=OMNIBus_Keyword_Search
scala.app.static.dashboard=OMNIBus_Static_Dashboard
scala.datasource=omnibus
scala.url=protocol://host:port
scala.version=1.2.0.3
```

この構成が必要になるのは、新しい環境の場合と、1.2.0.3 よりも前のバージョンの Operations Analytics - Log Analysis をアップグレードした環境の場合です。

- Web GUI Administration API クライアントをセットアップします。これは Operations Analytics - Log Analysis を起動するイベント・リスト・ツールをインストールするために必要です。「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus インストールとデプロイメント・ガイド」を参照してください。
- 以下のようにして Insight Pack をインストールして構成します。
 1. OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2 をインストールします。古いバージョンからアップグレードした Netcool Operations Insight を現在の環境で使用している場合、このバージョンの Insight Pack にアップグレードしてください。Netcool/OMNIBus Insight Pack を参照してください。
 2. データ・ソースを作成します。
 3. Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 を入手してインストールします。Insight Pack のインストールを参照してください。

手順

1. \$NCHOME/omnibus/extensions で、**nco_sql** ユーティリティを `scala_itnm_configuration.sql` ファイルに対して実行します。


```
./nco_sql -user root -password myp4ss -server NCOMS
< /opt/IBM/tivoli/netcool/omnibus/extensions/scala/scala_itnm_configuration.sql
```

NCIM データベースからの Network Manager データによってイベントが拡張されるまでイベントの保管を遅延するトリガーが ObjectServer に適用されます。

2. Gateway for Message Busがイベント・データを Operations Analytics - Log Analysis に転送するように構成されていない場合、必要な構成を実行してください。¹
3. Web GUI から Operations Analytics - Log Analysis UI 内の Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションを起動するツールおよびメニューをインストールします。\$WEBGUI_HOME/extensions/LogAnalytics で、**runwaapi** コマンドを `scalaEventTopology.xml` ファイルに対して実行します。


```
$WEBGUI_HOME/waapi/bin/runwaapi -user username -password password -file
scalaEventTopology.xml
```

ここで、*username* および *password* は、WAAPI クライアントを制御する \$WEBGUI_HOME/waapi/etc/waapi.init プロパティ・ファイル内で定義された管理者ユーザーの資格情報です。

4. Network Manager の GUI コンポーネントがインストールされているホストで、ネットワーク・ビューから Operations Analytics - Log Analysis の GUI にある Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションを起動するツールおよびメニューをインストールします。

1. 上位レベルでは、これには以下が含まれます。

- Netcool/OMNIBus インターフェース・ファイル内でのゲートウェイ・サーバーの作成
- G_SCALA.props プロパティ・ファイルの構成 (xml1302.map の指定を含む)
- scalaTransformers.xml ファイル内でのエンドポイントの構成
- SSL 接続の構成 (必要な場合)
- scalaTransport.properties ファイル内でのトランスポート・プロパティの構成

- a. \$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm/topoviz.properties で、**topoviz.unity.customappsui** プロパティを設定します。これは Operations Analytics - Log Analysis への接続を定義します。例えば、次のようにします。

```
# Defines the LogAnalytics custom App launcher URL
topoviz.unity.customappsui=https://server3:9987/Unity/CustomAppsUI
```

- b. \$NMGUI_HOME/profile/etc/tnm/menus/ncp_topoviz_device_menu.xml ファイルで、「イベント検索」メニュー項目を定義します。以下のように、「<menu id="Event Search"/>」項目をファイルに追加してください。

```
<tool id="showConnectivityInformation"/>
    <separator/>
    <menu id="Event Search"/>
```

5. Gateway for Message Bus を Operations Analytics - Log Analysis モードで始動します。例えば、次のようにします。

```
$OMNIHOME/bin/ncp_g.xml -propsfile $OMNIHOME/etc/G_SCALA.props
```

ゲートウェイにより、Tivoli Netcool/OMNIBus から Operations Analytics - Log Analysis へのイベントの送信が開始されます。

次のタスク

- 製品間のシングル・サインオン (SSO) を構成します。
- Web GUI のビューを再構成して **NmosObjInst** 列が表示されるようにします。Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションを起動するツールは、この列に値を持つイベントに対してのみ機能します。詳しくは、「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 管理およびユーザーズ・ガイド」を参照してください。

関連資料:

292 ページの『サポートされる製品とコンポーネント』

関連情報:

 Gateway for Message Bus 資料

トポロジー検索機能のためのシングル・サインオンの構成

Network Manager GUI コンポーネントをホストする Dashboard Application Services Hub と Operations Analytics - Log Analysis の間にシングル・サインオン (SSO) を構成することで、ユーザーが毎回ログインせずに 2 つの製品間を切り替えられるようにします。最初に、専用のユーザーを LDAP ディレクトリーに作成します。このディレクトリーは、ユーザー認証の際に両方の製品で使用する必要があります。次に、SSO 接続を構成します。

手順

1. 専用のユーザーとグループを LDAP ディレクトリーに作成します。例えば、次のようにします。
 - a. NetworkManagement という名前の新規組織単位 (OU) を作成します。
 - b. NetworkManagement OU の下に、itnmlldap という名前の新規グループを作成します。

- c. NetworkManagement OU の下に、新規ユーザー itnm1、itnm2、itnm3、および itnm4 を作成します。
 - d. これらの新規ユーザーを itnmdap グループに追加します。
2. Dashboard Application Services Hub で、ステップ 1 (295 ページ) で作成された itnmdap グループを、ネットワーク・ビューにアクセスできる Network Manager ユーザー・グループに割り当てます。Network Manager ユーザー役割は、ユーザー・グループに対する割り当てによって制御されます。ネットワーク・ビューにアクセス可能な、考えられるユーザー・グループは、Network_Manager_IP_Admin および Network_Manager_User です。
 3. Operations Analytics - Log Analysis 製品から、Network Manager をホストしている Dashboard Application Services Hub インスタンスへの SSO 接続を構成します。Operations Analytics - Log Analysis のために SSO を構成する方法について詳しくは、Operations Analytics - Log Analysis の資料を参照してください。以下は、Operations Analytics - Log Analysis SSO 構成の重要なステップです。
 - Operations Analytics - Log Analysis の役割をステップ 1 (295 ページ) で作成したユーザーとグループに割り当てます。
 - \$SCALAHOME/wlp/usr/servers/Unity/server.xml/server.xml ファイルで、<webAppSecurity> エレメントに httpOnlyCookies="false" 属性が設定されていることを確認します。終了エレメント </server> の前に、以下の行を追加します。例:


```
<webAppSecurity ssoDomainNames="hostname" httpOnlyCookies="false"/>
</server>
```

httpOnlyCookies="false" 属性は、Operations Analytics - Log Analysis によって生成された Cookie の httponly フラグを無効にします。これは、Network Manager GUI で SSO を有効にするために必須です。

関連情報:

 [Configuring SSO with Operations Analytics - Log Analysis](#)

トポロジーの検索

トポロジー検索機能を構成した後、ネットワーク・トポロジー内の 2 つのデバイス間の経路上で特定の時間枠内に発生したイベントを、Operations Analytics - Log Analysis に表示することができます。この機能は、例えば PE デバイスへのサービス妨害攻撃への対応など、ネットワーク上の問題を特定するために有用です。

Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションは、Operations Analytics - Log Analysis から実行することができます。また、構成によっては、Network Manager のネットワーク・ビューおよび Web GUI のイベント・リストから実行できます。カスタム・アプリケーションは、トポロジーのレイヤー 2 およびレイヤー 3 での検索をサポートします。カスタム・アプリケーションは、Network Manager NCIM データベースのネットワーク拡張イベント・データとトポロジー・データを使用します。カスタム・アプリケーションは、2 つのノード(ネットワーク・エンティティ)間のネットワーク全体で最もコストの低い経路をプロットし、その経路上のノードで発生したイベントをカウントします。経路およびイベントに対しては、さまざまな時間枠を指定できます。このアルゴリズムで

は、経路上のインターフェースの速度を使用して、最もコストの低い経路が算出されます。つまり、起点から終点までパケットを最も速く送信できる経路が、最もコストの低い経路になります。ネットワーク・トポロジは、最新のディスカバリーに基づいています。過去の履歴経路は考慮されません。変更可能なネットワーク・トポロジを使用している場合、時間の経過に伴って、ノード間の経路も変わっていく可能性があります。ネットワークが安定している場合、経路は常に最新の状態に保たれます。

始める前に

- トポロジ検索 から有意義な結果を得るためには、トポロジ内でのイベントについての知識 (環境内でのデバイスへの名前の付け方や、どのような情報を使用してデバイスをエンリッチするかなど) が必要です。デバイス名は一般的に、そのデバイスの機能を示しています。このレベルの理解があると、Operations Analytics - Log Analysis 内での検索の実行に役立ちます。
- トポロジ検索機能を有効にするように製品を構成します。 293 ページの『トポロジ検索の構成』を参照してください。
- 製品間で起動するときにユーザー資格情報を再入力しないようにするために、SSO を構成します。
- ネットワーク内で、ユーザー自身が担当していて、検索対象である部分を視覚化するネットワーク・ビューを作成します。http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSSHRK_4.1.1/com.ibm.networkmanagerip.doc_4.1.1/itnm/ip/wip/admin/task/nmip_admin_crtnwvview.htmlを参照してください。
- Web GUI のビューを再構成して **NmosObjInst** 列が表示されるようにします。Network Manager Insight Pack のカスタム・アプリケーションを起動するツールは、この列に値を持つイベントに対してのみ機能します。詳しくは、「IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI 管理およびユーザズ・ガイド」を参照してください。

手順

この手順のフローでは、2 つのノードを選択し、履歴上のイベント・データの検索に使用するツールと、検索期間を選択します。次に、Operations Analytics - Log Analysis UI で、目的の経路を選択し、イベントを表示します。イベントについて検索を実行し、結果を絞り込むことができます。

1. 以下のようにして、いずれかの製品からトポロジ検索を実行します。
 - Web GUI イベント・リスト:
 - a. イベント・ビューアーまたは AEL で、「**NmosObjInst**」列に値がある 2 つの行を選択します。
 - b. 右クリックし、検索するトポロジのレイヤーに応じて、「イベント検索」 > 「2 つのノード間のイベントの検索」 > 「レイヤー 2 トポロジ」または「イベント検索」 > 「2 つのノード間のイベントの検索」 > 「レイヤー 3 トポロジ」をクリックします。
 - c. 時間フィルターをクリックするか、「カスタム」をクリックして時間を選択します。
 - Network Manager ネットワーク・ビュー:
 - a. 2 つのデバイスを選択します。

- b. 検索するトポロジーのレイヤーに応じて、「イベント検索」 > 「2 つのノード間のイベントの検索」 > 「レイヤー 2 トポロジー」または「イベント検索」 > 「2 つのノード間のイベントの検索」 > 「レイヤー 3 トポロジー」をクリックします。
 - c. 時間フィルターをクリックするか、「カスタム」をクリックして時間を選択します。
- Operations Analytics - Log Analysis UI。Operations Analytics - Log Analysis UI では、アプリケーションを実行する前に、そのアプリケーションが検索結果を必要とします。検索結果で、**NmosObjInst** 列を選択します。アプリケーションは、選択された各イベントの発生元である 2 つのノード間でイベントを検出します。

重要: **NmosObjInst** のセルのみを選択してください。行全体を選択しないでください。行全体を選択した場合、ネットワーク上のエンティティ間について、結果が見るからないか、正しくない経路が検出されます。

UI の「ダッシュボードの検索 (Search Dashboards)」セクションで、表示するネットワーク層に応じて、**NetworkManagerInsightPack** > レイヤー 2 トポロジーでの 2 つのノード間のイベントの検索またはレイヤー 3 トポロジーでの 2 つのノード間のイベントの検索をクリックします。

Operations Analytics - Log Analysis UI からアプリケーションを実行する方法の例については、299 ページの『例』を参照してください。

検索の結果が、Operations Analytics - Log Analysis UI に以下のように表示されます。

レイヤー 2 トポロジーでの 2 つのノード間のアラートの検出

このアプリケーションは、レイヤー 2 トポロジー内の 2 つのネットワーク・エンドポイント間の、最小コスト経路上におけるアラートの分布を表示します。グラフには、指定の期間における各経路の重大度およびアラート・グループ別の分布が表示されます。アラート・グループの ObjectServer フィールドは AlertGroup です。経路のリストが表示され、そこから、指定の期間内に各経路で発生したイベントを検索できます。

レイヤー 3 トポロジーでの 2 つのノード間のアラートの検出

このアプリケーションは、レイヤー 3 トポロジー内の 3 つのネットワーク・エンドポイント間の、最小コスト経路上におけるアラートの分布を表示します。グラフには、指定の期間における各経路の重大度およびアラート・グループ別の分布が表示されます。アラート・グループの ObjectServer フィールドは AlertGroup です。経路のリストが表示され、そこから、指定の期間内に各経路で発生したイベントを検索できます。

アプリケーションは、現在の時刻に対して事前定義された期間内またはユーザーが指定可能なカスタム期間内に発生したイベントをカウントします。事前定義された期間を使用する場合は、カスタム・アプリケーションの実行元となる製品により、現在時刻の計算方法が異なります。Network Manager は、現在のタイム・スタンプを使用します。Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI は、イベントの FirstOccurrence フィールドで指定された時刻を使用します。

制約事項: Web GUI と Operations Analytics - Log Analysis では、タイム・スタンプの処理が異なります。Web GUI は、時間、分、秒を認識しますが、Operations Analytics - Log Analysis は秒を無視します。この問題は、「ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示」と「ノードごとのイベントの検索」に影響します。タイム・スタンプ 8 January 2014 07:15:26 AM が渡されると、Operations Analytics - Log Analysis はこのタイム・スタンプを 8 January 2014 07:15 AM と解釈します。このため、後続の検索の結果が最初に実行された検索と異なることがあります。

2. 棒グラフから、最も興味のある経路を特定します。次に、UI の右側で、その経路に対応するリンクをクリックします。検索結果が返され、そのネットワーク経路上で指定された時間枠内に発生したすべてのイベントが表示されます。
3. 検索結果を絞り込みます。「検索パターン (Search Patterns)」にリストされているパターンを使用することができます。例えば、重大イベントの結果を検索するには、「検索パターン (Search Patterns)」 > 「重大度」 > 「重大」をクリックします。検索ストリングが検索フィールドにコピーされます。次に、「検索」をクリックします。
4. 必要に応じて検索を拡張して絞り込みます。Operations Analytics - Log Analysis 内での検索について詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSPFMY_1.3.1/com.ibm.scala_1.3.1.doc/use/iwa_using_ovw.html を参照してください。

例

Operations Analytics - Log Analysis UI からカスタム・アプリケーションを実行する方法の例を示します。この例では、172.20.1.3 と 172.20.1.5 の 2 つの IP アドレス間で検索を行います。

1. 新規に検索を実行するには、「検索の追加 (Add search)」をクリックし、NodeAlias:"172.20.1.3" OR NodeAlias:"172.20.1.5" と入力します。Operations Analytics - Log Analysis から、NodeAlias 172.20.1.3 または NodeAlias 172.20.1.5 を持つすべてのイベントが返されます。
2. 結果の表示で、グリッド・ビューに切り替えます。「NmosObjInst」列が表示されるまでスクロールします。「NmosObjInst」の値が異なる 2 つの行を特定します。
3. これらの行について、「NmosObjInst」列のセルを選択します。
4. UI の「ダッシュボードの検索 (Search Dashboards)」セクションで、表示するネットワーク層に応じて、NetworkManagerInsightPack > レイヤー 2 トポロジーでの 2 つのノード間のイベントの検索またはレイヤー 3 トポロジーでの 2 つのノード間のイベントの検索をクリックします。

IBM Connections への統合の構成

IBM Tivoli Netcool/Impact は、Netcool/Impact の IBMConnections アクション関数を使用することで、IBM Connections に統合されます。IBMConnections アクション関数を使用すると、ユーザーは、フォーラム・リストおよびトピック・リストの照会、新しいフォーラムの作成、新しいトピックの作成、既存のトピックの更新を行うことができます。IBMConnections アクション関数パッケージは、`$IMPACT_HOME/integrations/IBMConnections` ディレクトリーにあります。

このタスクについて

以下のステップを実行して、IBM Connections サーバーと統合するように Netcool/Impact を構成します。

手順

1. `$IMPACT_HOME/add-ons/IBMConnections` ディレクトリーに移動します。このディレクトリーは、IBM Connections 統合パッケージのディレクトリーです。このパッケージには以下のサブディレクトリーが含まれています。

importData

ポリシー、データ・ソース、データ・タイプ、およびサービスを含むプロジェクトです。このプロジェクトは、IBM Connections 内のトピックへの接続、トピックの作成、更新の方法、およびトピックの例を提供します。

2. プロジェクト `$IMPACT_HOME/bin/nci_import <ServerName>__Extraction_Directory__/importData` をインポートします。
3. `$IMPACT_HOME/etc/<NCI>_server.props` ファイル内に、以下のパラメーターを追加します。

`impact.ibmconnections.forum.title.maxsize= number`。デフォルト値は 0 です。任意のストリング・サイズを使用できます。

`impact.ibmconnections.forum.content.maxsize= number`。デフォルト値は 0 です。任意のストリング・サイズを使用できます。

`impact.ibmconnections.topic.title.maxsize= number`。デフォルト値は 255 です。トピックと応答用です。

`impact.ibmconnections.topic.content.maxsize = number`。デフォルト値は 0 です。任意のストリング・サイズを使用できます。

4. Netcool/Impact サーバーを再始動します。

関連タスク:

40 ページの『Netcool/OMNIBus および Netcool/Impact のインストール』

IBM Connections の概要

IBM Connections は、組織が優秀な人材と接触し、技術革新を加速化し、成果を上げていくための先進的なソーシャル・ソフトウェア・プラットフォームです。

セキュリティの高いこの統合プラットフォームを使用することにより、重要なビジネス・プロセスという状況で専門家のネットワークと連携できます。このプラットフォームにより、誰もが自信を持ってアクションを起こし、新たなチャンスを予測して、それに対応することができます。

IBM Connections については、以下を参照してください。

<http://www-03.ibm.com/software/products/en/conn>

IBMConnections 関数のパラメーター

Netcool/Impact と IBM Connections の統合には、IBMConnections 関数と呼ばれる新規ポリシー・アクション関数を使用します。 IBMConnections 関数は、IBM Connections サーバーに接続し、IBM Connections サーバーでアクションを実行するために、任意のポリシー内で使用できます。この関数は、**Action Option** パラメーターと **Impact Object** パラメーターの、2 つの入力パラメーターを受け入れます。

Action Option パラメーター

Action Option パラメーターは、以下のいずれかのアクション項目を受け入れます。それらは、大文字小文字が区別されません。一部のアクション項目では、大文字小文字が区別されるプロパティ情報を必要とします。

IBM Connections のフォーラム、トピック、または応答のコンテンツには、HTML フォーマット設定タグの `br`、`b`、および `a` を使用できます。サポート対象の HTML タグについて詳しくは、<http://www-03.ibm.com/software/products/en/conn> を参照してください。

CREATEFORUM

フォーラムを作成します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。タグは、変数名に渡される前に作成する必要があります。

```
props.ForumTitle=タイトル;  
props.ForumContent=本文の全文;  
props.ForumTags=List_Of_Tags; はオプションであり、オブジェクトは  
Netcool/Impact オブジェクトでなければなりません。  
Tags=NewObject();  
Tags.Tag1=タグ;  
Tags.Tag2=タグ 2; は、複数のタグが必要な場合のオプションです。
```

CREATETOPIC

トピックを作成します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

```
props.TopicTitle=タイトル;  
props.TopicContent=本文の全文;  
props.ForumId=フォーラム ID: ここで、フォーラム ID は ID であり、フォーラム名ではありません。
```

DELETEDFORUM

ログイン・ユーザーが作成したフォーラム名と、それに属するトピックまたは応答のすべてを削除します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

```
props.ForumId=フォーラム ID; または props.ForumId=フォーラム・タイトル;  
;  
props.FirstMatchOnly=true; または props.FirstMatchOnly=false;  
props.FirstMatchOnly プロパティは、最初に見つかった一致するフォーラムまたは一致するトピックを削除します。または、一致するフォーラムまたは一致するトピックをすべて削除します。そのデフォルト値は true です。
```

DELETEDPUBLICFORUM

指定した公開フォーラム名と、それに属するトピックまたは応答をすべて削除します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

```
props.ForumId=フォーラム ID; または props.ForumId=フォーラム・タイトル;  
;  
props.FirstMatchOnly=true; または props.FirstMatchOnly=false;  
props.FirstMatchOnly プロパティは、最初に見つかった一致するフォーラムまたは一致するトピックを削除します。または、一致するフォーラムまたは一致するトピックをすべて削除します。そのデフォルト値は true です。
```

DELETEDREPLY

フォーラム ID のトピックのトピック応答を削除します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

```
props.ForumId=フォーラム ID; ここで、フォーラム ID は ID であり、タイトルではありません。  
props.TopicTitle=タイトル; または props.TopicTitle=ID;  
props.ReplyTitle=応答タイトル; または props.ReplyTitle=応答 ID;  
props.FirstMatchOnly=true; または props.FirstMatchOnly=false;  
props.FirstMatchOnly プロパティは、最初に見つかった一致するフォーラムまたは一致するトピックを削除します。または、一致するフォーラムまたは一致するトピックをすべて削除します。そのデフォルト値は true です。
```

DELETEDTOPIC

フォーラム ID のトピックを削除します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

```
props.ForumId=フォーラム ID; ここで、フォーラム ID は ID であり、タイトルではありません。  
props.TopicTitle=タイトル; または props.TopicTitle=ID;
```

`props.FirstMatchOnly=true`; または `props.FirstMatchOnly=false`;
`props.FirstMatchOnly` プロパティは、最初に見つかった一致するフォーラムまたは一致するトピックを削除します。または、一致するフォーラムまたは一致するトピックをすべて削除します。そのデフォルト値は `true` です。

GETCOMMUNITYFORUMID

ログイン・ユーザーが作成したコミュニティの ID を取得します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

`props.CommunityName`=コミュニティ名;
`props.ForumName`=フォーラム名;

GETFORUMTOPICS

フォーラム ID のトピックのリストを取得します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

`props.ForumId`=フォーラム ID;

GETMYCOMMUNITYID

ログイン・ユーザーのコミュニティの ID を取得します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

`props.CommunityName`=コミュニティ名;

GETMYFORUMID

ログイン・ユーザーが作成したフォーラムの ID を取得します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

`props.ForumName`=ログイン・ユーザーが作成した実際のフォーラム名

GETMYFORUMS

ログイン・ユーザーのすべてのフォーラムを取得します。

GETPUBLICCOMMUNITYID

指定した公開コミュニティ ID の ID を取得します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

`props.CommunityName`=コミュニティ名;

GETPUBLICFORUMID

指定した公開フォーラム名の ID を取得します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

`props.ForumName`=実際の公開フォーラム名

GETPUBLICFORUMS

すべての公開フォーラムのリストを取得します。

GETTOPICREPLIES

トピックの応答のリストを取得します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

`props.TopicId`=トピック ID; ここで、トピック ID は、トピック名ではなく、トピック ID でなければなりません。

REPLYTOTOPIC

既存のトピックへの応答を作成します。

大文字小文字が区別される、以下のプロパティを情報を入力します。

props.TopicId=トピック ID; ここで、トピック ID は、トピック名ではなく、トピック ID でなければなりません。

props.ReplyTitle=タイトル;

props.ReplyContent=本文の全文;

Impact Object パラメーター

Impact Object パラメーターは、以下のプロパティ情報を受け入れます。認証情報、および接続プロパティ情報は必須です。

```
props = NewObject();
```

```
props.Protocol=HTTPS;
```

```
props.Host=IBM Connections サーバーのホスト/IP;
```

```
props.Port=_PORT_;
```

```
props.Username=ユーザー名;
```

props.Password=パスワード; パスワードは、Netcool/Impact nci_crypt ツール、またはポリシー関数 Encrypt() のいずれかを使用して暗号化できます。パスワードが暗号化されている場合、プロパティ props.DecryptPassword=true; を使用する必要があります。

IBMConnections プロジェクトと成果物

インポートされた IBMConnections プロジェクトには、4 つのカテゴリに分類される成果物が含まれています。

データ・ソース

- IBMConnectionsObjectServerDSA
- Internal

データ型

- TopicCreationTracker
 - 名前の重複を避けるために、トピックの作成を追跡するのに使用する内部データ型です。
- InternetOutageEvents
 - UI データ・プロバイダー・ウィジェットの重大イベントを参照するのに使用できる、ObjectServer のデータ型です。重大度を状況データ型として取り込んで、カラフルなイメージを表示します。

ポリシー

- IBMConnectionsUtils
 - データ項目から値を抽出するためのユーティリティー関数を含みます。
- IBMConnectionsUtilsCaller
 - IBMConnectionsUtils のユーティリティー関数を呼び出す方法を示します。
- IBMConnectionsUtilsJS

- JavaScript ポリシー用です。
- IBMConnectionsUtilsCallerJS
 - JavaScript ポリシー用です。
- NetworkMonitorExample
 - トピックを作成および更新するためにイベント・リーダーによって実行されるポリシーの例です。
- NetworkMonitorForOpView
 - オペレーター・ビューによって ObjectServer イベント・リスト・ツールから実行されるポリシーの例です。
- Opview_IBMConnectionsOpView
 - AEL ツールによって実行されます。

サービス

- NetworkMonitorExample
 - オブジェクト・サーバーのデータ・ソースに接続し、デフォルトのフィルター `Node in ( ' US ', ' France ', ' UK ' )and Identifier Like 'Monitoring Network for'` を使用します。このデフォルト・フィルターはいつでも変更できます。 NetworkMonitorExample ポリシーが実行されます。

自動トピック管理

IBM Connections 統合パッケージには、Netcool/OMNIBus Object Server および特定のイベント用のフィルターに接続する NetworkMonitorExample イベント・リーダー・サービスが含まれています。一致があると、サービスは、トピックに応答を送信してトピックを更新するポリシーを実行するか、トピックが存在しない場合はトピックを作成するポリシーを実行します。

この例で使用されているフォーラムは、オブジェクト・サーバー・イベント内の AlertKey と同じ名前です (forumName = @IBMConnections_Forum)。

\$IMPACT_HOME/integrations/IBMConnections/db ディレクトリー内の SQL スクリプトを使用してオブジェクト・サーバー内に追加フィールドを作成するか、既存のフィールドを使用できます。

トピック・タイトルは以下のように、ハードコーディングされたストリングとイベントからのノード・フィールドの組み合わせで作成されます。

```
topicTitleVar="Network Monitor is down on node: @Node@" ;
IBMConnectionsUtils.extractParametersAndSubstitute
(topicTitleVar,EventContainer,result);
topicTitle = result;
```

ポリシーは、トピックが内部データ・タイプ TopicCreationTracker を照会することで作成されたかどうかを確認します。トピックが存在する場合、ポリシーは新規のトピックを作成する代わりに、応答を送信します。

イベント管理ツールによる自動トピック管理

オペレーター・ビュー・ポリシーが、既存のトピックの更新や新規トピックの作成を自動的に行う `NetworkMonitorForOpView` ポリシーを実行するために更新されます。

手順

1. イベント管理ツールを作成します。詳しくは `Netcool/OMNIBus` の資料を参照してください。
2. イベント管理ツールで、`executable box` タブを選択し、以下のテキストを入力します。
`start "" "https://<impactgui_server>:<port>/opview/displays/NCICLUSTER-IBMConnectionsOpView.html?Node=@Node&Serial=@Serial&Severity=@Severity&Acknowledged=@Acknowledged&AlertKey=@AlertKey&AlertGroup=@AlertGroup&Summary=@Summary"`

デフォルト・クラスターは `NCICLUSTER` ですが、異なるクラスター名を使用している場合は、ご使用のクラスター名でこの URL を更新してください。

上記のテキストは、Windows 上の Object Server 用に入力するテキストの例です。

3. 新しい イベント管理ツールを「AlertsStatus」ツール・メニューに追加します。詳しくは `Netcool/OMNIBus` の資料を参照してください。
4. イベントを右クリックするときに、このツールをクリックして URL を開始してポリシーを実行します。オペレーター・ビューが開始され、トピックが作成または更新されたことを、使用するトピックの URL へのリンクと共に通知します。

関連情報:

 イベント管理ツールの作成

履歴上のイベントの有効化

イベント・ビューアーで履歴上のイベントを参照するには、`Impact` の履歴データベースへの接続を作成します。

手順

1. `Dashboard Application Services Hub` にログインし、「データ・モデル」タブを選択します。
2. 「新規データ・ソース」アイコンをクリックします。
3. 「データベース **SQL**」を指して、ご使用のデータベース・タイプを選択します。例えば、「**DB2**」などです。
4. 「データ・ソース名」フィールドに、**historicalEventsDataSource** と入力します。
5. 指定されたフィールドにユーザー名とパスワードを入力して、「保存」アイコンをクリックします。
6. 左側のナビゲーション・ペインで、「**ImpactHistoricalEventData**」を右クリックし、「新規データ・タイプ」を選択します。

7. 「データ・タイプ名」フィールドで、**historicalEventData** と入力します。
8. 「最新表示」 をクリックします。

リリース情報

IBM Netcool Operations Insight V1.4.0.2 が利用可能になりました。このリリース情報では、互換性やインストール手順、また作業の始めにおける他の問題について説明しています。

目次

- 『説明』
- 『互換性』
- 311 ページの『システム要件』
- 312 ページの『新機能』
- 313 ページの『eGA 時点での既知の問題』
- 319 ページの『サポート』

説明

Netcool Operations Insight では、Netcool Operations Insight のリアルタイムのイベントの統合と関連の機能を、イベント検索および Event Analytics と結合しています。さらに、定期的に発生する問題の検出を支援する季節性分析を提供します。Netcool Operations Insight では、アプリケーション・トポロジーを含む異種システム間で発生したアラートに対して、素早い応答を可能にするためのリアルタイムのエンリッチと関連も可能にしています。

互換性

IBM Netcool Operations Insight V1.3.x および V1.4.x リリースには、以下の製品およびコンポーネントのバージョンが含まれています。

Netcool Operations Insight 製品およびコンポーネントについて詳しくは、4 ページの『サポートされる製品とコンポーネント』を参照してください。

表 28. 製品およびコンポーネントのバージョン

含まれている コンポーネン ト	Netcool Operations Insight V1.3 (2015 年 3 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.3 (2015 年 9 月 更新)	Netcool Operations Insight V1.3.1 (2015 年 12 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4 (2016 年 2 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4.0.1 (2016 年 3 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4.0.2 (2016 年 6 月 GA リリース)
IBM Tivoli Netcool/ OMNIbus の コア・コンポ ーネント	V8.1.0.3	V8.1.0.4	V8.1.0.5		V8.1.0.7	V8.1.0.8

表 28. 製品およびコンポーネントのバージョン (続き)

含まれている コンポーネント	Netcool Operations Insight V1.3 (2015 年 3 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.3 (2015 年 9 月 更新)	Netcool Operations Insight V1.3.1 (2015 年 12 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4 (2016 年 2 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4.0.1 (2016 年 3 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4.0.2 (2016 年 6 月 GA リリース)
Tivoli Netcool/ OMNIBus Web GUI	V8.1.0.2	V8.1.0.3	V8.1.0.4		V8.1.0.5	V8.1.0.6
IBM Tivoli Netcool/ Impact	V7.1.0.2	V7.1.0.3	V7.1.0.4		V7.1.0.5	V7.1.0.6
Operations Analytics - Log Analysis	V1.3.0	V1.3.1	V1.3.2 注: V1.3.1 もサポートされま す。		V1.3.2 注: V1.3.3 もサポートされま す。 注: Netcool Operations Insight V1.4.0.2 は、Operations Analytics - Log Analysis V1.3.3 フィックスパック 1 も サポートします。	
Event Analytics	IBM Tivoli Netcool/ Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.2 (Netcool/ Impact フィッ クスパックで 提供) IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/ OMNIBus Web GUI_1.3.0 (Web GUI フ ィックスパッ クで提供)	IBM Tivoli Netcool/ Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.3 (Netcool/ Impact フィッ クスパックで 提供) IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/ OMNIBus Web GUI_1.3.0.1 (Web GUI フ ィックスパッ クで提供)	IBM Tivoli Netcool/Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.4 (Netcool/Impact フィックスパックで提供) IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI_1.3.1 (Web GUI フィッ クスパックで提供)		IBM Tivoli Netcool/ Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.5 (Netcool/ Impact フィッ クスパックで 提供) IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/ OMNIBus Web GUI_1.4.0.1 (Web GUI フ ィックスパッ クで提供)	IBM Tivoli Netcool/ Impact Server Extensions for IBM Netcool Operations Insight_7.1.0.6 (Netcool/ Impact フィッ クスパックで 提供) IBM Netcool Operations Insight Extension for IBM Tivoli Netcool/ OMNIBus Web GUI_1.4.0.2 (Web GUI フ ィックスパッ クで提供)

表 28. 製品およびコンポーネントのバージョン (続き)

	Netcool Operations Insight V1.3 (2015 年 3 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.3 (2015年 9 月 更新)	Netcool Operations Insight V1.3.1 (2015 年 12 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4 (2016 年 2 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4.0.1 (2016 年 3 月 GA リリース)	Netcool Operations Insight V1.4.0.2 (2016 年 6 月 GA リリース)
含まれている コンポーネン ト						
イベント検索	Tivoli Netcool/ OMNIBus Insight Pack V1.3.0.0 (Operations Analytics - Log Analysis で提供)	Tivoli Netcool/ OMNIBus Insight Pack V1.3.0.1 (Operations Analytics - Log Analysis で提供)	Tivoli Netcool/OMNIBus Insight Pack V1.3.0.2 (Operations Analytics - Log Analysis で提供)			
トポロジー検 索	Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 (Operations Analytics - Log Analysis で提供)					
IBM Tivoli Network Manager IP Edition	V3.9.0.4 V4.1.1.1			V4.2		
IBM Tivoli Netcool Configuration Manager	V6.4.1			V6.4.2		V6.4.2.1
IBM Network Performance Insight	N/A			V1.1.1		
Jazz for Service Management	V1.1.0.3		V1.1.2.1			

システム要件

各コンポーネントのハードウェアおよびソフトウェアの互換性と詳細なシステム要件については、「IBM Software Product Compatibility Reports」Web サイトを参照してください。

<http://www-969.ibm.com/software/reports/compatibility/clarity/index.html>

ヒント: レポートを作成するときは、Netcool Operations Insight を探して、ご使用のバージョン (例えば、V1.4) を選択してください。レポートでは、吹き出しヘルプおよび追加のリンクによって役立つ追加情報が使用可能です。

例えば、各コンポーネントのオペレーション・システムとの互換性を確認するには、「オペレーティング・システム」タブに移動してご使用のオペレーション・シ

ステムの行を探し、「コンポーネント」列内のアイコンにカーソルを移動します。制限事項については、「詳細」列の「表示」リンクをクリックしてください。

新機能

IBM Netcool Operations Insight V1.4.0.2 では、以下の新機能が提供されています。Netcool Operations Insight に含まれているすべての製品、コンポーネント、およびフィックスをインストールした後、これらの各機能を活用できます。

更新された **Networks for Operations Insight** の製品バージョン

Netcool Operations Insight V1.4.0.2 ソリューションには、以下の製品およびバージョンのフィックスパックや拡張機能フィックスパックで提供される機能が含まれています。

- Tivoli Netcool/OMNIBus V8.1.0.8 のコア・コンポーネント
- Tivoli Netcool/OMNIBus Web GUI V8.1.0.6
- Netcool/Impact V7.1.0.6

注: Netcool Operations Insight V1.4.0.1 から V1.4.0.2 にアップグレードするには、Netcool/Impact および Web GUI で提供されているフィックスパックと拡張機能を適用してください。

ヒント: オプション: Netcool Configuration Manager 6.4.2.1 (フィックスパック 1) を適用することもできます。このフィックスパックは、IBM Fix Central (<http://www.ibm.com/support/fixcentral/>) から入手できます。フィックスパック 1 について詳しくは、http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS7UH9_6.4.2/ncm/wip/relnotes/ncm_rn_6421.html を参照してください。

詳細情報: 『4 ページの『サポートされる製品とコンポーネント』』

IBM Operations Analytics - Log Analysis V1.3.3 および V1.3.3 フィックスパック 1 のサポート

Netcool Operations Insight V1.4.0.2 に含まれる Tivoli Netcool/OMNIBus Insight Pack では、付属する IBM Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 バージョンに加えて、V1.3.3 がサポートされます。

Insight Pack のバージョンは以前のリリース (OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2) から変更ありません。IBM Operations Analytics - Log Analysis V1.3.2 を使用する場合も、V1.3.3 を使用する場合も、構成に違いはありません。

注: Netcool Operations Insight V1.4.0.2 は、Operations Analytics - Log Analysis V1.3.3 フィックスパック 1 もサポートします。

Event Analytics の以下の新機能のサポート:

- 正規表現 - パターン基準に正規表現を適用することにより、選択したリソース列の非構造化データから情報を抽出できます。

詳細については、216 ページの『パターン基準への正規表現の適用』および 217 ページの『パターン基準の正規表現の編集』を参照してください。

- Microsoft Excel へのイベント・データのエクスポート - 関連イベント、関連イベント・グループ、季節性イベント、季節性イベント・グラフ、履歴上のイベント、およびイベント・パターンを Microsoft Excel にエクスポートできます。

詳細情報: 『

- 』 166 ページの『特定の構成についてのすべての季節性イベントの Microsoft Excel へのエクスポート』
- 219 ページの『パターン汎用化テスト結果の Microsoft Excel へのエクスポート』
- 189 ページの『特定の季節性イベントについての履歴上のイベント・データの Microsoft Excel へのエクスポート』
- 199 ページの『選択した関連イベント・グループの Microsoft Excel へのエクスポート』
- 198 ページの『特定の構成についての関連イベントの Microsoft Excel へのエクスポート』
- 184 ページの『特定の季節性イベントについての季節性イベント・グラフの Microsoft Excel へのエクスポート』
- 167 ページの『特定の構成についての選択した季節性イベントの Microsoft Excel へのエクスポート』

eGA 時点での既知の問題

以下に IBM Netcool Operations Insight V1.4.0.2 についての eGA 時点での既知の問題を示します。

IBM Operations Analytics - Log Analysis V1.3.3 でのイベント検索: HeatMap グラフ・タイプが正しくレンダリングされない

IBM Operations Analytics - Log Analysis V1.3.3 を使用する際に、HeatMap タイプのグラフが「Parameter category is invalid for Heat Map」というエラーを表示してレンダリングに失敗します。このエラーは、Operations Analytics - Log Analysis 1.3.2 と 1.3.3 のグラフの定義方法が異なることが原因です。

影響を受けるグラフは以下のとおりです。

- 「OMNIBusInsightPack」 > 「直近 1 日間」 > 「動的イベント・ダッシュボード」の以下のグラフ:
 - ノードおよびアラート・グループ別ホット・スポット
 - アラート・グループおよび重大度別ホット・スポット
- Web GUI の「イベント検索」タブで右クリックして「ノードごとのイベント・ダッシュボードの表示」を選択することで開く、「OMNIBus_Static_Dashboard」の以下のグラフ:
 - ノードおよびアラート・グループ別ホット・スポット
 - アラート・グループおよび重大度別ホット・スポット

この問題を修正するには、以下のグラフ仕様ファイルを編集し、category のインスタンスをすべて検索して、それらを categories に変更します。

- \$UNITY_HOME/AppFramework/Apps/OMNIBusInsightPack_v1.3.0.2/Last_Day/OMNIBus_Dynamic_Dashboard.app
- \$UNITY_HOME/AppFramework/Apps/OMNIBusInsightPack_V1.3.0.2/OMNIBus_Static_Dashboard.app

IBM Operations Analytics - Log Analysis でのイベント検索: 右クリックによるキーワード検索結果がデフォルトで非表示

Web GUI の「イベント検索」タブ内で右クリックし、「キーワードおよびイベント・カウントの表示」をクリックすると、検索結果が空です。この問題は、Operations Analytics - Log Analysis ユーザー・インターフェースで「検索パターン (Search Patterns)」ペインがデフォルトで非表示にされていることが原因です。

「キーワードおよびイベント・カウントの表示」の結果を表示するには、ユーザー・インターフェースの左側にある三角形の「セクションのリストア (Restore Section)」のアイコンをクリックします。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード: トップ・パフォーマンス・ウィジェットにエラーが表示される

トップ・パフォーマンス・ウィジェットのフッターに、ときどきエラー・メッセージ「データ取得でエラーが発生しました (Data Retrieval Error)」が表示されます。このエラーが表示された場合、ウィジェットは 10 秒後に最新表示を試行します。この問題を直ちに回避するには、ネットワーク・ビュー・ツリーで再度ビューをクリックしてください。

ネットワーク・ヘルス・ダッシュボード: 可用性パーセンテージ・ウィジェットにエラーが表示される

可用性パーセンテージ・ウィジェットのフッターに、ときどきエラー・メッセージ「データ取得でエラーが発生しました (Data Retrieval Error)」が表示されます。このエラーが表示された場合、ウィジェットは最新表示していません。この問題に対処するには、ネットワーク・ビュー・ツリーで再度ビューをクリックしてください。

IBM Installation Manager - コンソール・モード: Netcool/OMNIBus コアと同時に **Web GUI** または **Netcool/Impact** をインストールできない。

Netcool/OMNIBus コアと同時に Web GUI または Netcool/Impact を Installation Manager - コンソール・モードでインストールすると、Web GUI および Netcool/Impact のインストール・パスのプロンプトが表示されず、インストールは失敗します。Installation Manager - コンソール・モードでインストールを実行している場合、各コンポーネントは別々にインストールする必要があります。

注: Jazz for Service Management および IBM WebSphere Application Server のインストールは、Installation Manager - コンソール・モードではサポートしていません。

Operations Analytics - Log Analysis のインストールに失敗する

Operations Analytics - Log Analysis V1.3.x は、サポートされるすべてのオペレーティング・システム上で、最低 5 GB のディスク・スペースを必要とします。5 GB 未満しか検出されなかった場合、インストーラーは停止します。エラー・メッセージは表示されません。この問題が発生した場合、インストーラーを終了してください。

グローバリゼーションの問題

英語以外のバージョンの Netcool Operations Insight に、以下の問題が影響します。

カウントおよびタイム・スタンプの吹き出しヘルプが一部のグラフで翻訳されない

この問題は、イベント検索機能について発生します。これは OMNIbusInsightPack_v1.3.0.2 に影響します。以下のテキストは翻訳されず、英語でのみ表示されます。

- 積み重ね棒グラフ、ヒート・マップ、および円グラフでのタイム・スタンプおよびカウントの吹き出しヘルプ
- xxxOMNIbus Static Dashboard カスタム・アプリケーションの「ノードおよびアラート・グループ別ホット・スポット」グラフおよび「アラート・グループおよび重大度別ホット・スポット」グラフの「カウント」フィールドの凡例
- OMNIbus Dynamic Dashboard カスタム・アプリケーションの「直近 1 日間 - アラート・グループおよび重大度別ホット・スポット」グラフ、「直近 1 日間 - ノード別イベント・ストーム」グラフ、「直近 1 日間 - ノードおよびアラート・グループ別ホット・スポット」の「カウント」フィールドの凡例。

エラー・メッセージが部分的にしか翻訳されていない

この問題は、トポロジ検索機能に影響します。これは Network Manager Insight Pack V1.3.0.0 に影響します。同じデバイスについて 2 つのノード間でトポロジ検索を実行しようとする、表示されるエラー・メッセージが部分的にしか翻訳されていません。エラー・メッセージ全体は以下ようになります。

An error occurred calculating the path between 'X' and 'X',
The source and destination Node's cannot be the same

(ここで、X はデバイスの **NmosObjInst** の値です。メッセージの最初の半分の「「X」と「X」の間のパスの計算中にエラーが発生しました (An error occurred calculating the path between 'X' and 'X',) は翻訳されています。メッセージの残り半分「The source and destination Node's cannot be the same」は翻訳されず、常に英語で表示されます。

Event Analytics: イベントが発生しない場合の合成イベントの作成時に空白のフィールドがある。

ユーザーは、「追加フィールドの設定 (**Set additional fields**)」を選択することによって、追加列の値を 1 つ以上指定することを選択できます。「イベントの作成」ウィンドウで指定した値以外については、Node および Summary の値のみが合成イベントにコピーされます。

Event Analytics: NOI コンポーネントが無関係のエラー・メッセージを **message.log** ファイルと **console.log** ファイルに書き込む場合がある。

この問題は、NOI コンポーネントが、無関係で注意を必要としない以下のエラー・メッセージを **message.log** ファイルと **console.log** ファイルに書き込む場合があることを示します。

```
[3/8/15 11:07:34:794 EDT] 0000009c SystemErr
R RHINO USAGE WARNING:
Missed Context.javaToJS() conversion: Rhino runtime
detected object [] of class java.util.HashSet
where it expected String, Number,
Boolean or Scriptable instance.
Please check your code for missing Context.javaToJS() call.
```

```
[15/08/05 10:55:53:668 JST] 0000009e SystemErr
R RHINO USAGE WARNING: Missed Context.javaToJS() conversion:
Rhino runtime detected object [] of class java.sql.Timestamp
where it expected String, Number, Boolean
or Scriptable instance.
Please check your code for missing Context.javaToJS() call.
```

要約すると、上記のエラー・メッセージが `message.log` ファイルおよび `console.log` ファイルに表示された場合は無視します。

注: `message.log` ファイルと `console.log` ファイルは以下のディレクトリにあります。

```
impact_home/wlp/usr/servers/ImpactUI/logs
```

```
impact_home/wlp/usr/servers/server_name/logs
```

Event Analytics: 必要とされなくなった **Netcool/Impact** データ・モデルの削除
この問題は、以下の **Netcool/Impact** データ・モデルが、**IBM Netcool Operations Insight** フィックスパックへのアップグレード後に必要とされなくなったことを示します。**Netcool/Impact GUI** を使用して、これらのデータ・モデルを削除します。

ObjectServerHistoryDB2ForSeasonality

ObjectServerHistoryOrclForSeasonality

ObjectServerHistoryMSSQLForSeasonality

注: 上記のデータ・モデルを削除しないことを選択した場合、**Event Analytics** 機能には影響ありません。上記のデータ・モデルを削除するのは、外見上の目的に限られます。

注: アップグレードについては、このリリース情報の 312 ページの『新機能』セクションの『アップグレードに関する注意』を参照してください。

Event Analytics: ユーザーが **DB2** を使用してロールアップ列を追加するときにエラーが発生する。

DB2 を使用してロールアップ列を追加するときにエラーが発生します。このエラーを避けるには、以下の手順を実行して、ロールアップ構成を更新します。

1. `<Impact install location>/bin` ディレクトリで、以下のコマンドを入力します。

```
./nci_trigger NCI <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Export
FILENAME <Full Path to the file name>.properties
```

2. プロパティ・ファイルを以下のように更新します。

- a. レポートに追加する列の数を指定します。

季節性イベントの `number_of_rollup_configuration=2` パラメーターの値を増やします。

関連イベントの `reevent_number_of_rollup_configuration=2` パラメーターの値を増やします。

例えば、レポートに 1 つの列を追加するには、パラメーターの値を 1 つ大きくして 2 を 3 にします。

- b. 新しいロールアップ列の場合は、プロパティ情報を追加します。
- 新しい季節性イベント・レポート列の場合は、以下のプロパティを追加します。

```
rollup_<rollup number>_column_name=<column name>
rollup_<rollup number>_display_name=<display name>
rollup_<rollup number>_type=<type>
```

- 新しい関連イベント・レポート列の場合は、以下のプロパティを追加します。

```
reevent_rollup_<rollup number>_column_name=<column name>
reevent_rollup_<rollup number>_display_name=<display name>
reevent_rollup_<rollup number>_type=<type>
reevent_rollup_<rollup number>_actionable=<true/false>
```

注: プロパティ・ファイル値について詳しくは、「*Event Analytics* のインストール」ガイドの 142 ページの『ロールアップ構成の更新』を参照してください。

- AlertsHistoryDB2Table のフィールドを最新表示するには、「最新表示」および「保存」をクリックします。
- 以下のコマンドを実行して、現在の構成を更新します。

```
./nci_trigger NCI <UserID>/<password> NOI_DefaultValues_Configure
FILENAME <Full Path to the file name>.properties
```

Event Analytics: Netcool Operations Insight 1.4.0 にアップグレードした後、**ProcessRelatedEvents** サービスと **ProcessRelatedEventConfig** サービスの自動開始設定がクリアされる

ProcessRelatedEvents および ProcessRelatedEventConfig の自動開始設定をリセットするには、以下の手順を実行します。

- Netcool/Impact の UI で、「季節性 (Seasonality)」プロジェクトを選択します。
- 「季節性 (Seasonality)」プロジェクトで、「サービス」タブを選択します。
- 「サービス」タブで、「**ProcessRelatedEvents**」を選択します。
 - 右クリックして、「編集」を選択します。
 - 「**ProcessRelatedEvents**」ペインで、「サーバー始動時に自動的に開始」チェック・ボックスを選択します。
- 「サービス」タブで、「**ProcessRelatedEventConfig**」を選択します。
 - 右クリックして、「編集」を選択します。
 - 「**ProcessRelatedEventConfig**」ペインで、「サーバー始動時に自動的に開始」チェック・ボックスを選択します。

Event Analytics: イベント要約が切り捨てられる

イベント要約は、「関連イベントの詳細」ポートレットのタイムライン・ビュー内で切り捨てられることがあります。イベント要約を表示するには、一時的に画面解像度を変更します。

Event Analytics: 季節性ルール統計が実行されたアクションと一致しないイベントに対して実行されたアクションと生成された統計との間には矛盾があります。アクションは予期したとおりにイベントに対して実行されますが、ルール統計は更新されません。

Event Analytics: 時間条件付きの季節性イベント・ルールが実行されない
25 秒を超える一定の時間後に実行されるアクションの場合、季節性イベント・ルールは実行されません。一定の時間後に実行するようスケジュールされた季節性イベント・ルールが正しく実行されるようにするには、25 秒以下の時間条件を選択してください。

Event Analytics: 「イベント・パターン」画面のレンダリングが遅い
パターンの作成と編集の画面では、大規模なデータ・セットに関連付けられているイベント・タイプが多数存在することが原因で、レンダリングに時間がかかる場合があります。この結果、パターン作成プロセスに遅延が生じます。

イベント検索: ノード、アラート・キー別のホット・スポットが表示されない。
「ノード、アラート・グループ、アラート・キー別ホット・スポット (Hotspots by Node, Alert Group and AlertKey)」グラフが「Last_Month」>「運用状況」ダッシュボードに表示されない場合は、SOLR ヒープ・サイズを増やすことが必要な可能性があります。

注: 「ノード、アラート・グループ、アラート・キー別ホット・スポット (Hotspots by Node, Alert Group and AlertKey)」グラフは CPU への負荷が高いため、データ量が多いシステムの場合はレンダリングが遅くなる場合があります。

詳細情報: 検索の実行時例外および IBM SmartCloud Analytics - Log Analysis Performance and Tuning Guide。

イベント検索: 「重大度別イベント・トレンド」グラフの吹き出し値が軸と一致するように表示されない。

特定の重大度のポイントにカーソルを移動すると、返される値がグラフの軸と一致するように表示されないことがあります。これは、吹き出し値がその重大度のみを表すのに対し、軸の値は累積値であるためです。例えば、重大度が「中間」のイベント 20 個と、重大度が「重要」のイベント 26 個が線上で表示されている場合、「重要」イベントは Y 軸上で 46 と表示されます。

イベント検索: ドリルダウンで結果が返されない。

「Omnibus ツリー・マップ (Omnibus Tree Map)」タイプの場合、ドリルダウン機能は使用できません。これは、「直近 1 カ月間」フォルダーにある「運用の効率性」ダッシュボード、および「直近 1 時間」フォルダーにある「OMNibus 運用マネージャー」ダッシュボードと「OMNibus スポットの重要アラート」ダッシュボードのいくつかのグラフに影響します。

これらのグラフでドリルダウンが必要な場合は、代わりにデフォルトの「ツリー・マップ (Tree Map)」仕様を使用できます。仕様を変更するには、グラフの右側にあるグラフ設定アイコンをクリックし、「グラフ・タイプ (Chart Type)」を「OMNibus ツリー・マップ (OMNibus Tree Map)」から「ツリー・マップ (Tree Map)」に変更してください。

イベント検索: 「イベント分析および削減」のヘルプ・テキストが双方向ロケールで正しくレンダリングされない。

これは、「イベント・ボリュームの分析および削減」、「アプリケーションの概要」、および「有用なリンク」の「イベントの分析および削減」ダッシュボードのヘルプ・テキストに影響します。このヘルプ・テキストは、アラビア語およびヘブライ語のロケールでは正しくレンダリングされません。

双方向ロケールをサポートするブラウザーに HTML ファイルとしてテキストを直接表示できます。関連ファイルは

Analyze_and_reduce_event_volumes.html、

Introduction_to_the_Apps.html、および Helpful_links.html です。これ

らのファイルは \$UNITY_HOME/AppFramework/Apps/

OMNibusInsightPack_v1.3.0.2/locale/<LOCALE>/LC_MESSAGES にあります。

サポート

IBM 電子サポートには、問題を診断して解決し、ご使用の IBM 製品を保守するための包括的な技術情報を提供する、オンライン・ツールおよびリソースのポートフォリオが用意されています。IBM には、初期の段階で問題の発生を回避したり、問題が発生したときに素早く簡単にトラブルシューティングしたりするための、多くのスマートなオンライン・ツールおよびプロアクティブな機能が備えられています。詳しくは、以下を参照してください。

<http://www.ibm.com/support/electronicssupport/about.html>

関連概念:

- 1 ページの『ソリューションの概要』

「マイ・コレクション」を使用したトピックのサブセットを含む独自 **PDF** の作成

IBM Knowledge Center にサインインすると、個々のトピック、トピック群、またはコレクション全体を保存できます。コンテンツを「マイ・コレクション」に追加して保存した後、トピックの再編成、削除、名前変更を行い、その後それらを PDF ファイルとしてフォーマットすることができます。

コレクションにトピックを追加するには、以下のようになります。

目次にあるトピックを右クリックし、「このトピックを既存のコレクションへ追加」または「このトピックを新規コレクションへ追加」を選択します。代わりに、「コレクションに追加」をクリックすることもできます。

コレクション内のトピックの順序を変更するには:

「マイ・コレクション」ペインでコレクションを選択し、「編集」をクリックします。矢印キーを使用して、コレクションの階層内でトピックを上または下に移動します。

コレクションからトピックを削除するには、以下のようになります。

「マイ・コレクション」ペインでコレクションを選択し、「編集」をクリックします。その後、トピック・タイトルの横にある「X」をクリックします。

コレクションの名前を変更するには:

「マイ・コレクション」ペインでコレクションを選択し、「編集」をクリックします。コレクションのタイトルをクリックして、コレクションの新しい名前を入力します。

コレクションの **PDF** ファイルを作成するには:

「マイ・コレクション」ペインでコレクションを選択し、「**PDF** ファイルの作成」をクリックします。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。

国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
2Z4A/101
11400 Burnet Road
Austin, TX 78758 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で 사용할 수 있지만、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。



Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。